
ハルケギニア物語 『復讐八、我ニ有リ』

ルフトハンザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニア物語『復讐八、我二有り』

【Nコード】

N6304Q

【作者名】

ルフトハンザ

【あらすじ】

私は戦おう。

復讐の為に。

私達は戦おう。

世界を再び変える為に。

私は戦おう。

奴を殺すために。

ただそれだけの為に、此処で在ろう。

プロローグ（前書き）

注意

ゼロ魔をかなりいじくってますので、二次創作嫌いな方は気分を害する恐れがあります。

変な思想や主義、自己解釈、エゴが入ったりします。

自分は未熟なので三人称視点と一人称視点が混じる上に誤字脱字、意味不明な表現が入るかもしれません。

色んなネタが、入ります。

何とぞよろしくお願いします。

プロローグ

私は一度死んだ。

そして計らずとも生まれ変わった。

復讐と憎悪を胸に抱いて。

憎しみとは亡霊のようだ。

消し去ったつもりでも何度も現れる。

最後の一人が倒れるまで。

私は決して忘れない。

この大地に友の血が流れた事を。

この世界に自分の血が染み付いている事を。

運命は私達を裏切り、この世界に売り渡した。

私はこの世界が憎い。

そして奴は、生きている。

まだ、ただの少年として。

奴の手は血で染まっている。

私達の血。

この私の手にも染み付いている。

復讐の為なら、なんだって利用してやる。

何度でも繰り返し、選んでやる。

私は狂っている。

もし世界が私を許さないなら、逆に世界を荒らし返し破壊するまでだ。

ならもう一度立ち上がろう。

血に染まった刀を、血みどろの銃を。

そして、新しく血まみれの杖を持って。

この世界を、この社会を完膚なきまでに叩き潰して燃やし尽くしてやる。

戦争だ。

復讐の為の

これは戦争だ。

出掛けるには、家に居なきゃ始まらない。(前書き)

書き忘れてましたが、エブリスタでも書いています。

出掛けるには、家に居なきゃ始まらない。

ティリエル・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデル。

それが私の今の名前だ。

前世で何をしていた、何がどうなったかはあまり言いたくない。

歳は17。

しかし、あくまで肉体の話で精神は既にそれ以上生きているわけで。

死んだ時の話もあまりしたくない。

あえて言うなら、大学に入る直前で死んだ事になるだろう。

世間的には。

ともあれ、この世界で過ごした時間は地球で過ごしていた時間よりも長くなったのは皮肉と言うかなんと言うか……

これもゼロの使い魔の平行ワールドの一つであろうifの集った世界。

この世界に転生したのも皮肉の一つ。

どうやら運命の神様とやらは、よほど自分に不幸と幸運を同時に授けるのが好きらしい。

ともかくだ。

今の自分の境遇は、前と比べると格段によかった。

ある意味この呪わしい世界の唯一かつ最大の幸福とまで言える。

私の生まれた国は、トリステインでもゲルマニアでもガリアでもロ
マリアでもアルビオンでもない。

トリステインとゲルマニアに挟まれるように存在する国、ベルカ公
国。

立場的にはトリステインの従属国となつてはいるが、領土はトリス
テインと同等かやや勝る程の規模で、外交、軍事、経済、政治とも
に完全に独立した国である。

しかしながら、宋主国であるトリステイン他、各国が正式な国とし
て認めてくれていないので、ゲルデンホルフ大公国などと同等。

もしくは劣った扱いをされている。

主な輸出品は武器、香辛料、実用品、そして船である。

人口は、『産めよ増やせよ』政策で550万人。

ただし、他の国々も原作プラス200万ぐらい増えているが。

重工業、軽工業、農業ともに盛んで他の国から見たらオーパーツ的
な技術も大量に保持している。

そんな国の王女として私は生まれたのである。

ちなみに公国とは言っているがトリステイン王家とは、血も何も繋がってはいないが。

この国の特徴として、貴族は一応存在はするものの領地は持たない（持てない）。

普通の土地しか所有していないのがほとんどで、実質トリステインの様に貴族がごろごろ転がってはいなく、そもそも貴族自体が寡少で、（メイジも同様）居ても形式だけや名誉称号扱いである

全ては合理化の為だ。

領地ごとに支配する封建的土地支配は、中央集権国家にとって、面倒かつ複雑で長所より短所が目立つからである。

政治は一応、議会が存在する立憲君主制と言えるだろうか。

そんな国の元首の長女として生まれましたのが私なのです。

父はカールといって、公私をしっかりと分けている立派な人で家族サービスもしっかりとる家族に若干甘い父親であり大黒柱。

母は、私を産んだ後に死んでしまったので、顔は分かりませんが優しい人だったそうなの。

最後に兄が一人いて、私より3歳上で好奇心旺盛だ。

ちなみに仕事は、兄が研究者で私は軍人をやっている。ついでに我

が国は、ある意味閉鎖的な国で外部に情報が漏れることを極端に嫌う（普通の国家なら間違いないく嫌う）。

容姿については灼眼のシャナの愛染他のような感じで。

自分で言うのもなんだと思うけれど綺麗だと思う。

背丈は154センチ。

さらにチートか何かか、この家系には吸血鬼の血が混じっているそう、私の場合は八分の一で（普通は二十分の一だそうだがそんなの知らん）、そのせいか、スクエアクラスの中でも上位で四大系統の内火、風、土（水のみライン）を使えおまけとばかりに先住魔法まで使える。

チートだ。

ちなみに吸血鬼の軍隊は、約1000名ほどいますがその話はまた後日。

さて、そんなこんなで魔法学院に入学せねばならなくなってきた。

そして入学の日は明後日までに迫っていた。

その日の夕食。

カチャカチャ。

ナイフとフォークが動き、食物を食べやすい大きさに解体している。

それなりに立派な造りのテーブルを囲んで、三人（私と兄、父）が夕食を食べている。

家族揃って実家で一緒に食事をするのは、最近あまりなかった。

何故なら、父は政治や所用で国会議事堂の仮眠室で寝泊まりすることが多く、兄は研究所に閉じこもっていて、私もあちこち移動したりしている上に、自宅が別にあるため特別な日や偶然が重ならない限り全員が揃う事は少ないのです。

今日の場合は、前者でした。

「明日の用意は大丈夫か？」

父が鳥のローストを食べ終えてふと聞いた。

「ええ、お父様。大きい荷物は昼の内に駅に運んでおいてもらったので、あとは小物ぐらいですわ。」祝いのシャンプンを一口飲む。

ちなみに実家は、こじんまりした屋敷でほかの王族どころか、男爵の屋敷ほどの大きさしかない。

使用人も数人程だ。

我が家の家訓は、宮廷費なんか軍事予算とインフラ整備に回せ、である。

夕食も、ザワークラウトとコンスープ、白身魚、ローストチキンの切り身、お祝いのシャンプン、ブロート（ライ麦パン）バター、以上である。

別に国自体が貧困に喘いでいるわけではない。（逆にかなり豊か。）

ただ単に、これくらいの食事でちょうど良いからだ。「テイリエルが居なくなると、寂しくなるね。」

「ええ、お兄様。でもちよくちよく帰ってくる予定なので、そんなに心配しなくてもよろしいのに。」

午前中は大変でした。

荷物の選別や、不在の間の引き継ぎやその他諸々。

「ところでトリスティン魔法学院には、どのくらいかかるのかな。」

お父様が、ふと気になったようで聞いてくるが、正直私に聞かれても。

早朝鉄道でトリスティン国境近くまで行ったら、そこから馬車に乗り換えて首都のトリスティアに着くのがその日の真夜中らしいので、そして早朝馬車で出発して学院に行く予定なのである。

……と、執事のウォルターが言っていたような。

「ところで、やはり情勢が変わってきているようだな。」

お父様がふとそんな事を漏らす。

「特にアルビオンでの状況が、悪化している。先日、ロンディウムが陥落したそうだ。」

「レコンキスタ……ですか……」

「そのようだ。ジョセフとはいろいろ会談したが。ただのクーデター騒ぎで治まる様子は無いようだ。このままではアルビオンの現政権転覆は確実だな。」

ガリア王ジョセフとお父様は、何故か親しい間柄にある親友同士なのです。

大分前に、向こうで王位継承を巡っていざこざがありました。既にほとんど解決しています。

たまに私もガリアを訪問します。

軍事同盟を結んでいるからです。

「近い内に内戦から戦争になるな。」

「国境近くのエッセンでも、傭兵の盗賊団が頻繁に現れているのもそれが原因でしょう。トリステインの治安もかなり乱れているらしいので。」

「ティリエル。部隊はすぐに動かせそうか？」

「リエージュの国境紛争から戻ったばかりですけど、すぐにでも。」

「わかった。」

お父様が、時計を見て。

「もう遅い時間だな。明日も早い。もう寝るか。」

丁度シャンパンも飲み終わったところなので、良い頃合いでしょう。

明日から疲れるでしょうから。

トリステイン魔法学院にて

編入から一ヶ月。

トリステインは、とりあえず平和です。

見かけは。

正直、トリステインはあまり好きにはなれません。

元々ベルカの学習院（色々な事で休む事が多いから。）で勉強していて、わざわざ外国の魔法学院に行くメリットはあまりないのだが、トリステインに従属する国の王族は、トリステイン魔法学院に入学するのが筋だという事強引にトリステインがしゃばったの結果です。

生憎、ベルカはトリステイン貴族にとってはゲルマニア並に毛嫌いだ。する傾向があるようなので、更に最悪だ。

自分達から見れば、各国の様々な長所を取り入れたりしている順応性に富み、平等である国なのだが、トリステイン側から見れば属国の癖に好き勝手にやって伝統を蔑ろにし、卑しい平民を登用する成り上がりの国と見えるのでしょう。

建国150年という歴史の無さがそれを強調してしまっています。

最近では、3年前のトリステイン・ベルカ事変（私も従軍した。）でそれが証明されている。

簡単に説明してしまうと、ベルカ公国の存在に異議を唱える国境近くに領地を持つ貴族が、王家に無断で連合を組みベルカに攻め入った事件で、当然我が国の反撃を受け逆に進攻されて、結局王家が仲裁に入り、ベルカに多額の賠償金と領土を割譲させられ和解しました。

まあ自業自得という奴。

そのため私の評判は極めて悪く、更に容姿が良いせいで変な男子に付き纏われるわ、変な妬みは買っわ正直堪ったもんじゃない状態で嫌になる。

とりあえず学院では王女という事は隠して、ティリエル・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデル（国名を消して）伯爵（嘘はついてない。ベルカである程度行動するには必要。ちなみに兄は候爵）と名乗っています。

まあ、忙しいので学院に居ない事も多いのだが。

ティリエル・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデル・ド・ベルカの朝は早い。

朝もやがまだ薄く掛かって陽も完全には出てきていない時間。

寝ぼけ眼で、目覚まし時計の曲を止めると数秒ベットの上でじっとした後勢いよく布団を跳ね飛ばし、ベットから降りる。

元々私は寝起きが良いので、わしゃわしゃと髪を掻き回して、着替

えている内に完全に目が覚めてしまします。

髪も長くてやや癖があるので軽くとかすだけで十分。

そして運動しやすい服に着替え、髪を軽く縛り、ベル力製小型氷冷蔵庫（絶賛販売中）から切っておいた果物を取り出し、二切れ程食べから部屋を出る。

この時間では、まだ起きている生徒はまだいない。

一部の教師や使用人が準備の為に起きてはいるが、ほとんど静かだ。そのまま広場を過ぎて、学院の壁の廻りをランニングする。吸血鬼の血のせいで、普通の状態でもグリーンベレー並の持久力はあるが、かと言ってなにもしない訳にはいかない。

外周2周。

その後、適当に学院の外に向けて強力な魔法を詠唱して、ぶっ放す。魔力も持久力と同じように訓練していれば多少は上がる

また、長い時間使わないと鈍るので必要な事だ。

最後に部屋に戻り、二度寝をする。（これがなかなか気持ちがいい。）

二時間程寝た後、発条式目覚まし時計によって目覚める。

二度寝だけに覚醒が早く、素早く制服に着替える。

二時間程寝たお陰で、気分もいい。

スカートは、あまり人気のないやや長めの物だ。

アニメや小説の女子学生服は、ミニスカにブルマと決まっ
てはいませんが、流石に自分で着る気にならない。

とりあえず時間はたっぷりある。

必要な物を持って食堂に向かう。

その途中。

「ハロー、ミス・ルーデル。今日もいい天気ね。」

顔なじみとであった。

「グーデンモルゲン、ミス・ツェルプストー。今日も生憎の晴天で
すわね。」

目の前にいるのが、私の学園生活の中で数少ない友人。キュルケ・
・・・（以下省略）

同じくゲルマニアからの留学生で、ベルカに居たときの取引先の令
嬢である。

お互い、他国からの編入生同士なのでそれなりに馬があう。

ちなみに、晴天が嫌いなのは事実だ。

私達のタイプの吸血鬼は、一般的なタイプの吸血鬼とは若干異なり、日の光を浴びても死にはしない。

そもそもが、八分の一なので常人より日焼けがしやすく、目が少し疲れるだけだ。

「相変わらず晴れが嫌いなのね。貴方は。」

「大きなお世話ですわ。私が嫌いと言ったら嫌い。それだけの事ではなくて?」

「それもそうね。私は食堂に行くの。あなたも一緒に来る?」

「あら。そのつもりで私に声をかけたのではないの?」

「一緒に来たくないのかしら?」

「ふふ、いえ。満更でもないのですし、行きましようか。」

「食えないわね、貴方は。」

「私は貴方の食べ物ではありませんわ。それとも、その手の趣味がお有りで?」

「本っ当に食えないわね。」

「それはそうと、フロイライン・タバサはどこに? 貴方と一緒にではなくて?」

「今来た。」

キユルケといつものやり取りをしている内に来たらしい。

「ご機嫌よう。フロイライン・タバサ。」

「ん、おはよう。」

口数の少ないこの少女はタバサ。

ガリアからの留学生で、訳有りで偽名を使っている。

読書仲間だ。

「どっちの勝ち？」

タバサが聞いてきたのは、昨晚のカードゲームだ。

「今日もティリエルの勝ちよ。」

タバサの問いにキユルケが、悔しそうに呟く。

「ふふふ、今日は私が勝っても明日は勝つとは限らないのだから。気を落とさずに。キユルケ。」

「そう言っただけで昨日からずっと勝っているじゃない。」

「誰だって負けたくはありませんもの。」

「明日こそは、絶対に勝つわよ！」

「負け惜しみ。」

食堂に着いた。

この世界には、幾つかの魔法学院がある。

ウィンドボナ魔法学院、リュティス魔法学院。そしてトリスティン魔法学院と。

いずれも歴史と格式のある学校である。

ここで、貴族の嗜みと魔法を学び、ついでに結婚相手を探したりする。

そして、貴族というのは何故か豪華なのが好きです。

それは食事にも当て嵌まる。

テーブルにおかれた料理は、朝食とは思えないほど重い。

どっかのパーティー並の量である。

しかしこれが普通なのである。しかも朝昼晩。

正直、胃がもたれてしまう。

当然私がそんな料理を食べれる筈もなく、調理場に行って頼んだ食事を貰ってくる。

当たり前だ。そんな量を毎日食べていたら、卒業する頃には動脈硬化でジ・エンドとなるだろう。

テーブルにキュルケ、タバサ、私と列び朝食を開始する。

キュルケとタバサはあの量をいつも食べる。

しかしいつ見ても、けしからん胸だ。

タバサはタバサで、苦い事で定評のあるハシバミ草が好物のようで、大盛りのサラダをひたすら食べている。

正直信じられない。

前世にラーメンの葱だけを食べる親戚がいたけど、ここまでじゃない。

ちなみに私の嫌いな物は、葱と納豆だ。葱なんて口に入れた瞬間、拒絶反応が出る。

余談だが、ハシバミ草をミキサーすると青汁と同じ味になるとか、ならないとか。

とりあえず私の朝食はパン、バター、りんご、ミルク、終わり。

朝はこれくらいで十分。

今は、バターが溶けやすいよう、魔法でパンを加熱している。

ほんと魔法って便利だ。

何も無い所で火が出るなど、見てて楽しい。

小さい頃は、杖の先から出る火をじつと眺めていて、つい本物かどうか確かめる為に火に触って火傷してしまったことがある。

懐かしい記憶だ。

昔はあんなに忌み嫌っていたのに。

「ティリエル、モグ。貴方いつもそんな、モグ、量だから、モグ、大きくなるよ、モグ。」

「食べ終わってから口を開きなさい。」

「下品。」

「私は、これで満足しているのよ。それにもし食べる量によるなら、貴方の大好きなヴァリエールも、そのタバサも。あるいは、私以外の全ての女子生徒が貴方と同じサイズになるはずではないのかしら?。」

「同感」

タバサも私に同意してくれている。

ちなみに私は、普通だ。グローバル・スタンダードなのだ。

そう思いたい。

どんな場所にも苦手な嫌いな人間はいます。

家庭で、職場で、学校で、軍隊にもいる。

当然この学び舎も例外な筈はない（雀の巣窟）。

朝食も終わり、教室で教科書を眺めているとその人物は、やって来た。

ピンク色のブロンドヘアで高すぎるプライドと希少価値の胸と釘宮ボイスを持つ少女。

ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール、公爵家令嬢。

わたしはルイズ・フランソワーズ・ド・ラヴァリエール。

トリステインの中でも最大の公爵家の三女。

今日は、進級の日。

使い魔召喚の実技試験の日。

前の晩からゆっくり休息を取って精神力を蓄えてた。

今日こそわたしをゼロと呼ぶ輩を見返してやる。

朝。あの忌ま忌ましいツエルプストーとは会わなかった。

朝から私の大好きな極上のクックベリーパイが出た。

今日がついている。

今日こそ成功できる。

貴族として、公爵家として、誇れる使い魔を召喚できる。

今日は私の為の日だ。

そう思って、ブリミルと女王（マリアンヌ太后の事で、実際には即位していないが、他の貴族はそう呼んでいる）に感謝している。

なのに、今。

ティリエル・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデルと目が合ってしまった。

「グーデンモルゲン、フロイライン・ヴァリエール。」
ゲルマニア式の挨拶をしてくるティリエルを睨む。

わたしは、ベルカを宿敵のツェルプストーと同じくらい嫌っている。

トリステインの属国に過ぎず成り上がりの癖に、今やトリステインと同等以上の規模にまで成長した国。

特に許せないのが、親である筈のトリステインとの戦争で勝ち、神聖な領土の一部を奪ってあまつさえ賠償金まで分捕るのだから絶対に許せない。

この学院で唯一のベルカ貴族を見る度にこの手で縛り首にしてやりたくなる。

あるいは、自分の持っていない物を持っている彼女に嫉妬したのか

もしれない。

綺麗で、胸があつて（自分よりは）、学院で唯一の火・風・土の上位のスクエアで、この年で伯爵の位（ベルカは貴族の称号は買えない。）を持つ程の名誉を上げている。

まるで私の目指す貴族のような。

それに比べてわたしは、胸も無い、魔法も使えない。

でも私はベルカを国とは認めないし、彼女を貴族としても認めない。

「あんた誰に口を聞いてるわけ。成り上がり風情が調子に乗るんじゃないわよ。」

「不機嫌なのは、理解しましたが、開口そうそう失礼ではなくて？」

「そうね。あんたが居るから不機嫌なの。わかった？」

「ええ、ですがいきなり人に当たるのは不躰でないの？名高いヴァリエール家では、外国の貴族にたいする礼儀はどのように教育されているのかしら？」

「属国で売国奴の貴族に礼儀なんて必要ないのよ。さっさと国に帰りなさい。学院の面汚しだわ。」

「あら、今なんとおっしゃいましたか？」

そこでティリエルの眉毛が釣り上がりわたしを睨む。

「黙って斜に構えてくれれば、図に乗って！正直におっしやいます
が、こんな学院とは出来るならさっさとおさらばしたい気分ですわ。」

「なら、今すぐに私の前から消えなさい！目障りよ。」

「ふん。弱小国家のトリステイン貴族は、プライドだけは高いとは
良く言ったものですね、フロイライン・ヴァリエール。口と実力が
釣り合っていないば、長生き出来るかもしれせんわよ。」
売り言葉に買い言葉。

だが、どんな事にも始まりがあれば終わりもある。

「まだまだ言い足りないけど、もうすぐ授業が始まるわ。迷惑にな
るだけね。」

「それは、肯定しましょう。」

「覚えてなさいよ！」

「忘れましたわ。」

それだけ言っただけ私席に着く。

「はあ」

後ろでため息が聞こえた気がした。

「どうしたの、ティリエル。ため息なんかついて。」

いつの間にか、後ろに居たキュルケが聞いてくる。

「いえ。ツンデレの扱いは、極めて難しいと実感しただけ。」

「ツンデレ・・・なにそれ？」

教師の説明を聞き流し、授業は終わった。

召喚の儀式。でもそんなの（私には）関係ねえ！！

さて、午後から召喚の実技試験及び進級試験が行われる。

担当はコルベール先生。

召喚は、学院の広場でします。

以前教室でやって大変な事になったので。

皆、大なり小なり張り切ったり緊張しているようだ。

そりゃ、一生のパートナーとして付き合っていくわけで、珍しいのを召喚すれば自慢が出来るわけで、ついでに進級も兼ねているのだから当然でありましょう。

ちなみに順番は名前からなので、ルイズが最後らしいです。

私は緊張しないのかって？

召喚に参加するなら緊張もするかもしれませんが、お生憎様。

私は、とつくの昔に召喚してしまったのでこの授業に参加しません。

とりあえず、後ろの方の椅子に座って傍観者気分を味わっています。

「ティリエル、貴方召喚の儀式は済んだの？」

「朝言ったことを忘れましたの？私は、召喚の儀式は既に済ませた

と、言った筈でしょう。」

「……………ああ、そうだったわね。」

どじやら忘れてたらしいです。

「ところで、キュルケらしい素晴らしいサラマンダーですわね。」

「そうですね。この立派な鱗、この尻尾の火。これは特に極上のサラマンダーよ。名前はもう決めたの。フレイルムちゃんよ。」

なんか、そのまんま。

まあ私は、個人の意見を尊重しますから。

自分に影響が無い限り。

頬擦りするキュルケをフレイルムは二岐の舌でチロチロと嘗めていきます。

「さぞかし殺しがいがりそうですね。」

しまった。つい本心が……………

フレイルムとキュルケが、こちらを見て固まっていると、

「今終わった。」

と相変わらず平坦な声でこちらに来るタバサ。

傍らに佇んでいるのは、蒼い鱗の竜。

決してリオレウス亜種ではありません。

「立派な風い……風竜。おそらく、今回の最良の使い魔でしょう。」

今日はやけに口が滑る。精神的に疲れているのでしょうか。

たしかに周りには、フクロウ、毒々しい蛙、巨大なモグラ、目玉親父の強化版的な生き物ばかりです。

ために、タバサの使い魔の頭を撫でてみると、きゅい、と鳴いて嘗め返されました。

私は別に爬虫類とか両生類は平気です。

それどころかむしろ好きな部類に入ります。

逆に嫌いなのは昆虫全般。

さあ、そろそろルイズの出番です。

ドカーン！！

ポカーン！！

ズカーン！！

ドカーン！！

ズカーン！！

学院の広場で爆発音が響き渡る。

閃光が煌めく事に、クレータが増え、空へ幾筋もの煙が上がる。

別にトリスティン学院が砲撃を受けているわけではない。

これは、ルイズの起こす魔法の結果だ。

呪文を唱え、杖を振る度に爆風が周りを叩く。

他の生徒達は、被害を受けないように距離をおいて待機している。

本人は、今は無傷だが度重なる爆風で体が若干煤けているのだが。

ルイズの起こす爆発は、極めて不思議だ。

爆発とは、通常激しい燃焼の事で必ず火が出る筈なのだがルイズのそれは、そのような現象は何もない。

更に恐ろしいのは何も無い場所から、いきなりなんの前触れも無く爆発が起きる事なのだ。

本人は気づいていないが、日常生活では迷惑以外の何物でもないが戦闘の際には、とてつもなく便利である。

砲台として重宝されるだろう。

マクミラン大尉といい勝負だ。

いや、寧ろセットで配置した方がより万全かもしれない。

本人に言ったら怒りそうだな。

マクミラン大尉って誰？

ムックでモリゾーです。

爆発が三桁に近づく頃には、クレータだらけでさながら戦場のようだ。

血と硝煙の臭いはしないのですが。

そしてようやく、召喚に成功しました。

前世で読んだ他の方々（白い魔王とか、全長100メートルのGとか、蜘蛛男とか、人間大好き吸血鬼の旦那とか・・・）などが来ると今後かなり面倒な事になります。

しかし、青パーカーを見た瞬間。

目の前が歪みました。同時に激しい頭痛と身体中から血とゆう血が沸騰して、外に流れ出すような感覚。一瞬意識が飛びそうになり、椅子から落ちそうになります。

「ちょっと！貴女大丈夫？」

「顔色が悪い。」

キュルケが慌て支えてくれたのでなんとか落ちないですみました。

「あ、ありがとうございます。少し……部屋に戻って休みますわ。」

わかっていた事でしたが、思った以上に精神がたえられなかったようです。

「ほんとに大丈夫？」

「ええ。お気遣いは有り難く頂戴しますが、気にしないで。」

心配そうなキュルケとタバサがこちらを黙って見るなか、ルイズとあの少年、『平賀才人』が口論しています。

それを睨みながら、私は部屋に戻りました。

騒乱は、ゆっくりと静かに

部屋に戻ってから私は明かりも付けず、夕食も抜いて椅子に寄り掛かり思考を巡らせている。

あの授業の後は使い魔との触れ合い、もしくは親交を深める自由時間だったのが幸いした。

部屋に戻るなり、頭痛薬と精神安定剤を飲み干しすぐに眠りについた。

それから目を覚ましたのが夜中。

ショックはおさまったが、今後どうするかだ。

結論は前々から考えている事の実行だ。

それ以外ない。

やっと簡単な結論が出たところで、カタカタと乾いた音が響く。

通信機だ。

もちろん他のハルケギニアの国では、こんな物は存在しない。

これもオーバーパス技術の一つだ。

タイプライター型の通信機が、白い紙に次々と文字を書いてある。

別名エニグマ暗号機と呼ばれるものから出てくる文字は、アルファベット。

ドイツ語で書かれている。

電力はやっぱりオーパーツのバッテリーで、アンテナは窓から突き出している。

ちなみにこの世界で一般的なフクロウ便や伝書鳩を使えば良いじゃないかと思うが、必ず届くとは限らないし、密偵に奪われる可能性もある。なにより遅い！！

情報は早く伝わらなければ、意味のない事になってしまう。

その点これは、迅速で誰かに見られる可能性も極小だ。(そもそも電気の仕組みどころか、雷が電気だということを知らないレベルなのだ。)

送られてきた文章の内容は、前回トリスタニアの武器密造工場で捕まえた業者から、スポンサーの貴族が特定出来たこと。

近々、対アルビオン対策で虚無の日に会議がしたいとの事。などが書かれていた。

それらに目を通し、またベットに戻る。

明日からは普通にしようと思心に決めて。平賀才人は、とことん運がない。

周りから良く抜けていると言われているが、これは流石にどうだ。

秋葉原で修理から戻ってきたパソコンに頬擦りしていたら、いきなりファンタジーでマジカルな世界に来てしまったからである。

いきなり美少女に唇を奪われたと思ったたらいきなり使い魔と呼ばれ、犬扱いされ飯は食わせて貰えず藁で寝ると言われ、口答えすればお仕置きとゆう名のSMプレイをされる。

多分裁判になったら俺は絶対に勝てる。そうに違いないと思う。

おまけに魔法？月が二つ？貴族？絶対異世界だ。

帰れないと言われて驚いたが、不思議とパニックにはならなかった。

多分俺じゃ無かったら発狂してると思う。

朝起きて、夢だとよかったらと思ったがやっぱり現実だった。

冷たい水で下着を洗ったが………うん………結構いいかも。

とりあえず、朝食だと言われ食堂まで来たら驚く。

「マジ?!すげえ」

目の前には、七面鳥の丸焼きやケーキなどクリスマスパーティー以上の食事が並んでいる。

ただ、周りがみんな制服で俺だけ私服なのがなんか気恥ずかしい。

「ほら、アンタの分の食事も頼んだから有り難く食べなさいよね!」

と言われた時、めちやくちゃ嬉しかった。18時間以上何も食べてないから、胃袋が食物を寄越せと疼いている。

だが現実には厳しいのだ。

「……………なんだこれ……………」

「何ってアンタの食事に決まってるでしょ。」

何故か床に置かれたプレートの上には、一欠けらの固いパンに薄い皿に載せられた具も何もない海水のようなスープ。

「…………………………」

ここは、ゲッターなのか？アウシュヴィッツなのか？あるいはシベリアの収容所？

いや、そっちのがまじだろう。

「本当にこれが俺の食事か？」

「何度も言わせないで。平民ならこれで十分でしょ。」

身も蓋も無い回答ありがとうございます。

これが平民の食事。

もしかして、他の使い魔の食事はこれ以下？

これ以下が思いつかない。

他の使い魔もこんな食事か……

同情する。

いつその事、このスープを目の前の憎らしい少女の顔面にぶちまけてやろうと思ったが、それをやったら一週間くらいは飯を抜きにされる。

絶対餓死する。

そんな死に方は絶対にごめんだ。

俺は巨乳に抱かれて窒息死したいんだ。

とにかく、石のように固いパンを塩水に付けて食べる。

マズすぎる！！地球には捨てる神あれば拾う神ありとの諺がある。

今の心境はそんな感じだ。

「流石にひど過ぎるのではなくて？ミス・ヴァリエール。」

そう言ったのは、豪奢な金髪を靡かせる少女。

まるでフランス人形みたいだ。

彼女の手には、小皿に取り分けた料理。

「どうやら、俺にくれるらしい。」

「なに人の使い魔に勝手に施しをしようとしてるのよ。」

「だがどうもルイズは納得しないらしい。」

「当然でしょう。この食事では、一月もかからずに餓死するわ。」

「余計なお世話よ。こいつは、平民で私の使い魔よ。私がどうしようとするの勝手でしょう。」

「本来使い魔と主は、一心同体。対等の立場で接するのが筋とゆうもの。それともミス・ヴァリエールは、この使い魔を飢え死にさせて尚且つ新しい使い魔を召喚できる、自信はありますか？」

「いい。こいつは私の使い魔なの。こいつの物は全部私の物。わかる？平民は平民らしく私に従ってればいいの。」

何気にジャイアニズムですか。

「ったく。これだからトリステイン貴族は。」

と小さく言っただのが聞こえた。

「わかりました。では、考え方を変えましょう。貴方、名前は？」

唐突に話を振られて反応が遅れてしまった。情けない。

「平賀。平賀才人。」

「よろしく。『平賀才人』。私は
ティリエル・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデル。ティリ
エルとも呼んでくださいな。以後よろしく。」

と言って一礼してくる。

反射的にこっちもお辞儀する。

その光景に一瞬唖然としていたが、ティリエルが才人に小皿を渡し
た瞬間我にかえる。

「ちょっと、話を聞いていたの?!私の使い魔に施しは……」

「誰が貴女の使い魔に施しをしましたか?」

「あなたなにを……」

「私は、ミス・ヴァリエールの使い魔ではなく、平賀才人とゆう個
人に差上げたまですわ。問題は何処におありで?」

ルイズは苦虫を噛み潰したような顔をして、勝手にしなさいと呟く。

「では、どうぞ召し上がってくださいな。私はここでおいとまさせ
ていただきます。では。」

俺は、食堂を去るティリエルを見ていた。

さて、主人公は冒頭不幸が続くのは基本です。

「諸君決闘だ。」

自称薔薇らしい、ギーシュ・ド・グラモンが、広場で高々とギヤラリーに宣言します。

事の発端は堀江ボイスのメイドが、ギーシュの落とした香水の瓶が割れて、様々な偶然が交差した結果、二股がばれたとゆうのが真相。

そこで自分の罪を決して認めないのがトリステイン貴族。

顔面に二枚の紅葉を貼付けたまま、あうあうあ〜と言って泣きそうになっているメイドを攻めるギーシュ。

心なしか、周りの視線が冷たかったりするのは気のせいではない。

それで、才人が出て来て「お前ら人間じゃねえ!!」と叫んでそれで決闘になった。

現在ギヤラリーは二つに別れている。

ギーシュ寄りのは「平民に貴族の強さを教育してやれ!」と叫ぶ、貴族優位主義者(主にウァリエ。)と「ギーシュ様格好良い〜)はぁ〜と)「と言っている者。

才人寄りなのは、「リア充死ね!」と叫ぶモテない人達(マリコリ又等)と「この女の敵!浮気者!」と叫ぶ、ギーシュに裏切られたと感じている者。

「殺せ!」「殺せ!」「殺せ!」「殺せ!」「とギヤラリーはヒートアップするなか、双方とも冷や汗が出てくる。

ギーシュとしては、最初は殺しても構わないとも考えていたが、流

石に周りから殺せ、殺せ言われたら逆に退く。

サイトとしても喧嘩程度の事と考えていたが、この熱狂ぶりは異常だと肌で実感する。

「少し静かにしたまえ！」

ギーシュは叫ぶ。

「まずはルールだ。君は僕のこの杖を落とすなり、奪うなりしたら勝ちだ。僕は君が戦闘不能と判断するか、君が降参するかしたら僕の勝ちだ。」

「ああ、それでいいぜ。」とりあえずそれくらいが妥協だ。

しかし周りから、ブーイングが飛ぶ。

とりあえず周りは無視して杖を構えるギーシュ。

「始める前に言っておく。僕は貴族だ。だから魔法で戦う。」

そう言っつて杖を振る。

「いでよ。ワルキューレ。」

サイトが殴りかかろうとして慌てて止まる。

目の前に突如、青銅で出来た甲冑が現れた。

青銅は、鉄には劣るとは言えれつきとした金属だ。

おまけにゴーレム等は力加減が難しい。

顔面を殴られて吹っ飛ばされてしまう。

「くっそ！」

顔面は、紫色に膨らんでいる。

「どうだ平民。降参する気にはなったかね？」

上目線から腕をくんで告げるギーシュ。

それにぺっ、と地面に血混じりの唾を吐いて答える。

「そっか……」

意味を悟ったギーシュがワルキューレに命令を下す。

再び攻撃が加えられる。

正直リンチ以外の何物でもない。

攻撃をかわす事も出来ず、金属のハンマーで叩かれるような猛攻に耐える。

だが、それで済まずサイトではない。

攻撃の一瞬の隙について地面を転がり、ワルキューレの攻撃範囲から逃れる。

そして、ワルキューレの大振りな拳を避けると、全体重を掛けた夕ツクルをかます。

勢いに負け、仰向けに倒れるワルキューレに、学校で習った柔道の技をかける。

じたばたと暴れるが流石に起き上がれないようだ。

サイトは勝った。

と、そう思ったが間違いだった。

「それで勝ったつもりか？平民。」

ギーシュが呟くと同時に、またもや頬に衝撃が走り、吹っ飛ばされる。

なんでだと思い、起き上がる。

目の前には、3体が増えたゴーレム。

(まじかよ……………)

その顔面に蹴りが炸裂する。

3体が増えてリンチを開始したワルキューレを見て、そろそろ手助けしてやるかと思う私、ティリエル。

なにしろ、ここで死なれたら意味がない。

「そこまでしたらどうかしら？ギーシュ・ド・グラモン。」

観客を擦り抜けるように決闘の間に入る。

「そうはいかないな。ミス・ルーデル。これは、決闘なんだ。」

「すでにぼろ雑巾状態の相手を痛めつけるの

「ああ、いいだろう。じゃあき「サイトー!!」

観衆とギーシュの台詞を割ってルイズが入りこんでくる。

少し来るのが遅かったような……まあパラレルワールドだし誤差はあるな、誤差は。うんうん。

「ちょっとギーシュ、わたしの使い魔に何してるのよ。貴族の決闘は禁止されてる筈でしょ。」

「『貴族同士』だがね。彼は平民だろ。ルールに間違いはない筈だが。そうだろう、諸君。」

ルイズの抗議を流してギャラリーに振り向くが。

「あれ？そうだったけ。」「さあ……どうだったかしら？」「俺、先生に見つからない内に戻るわ。」「僕も。」「私も。」「と曖昧な返事か、帰ってゆく。」

「……とにかく、これは決闘だ。いかに主の君の為に戦っ

ているとは言え、彼自身の口で言った事だ。彼の答えを聞こう。「

「ははへへろ、るひふ。」（離れてろ、ルイズ。）

「サイト!?!」

意識が朦朧としていたようでしたが、まだ動けるようです。

「あひふの、ゆうほうひは。こへはおほほほうひのけっほうは。けっほうはふへるまへ、はははってやふ。」（あいつの、言う通りだ。決着をつけるまで、戦ってやる。）

「でも……」

「よしたまえ、彼は彼自身の意志で戦ってるんだ。これは名誉の問題だ。」

あれ?ギーシュの何かに火がついてた? カッコイイこと言ってる。

私のせいかしら?後悔はしないけれど。

「では、ルーデル。武器を。」

原作ではギーシュの作った剣だったけど。

まあいい。

私は、サイトの方に歩む。

「平賀才人。貴方はこの決闘で武器を受け取りますか？おそらくギ
ーシユは手加減はしないでしよう。止めるなら今ですが、決闘を続
けますか？」

サイトは無言で頷く。

私は笑って。

「それでこそ、貴方。では武器を受け取りなさいな。」

と事前に用意しておいた武器を二つ、倒れているサイトの目の前に
投げる。

ホルスターに入った銃と同じく鞘に入ったナイフ。

それを見たサイトが驚きで目を見開く。

「ひんふるあふひょんあーひいー？ほへに、さはいはるはいふ？」

(シングルアクションアーミー？それに、サバイバルナイフ？)

痣だらけの笑みでサイトが叫ぶ。

「まはは！まはおはっへひはい！！」(まだまだ！まだ終わっていな
い！！)

まあ結局、普通にガンダールブ発動で原作通りにやられました。

簡単に説明すると、才人がシングルアクションアーミーのファース
トドロウ(西部劇などで撃鉄をたたき付けるように連射するやり方
)でワルキューレを6体撃ち倒した後、ナイフで残りの一体とギー
シユの杖をみじん切りにしたあと、首に突き付け終了。

余談だが弾切れの時に「おへのりろーほは、れほりゆるーひょんら！
！」（俺のリロードは、レボリユーションだ！！）と、オセロット
の台詞を叫んだのだが、予備弾が無かった為に、ワルキューレに
発楯で殴られている。

とりあえず、最後は何故か倒れたギーシュに「いひへんふら。」（
いいセンスだ。）とにほざき、ギーシュと漢の握手をしたあと倒れ、
同じく脳震盪を起こして気絶してしまったギーシュが引きずられて
いくのを見送って、その場をはなれた。

タバサの冒険+ 又ル

なにやら銃について言い争っている二人を本を読む振りをして見つめるタバサ。

今、懐には昨日届いたガリアからの命令書状が入っている。

命令の内容は、ザビエラ村の吸血鬼騒動の解決。

おそらく、使い魔が召喚されたからこの際。とゆうのだろう。

母が倒れてからずっと任務をこなしてきた。

それも自分の宿命と割り切ろう。

あれからずっと復讐の為に生きてきたが、どうするかは全く考えていない。

昔と変わった事といえば、宮廷に呼び出されることは、なくなり直接手紙や荷物を送ってくるようになった事くらいだ。

それと、友達と……

書類にある吸血鬼との文字を見つめて、同業者(?)が出来た事くらいだと言うことだ。

タバサは、テイリエルを眺める。

朗らかな笑顔のもうひとつの素顔を。

約4週間前。

真夜中に近い時刻。

タバサは、トリスタニアからやや離れた、船のドックのような工場に居た。

「ようこそ。ミス……」

「タバサ。」

「そうでした、ミス・タバサ。こちらへ。」

タバサの目の前には、この工場の責任者らしきメイジ。

周り建物の中では、外の気温と較べてとても熱い。

真っ赤に溶けた鉄があるからだ。

鉄が火花を散らして型に入れられる。

事務所のようなところに案内されテーブルにお茶が出される。

「それでは、商談に。」

タバサの今回の任務は、トリステインで新しく造られた大砲とその設計図の写しを取りに来たのだ。

テーブルの上にあるのは、ガリア貴族の連名書と10万エキュの手形だ。

タバサにとって、最近こんな任務ばかりであった。

おそらく単に人手が足りなかったのだろう。

相手側も乗り気なようで直ぐに終りそうであった。

タバサ自身も味気無い任務だと、無表情に思っていた。

だがそれは間違いであった事は、タバサも任務を命じた貴族達も例外では無かった。

『こちらシュトローム。目標、確認。取引を始めた。』

『こちらイエーガー。同じく確認。』

タバサが居る建物の近くの路上に、6人乗りの馬車が止まっている。

それが5台。

それらは全て特別製だ。

装甲が施され、サスペンションもついている。

馬も装甲ガーゴイルだ。

その内の一台の屋根には、魚の骨のような棒が突き出ている。

アンテナだ。

この時代には実用化されていない代物だ。

その馬車の中には、金髪の少女が混じっている。

「こちらノスフェラトゥ。配置完了。」

ティリエルである。

黒いベルカの軍服を着て無線のヘッドフォンを付けている。

彼らの任務は、ベルカから持ち出された第5級機密兵器であるアイムストロング砲の設計図と転炉の設計図の奪取。

不正に製造された製品と製造施設の破壊。

そして関係者すべての抹殺だ。

今は何箇所かある拠点の一斉殲滅の為に待機している。

間もなく時間が迫っている。

車内の兵士は命令の出る時を心待ちにしている。

「少尉。少し早いかもしれませんが戦闘準備を開始しましょう。」

「ヤボール。コマンダー」

テイリエルが微笑みながら言う。

「軍曹。攻撃準備だ。伝える。」

「ヤー。」

指示は直ぐに伝わり、銃に弾を装填する。

銃もハルケギニア主流のマスケット銃ではなく、近代的な銃だ。

ボルトをオープンしてクリップに付いた弾丸を差し込むのはKar
98k。

バナナ型マガジンを差し込み、初弾を薬室におくのがStg44。

20連発マガジンを取り付けるのは、Gew43。

フィールドカバーを開けて箱型弾倉に入った弾帯を装填位置に置く
のが、MG42。

折りたたみ式ストックを伸ばすのは、MP40。

そして、大尉ことテイリエルの使う銃もMP40。

「責任者だけ生かしなさい。後は殺しても構わないわ。」

「大尉。」

MG42を肩の高さに持ち上げた軍曹が聞く。

聞きたいことがわかっているティリエルは。

「ええ、勿論。喰らっても問題はないでしょう。存分に召し上げればよろしくてよ。」

その時、無線から通信があった。

『全部隊に次ぐ。攻撃開始、ジークハイル。』

その小さな音を全員が聞き逃さ無かった。

馬車のドアが開かれ、兵士が戦場に向かう。

「では僅かな娯楽を、存分に愉しみましょう。」

そういったティリエルの被った将校帽には、下顎の付いた髑髏のマークがついていた。

SS武装親衛隊。

全員の目が真紅に染まっていて、全員が笑っていた。

「ではこれで、間違いはないですね。」

何度も契約書を見て間違いや偽装が無い事を確認したタバサは、コクリと頷く。

その時どこかのガラスが割れた音、何かが発火するような音が響き渡る。

（事故？）とタバサは思った。高温の金属を使う製作上、何かの拍子で爆発事故が起きる事もあるだろうと考えた。

しかし、現実にはそうでは無かった。

タバサは無意識の内に、これは単なる事故であると対応を怠った。

無理もない。

始めからとんとん拍子で物事が進んでたらきつとそう思う。

「何かあったようですな。ちょっと見て……」

その言葉を全部言い終わる前に耳をつんざくような銃声とその合間に響く、悲鳴が聞こえた。

すさまじい銃声と共に銃口からのマズルフラッシュが薄暗い工場を照らし、床に空薬莖が降り注ぐ。

弾丸は嵐のような勢いで無慈悲に全ての標的を薙ぎ払い、穿ち、鮮血を撒き散らす。

反抗すら出来ずに進む殺戮。

時たま、金属に当たって金切り声をあげて跳弾する。

「第二分隊は、此処此処の確保。第三分隊は、敷地内の残党を排除。終わったら、好きに食事をしなさいな。第一分隊は、私と事務所と倉庫の制圧。」

言い終わると各自それぞれ命じられた場所に向かう。自分は先行して通路のドアを開ける。

殺気っ！

待ち伏せしていたメイジ二人、火縄銃を持った一人。それぞれを視認すると、素早くMP40の引き金を引く。

毎分600発の銃弾を吐き出す銃の一連射で三人とも倒れる。

「ぬるいですわね。」

誰にも聞こえないような小声で言った。

「い、いい、一体何がどうなっているんだね？」

先程のタバサと商談していた貴族が、事務所の前の通路のドアの前で杖を構えながら傍らに伏せている傭兵団長に聞く。

「さあ、わかりませんなあ。逃げ込んでくる奴らがいけない以上すくなくとも作業場の連中は全滅しやがったことはたしかでさあ。まあ、これじゃあ手の打ちようがありませんがね。」

「手の打ちようがないとは、どうゆうことだ！こうゆう時の為に大枚叩いて雇ったのだぞ！なのにこの失態はなんだ！」

弱腰とも取れる傭兵団長の言葉に、貴族の部下のメイジが杖を抜いて怒鳴るが、その喉元にショートソードが当たる。

「貴族の旦那様よお。あんまし調子ぶっこいてると、ぶっ殺しち

やうぜえ。」

それを横目で見ていた傭兵団長は、手で得物を下ろせと命令する。

そしてこの状況をどう切り抜けるかを考える。

彼等は有名では無いが、それなりの場末を乗り越えてきた手練れの男たちが揃っている。

対メイジ戦も当然出来る連中だ。

幾つか負けたりもして来たが、今回ばかりは相手が悪かった。

傭兵団長としては、ここまで手勢が壊滅したのは初めての事だ。

正直敵がどの程度の数で、どの程度の力なのかも分からない。

わかってるのは、恐ろしく強くて、それなりの人数がいるってことだ。

それに、

団長は、傍らに倒れている『元部下』を見る。

それは頭が半分、中身ごとぶっ飛んだ死体だった。

窓から様子を見ようとしたこいつは、何処からか飛来した銃弾に殺された。

今残ってるのは、俺と舌打ちしながら剣をしまう馬鹿野郎だけだ。

正直まともにぶち当たって勝てるとは、思えない。

不意打ちも同じ結果に終わる。

それにだ。

今窓の外から虫の音も木の揺れる音も聞こえない。

サイレントだ。だがこんな広い場所を、いつぺんにカバー仕切れるのは、トライアングルかスクエア。

自分はトライアングル。

只のスクエアくらいなら、やり込めれなくもないがここまで手際が良い奴が、普通である訳もない。

多勢に無勢だ。

そして雇い主の為に死ぬ程、暇ではない。

俺達は、傭兵。

命あつての金儲けだ。

最後まで戦ってやる義理もない。

せいぜい、払いが良かった雇い主程度だ。

とりあえず手遅れになる前に、逃げるとしますか。

結局最後の一人と仲間に、ずらかるぞ。と目で合図する。

「しっ、足音が聞こえるな。」

「よし。ドアの前に立つたら攻撃するぞ。」

雇い主はどつやら戦うようだ。

命知らずめ。

ドアの前の二人に気づかれないように、小声でリビテーションを唱える。

今だ!!

ガシャーン!!

窓ガラスが割れる音と同時に、ほうり投げた死体に、飛来した銃弾が残りの頭を吹き飛ばした。

銃声と同時に、フライを唱え飛び出す。

「おい貴様ら、何処へ行く!!」

ガラスの割れる音で振り向き、傭兵の姿が消えている事に気がついた貴族が叫ぶ。

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ。俺たちや、先においとまさせてもらっぜ。せいぜい奴らと、ワルツでも踊ってな。あの世で先に糞でもしてこい。」

豚野郎共。」

傭兵達の算段はこうだ。

最近、ベルカカゲルマニアで命中率が高い銃が出来ていたから、狙撃してきたのはそれだろうと睨んだ。

だが所詮は、前装式だ。

装填方法はマスケットと変わらず、まず黒色火薬を入れてから弾丸を銃口から入れ、朔杖で突き固める。

そして、点火よしの火薬を火皿に入れる。

このプロセスをするなら、一分程度。

熟練者でも20秒ほどかかる。

その時間があれば、自分達は銃の射程の外に逃げ切れると考えた。

だが残念な事に彼等の予測は外れていた。

予定より早く銃声が聞こえる。

捨て台詞を叫んでいた一人が倒れる。

「なに!？」

それに気がついた団長は、慌てて近くの木の影に隠れる。

「馬鹿な!早過ぎる!それにフライの高速低空飛行を撃ち落とした

だと！」

距離は予定の半分も稼げていない。

どうしたら良いのか分からない。

まあ、この木なら大丈夫だろうと思った瞬間、意識が無くなった。

屋根にあらかじめ待機していた狙撃兵が、木の幹を貫通した弾丸で倒れ込む標的をスコープ越しに見て笑みを浮かべている真下でタバサは音を出さないように伏せていた。

銃声が聞こえ初めてから、タバサは屋根裏に侵入しそこに潜んでいたのだ。

手には、事務所から失敬しておいた大砲と転炉の設計図。

何が書いてあるのかさっぱり分からないが、タバサには関係の無いことだ。

問題は、ここからどうやって逃げ出すかだ。

屋根は、先程聞こえた銃声で大胆の位置は、わかったがそれっきり気配が感じられない。

場所的には、こちらが優位だが戦闘体制の敵に不意打ちで稼げる時間はあまりない。

それに、タバサは先程天井に空いた穴からある物を見て恐怖心が湧いていた。

襲撃者達が赤い目を光らせ、既に息絶えた作業員や傭兵の首筋に噛み付き、肉ごと血を吸っているのを見た時だ。

吸血鬼だ、とタバサはすぐに感じた。

それも吸血鬼の中でも最上級と言える種族のだ。

ハルケギニアの吸血鬼には幾つか種類がある事をタバサは知っていた。

平民の傭兵でも倒せるレベルから、スクエアメイジが束になっても勝てないレベルまで居る。

中でもこれはピカイチだ。

ハルケギニアでついで発見例が何百年もない種だ。

吸血鬼全般の弱点の日の光を浴びても平然とし、高い身体能力と再生能力を持ち、血を吸わなくても数年は生きていられる。

また、不老とも言える。

学説では、人間の社会に人間として紛れ込んでいるとも言われている。

そんな幻の種族が、驚異的な威力の銃を持ち、しかも軍隊としてタバサの目の前に存在している。

彼等と戦って勝ち目はない。

下の方で騒音が聞こえたがすぐに止む。

そして階段を登る音がする。

タバサはウィンディ・アイシクルを唱え身構える。

ドアがゆっくりと開く。

ドアを開いて中に入って来た人物を見て僅かにタバサは驚いた。

それは、一週間程前にベルカから転入してきた少女だったからだ。

ティリエルは、ゆっくりと中に入る。

MP40の弾倉にはまだ、半分程弾丸が残っている。

テーブルの上には、コップと幾つかの書類が残っていた。

その書類を幾つか手に取って眺める。

その一つには、ガリアの有力な貴族の名前が幾つかあった。

取引の最中だったようだ。

これまでの死体からは、それらしき死体は見つかっていない。

狙撃兵から、報告は傭兵だけとなるとまだこの建物中に潜んでいる筈だ。

「少尉。」

机を漁りながら喉元に付けた無線で、呼び出す。

「取引相手は、ガリアの者の様。まだ此処に潜んでいる筈。生きて
まま捕らえなさい。」

現在ガリアとベルカは、友好的関係を築いている為この場にいるで
あろうガリア人の取引相手を殺して、外交的に問題が発生する恐れ
があるためとティリエルが判断した為である。

それに万が一その取引相手が設計図を所持していた場合。

この建物の何処かに隠しておく可能性も有り得るわけである。

「大尉。先程、こここの責任者らしきメイジを捕らえました。」

「口は利けるのでしょうか？」

「はい、今から尋問を開始します。」

「わかりました。事務所の搜索が終り次第、尋問に加わりましょう。
ガリアの取引相手の搜索も引き続き続行しなさい。」

そして、ティリエルが棚の中を調べようと扉に手を掛けた時。

事務所の天井の一部が砕ける。

咄嗟に振り向いたティリエルが見たのは、降り立とうとしている人
影と、その自分を狙って滞空している無数の尖った氷だ。

タバサの杖が僅かに降られると、何本かの氷の矢が標的を貫かんと迫る。

だがそれは、ティリエルの翻すように進路を塞いをマントを貫か・・・無かった。

ケプラーとセラミックのチップで編まれ、5・56ミリNATO弾にも耐えられる防刃防弾のマントによってタバサの必殺の一撃も虚しく碎かれる。マントで死角が出来た所で杖を抜く。

お互い2、3歩距離を置く。

タバサの必殺のジャベリンも、ティリエルのMP40もこの至近距離では余り使えない。

お互いブレイドを唱える。

タバサの身の丈程の杖が真空の竜巻の刃となり、ティリエルのタングステン合金で出来た杖が、鉄をも溶かす灼熱の刃となってお互いを切り裂こうと迫る。

タバサは接近は苦手だが、小柄さを活かしてブレイドを槍の様に使う。

かたやティリエルは、剣術は苦手だが片手剣のように扱う。

何回か切り結んだ後、タバサがティリエルの杖を弾き飛ばした。

杖を引き戻し、杖を無くした標的を貫こうとした。しかし、その前

にティリエルがタバサの杖を蹴飛ばした。呆気なく飛んでくタバサの杖。

そしていつの間にか額に銃が突き付けられている事に気がつくタバサ。

「チェック！」

ティリエルがそう呟いたと同時に。

応援に来た、吸血鬼の軍団に銃を向けられていた。タバサは、動けずにいた。

杖は何処かに弾かれた。

額には、銃口が突き付けられている。

命中精度が悪いマスケット銃でも、突き付けられていては確実にあたる。

そもそもティリエルが突き付けている銃自体ただ物ではないが。

おまけとばかりに、周りには銃を構えた吸血鬼の軍団。

チェックメイト。あるいは地球で言うなら四面楚歌と言えよう。

しかし、先程聞こえた会話？

では、多分すぐに殺す気はない筈だ。

そうならとっくに頭を撃ち抜いてる筈だ。

「こんばんは、タバサ。今日の月は綺麗ですわね。」

微笑みながら話し掛けるティリエルにタバサは無言で通す。

「用とゆうのは簡単。貴女の持っている書類を、私どもにお渡ししてくればそれで結構。」

「なんの事？」

「惚けても無駄ですわ。此処に書類が無い以上、貴女が持っているのは確定事項。そもそも貴女は何故、此処に居たのかしら？」

「……………」

「大人しく書類を渡すなら、痛い目に会わずにすみますわよ。」

「……………」

無言で黙ったタバサに、ティリエルが額に銃口を押し込む。

「全く、私どもがわざわざチャンスを与えているとゆうのに。」

ティリエルが素早く足を動かし、タバサの足を踏み付ける。

全体重をかけてるので、タバサの足の骨がミシミシといい始める。

「……………ッっ！」

「足の指が砕ける前に渡した方が、得策ですよ。」

どのみち気を失ってから書類を回収する筈だ。

そう判断して、しぶしぶ書類を渡す。

「手間を掛けさせないで下さいな。お互いの為にならないでしょう？」

タバサから受け取った書類を部下に渡す。

「間違いなく設計図ですな。写しの。」

「そう……」

呟くと、タバサの額から細身の銃身を外し、ホルスターにしまう。

同時に、銃を構えていた兵隊もタバサから照準を外す。

「ヘンシエル。彼女を馬車まで護送しなさい。他の者は作戦を継続。私は彼女に話がある。」

馬車の中。

タバサとティリエルは、向かい会って座っていた。

馬車の中は月明かりが薄く照らす程度。

直ぐ隣で響いているだろう悲鳴もサイレントで聞こえていない。

その暗い空間でポツとティリエルの手から火が点る。

それはティリエルが加えた葉巻をあぶる。

只の葉巻ではない。

吸血鬼の血の関係上、体に馴染めず不都合ある者もいる。

そうした者の為に、秘薬や魔法薬、薬草等を配合した葉巻である。

地球にあれば喫煙者がこぞって買ったがる代物だ。

生憎一本10エキューもする高額な品物でしかも医薬品扱いでほとんど作られていない。

(葉巻タイプ吸収効率は良いが子供が使うには印象が好ましくないため、ガムや吸引するタイプがほとんどだから。)

もちろん医薬品だけあって、ニコチンもタールも発癌物質も依存症もない。

もちろん普通の葉巻も煙草もベルカが販売している。

ちなみに、ハルケギニアはパイプが主流だったが葉巻や煙草のがお手軽な為ベストセラー商品の一つである。

(ティリエルは医薬品として使っている為、只の煙草などは吸わない。)

まあ、葉巻の話は隅に捨てておく。

タバサは無言でこちらを睨んでくる。

杖は無いがなんらかの拘束を受けているわけでもない。

ただ座らされているだけだ。

「話とは。」

平淡に少しの疑惑を混ぜて話すタバサに、肺に吸い込んだ煙を吐き出してから、

「では、改めて。ガリア北花壇騎士7号タバサ殿。それとも今は亡きオルレアン公シャルル殿の愛娘、シャルロット・エレーヌ・オルレアン殿。」

その一言で、タバサから怒りと殺気のオーラがティリエルに吹き付ける。

だがティリエルは、「あら、怖い。」と薄く笑っただけで、特に反応は無かった。

「何故その事を？」

「情報を征する者が勝利を得る。故に皆求める。ガリアで起きたスキャンダル。気につけない訳がない。」

ようは、皆が聞き耳を立てているとの事。

「情報は固守出来ない。いくら川の中で塩を強く握り絞めても、何処からか必ず漏れたす。そして一度漏れた塩は二度と回収出来ず、下流に行き渡る。」

葉巻をもう一度吸って、

「それを誰が飲んででも不思議じゃないわ。」

答えにならない答えを繰り返した。

「何故私を生かして置いたの？」

「決まっているでしょう。殺す必要が無いから。正確には、殺してしまうと後々厄介ですから。」

「それと、私のほんの気まぐれ。貴女だったから、生かしたただそれだけの事。もし他の者が来ていたら、殺すな、などとわざわざ命令など出しませんでしたわ。」

「目的は何？」

タバサもさつさと目的を言えと、こちらを見つめる。まあタバサらしい。

「目的ね。とは言っても、私は特に貴女にして欲しい事などありませんのよ。」

と困ったような表情で微笑むティリエル。

本当に考えていなかった様だ。

しばらく俯いて考えていたようだが、

「では、まず暇な時に私が貴女の任務を手伝う事。そして私のお友達になる事。それで結構。要求としては破格の申し出だと思えますわ。」

ティリエルの言う通りだ。

全然要求になっていない。

流石のタバサもティリエルの思考回路が理解出来ない。

頷くしか無かった。

その時、馬車の窓が叩かれ少尉が作戦完了を告げて、隊員が馬車に撤収し始める。

ティリエルは、詳細は後で聞くと返して、馬車を発車させる。

入り切らない隊員が屋根に乗っている。

その頃工場の中では。

「んぐ。んぐぐ！むぐぐ！」

さるぐつわを嵌められ、椅子に嚴重に縛られた責任者のメイジは見るも無惨な格好だった。

顔が原型をとどめないほど腫れ上がり、鼻血や涙、鼻水を垂らして必死に解こうとしている。

何故なら、自分の周りにあるのは死体だけではない。

倉庫に貯蔵してあった、黒色火薬の樽が全て置かれている。

それだけではない。

壁や床には、彼らが持ち込んできた大量のTNT爆薬が仕掛けてあり、死体や重要な機具は全てC4が付けられている。

更にご丁寧に、ガソリンまでまかれている。

ティリエル達の馬車は、数リーグ離れた草原で停まった。

「ここまでですわ。後はお好きに。」

杖を返されたタバサは、ティリエルを見る。

相変わらずの微笑みで口を開く。

「ここまでのお詫びに、花火を見せてあげましょう。遠慮は結構ですのよ。」

ティリエルに促され、来た方向を見る。

少尉から何か小さい物を受け取ったティリエルは一言。

「ターマヤー。」

と舞台、時代、雰囲気ぶち壊しな台詞を言って起爆スイッチを押す。

ティリエルが、手に握られた機械のボタンを押すと同時に拘束され

ていた、メイジに取り付けられたC4爆薬が点滅し爆発する。

TNT爆薬、黒色火薬、気化し建物内に充満していたガソリンも引火し、建物全体が風船の様に一瞬膨らみ、内側から破裂するように大爆発を起こす。

そして、建物のあった所を包み込むように巨大な火球が立ち上り衝撃波が近くの木の葉を吹き飛ばす。

ただし、数リーグ離れた所からでは小さくしか見えない。

「あら、もう少し盛大だと思っておりましたのに。」

期待外れと言った表情のティリエル。

爆発の規模としては大きい方だが、流石に離れ過ぎたようだ。

とにかくこれで、証拠は隠滅出来た。

大半の物は、爆発で粉々になるか溶けるかして、そうならなかった物体も遙か広範囲に広がっていて、証拠とはならない残骸だけの筈だ。

おそらく事故は不慮の爆発事故として、記録にも残らないであろう。

「つまらない物を見せてしまって、もうしわけありませんでしたわね。」

「……………」

「では、今日はこれでさようなら。学院で会いましょう。」

杖を返し、馬車に乗り込もうとするティリエルにタバサは聞く。

「貴女は一体何？」

自分は復讐を遂げる為に、今のガリア王家に従って、苛酷な任務を行っている。

だがティリエルは、正反対に恵まれた環境にあり、上になれる立場の善なのに、わざわざ危険で苛酷な任務を楽しそうに行っている。

「何、とは？」

「わたしは復讐の機会の為に任務をしている。だけど、王族であるあなたがこんな事をしては何もならない。」

「ふふふ、私が見返りを期待して行動していると思っっているなら間違いですわ。私は、祖国と私自身の為に戦っているだけ。愛国心。ただ国の繁栄の為に戦っているだけ。仮に自分が平民だったとしても同じ。あとは、単なる復讐の布石の為。貴女と対して変わりませんわ。チェスで例えるならポーン。ナイトでもなくクイーンでもなく只のポーン。今の貴女もそう。」

「そう・・・」

馬車が走り出す。

半分乗り込んだ体制のまま続ける。

「最後にタバサ。良い事を教えておきますわ。貴女には必ずや貴女の騎士がやって来る、思いがけない幸福もやって来る。」

「え………?」

タバサの呟きは、既に離れて行った馬車にはとどかなかつた。

空には星達が、何事も無かつたのかのように、佇むタバサを見つめていた。

はっと、タバサは現実世界に帰って来た。

テーブルでは、相変わらず他愛のない話をしている。

「あのギーシュのゴーレムを倒すなんてあの平民もやるじゃない。ああ、私の中の恋に火が付いたわ。」

「あら、私の聞き違いでなければ、この前も同じような事を何度がおしやって無かつたかしら?」

「ギムリの事?それとも……」

「……もう結構ですわ。言っても無駄だとは思いますが、殿方をコロコロ変えるのにもほどほどになさったらどう?後で要らぬ恨みを買いますわよ。」

「あら、だって私の二つ名は『微熱』よ。すぐに熱くなってしまつ。彼に私の心が疼くの。貴女はどうなの?」

「(ただ弄りたい衝動じゃないの?) まあ、彼については私にも心

に感じるものがありますの。」

「あらそうなの。あなたも恋？」

「いいえ、私のはちがいますのよ。」

一瞬俯いたティリエルの顔をタバサは見た。

「貴女と同じ、私の二つ名『炎獄』が燃え盛るだけよ。」

ティリエルの笑顔が、復讐と闘争に染まっていた。

タバサの冒険+

アインス(前書き)

ネタ豊富

タバサの冒険+ アインス

さてさて、時間は跳んで夜。

タバサから任務の詳細を聞いたので、準備を始める。

出発は早朝、今のうちから準備しなくては間に合わない。

とは言え持っていく物は少ない。

まず、普段の装備を身につける。

まず、ストックにもなるホルスターに入ったモーゼルM712。

ドイツのモーゼル社で製造された、当時大人気だったC96のモデルの一つだ。

グリップではなく、トリガーの前にマガジンがある独特な形をしていて、当時としては10発と多く、7.62×25弾は貫通力が高くて射程も長く、ライフルと同じ照準装置もついているからストックを付ければ300メートル程度までのカービン銃としても使用出来る。

ドイツ以外にもロシアや中国で良く使われた。

M712はそのC96に20連マガジンを装着出来、更にフルオートセレクターも追加されサブマシンガンとしても使用でき、第二次大戦ではナチスドイツの降下猟兵が良く使用していた。

これを使う理由は、簡単で一丁であらゆる状況に使い分けが出来るからである。

これを腰に。

そしてもう一丁が、454カスール弾を発射するタウルス・レイジングブルである。

44マグナムの2倍の威力を持つこの銃は、グリズリー狩りなどに使われる弾である。

人に撃つたらどうなるかはご想像にお任せしよう。

後はダガーを一本隠し持っている。

ちなみにだが、いずれの銃もベルカでは製造販売を行っている。

同じ銃が何丁かあれば、分解して同じ部品を生産は可能なくらいの技術は所持している。

現在ベルカの科学技術や工業は、第二次大戦時のナチスドイツのそれよりも少し上回っている。

故に軍隊は、国防軍で装備も当時のドイツ軍の装備を弱冠改良した物（マガジンに連結クリップを付けたり、レイルシステムを付けてみたり、）を使用している。

まあ、チートである。

他の国がやり、弓、刀、火縄銃の時代に自動小銃、機関銃、手榴弾

がある時点でおかしい。

（ちなみに、こんなハンデが有ってもエチオピアで、イタリアは苦戦していた。）

世界的に言えば、ルイ14世やマリア・テレジアがいる時代に、フリードリヒ大王の代わりにアドルフ・ヒトラーが居るようなものである。

実際国土的には、プロイセンに近いが。

ファンタジーでメルヒエンな世界に、現代兵器はどうかと思うが、実際そうなのだからしかたがない。

そして、メインウエポン。

どれにしようか悩む。

私の部屋には、当然ながらいろいろな銃器が置いてある。

悩んだ結果、結局無難なKar98kスコープ付きを手取る。

Kar98kは、ボルトアクションライフルの中でも最高傑作と言われたライフルである。スプリングフィールド、三八式歩兵銃など各国がこの銃を参考にしているくらいだ。

異世界のベルカでも、この銃の品質は変わらない。

銃に外から見えないようにボロ布を巻くのも忘れない。

そして、別にもう一丁念のためにもっていく事を決めたところで、一通りの準備が終わった私は、ベッドに入り込む。

睡眠はどんな状況でも大切だから。

そして又々時間は過ぎていき、夜も開けていなくて薄暗い中、学院の広場で青い竜と青い髪の少女が居た。

シルフィードとタバサである。

「わたしに任せてなのね、お姉様。このシルフィーが、ちよちよいのちよいのひとつ飛びで、飛んでくのね。きゅい、きゅい。」

このかわいらしい声はもちろん、長門並の無表情のタバサが発した声ではない。

それなら当て嵌まるのは、一人しかいない。

この竜だ。

まあ、面倒なので説明は割愛する。

ようはこの竜シルフィード（本名イルククウ）は、先住魔法が使えるて高い知能を持ち人語を操り、おまけに？なドラゴンなのである。

ちなみに？なのは幼体だからである。（200歳だが。）

「？は余計なのね！」

「うるさい。」

虚空に向けて叫んだシルフィードは、ダバサの長い杖で頭を殴られる。

「痛いよね。痛いよね。きゅい、きゅい。」

「静かに。」

このハルケギニアでは、いちおうシルフィードのような韻竜は全滅されているとされている為、人前で喋るのを見られると、大変な事になるのである。

なのでシルフィードは、高度3000メートルまで上昇するまで喋らないように言っている。

だが、今の時間なら起きている人間は皆無の筈なので特に注意はしなかった。

けど流石に大声で喚かれては、目を覚ましてしまう生徒がいるかもしれないのでとりあえずタバサは制裁をしたのだ。

すると、シルフィードの鋭い視覚と気配でこちらに接近してくる物体を感知する。

「お姉様。」

「大丈夫。味方。」

シルフィードが警戒するが、タバサの一言で警戒を解く。

「あら、私はいつから貴女の味方になったのかしら？」

「わたしが貴女に敵対するまでそのつもりでいる。」

現れたのはいつもの微笑みを浮かべるティリエルである。

「なるほど、なるほど。まあいいでしょう。」

一見普通の少女かと思ったシルフィードだったが、このティリエルと名乗る少女も自分の主と同じく只者ではない雰囲気を感じる。

おまけにシルフィードの本能が、何か危険だと警告を発する。

「（全くなんなのね。この学校は）」

シルフィードは、心中で呟いた。

「その服は何？」

「これ？」

タバサが指差したのは、ティリエルの迷彩服だった。（階級章の類いは無い物）

危険な任務である以上、それらしい露出が少ない機能的な服を着るのはティリエル的には当然で、結構ゆったりとしている。

靴も、ベルカ軍用の組み上げ靴を履いている。

更に背中の背囊には、3日分の携帯食糧（缶詰主体）と幾つかの装

備が入っている。

そして、直射日光やいろいろな物から頭を守る迷彩キャップを被っている。

完全武装と言った雰囲気だが、少なくとも他の貴族や騎士は絶対にしない格好をしている。

騎士や貴族なら、戦いの際にはきらびやかな甲冑や鎧を付けて出陣するのが常である。

タバサも、任務の際に特に条件が付かない場合、たいてい魔法学院の制服を着ている。

今回も制服の上下と財布、杖といった軽装である。

まあ、迷彩とゆう概念が普及していない時代なので、タバサから見たらおかしい格好に見えるのも仕方ない。

だが、いくら冠婚葬祭に使える制服でも戦闘で使う事は無いだろうと思うティリエルだった。

ちなみに、この任務が終わった後タバサがティリエルに自分サイズの迷彩服を頼んだりした。

「さて、そろそろ来る筈なのだけれど。」

ティリエルが空を見つめながら呟く。

すると、空から影がこちらに近づいて来た。

「使い魔？」

「仲間と言った方が正しいですけど。タバサの質問に簡単に答える。」

（時間通りね。）

やがて黒い影は全貌を見せる。

強靱な翼。頑丈な深紅の鱗。たくましい四肢。鋭い瞳。

火竜である。

大きさは、シルフィードよりも一回りほど大きい10メートルほど。

「ゴガアアアアアア！」

こちらに接近しながら、三人に咆哮する。

だが、範囲を絞るようにしたため他の人が起きることはない。

「きゅい!？」

シルフィードが驚いて跳び上がる。

だが、火竜は威嚇したわけではない。

その証拠に目は笑っている。

初対面の二人（特にシルフィード）をからかったただけだ。

そして、火竜の全身が輝き始める。

これには流石のタバサも僅か反応した。

そしてその姿は人型になり、

「ティリエルう〜！」

落下の勢いのままティリエルに抱き着いた。

「ティリエル。会いたかったですよ。」

「ええ、私も会いたかったわ。」

優しく抱き合い再会を喜ぶ二人。

ただ、落下の勢いをつけたまま抱き着くのはどうかと思うが、抱き着かれたティリエル自身も微動だにしていなので別に平気なのだろう。

タバサは降りてきた『彼女』をしげしげと観察している。

身長はティリエルと大差ない。

服装は東トリスティンの民族衣装のような深緑なドレス。

髪も緑色でとても長い。

ここまでなら普通だが、やはり迷彩色の服を羽織っている。

そしてどこから出したのか、ティリエルと同じ銃を背負っていた。

「まあ、冗談はこのくらいにしますかです。」

「そうね。」

どうやら、感動の再会劇は全部演技だったらしい。

呆気なくハグをやめると、若干空気になりつつあるタバサとシルフ
イードを見つめる。

「これが例の『アレ』ですか？」

「そうよ。」

短いやり取りの後、

「タバサ。紹介するわ。彼女は火韻竜の」

「ヴィルヘルミナ・リツケルトです。以後よろしくなのです。」

「ところでティリエル。」

「何かしら？」

ヴィルヘルミナは片手を突き出して、

「ここまでの交通費、よこしやがねなのです。」

と、お金を要求した。

何故交通費かは、普通の人なら、竜なら飛んでけばいいじゃん。、
と言うかもしれないが実際にはベルカの夜行列車に乗って、トリス
ティン国境近くで馬車に乗り換え、学院の近くの町の宿で仮眠をし
た後、人目の無い所で竜になり、学院まで飛んでくるといふ複雑な
手段で来たからである。

「わかったわ。幾ら？」

「片道50スウ35ドニエですから、1エキュー70ドエニなので
す。」

「細かいのが無いけどいいかしら？」

「2エキューでいいです。釣りはいらねーよで、いいですね。わか
りましたなのです。」

「相変わらずがめついわね。」

「文句があるなら、そこいらの傭兵でも雇いやがれですう。ポラン
ティアで来てやったのですから、手間賃だと思えば安いもんであ
りませんか。」

「なら、3エキュー。労いと感謝も込めて。」

「毎度あり。」

財布から取り出した金貨を取り出し、ヴィルヘルミナに手渡す。

ちなみに、エキユーは金貨で日本円に換算すると一万円程度である。スウは銀貨でドニエは銅貨だ。

ちなみにこれは、金本位制なので金の含有量で価値が変わる。

良い例が、トリステインの新金貨で金の含有量が少ないため、従来の金貨に比べて4分の3程度（日本円で6750円程度）の半端な価値である。

なので、実際金貨と新金貨は紛らしいので日本で言う二千円札並に不便である。

ぶつちやけ、貨幣制度云々はどうでもよいので省きましょう。

そこで、茫然自失していて空気になっていたシルフィードが、口を開く。

「きゅい！なんでお前みたいな火韻竜がここにいるのね！」

と、シルフィードにしては珍しく敵意を表している。

同時に、翼を広げて威嚇する。

「やっぱり、青臭い奴が居るかと思ったら、腰抜けの風韻竜ではありませんか。あれ？おかしいですねー。外が怖くて仕方ない、ヒキコモリの臆病竜がこんなところにいる筈がないのです。」

「なんなのね！野蛮で血の気が多いお前達に崇高な風韻竜を馬鹿にするのは許さないのね！きゅい！」

「はあ？何を言ってるやがりますか。本当の事を言ってる悪い法律はないのですよ。このチンチクリンが。」

「きゅいっ！！」

圧倒的に形勢が不利なシルフィード。

ここまで二つの竜なかが悪いのは、一重に文化の違いだ。

風韻竜が自分達の文化を守り、種の存続を計る為に辺境の住家に籠っているのと違い、火韻竜は自由気ままに行動しているからである。

そもそも火韻竜の文化は、戦いと言って良い。

更に、冒険心が高くスリルが味わうような生活が好きなのである。

また様々な事象に積極的に関わろうとするのもこの種の特徴である。

元々現在の竜に進化する前の分岐点で別れた種である火韻竜は、比較的性質が大人しい風韻竜ほど洗練された文化を持ってはいない。

ただ新しい物を考案したりするのは大好きなのだ。

まあ、戦いが彼らの重要な部分の大半を占めているので、現在の火韻竜と比べて機動力と速力では劣るがその代わり、強靱な顎、脚力、鱗。そして、視力を備えている。

つまり、戦闘に特化しているのである。

まあ、鳩派と鷹派。穩健派と武闘派。

文官と武官と言った関係で対立するのは当然といえよう。

故に風韻竜を腰抜け、火韻竜を野蛮と罵り会うのである。

さて、互いにバチバチと睨み合う二人（二竜？）だがパン、パン、パンと手を叩くティリエルが仲裁に入る。

「言い争いも結構ですけど、そろそろ向かったら？タバサも待ちくたびれているわよ。」

確かに予定より出発は、若干オーバーしている。

タバサはしゃがみ込んで本を読み始めているが、ややいらついているようだ。

「そうですか。んじゃ行きましようか。さつさと背中に乗せやがれなのです。チビ竜。」

「チビ竜とは、なんなのね！」

喧嘩は終わりそうにない。

「きゅいつ、きゅいつ、きゅいつ、きゅいつ！」

苛立ちの声を上げて、不機嫌な表情のまま空を飛行するシルフィーだ。

現在高度3000メートル。

地球の高度でも3000メートルくらいなので、実質的には変わらない。

ちなみに、メートル方はドイツ・ヨーロッパ。ヤード、ポンドはアメリカ・イギリス式である。

3000メートルといえば、雲ぐらいの高さである。

下を見るとトリステインとガリアの国境があるラグドリアン湖が見える。

大きさが琵琶湖ほどもある水面が、反射した太陽の光でキラキラと光っているが、シルフィードの背中の上は静かである。

何故と聞かれたら、まずこちらから聞きたい。

3000メートル上空で、防寒装備無しで平気な奴はいるのかと。

はっきり言おう。まずいないと。

高度3000で、3キロであまり高くないじゃんと思う人がいるかもしれない。

だが、実際には高い……

正に、高層ビルがゴミミのようだ。

更に気温。

雲が出来る以上零度以下なのは、間違いなくマイナスの世界である。更に対気速度も入れると、えらいこっちゃんになる。

雲は気楽だと思っている諸君。

もし雲になるのなら、世間以上の冷たさと風あたりを受ける事になるので、やめたほうがいい。

タバサは、本を読んでいて会話する気はない。

寒さは、シルフィードが風が当たらないように調整しているから問題無い。

が、後ろに座っているティリエルとヴィルヘルミナはその恩恵を受けてはいない。

寧ろわざと当たるように仕向けているらしい。

もちろん、ヴィルヘルミナは竜なのでこんな微塵も感じないが、ティリエルはその限りではないので、結果的に被害が出ているのはティリエルだけなのだ。

多少魔法で暖かくはしているが、多用するのはいけないとわかっているため、気休め程度に使っている。

おまけに声が後ろに流れてしまい、会話がほとんど成り立た無いのである。

ちなみに3000メートルもの上空を飛行するのは、国境越えを見ら

れない為である。

国境を許可なく通るのは当然違法行為だが、戦時はともかく普段から国境を監視する人間など関所以外、ほとんど皆無である。

もちろんレーダーの類いは存在せず、実質フリーパス状態なのだ。

つまり、あくまで念のため状態の飛行なのである。

まあ、そんな高度ではシルフィードでも点にしか見えないだろうし、そもそも真昼間から空をガン見している程の暇人などいないだろう。仮に見られたとしても鳥か何かかと思うだろうし、軍に報告に行つたところでこの時代、相手にされないだろう。

しかし、ばれたらばれたで厄介なので妥当なのである。

それがわかっているティリエルは、文句を言う事は無いので、無言で風圧と寒さに耐えている。

ちなみに竜の上昇限度は5000メートルほどらしい。

それ以上の高度では、流石に気温に耐えきれない（乗ってる人は言うまでもない。）し、酸素が薄く、酸欠状態に陥ってしまうのだ。

だが、この世界で竜に勝る兵器は存在しないのが事実である（ベルカ以外。）

肝心のヴィルヘルミナは夜行強行軍のせいか、はたや久しぶりに空を飛んで少し疲れたのか、背中にもたれかかって眠っている。

まあ、これからのバトルフィールドではいつ眠れるか分からないので、特に注意する必要もない。

そんな事を考えていたティリエルにも眠気（雪山的な）が襲ってきた。

それから目的地ザビエラ村に着くのは、夕方になってからだった。

ガリア王国、ザビエラ村。

特産品、特になし。

人口百人足らずの小さな村である。

ガリア奥地の田舎村の付近にシルフィードは着陸した。

鬱蒼とした森林に囲まれた（むしろ森の中にぽつんと存在している）ど田舎のマイナスイオンたっぷり過ぎるところが今回の戦場である。

「っと。」

シルフィードから飛び降りる。

周囲に異常は見られない。

続いてヴィルヘルミナ、タバサの順で降り立つ。

私は、凍えかけていたのをなるべくおくびかけないようにする。

「ご苦労だったです、チビ竜。帰りも頑張れや、なのです。」

「ふざけるなのね！もう二度とお前を乗せるのは、ごめんごつむるのね。きゅいっ！」

ヴィルヘルミナのからかいに載ったシルフィードの頭にタバサの杖が振り下ろされる。

「いたい、いたいのね。お姉さままで止めて！！」

三人のやりとりを後目に、水筒の水を飲もうと中身を傾けるが。

「……あら？」

中身が出ない。

おかしい。行く時にちゃんといれた筈。

途中で開けてすらいなし、穴が開いている訳でもない。

「お〜か〜し〜い〜わ〜ね〜。」

隣りでギャーギャーやつてる横のでマイペースに水筒を振ったり逆さまにしてみるが、水は一滴も出ない。

理由は簡単だった。

ズバリ、凍っていたのだ。

まあ高度3000メートルじゃあ当然でしたね。

とりあえず、溶かすのも面倒なのでしばらく放置。

まあほっときゃそのうち溶けるでしょう。

横でも相変わらず。

「このシルフィを見るのね。お前と違って痩せっぱちじゃなくて、大きいし、なによりこちら辺がポイントポイントなのね。」

「黙って、服を着て。」

「きゅいい。嫌なのね。キツイのね。動き辛いのね。」

「ふん。服を着ないどころか嫌がるなんて、ちっとも文明的じゃないのです。時間がないから、ちゃちゃと着替えるのですバカ竜。」

「きゅい！バカ竜とは、聞き捨てならないのね。この偉大なる竜の眷属のシルフィが黙ってられないのね。」

「先が思いやられる。」

全裸のシルフィードに服を着せる為に追いかけてっこをしているタバサがポツリと呟いた。

「ティリエル。」

「なにかしら？」

「あなたの使い魔をこの後の任務でも貸してしてほしい。」

「お断りますわ。彼女は私の所有物じゃありませんの。」

「どうゆうこと？」

「だって契約してませんのよ。」

その後

まあ、色々あったが取り合えず私とヴィルヘルミナが騎士。タバサとシルフィードが従者という形になった。

ただ、そうすると騎士と従者のギャップが大きすぎないかと思っただけ、タバサいわく問題ないらしい。

とにかく、不自然でないように村に入る。

村の入口にいた、門番らしき人に声をかける。

ただ、何を言っても反応がなく、村長の家を教えてほしいと言った、ぶいと背を向け歩き出してしまった。

おそらく、ついて来いと勝手に解釈して後に続く。

今、村の中を歩いている。

率直な感想は、寂れている、だ。

空は生憎の曇天。村の空気もどこか、かび臭い空気である。

一面灰色に感じる。

まるで時間から孤立しているようだ。

過疎化が進んでいるのか、不明だが不思議と子供の姿が見えない。

また、村人もやけに汚れの付いた服を着ている。

何より、黙々と日常の生活の仕事をしている彼らだが、腰や手元に斧や鎌を指して、殺気をばらまいている。

吸血鬼事件のせいで、苛立っているのだろうか？

脇を通ると、皆が作業を止めこちらを見つめてくる。

原作でこんな雰囲気だったか？と思っていると、目の前にやけに存在感たつぷりの男が立ち塞がる。

2メートル近い長身、禿げた頭に立派な髭。

着ているコートは、やや古びているがなかなか上等な物である。脇に、二人ほど従えて仁王立ちしているこの大男がどうやらこの村の村長らしい。

あれ？こんなゴツイキャラだっけ。村長さん。

と、平然とした表情の下で考える。

「貴殿ら。この辺境の村に何ようで来られた？」

「私達は、ガリア騎士。この村からの要請があった吸血鬼退治に来た。」

田舎にしては、訛りの無い、威圧感バリバリの口調でいわれたが、さらりと受け流す。

「そうか。遠路遙々感謝する。」

イマイチ、有り難く感じないがまあいい。

「お疲れの用なら部屋を用意する。」

「お気遣いありがとうございますわ。」

「荷物をお持ちしましょうか？」

「そうね。従者の分も運んでくれると助かりますわ。」

村長の側近らしき人が、丁寧に話し掛けてきた。

村長の後につきながら、村を見渡す。

不自然と異様な雰囲気は、拭うことは出来なかった。

案内された家は、貴族の屋敷には及ばないが、立派なものだった。

取り合えず二人ずつ、二つな部屋を宛がわれた。

夕食を用意すると言われたが、持ち合わせがあるからと断り、従者の分だけで良いと言った。

詳しい調査は明日からとゆうことで、荷物を部屋に置くとヴィルヘルミナと交代で寝ずの番に付いた。

その日はなにごともなく朝を迎えた。

二日目。

夜通しの警戒のおかげか不明だが、襲撃はなかった。

これで犯人の吸血鬼は、村人の内部に紛れ込んでいるのがほぼ確定した。

もつとも、軽く残っていた原作知識によれば犯人は村長の保護したメイジ嫌いの少女エルザが犯人なのだが、こっちのハゲでこっつい村長さんは、そんな事一言も言っていないし見かけもなかった。

そのため洗いざらい聞き込みや死体検分、犯行現場から犯人の手掛かりを見つけなくてはいけない。

なので、効率よく進める為に二手に別れた。メンバー？わかるでしょ、そのくらい。

「しかし、あの村長どこかで見たことあるような。」

つい死体を調べながら呟いた。

「なに？」

「いえ。別にたいしたことでは。」

つい二日前に殺された少女の墓を掘りおこして検分をしているのだ。
(遺族の許可の下。)

歳は18歳ほど。

血を殆ど吸われた為、まだ腐敗も始まっていない。

かなり状態がいい。

もしこれが、もう少し日が経っていたら、全身に蛆が湧き(どこからともなくやって来る)紫色にパンパンに膨らんで(体内にガスが溜まって)みる影もなかっただろう。

「ここか……」

噛み跡は直ぐに見つかった。

首の頸動脈が位置する所に、小さな穴が二つ開いている。

予想通りというか、なんというか。

穴の間隔と深さからして、まず子供の吸血鬼だ。

「ただ、これは変ね。」

普通、吸血鬼が血を吸うなら夜間。

それも大体のケースで狭い空間で眠気を誘ってから襲われる場合が多い。

実際、ここの吸血鬼もそのセオリーに則っていた。

ただ、今見ているのはやや違う。

顔は、死の直前の苦悶に満ちた表情で酷く歪んでいる。

後、抵抗したのか暴れた跡があり手には血痕が残っている。

しかも、死体が見つかった現場は、近くの森の中でおまけに夕方だったそう。

更に、首の噛み跡は綺麗出なくおそらく暴れながら血を吸われたと推測できた。

そして、不可解なのがもう一つ。

少女の首筋に噛み跡とは違う、注射針のような痕跡を見つけたことだ。

その後、死体が見つかった森の中に入ってみる。

中は、鬱蒼として薄暗いが木陰の隙間から日光がカーテンのように差し込んできている。

しばらく歩いていると、タバサが立ち止まり「ここ。」と短く言う。

丁度、森がやや開けた場所だった。

足元には、この付近の村では食用になるムラサキヨモギが群生して花壇のようだ。

メタルギア3のラストのザ・ボスとの戦闘ステージとかみたいな幻想的な場所である。

だが、タバサの足元の所は花が乱れて倒れたりしている。ここが襲撃兼死体発見現場と見てよいだらう。

しかし、変な所で襲われたものだな。

とりあえず無いとは思うが、なにか手掛かり的な物を探す。

ちなみに私は、殺人事件の検死などしたこと無いし、事件を解決した事も一度もない。

ただ、戦場で死体や負傷者の応急処置などをしていれば、死因や凶器ぐらいはそれとなくわかるし、吸血鬼としての経験からもなんとなくくわかってくる。

まあ、犯人は大筋でわかっているから適当に理由と証拠もつけければ、いいや。

コナン君、涙目

「お姉ちゃん達、何か探し物でもしてるの？」

後ろから、急に気配と共に声を掛けられ、タバサと私は身を翻し杖を向ける。

そこには、あどけない金髪の少女が突き付けられた杖を見つめて震えていた。

「（あ、犯人発見！）」

と、心中でテイリエルが叫ぶなか、震えていた少女はぺたんこ腰が抜けたように尻餅を着く。

どうやらメイジに恐怖心が湧いているようだ。

それを見た私は、杖をホルスターに戻す。

横目で、タバサが大丈夫なのか？的な事を目で言っているが、スル―する。

そして、手を伸ばし。

「みい、怖い怖い飛んでけなのです。にぱー。」
と頭をなでる。

その途端、空気が死んだ。

その日の夕方。

「というこたなのです。」

一行は、今日泊まる事にした家の部屋で情報の整理をしていた。

今までにわかった事は、実はこの村は二つに別れていて元からあった村に何処からともなく現れた髭面村長と一緒に来たらしい人達とで成り立っているらしい。

ちなみに今日泊まるのは、元から居た村長さんの家で見えるからに優しそうなおじいさんだった。

こちらの村長さんの家に泊まる事となった経緯は、森の中で盛大に引かれた（自覚はしている。）後、何事もなかったように幾つか質問した時にどうせなら泊まっていけないか的な事を言われたからである。

実を言うとあの髭面怖面村長の家で威圧感たつぷりに過ごすよりは、こちらでなにも干渉されずに過ごしたいからだ。

とりあえず、今回の事件のキーワードになりそうな共通点や気になる事を見つけた。

まず、この事件の被害者は2日前の少女以外全て新しくやって来た者達である事。

新参者達は、村長が司祭を兼ねるらしい新興宗教の信者であるらしく、被害者は教団の幹部であった事。

それ以前では、吸血鬼の被害は皆無であった事。

また、2日前に殺された少女はエルザとは友人であり、数週間前に

教団の教会の儀式に参加したということ。

また、今回エルザと会った時に右腕の袖から僅かに包帯が見えていた事。

つまり、この事から推測するに今回の一連の事件は、単なる補食活動ではなく何らかの意図なり目的があつて行動したと思われる。

その為に、吸血鬼の補食に偽装した暗殺であると推測できる。

また、その目的であるらしい教団絡みらしい噂がある。

曰、教団の儀式に参加した人の内何人かが一時的に奇行に走った。

曰、牛を殺して生贄にする。

曰、瀕死のオーク鬼を教会に引きずっていくのを見た。（信憑性がかなり低いため、ネタ扱い。）

と、陰湿な噂であるが信仰は高いらしく村の3分の2ほどがにわかもふくめて信者であり、最近では近隣の村々でも布教を行っているそうだ。

まあ、各国の内情や貴族の振る舞いは年々悪化傾向にあり、同様な立場のブリミル教に対する信頼や期待が薄れてきたのも影響しているだろう。

また、どの村人も最近やって来た占い師の一家を疑っているらしい。

聞いてみれば、占う度に呪われていると言って、多額のお祓い料を

請求する悪徳商法をしているのだから、嫌われてしまうのは当然だが。

「取り合えず、明日はターゲットになっている教団の辺りを虱潰しに探索。あと、もし動きがあるとしたら可能性的今夜」
ガシャーーン！！

夜の静寂を破るように、ガラスの割れる音と悲鳴が聞こえる。

急いでタバサに杖を投げ渡し、ライフルを手に窓を開ける。

案の定、エルザらしき少女を背負ったグールが、道の向かい側の屋根の上を走っている。

素早くセフテイーを外し照準を合わせる。

倍率は、市街戦を考えて低めにして置いた。

ただ、エルザが邪魔で上半身は狙えない。

なら・・・。

狙いを少しずらして、引き金を絞った。

銃声と共にやや下を狙ったKar98の7.92ミリの弾丸は、寸分変わらず左足のふくらはぎを貫通し、骨を砕いた。

こちらにしてみれば、20メートル程度の距離の標的。

更にスコープでの狙撃。

外しつこない。

左足を撃ち抜かれたグールは、バランスを崩し屋根から落ちる。

だが流石はグール。

素早く体制を立て直すと、撃たれた足をものともせず駆け出し、角を曲がる。

しかし直ぐ後を、タバサが追尾している。

ヴィルヘルミナは、既に別の窓から狙撃ポイントに移動している。

とにかく、こちらは射線が取れない上にやや出遅れてしまった。

フライヤリビテーションを日々唱えるのも面倒なので、普通に窓から飛び降りる。

部屋には何が起きたのか理解出来ず、キョトンとしているシルフィードだけが残った。

タバサ視点

私はティリエルから杖を受け取ると、直ぐに部屋を出て、廊下の窓から隣の家の屋根に出た。

後ろから、ティリエルの使い魔がついてくるのが分かる。

銃声が聞こえ、グールが屋根から落ちるのが見えた。

すぐにフライで距離を詰める。

ヴィルヘルミナは、屋敷の屋根の上に登ったようだ。

シルフィードに感覚を合わせると、まだ部屋にいた。

最初っから期待はしていなかったが、何故かイライラする。

「（一日ご飯抜き。）」

心中で帰ったら執行する罰を決めると、ウィンディ・アイシクルを唱え、足を止めようと狙いを定めた。

その時、上の方から断続的に銃声が聞こえグールの体から鮮血が吹き出す。

つんのめったグールは、そのまま転びエルザを放り投げた。

足を止める必要がなくなったので、足止めの為の氷の矢をグールに撃ち込む。

地面に縫い付けられ、芋虫のように足掻いているグールが出来上がった時、やっとティリエルがやって来た。

走ってきたティリエルは、はいつくばっているグールを見て、次いでタバサを見て、

「私の出番は無かったわね。」

と皮肉を言った。

「そんなことない。足を遅くした。」

タバサの返事を聞いて苦笑する。そして、左手でタウルス・レイジングブルを抜きグールの頭に銃口を向ける。(右手はKararを持っているから)

やがて、様子を見ていたらしい村人が鎌や斧や鍬をもって恐る恐る近づいてきた。

タバサは、エルザの様子を見に行っている。

結構思つきり吹っ飛んだが怪我らしい怪我は無いみたいだ。

「誰か、ちょっと来てくださいな。」

目の合った一人の農夫を手招きする。

若干腰が退けているが、来てはくれた。

「これ、誰だかわかります?」

農夫がカンテラの明かりでグールの顔を照らす。

目は白濁して、牙を生やした口からよだれを垂らして呻いていたがわかつたらしく、

「アレクサンドルだ!こいつは、アレクサンドルだ!」

、と叫んだ。

すると、周りからも

「やっぱりそうだったか。」「こいつがゲールだから、あの紫ババアが吸血鬼だ。」

と口々に言い出す。

そして、声は段々大きくなってゆく。

その声に反応したのか、関係ないのかアレクサンドルが身をよじって暴れる。

ハンマーをコックし、弾倉が一発分回転し引き金が引かれる。

すさまじい大音響と、大きなマズルフラッシュが、暗闇に沈む村を一瞬照らす。

それで声が一瞬で鎮まる。

ティリエルがセフティを掛けて脇のホルスターに戻す。

後頭部に大穴を開けたアレクサンドルは、地面にキスをしたままピクリとも動かなかった。

沈黙が走った。

だが、今夜はまだ終わらない。

屋根の上で、監視を続行していたヴィルヘルミナは一つの光源を発見した。

ティリエルとタバサは、村から外れた家の近くにいた。

正確には、巨大な松明と化した木造の家を囲み意味不明（罵倒や罵りであることはわかる）で叫ぶ新興村人を遠巻きに見ていた。

とてもあの輪の中には入れない。

家の横の開けた所では、何十人も村人が何かを囲んで手に持った得物を何度も何度も振り下ろしている。

何に振り下ろしているかは、わかるだろう。

とてつもなくバイオレンスな雰囲気のカンプファイヤーはしばらく続いた。

夜が明けて、二人の遺体は誰も見送られることもなく、集団墓地に埋葬されることもなく、荷車に汚物のように積まれて村外れのゴミ捨て場に放り投げられた。

二、三日もすれば、野犬や屍肉を喰らう幻獣によって綺麗に消えているだろう。

死体検分をしたかったのだが、母親の死体の損傷が激しいどころではなく、原形を留めないほどの肉塊と変貌していた為、検分は不可能だった。

まあ、原作では家と共に灰になったからどっちもどっちだが。

タバサと相談して一日だけ、様子見で滞在する事にした。

優しい方の村長さんの家でささやかな感謝の食事を催すそうだからだ。

村人も何人かは参加するらしいが、大部分の村人はあまり快くないと思っっている。

実際、「お前達もつと奴らを殺してくれば、エルザが危険な目に会う事は無かったんだ。さっさと帰れ！」

と、まで言われてしまった。

言い忘れていたが、エルザはこの村のアイドル的な存在らしい。

新興宗教が出て来る前は、村人の殆どの人が自分の孫のように可愛がっていたらしい。

どごその、古手梨花だ。

むしろ声的に私だろうと、思うが。

まあ置いていこう。

正直な所あまり食事会には参加はしたくない。
タバサとシルフィード？

無表情で何人前も平らげる彼女とその使い魔がどうして行かないだろうか。

いや、行かない筈がない。反語W。

まあ、二日間携帯食糧だけだったしせつかく用意して貰った物を食べないのも悪いので有り難く戴く事にする。

「ねえ、姉ちゃん。ムラサキヨモギを食べると、わたしが血を吸うのと同じ違うの？」

タバサは、エルザと始めて会ったムラサキヨモギの群生地に向かい合っていた。

四肢を先住魔法の蔓で磔にされた状態で。

食事会の後、タバサはエルザと一緒に散歩したいと言ってきたのだ。

エルザから、出来れば杖は持って来て欲しくないな。と言われ、つい油断してしまったのだ。

いくらトライアングルのメイジでも、発動媒体である杖が無くては無力な少女だ。

もともと、強靱な体格の持ち主だろうと拘束された状態では結果は同じだろうが。

助けを呼ぼうにも、森の中では声は村まで聞こえないだろうし、肝心の使い魔は飯又キの苦痛を忘れるため目下熟睡中である。

ティリエルもヴィルヘルミナも、食事会に少し参加した後は全く姿を見せていない。

「何も、違わない。」

タバサは、か弱い少女から狡猾なハンターに変貌したエルザを見つめる。

「ふふふ、そうだよ。仕方ないんだよね。」

クスクスとエルザは可笑しそうに笑う。

「最初は、少し焦ったよ。まさか4人も来るなんて思わなかったから。金髪と緑髪が怪しと見たら、お姉ちゃんだったなんて。結構気に入ってたんだけどな。」

まさかメイジだったとはね。と、付け加えて、月光スポットライトの中を、ムラサキヨモギを舞台にクルクル踊る。

ふと踊りをやめて。

「一応聞いておくけど、どこまで知ってる？」

「あなたが吸血鬼で、村の人達を殺した犯人だということ。」

小首を傾げながら質問したエルザに、タバサは静かに答えた。

「そうだよ、ふふ。わたしが殺したの。みんなわたしが殺したんだよ。仕方ないんだよ。生きる為だからね。」

「.....」

黙るタバサを尻目になおも続けるエルザ。

「知ってるでしょう？私達は血を吸わなきゃ生きていけないの。だから、何の後悔もないの。」

「じゃあ何故、あの二人を村人に殺させたの？」

「あいつらは？あいつらは人で無しだからだよ。人の心に付け込んで、財産を奪い取る追いはぎ！お姉ちゃんみたいなメイジと同じ！」

「そんな奴らは、みんな死ねばいい。人間なんてみんな一緒！気に入らなければ、殺して奪い取る。」

「私は、見たんだ。目の前で父さんと母さんがメイジに殺された時。そいつ笑ってた！だから、復讐してやる！」

いつしかエルザは叫んでいた。怒りで口が回らない程に。

しかし、すぐに、はっとした顔をした後、表情を元に戻す。

「お姉ちゃんには、わかんないよね。ううん、わかるはず無い。大切な人が死んでいくのを見るのも。大切な人が狂っていくのを見るのも、この苦しみも、痛みも悲しさも、わかんないよね。」

「.....」

しばらく、静寂が続く。

「もし、お姉ちゃん達がこの事を黙って、すぐにこの村から出ていくって約束するなら、命だけは助けてあげてもいいよ。」

ぼつりとエルザが呟いた。

「勘違いしないでよね。いちいち殺したりしたら、後々厄介なだけだから。前の騎士だって、あっさり逃げちゃったし、さっさと逃げた方がよいよ。」

「それは出来ない。」

タバサの言葉でエルザが一瞬目を見開いた。

信じられないという表情だ。

「お姉ちゃん。今の状況わかってるよね？それとも、怖くて頭がどろろかきちゃったのかな？」

「私はどこにも行かない。任務だから。」

はっきりとエルザに聞こえるようにタバサは告げた。

「わかんないかなあ〜？今のお姉ちゃんは、私の前だとただの人間。虫みたいにいつでも殺せるんだよ？」

「マリーを殺した時も、そんな気持ちだった？」

その言葉に、エルザの表情が強張る。

マリーとは、あの死体の少女の名前だ。

「そ、そんなの。い、一々覚えてない。おかしい事言ってるよ、さっさと殺すよ！」

さっきとは、打って変わった表情で睨みつけるエルザ。

「無理。」

だが、タバサは無表情で呟いた。

「あなたにわたしは、殺せない。」

「っなんでそんな事が言える！」

思わず怒鳴るエルザ。

「あなたは、とても悲しい顔をしている。」

「えっ？」

思わず顔を触る。

その指が、液体に触れる。

それが涙だと分かるのに少し、時間がかかった。

「あ、ああ、」

気づかずに嗚咽が漏れだす。

涙も止まらない。

記憶が、思い出が溢れ出す。

この村に来てからの生活、優しさに触れた日常。それらが、一気に溢れ出しエルザの心を満たし非情の壁を決壊させた。

エルザは、膝をついて泣いていた。

全てが終わるまで泣かないと、決めていたのに。

「あら、なかなか良い事言じゃありませんか。お前は、もう弾切れかとか言うのを期待しておりましたのに。」

突如、気の抜けたような声が耳に入る。

「誰！何処にいるの！？」

涙を拭って立ち上がるエルザ。

その後ろから、声は聞こえてくる。

「今晚はエルザ。今宵、とても綺麗な月ですわね。」

エルザの後ろの木の枝に、左手で口元を押さえて微笑んでいるティリエルがいた。

エルザは、意表を突かれた。

「いつから、そこに・・・いたの・・・。」

「そうね。『ムラサキヨモギを食べるように……』からずつといたわね。」

笑みを見せるティリエルに思わず拍子抜けしてしまうが、気を取り直し蔓を伸ばして捕らえようとする。

何しろ、自分は吸血鬼なのだ。

平地ならともかく、自由に先住魔法を扱える森の中で、メイジだろうと『ただの人間』に遅れを取る筈がない。

そう思っていた。

ただ、唯一の誤算はティリエルが『ただの人間』に該当しない事だった。

闇の中、見えない死角から音も無く忍び寄る蔓や蔦に、何やら眩いて手を翳す。

すると伸ばしていた蔓が、スルスルと引いて行く。

啞然とした表情のエルザに、笑みを深め枝から音も無く飛び降りる。

「っとうしてー！」

叫び声を上げ、再び蔓を伸ばす。

今度は捕らえるのではなく、鋭く尖らせ貫くように。

だが、

「無駄だと、判らないのかしら？まあ、普通は無理もないでしょうが。」

ティリエルを貫かんと、四方八方から伸びる植物の槍は先程と同じように止まる。

「いきなり、酷いですわね。せつかく来てやったというのに。」

呆れたような表情のティリエルにエルザは、

「……………どつゆつこと……………」

と、かるうじて口を開いた。

「まだ判らないのかしら？こつゆつことよ。」

ティリエルは目を赤く光らせ、隠していた牙を見せる。

「あなたと、同類よ。」

まあ、もっとも八分の一吸血鬼ですけどね。

と、付け加えて。

「どつして、殺さないの？」

「話があるから、此処に呼んだんでしょう。それに殺そうと思えば、いつでも殺せましたわよ。あの位置なら。」

エルザの問いに、簡単に答える。

傍らで礫にされたままだったタバサには、ブレードで蔓を切り裂いてから、持って来ていたタバサのでかい杖を放り渡す。

「さて、お話を伺いましょうか？」

ティリエルがエルザに詰め寄った時。

「止まれ！」

と、男の声が聞こえ傍らの茂みから何かが飛び出す。

これには、ティリエルやタバサも驚く。

エルザは、またもや驚いている。軽く今日だけで、何年寿命が縮んだだろうか。

杖を向けようとしたタバサは、その前に喉元に銀色に輝くナイフを突き付けられ、飛び出してきた影に銃口を向けたティリエルは、自分の額に赤い光点が付いたのに気づく。

ただ一人、エルザだけが叫んだ

「レオンにいいー！」

タバサにナイフ、ティリエルに銃口を突き付けた男の姿が、はっきりと見える。

細い顔だが、強い意思を宿す顔。あのナイフ捌きに、身のこなし。数々の修羅場をくぐり抜けた者だけが出せる強者のオーラ。それは、まさしく。

「いきなり、話に突っ込んできた揚句、レディに得物を突き付けるなんて無作法ね。」（ええー！マジですかあー！？）

あの、ラクーンシティの生存者で合衆国のエージェント。

「そうだったな、失礼した。俺はレオン・S・ケネディ。ただの薬草師だ。」

「あら。ならただの薬草師さんが、私達に何用かしら。」（ちよつと待つて。あのレオンだよな？薬草師つて・・・あつハーブですか。そうですか。確かにあれは薬草だね。本当にありがとうございました。）

冷静そうで、内心全然冷静じゃないテイリエル。

まあ、そりゃ普通驚くでしょ。

いきなりバイオのキャラが、出て来るなんて誰が予想出来るだろうか。

そういえば、村人に最近さすらいの薬草師が住み着いたと聞いたが、そうだったんですか。

「彼女をどうするつもりだ？」

彼女とは、エルザで間違いないだろう。

「どうもこうもするつもりは、まだありませんわよ。とりあえず話を伺ってから。ねえ？」

とタバサに目線を振る。無表情のまま、こくりと頷く。

「なら、俺の話は聞いてくれるな？」

「ええ、もちろん。」

お互いに突き付けた得物をしまう。

ふと、思っただけどあれなんて名前の銃なんだろう？

「レオンにい〜！」

極限状態から、解放されてカリスマブレイク(?)してレオンに走り寄るエルザ。

その頭を無言で撫でるレオン。

流石、バイオの主人公の一人。人心掌握もおてのものか。

この調子で、フランクとか出て来ないかな。

と、心中呟く中。

話が始まった。

話の流れを説明すると、

この村に居着いたエルザは、新興宗教の脅威を知ってそれを食い止めようとしたらしい。

まともに言っても、流石に誰も信じてくれないし、そんな事をあちこちで言っていたら、逆に殺されかねない。

だから、少しでも活動を弱める為に暗殺を行ったそうだ。

ちなみにマリーとは、本当に友人同士でマリーが宗教活動に参加した事を知って慌てて止めようとして、森の中で彼らは危険だと諭したら、いきなり豹変して首を締められて身を守る為に、仕方なく殺してしまったそうだ。

不憫な話だ。

そして、その現場をたまたま目撃したアレクサンドルに恐喝されたが、翌日に口封じの為仕方なく血を吸ってグールにしたのだ。

そして、実は同様に村の異変に気づき、独自に調査をしていたレオンに目撃されて、様子を見にアレクサンドルを尾行していたのだそう。

日頃、親しく過ごして来たので互いに殺すのを躊躇して、訳を説明したのだった。

ちなみに、アレクサンドルの母を殺すように仕向けたのも、アレクサンドルがグール化する前に母に話し、母がまたもやエルザを揺するうとしたのと、今回やって来た騎士が信用に値する力を持っている

るか確かめるためだったそうだと。

「まあ、あの教団の雰囲気とゆうか、なんというか。」

「確かに異常。」

なんか吸血鬼退治が、別の方向にズレて行っている気がするのと、タバサもティリエルもこっそり思った。

教会内部。

「村を襲っていた吸血鬼を信徒共が打ち倒しました。」

教会の一段高くなった祭壇の下、村長が片膝を着いて祭壇の上に立つ幾何学模様のフードを着た人物にうなだれている。

「よくやった。ビトレス・メンデス。」

フードの人物は、祝福をするように村長の額に、手を翳す。

「計画通りに事が行く。直ぐにでも、残りの不信心共を殺すなり、わが信徒に入れるなりすることが出来る。」

「はっ。しかし、かの騎士共はいかが致しましょう。」

「ああ。」

村長の疑問にフードの男は、怪しい笑みを浮かべた。

「彼女達は、素晴らしい逸材だ。我々の血を入れるのに相応しい。我等に引き入れれば今後とも必ず役に立つ筈だ。生たまま捕らえるように。」

「もし出来ないようであれば？」

フードの男は少し悩むように、顎に手をやり。

「なら、殺せ。一人残らず。」

「わかりました。」

「まず手始めに、不信心の村長の屋敷を襲え。丁度宴で殆どが集まっている。それから残りを血祭りに上げる。」

「畏まりました。必ずご期待に添えますよう。サドラー様。」

「容赦はするな。我がロス・イルミナドスが、この地ハルケギニアに覇を唱える為の第一歩だ。」

それから、いったん村長の家に戻る事にした一行。そこで彼らに襲いかかったのは……

「オツパイのペラペラソース!!」

「アイエスタ!!」

「手コキ!!」

狂ったように襲い掛かる、化け物と化した村人の変わり果てた姿であった。

皆が皆、武器を持ち、武器が無い者は素手で掴みかかるとする。

だが、彼らは標的には近づけなかった。

「泣けるぜ。」

軽快な破裂音が続けざまに響き、得物の鎌を振り下ろそうとした、中年の男はのけ反る。

レオンの握る拳銃から、9ミリパラベラム弾が飛び出す。

撃ちながら、悪態をつくほど馴れてしまっている。

流石バイオの主人公。

化け物フラグを立てて折るのは、もはや天下逸品だ。

もつとも、片っ端からフラグを折ってもゾンビよろしく、次から次へと復活するのだが。

拳銃を撃ちながら片手間で魔法を唱えて、火炎を浴びせてゆく。

たいていは火炎を浴びて炭化してしまっているが、たまに黒焦げや、ケロイド状になってもなお歩み続ける執念深い奴がいる。

そうした、奴の頭蓋骨を片っ端から弾頭が粉碎していく。

タバサも、ウィンディ・アイシクルを素早く詠唱して、人間の串刺しを製造していく。

ただエルザは、こういったときの戦闘を知らない。

ゆえに、守られながら進んでゆく。

おまけとばかりに、間延びした銃声が響く。村長の家で待機しているヴィルヘルミナが持ってきたスコープ付き、Gew43で狙撃しているのだ。

だが、何せ数が多い。

倒しても倒しても、やってくる。更に地の利もある上に、耐久力も上がっているらしく、弾薬も精神力も心細くなってきた。

しかし、ようやく村長の家にたどり着いた。

家の周りには、スイカを割ったように頭を破裂させた死体が幾つも転がっている。

ヴィルヘルミナの仕業で間違いない。

本人は、一行を視認して入ってくるように合図する。

だが、こんなのまだまだ序の口だ。

家の中に入り、急いでドアに鍵をかける。

中には、立て籠もった村人が居た。

何人かは、血を流していたり包帯を巻いていたりしていた。

まあ、生き残れただけ幸運だろう。

もっともこれから生き残れるかは、努力と運次第だ。

さて、窓や出入口は既に塞いでいたので手間が省けたが自分達以外、武器を持っている人は殆どいない。

入口と裏口に、斧と木の棒を持った男二人がいるだけだ。

手持ちの武器をチェックする。

精神力も、まだ十分に残っているが、弾薬は部屋に戻れば幾らかはあるが、十分では無い。

魔法は汎用性と瞬間的な破壊力は高いが、即応性と持続力、射程距離と扱い易さは銃の方が勝っている。

もちろん魔法でも対処は出来るが、発動までのタイムラグなどを考えると奇襲には弱い。（逆に奇襲する側からすればかなり強力。）

正直、援軍の来ない籠城戦はしたくないが、かといって全員を引き連れて包囲を突破するのは困難だ。

助けられるようなら、なるべく全員助かるようにするのがティリエルの心情だ。（逆に殺せるようなら、全員殺すようにするのも心情だ。）

小さい窓からそっと覗く。

松明を持った村人の姿が見えた。

とたん、窓にボウガンの矢が撃ち込まれて、壁に突き刺さる。

頭を戻すと、窓から入ってきた2本のうち一本は壁に当たり、もう一本はガラスを割って食器棚に突き刺さった。

先程から、銃声が聞こえないのも窓にくぎづけにされてるせいだろう。

レオンも銃の確認をしている。

転移してからずっと扱い続けてきた拳銃は、ここにきてガタが来た

らしい。

スライドに輝が入っている。

無理もない、正規のメンテナンスも無く使いつづけてきたらこうなる。

もっとも、弾丸も尽きかけていたようだから、どっこいどっこいだ
が。

ナイフ一本では、あまりに不憫なので武器を貸してやる。

「これを使いなさいな。無いよりは、遙かにましですわよ。」

と、ストック付きモーゼルを貸してやる。

20連マガジン4つとクリップ2つも渡した。

「いいのか？」

しばらく、感慨深げに銃を見つめていたレオンが聞いてきた。

ルイスが使ってたのと、基本同型だからな。

「心配なさらないで下さいな。まだこれがありますから。」

と、脇のタウルスを見せる。

それに、念のために持ってきたあの銃もありますしね。

どうやら、レオンは教会に向かうらしい。

「同行しましょうか？」

2階の窓から飛び降りる準備をしているレオンに、聞く。

「いや、気持ちだけ受け取っておく。」

なるほど紳士ですね。

ならこちらが出来ることは、一つ。

露払いだけだ。

飛び出す前に別の窓から杖突き出し、フラッシュを唱える。

焼き付くような閃光で目を押さえる村人。

皆動きがシンクロしているのは、仕様です。

ガラスを突き破ってレオンが、飛び出した。

皆さんつごめいている隙に、狙撃。

止まっているターゲットだから、狙撃も容易だ。

ティリエルとヴィルヘルミナの狙撃が、教会の進路上の敵を倒してゆく。

下では、近づいてきた村人を回し蹴りで吹き飛ばしていく。

5発撃ち切る頃には、レオンの姿は消えていた。

さて、後は私達の版だ。

今現在、サンドイッチのハムだ。

それも、時間無制限の。

まあ、私は不利になれば成る程燃える。

Kar98にクリップを差し込んで装填すると、残りの弾薬を全て
ヴィルヘルミナに手渡した。

激しい戦いで、弾も相当消費していたからだ。

ライフルを肩にかけて、部屋に戻りトランクの鍵を開ける。

中に入っているのはトンプソン1928A1、のコピー。

シュヴェアー・マシーネン・ピストーレ（英訳、ヘビーサブマシン
ガン）、略してSMPだ。

万が一の為に持ってきたが、まさか役に立つとは、そう思ってニヤ
リとする。

弾薬は、150発。

50連ドラムマガジンだから、3つ分だ。

これなら当分凌げるだろう。

急いで下に降りる。

階段の降り口のところで、目の前の窓を塞いでいた箆筒が倒れ、オッサンが身を乗り出して入って来ようとした。

とりあえず、ストックで顔面を殴りつけて箆筒を立て直す。

「タバサ。生きてますか？」

「生きてる。」

呼び掛けるとすぐに返事が返ってきたから、まだ多少は余裕だろう。箆筒を錬金で鉛に変えたあと、広間に戻る。

そこには、タバサと武器を持った男二人しかない。

タバサは当然のこと、残り二人もなかなか善戦している。

やばそうな、窓やドアを錬金で塞いでようやく一息つける。

残りは、地下室に逃げたようだ。

シルフィードは、どうしたのかと聞くと壁の隅にしゃがみ込んでいた。

「怖いね、怖いね、お腹空いたのね。」

戦闘要員としては、期待出来ない。

そう判断した。

まあとりあえず侵入は防いだ。

後は、引きこもりながら攻撃すればいい。

まあ、火攻めは流石にやばいが消火は出来る。

周りは全て敵だ。

狙いにはこまらない。

ただし、間接的な魔法で攻撃したほうがいい。

しゃがんで手を床に付けて目を閉じる。

「ポイントマーカースェット。」

そう呟いて、十秒程じっとする。

「（把握、完了。）」

「クリスタル・ブリューテ！」

村人達の足元から突然、鋭く尖った水晶が飛び出し、串刺しにした。

それが、何本もピンポイントに飛び出す。

そして、止めも忘れない。

「クリスタルナハト！」

地面から、何本も村人を串刺しにして乱立していた水晶が、爆発した。

刺さっていた者は、もちろんバラバラになり、かろうじて避けた者も水晶の破片が襲い掛かる。

これが、ティリエルの得意とする奇襲攻撃魔法だ。

そして、パニックになっている追い撃ちに、タバサのアイスストームが襲いかかる。

風圧で吹き飛ばされ、氷のつぶででえぐられる。

これで大半は、倒せたとは思いが油断は禁物だ。

「インデッコー！」

ヴィルヘルミナが叫びながら、階段を飛び降りる。

その瞬間。

二階が吹き飛んだ。

思わず頭を下げる。頭上を何かが高速で過ぎっていった。

頭を上げると、真っ暗な夜空がみえた。

飛んでいった方向を見ると、巨大な大木が倒れていた。

あれが、飛んできたのだろう。

大木は、二階と床を削り取っていったのだ。

そして、ぬうつと巨人が現れた。

全長16メートルほどの……エルヒガンテ？

見た目エルヒガンテっぽいが、顔つきはオークの面影を残している。

あの噂が間違っていない事が証明されたわけだ。

とりあえず新たに判った事は、オークを生体改造するくらいの技術はある、やばい宗教だとゆうことくらいだ。

「（やれやれ。暇潰しで来てみれば、どうしてどうして。中々良い手土産が出来たこと。）」

心中呟きながら、巨人を観察する。

まあ、後は背中から触手っぽいものが何本もつねっているくらいだ。

それが二体。

「ふう。歯ごたえのありそうな敵がいるじゃあないかですう。安心しました。」

肩を鳴らしながら、ヴィルヘルミナが言う。

「あいつ、殺っちゃっていいですか？ ティリエル。」

「どっち？ 片方、それとも両方？」

「両方に決まってるじゃあないですか。 でないと全然面白く無いのですよ。」

「なら、両方ともお願いね。 特大のミートパテをお願いするわ。」

「合点承知ですう〜。」

凄みのある笑みで答えた後、全身をバネにして飛び上がる。

オーク・エルヒガンテも本能的な脅威を感じ取ったのか、そちらに身体の向きを変える。

「さあさあ、豚共！ 大人しくローストされやがれ、ですう！！」

オークエルヒガンテの咆哮と同時に変化を解き身体を光らせ。

ゴガアアアア！！

竜化して返答するように吠えたと、勢いそのまま飛び掛かり、鋭い牙をぶよぶよした肉に突き立てた。

怪獣大戦争が勃発する、傍ら半壊した村長宅でも戦いは激しさを増していた。

遠巻きに囲んでいた、村人達が全方向から村長宅を蹂躪せんと迫ってきたのだ。

ただこれが村の人口的に最後の大攻勢だ。

それは、村人の集団の中にオークエルヒガンテと歩調を合わせるために待機していた精鋭の信者が混じっていることから明らかだ。

彼等は木製の楯やモーニングスター、ボウガン、サイスなどを持って、彼等の祈りを唱えながら突撃してくる。

ただそれは簡単にはいかない。

足元から飛び出した水晶の槍が一呼吸おいて爆発する。

氷の竜巻が、犠牲者を五体不満足にして空中にほつり出す。

地表を舐めるように延びた火炎に丸焼きにされる。

たたき付けられるような風圧で骨が折れ、内臓が破裂する。

布を裂くような銃音と共に飛来する45口径の弾丸ですたすたにされる。

氷の矢でハリネズミのようになり、風の刃で上下泣き別れする。

そしてついに禿の村長が参戦する。

カタタタタタツカチン！！チュイン。

窓から突き出した、SMPの射撃が止む。

放熱用のフィンが特徴的な銃身とリコイル（反動）を押さえる銃口から煙が上がる。

ちなみに、カチンは撃鉄が空撃ちした音で、チュインは遅れて床に落ちた最後の薬莖の音である。

銃口の向いた先ではもはや動く物は、何もなかった。

「ふう〜。」

実戦慣れはしているとはいえ流石に、魔法を休みなく連発していたら疲れる。

タバサの方を見たが同じような状態だ。

水筒の水を一杯煽る。

ずっと連射していたから、床には空薬莖が一面散らばっている。

だがまだ終わってはいない。

空になったドラムマガジンを床に放り、新しいマガジンを付ける。

ちょうど最後の弾倉だ。

既に抵抗はないが、いないとは限らない。

すぐにコッキングレバーを引いていつでも撃てるようにする。

窓を守っていた、二人の男が近づいてくる。

「終わった……のか？」

「生きてるよな、俺。」

今だ生を実感んしていない男達。

つい先程までアドレナリン全開で恐怖を忘れて無我夢中で戦っていたのだ。

周りの死骸の山を見て恐怖を感じて、そして叫ぶ。

「勝ったんだ！俺達が勝ったんだ！！」

抱き合う二人。

だが、そこまでだった。

何気なく、上を見たのだ。

そして短く叫び声を上げ思わず飛びのく。

振り払われた本人は、相棒の行為が判らなかった。

そして死は降る。

建物のかろうじて残る梁。

そこから飛び降りた影は、まず自分に気づかない男を踏み潰した。

思わぬ方向から圧力をかけられた、男の身体は折れた骨が全身に突き刺さるとゆう、壮絶な最後を遂げた。

タバサは杖を向けるがもう一人の男が邪魔で攻撃出来ない。

ティリエルが銃口を向けるが、カチとしか音が出ない。

不発だ。

急いでボルトを引いて、薬室から使えない弾丸を外に出す。

その間4秒ほど。

それで十分だった。

「うわああああ！」

目の前で仲間が殺されて恐慌状態になった男が駆け出す。

そして、振りかぶった木の棒で頭をカチ割ろうとした。

だが、棒を振るより早く村長が動いた。

大きな手の平で、男の頭を掴む。

そしてそのまま力を込め、

バキヤア！

と、頭が変形した。

即死だ。

中枢神経を一瞬で破壊され、下の方から汚物を垂れ流す。

棒は空しく村長の体を叩いた。

村長は、死体を投げ捨てると

「ここまでの被害は甚大だった。だが、それに見合うだけの価値はお前達にある。我らの同胞となれ。我らと共に偉大なる信仰を広めよう。」

「宗教の勧誘？そういうのは、お断り頂いているのだけれど。」

「神様は信じない主義。」

「何故だ？救われるのだぞ。お前が信仰を受け入れさえすれば、今までの苦しみから解放されるのだぞ。」

「前に似たような事を、神官が言っていた。」

「なら仕方ない。」

村長は殺気を出して、

「力づくで信仰に従ってもらえないかな。」

そのままティリエルに向かっていった。

タバサの後ろからの攻撃をもともせず。

簡単な動きで、拳を振り上げて、殴りかかる村長から飛びのく。

拳は先程まで私の頭があつた延長線上の壁を貫く。

ただで済まさないのが私。

飛びのきざま、ファイヤーボールも忘れない。

火だるまになる、村長。

「そういうのは他人に強要せずに、自分達だけで勝手にやって下さいな。こんな思想は抹消しますよ。弾圧的な意味で。」

「あと、その台詞は自信過剰。相手の力量も考慮に入れたほうがいい。」

火だるまになりながらも、立っている村長。

上着は完全に灰になっっているのに、ズボンは燃えていない……はい、耐火製ですね。わかります。

そうでないとか村長さんのイチモ、ゲフンゲフン！！

いけない、いけない。

危なくレディらしかぬ想像を……まあいいか。

ところで、エルヒガンテもやっぱりパンツはいてますよね。

どうやって穿かせたんだろう。そして中身は………駄目だ。
思考回路が変な方向に向かっている。

集中してさっさと殺っちゃおう。

後は、何となく予想通りだった。

爪を伸ばして、背骨をムカデみたいにして襲いかかってきた。

だが、結果は実に味気無いものだった。

ファイヤーウォールでもう一回火攻めしてタバサのエアーカーターとSMPの同時攻撃で背骨を破壊した後、残った上半身をジャベリンとタウルの連射でずたずたにして、村長さんは呆気なく倒れた。

これが、二週目以降の村長さんポジションだろう。

義眼が床に落ちていたのはお約束だ。

春も終わりに近づいた時期。朝は早い。

明るくなりつつある空を眺めながら、ポケットから葉巻を取り出し火をつける。

元氣そうなレオンとヴィルヘルミナが戻ってくる。

朝日と共に異変は終わった。

やがて、地下から隠れていた村人が出て来る。

そして、村の惨状を見て愕然とした。

銃弾や魔法で穴が空いていたり、破損しているのはまだ良い方。

火炎放射や火矢で燃え尽きていたり、爆発や暴風で屋根が飛ばされたり半壊していたりする。

特に、エルヒガンテとヴィルヘルミナの怪獣大戦争の舞台となったところは、潰れて木材や家具がバラバラになっている。

教会と禿の村長宅は、跡形も無く更地になっていた。パネエツス。バイオの主人公パネエ。

あまりの有様に、怒鳴り付けようとしたが、村長に諭されて相手が違うと分かり黙った。

確かに家屋は損壊したが、彼らのおかげで命は助かったからだ。

だが、

「もう村を捨てよう。」

と村長は呟いた。

村人も十数人に減り残りは、物言わぬ死体となって横たわっている。

建物は殆ど損壊し、修理するのも困難だ。

よしんば直したとしても、こんな事件が起きた村に誰が住みたがる

だろうか。

彼等自身もそうだろう。

ならいつそ移住する方が遥かに安上がりだ。

それに奇跡的に家畜小屋などは、全く損害を受けていない。

おまけに、住人が減った分の家畜がいるため、ある意味財産が増えたことにもなる。

何人かの男は、主無き家から見えそうな物を家捜ししている。

この時代の農民は、したたかなのである。

まあ、当事者のこちらとしては微妙な訳で。

問題はエルザである。

実は村長、拾った当初から、吸血鬼だとゆうこと知っていたそうです。

しかし事情が事情により言い出せなかったようである。

だがど田舎の農村では何とか騙し通せたが、これから先も騙し通せる自信は無い。

それに、自分はもう歳で自分を養うのも精一杯だと口走った。

で、エルザをどうするかだ。

「なら、こちらで引き取りましょうか？」

えっ？とした表情で見上げるエルザ。

少なくともベルカなら、多種多様な種族が生活している。

吸血鬼でもおっぴらに生活出来る唯一の国である。

もちろんこの事は、村長の前では言わない。

あくまで身分を偽って来ているのだからだ。

そして昼。

今現在シルフィードの背中。

トリステイン目指して飛行中である。

ヴィルヘルミナは、エルザを乗せてベルカへ向かって行く。

その後エルザは、養子となり平和な日常を手にしたのでした。

レオンはとゆうと、光の鏡に入ったのを最後に誰も姿を見た者は居ない。

The End (この話は。)

タバサの冒険 + アインス（後書き）

ふざけ過ぎました。

バイオのやり過ぎです。

長すぎた事は、若干後悔してます。

買い物に行こう！

長かった。

本来一日で終わる事件を3日かけて、終わったのだから。

いや、帰って来たのが夜中だったから厳密に言えば4日になるか。

部屋に戻ってから、着替える間もなくベッドに突っ伏す。

腹は減っていたが、何も食べる気が起きない。

何より、当直やらで全然寝ていなかったので軽く頭痛がする。

嬉しい事に明日は虚無の日だ。ゆっくり休もう。

とりあえず、保冷庫に入れて置いたウイスキーをストレートで一杯煽ったあと、明かりを消して改めてベッドに横になる。

すぐにアルコールが回り初め、思考力を低下させる。

ぼんやりした頭で思う。

今頃ヴィルヘルミナはエルザと、どさくさに紛れてこっそり回収した寄生体の一部を届けているだろう。

センターとアーネンエルベの科学者達が喜ぶ顔が目に見えぬ。いや、935部隊の連中もかも知れない。

まあ、興味はあるがそれだけだ。

ゆっくりと意識が沈んでゆく。

翌日。

「タバサああー!!」

時計の針が10時を指そうとし、ティリエルがまだ爆睡している中、寮の廊下を走る者が一人。

褐色の肌と赤い髪でプロポーションが素晴らしいキュルケである。

先程、ダーリンことルイズの使い魔を求め部屋に押し入るが姿が無く、窓から馬に乗って行くのが見えた。

追いかけてようと、馬小屋まで走っていったものの他にも出掛けた生徒は多かつたらしく、馬は一頭もいなかった。

途方にくれていたが、直ぐに友人の風竜を思い出し乗せていって貰おうと、またも駆け出したのである。

愛は情熱。情熱は疲れすら感じさせない。

若いのはいいことだ。

ようやく、目的の部屋の前に着く。（原作では、ルイズの真上だったが一つズレて、キュルケの真上である。ルイズの上はティリエル）

「タバサああー!!」

悲痛な声を上げながらドアと叩くが、開く気配は全くない。

キュルケは、胸元から杖を取り出すとアンロックを唱える。

アンロックは、規則で禁止されているが実際は有名無実化している。

中に強引に入ると、ベッドの上で読書中のタバサ。

本の題名は、《ベルカ兵が語る。ドキドキ、サバイバル技術・入門編》、である。（ティリエルに貸してもらった。）

キュルケが何やら訴えるが、タバサは反応しない。

サイレントで音を遮っているからだ。

ならば、実力行使だと肩を掴んで前後に揺さぶる。

首がガツクンガツクンなってもまだ反応しないが、だんだん顔が青くなってきた。

耐え切れなかったようで、仕方なくサイレントを解除し本を顔から離して読書を邪魔をしたと睨みつける。

だが、キュルケはそんなの意に解さないのか気づいていないのか、気にしたようなそぶりもなくそのまま縋り付く。

「大変なのよ、タバサ。あのヴァリエールが私のダーリンを連れてトリスタニアに向かっているのよ！早く二人を追いかけてほしいの！だからあなたの使い魔で連れて行って！」

ダーリン云々は理解出来なかったが、友人が困っているのは分かる。

口笛を吹くと窓際にシルフィードが現れた。

どこか動きがのっそりとしているのは気のせいだろう。

「流石タバサね。」

しかし、ふらふら進路をずらすとそしてそのまま隣の窓に突っ込んだ。

「えっ！」

キュルケが思わず声を上げ、

「まずい。」

タバサが本当にそんな顔で呟いた。

その頃ティリエルは微妙に意識があつた。

先程まで変な夢を見ていてそのことを思考していた。

何故か自分は砦に居て、何人かの味方と共に坂を駆け上がってくるバイキングのような格好の敵を、マスカット銃でひたすら射殺していた夢だった。

夢の中で、味方も大分いるしマスカット銃で十分だろうと思ってい
たら、目が覚めた。

まあ、このまま二度寝しようと思ったところで、

ガツシャアン！！

突然衝撃と共に飛び起きたのだ。

ベッドから転がり落ちると、すぐに臨戦体制に入る。

枕元に置いてあつた拳銃をとるのも忘れない。

そこでティリエルが見たのは、頭を窓に突っ込み目を回して気絶し
ているシルフィードだった。

「きゅいい……」

弱々しく鳴くシルフィードの頭を足で小突くと目を覚ましたようで、

「おはよございますなのね、お姉様。」

テイリエルが人違いだと訂正してやろうとすると、頭がだんだん窓からずり落ちてゆく。

いくら竜でも万有引力には勝てないようだ。

窓から姿が消えると、少しして「ぐえっ！」と蛙を潰したような音がする。

まあ竜だから、大丈夫だろうと思ったら次は、

「テイリエル、大丈夫！」

とタバサが止めるのも聞かずアンロックでドアを開けるキュルケ。

そして、ドアについていたワイヤーに引っ張られて信管が作動する。

不法侵入者撃退装置が作動してゴム弾で吹っ飛ばされるキュルケ。

結局二人が起きるのは約一時間後だった。

トリステインの首都トリスタニアは、王族の住まい兼政治の中心であるトリステイン城を中心とした城下街である。

人口約20万、特産物は腐敗した法衣貴族と甘い汁をたっぷり吸った政府高官の詰め合わせである。

そんな事はどうでもいい。

この街には二つの区分けが出来る。

一つは官庁街と貴族の邸宅を兼ねた貴族街。

もう一つは商店や露店、雑貨屋、宿屋、ギルド、麻薬窟、売春宿、事務所などが立ち並ぶ平民街である。

その平民街の一番の大通りのブルドンネ街にルイズと才人は歩いていた。

武器を買う為にである。

何故か才人は尻を摩りながら歩いている。

「痛え〜。」

「情けないわね。大の男が馬に乗ったくらいでそんな風になるなんて。」

「うるせえな。馬なんて、小学校ん時に動物園で乗ったきりなんぞ。」

才人が痛がるのは、無理もない。

舗装されていない砂利道を三時間かかって、パカパカ歩いてきたのだ。馬で。

サスペンションもなにもついていない馬に乗ればだれだって疲れる。

分からない人は、アスファルトの道でスケボーに座った状態で引張って貰えば何となく実感出来る筈。(たぶん)

「ドウブツエン？見世物小屋の事？」

「まあ、似たようなもんかな。」

しばらく歩く二人。

休日とあって、人が大勢闊歩している。

そして客を引き込もうと、盛んに声を上げる。

「安いよ、安いよ。今朝採れたばかりの野菜が安いよ。」

「ロマリア産のネックレスはいかがかね。二つ買ってくれたらおまけにもう一つ付けるよ。」

皆質素な服装だが、賑やかな雰囲気醸しでている。

「なんか、ハリーポッターのダイアゴ横丁みたいだな。」

「このブルドンネ街は、トリスタニアーの大通りなのよ。」

ルイズは自慢げに話すが、

「えっ！マジ？これが?!」

驚いて周りを見渡す。

「何よ。」

「いや、俺てつきり単なる商店街の一つかと。」

ブルドンネ街は、大通りと言っても道幅が5マイル程しかない。馬車がすれ違う程度の間隔しかない。

ちなみに戦車だったらぎりぎり進める幅だ。

道を狭くするのは、防衛上良い事だが経済活動には不便である。

また、火災の際も延焼が起きやすく不衛生になりやすい。

トリスティン以外の国はその事に既に気づいていて、道幅を広く改修したり、最初から広くしたりしている。

そもそも、半分チエックがかかった手遅れの状態で悪あがきしても無駄な抵抗以外何ものでもない。

「えーと、こつちよ。」

ルイズが一つの路地に入る。

才人も後に続く。

目的の武器屋は裏通りの奥にある。

足元には、不必要になった生活用品や窓から投げ捨てられた汚物が無造作に足元に散らばっている。

「なんか、繁華街の裏通りもこんな感じだったよな。」

壁にしゃがみ込み、ボロボロの服を着て、長く伸びた髭やらで人相が分からないような裏の住人が、明らかに場違いで浮いた存在のルイズ達を見つめる。

ようやく、武器屋が見つかる。

カラン、カラン。

ドアに着いたベルが、カウンターで鼻毛を抜いていた店主に来客を知らせる。

「いらっしゃ……貴族様ですか。うちはまっとうな商売を」

「客よ。」

抜いた鼻毛を吹き飛ばしていた店主の誤解を短く否定する。

「へえ、さようですか。坊主は聖具を、兵隊は剣を、貴族は杖を、陛下はお手を振られるのが相場ですが、その方はどんな物を？ 槍、斧、銃と揃ってござりますが。」

「剣でいいわ。詳しい事は、分からないから勝手に見繕ってちょうだい。」

ルイズの無然とした態度と五芒星とマントを見て、見繕う相手を把握した店主は、小汚い部屋に乱雑に置かれた武器や防具を興味深げに見ている才人をちらりと見て。

「少しお待ちを。」

と、奥に引っ込む。しばらくして、一メートル程のレイピアを持つてくる。

「これが今人気の剣でさあ。これなら、軽いし素早くふれますから、あの方にはこれくらいが無難かと。」

店主オススメの品を値踏みしたあと、もっと太くて大きいのがいいと言いつ出した。

それならと、やや小振りのサーベルを取ろうとすると、もっと大きいので、と要求した。

ぺこりと頭を下げ、奥に下がる。

こっそり舌打ちする。

なにが、勝手に見繕えた。これだからメイジは。

それなら、望み通りの高級で不釣り合いな剣を渡そう。

あの使い魔とやらが、剣を扱えなくてあの生意気なガキがくたばった所で、関係がない。

と、奥の方にあつた剣を取り出す。

「若奥様。これは、いかがでしょう。」
と両手持ちの大剣をカウンターに置く。

刀身は両刃で、長さはルイズの身長ほどもある。

俗に言うグレートソードだ。

おまけに刀身は黄金に輝き、色鮮やかな宝石がちりばめられている。

「どうでしょう。貴族様の護衛となると、これくらいの業物でないと釣り合いがとれねえですから。」

「おお、なんかエクスカリバーみたいだ。」

ルイズも才人の反応を見て、これで良いと思ったようだ。

「これにするわ。」

「流石お目が高い。こいつは、あの有名なゲルマニアのシユペー卿が鍛えた一本でさあ。この店一番の高級品で、他のお客様にも評判で。」

店の親父が太鼓判を押すので、ルイズは買う事にした。

プライドの高い貴族は、高級品でないと気が済まないのも後押しした。

「おいくら?」

「名剣ですから、安くはありませんぜ。」

「わたしは貴族よ。」

「へい、わかりました。」

ルイズは偉そうに踏ん返り返って、

「2000エキューでございます。」

予想外の高さに呆れた。

「庭付きの邸宅が、買えるじゃないの。」

「これでも、名剣の中では安い方ですぜ。若奥様。失礼ですが、予算の方はどのくらいで。」

「新金貨100枚しか持ってないわ。」

呆気なく財布の中身を教えてしまい、店主は話にならないと仕草をする。

「75エキューですかい。普通の大剣でも200は下らないですぜ。」

「知らないわよ、そんなの。」

普通は貴族が剣に対しては、マニアなどの例外を除けば、興味の一切けらもないので、ましてや普通の魔法学院の生徒が武器の相場を知ってるわけがない。

「まあ、近頃は物騒でいやがるんで段々相場が上がってるんでさあ。」

ちなみに相場だが、剣は1000エキュー、槍は80エキュー、銃は1500エキュー程である。

これらは、ある程度の品質の物で物価の高いトリステインの値段である。（粗悪品はこの半分程度。）

理由はトリステインに有名な職人が存在せず、また各国の中でもメイジ比率が一番高い為（最低はベルカ）に供給が殆ど無く常に品薄なので需要と供給の法則の元、剣の値段が上がり、更に殆どの武器が輸入した外国製であるので、関税やらなんやらで高額になりやすいのである。

他の国では、トリステインの3分の2か半分程度で買える。

とにかく今の持ち合わせでは、高級品どこかまともな武器も買えないのである。

「結局買えないのか。これ。」

「そつよ。買えるのにして。」

「でもな〜。」

才人がつまらなそうに呟く。

その視線の先には、戦場から拾ってきたのかのようなボロボロのジヤンク品しかない。

刃があちこちかけていたり、僅かに歪んだり曲がっていたり、握りがボロボロだったり、錆だらけの物しかない。

才人がため息を着くと、突然武器の山の中から声がした。

「おでれーた、坊主。おめえ、その成りでいつちよ前に剣士のつもりか？笑わせるぜ。寝言は寝てから言いやがれ。」

「なんだ？どつから聞こえたんだ。」

分ならず、あたりを見回す才人とルイズ。

しかし、当然ながら店内には他には誰もいない。

声のした方には、殆ど赤錆の塊と化している武器が樽に何本も刺さっているだけだ。

「やい、デル公！お客様に失礼だろうが！」

店主が慌てたように叫ぶ先にはカタカタ、鳴る剣があった。

「うお！びっくりした。」

「インジェリデンス・ソード？」

「へえ。そうでさあ。誰が何考えて造ったんだが。とにかく、こいつは口は悪いわ、やかましいやらで持て余しております……」

「へえ」。面白いじゃないか、それに以外と悪くない。なんか太刀みたくて、切れ味赤っぽいけど。」

才人は握りを持って目の前に持ってくる。

すると、剣は小さな声でしゃべりだした。

「なんだ。おめえ『使い手』か。よし、俺を買え。」

「ちよつと、そんなので良いの?」

自分の預かり知らぬところで、勝手に話が進んでいるので文句をいったが、手持ちがどうしようもない。

「あれは、どうなの?」

「あいつは、ボロボロですが以外と切れ味も良いですし、そんじゆそこらの剣よりは、よっぽど頑丈でさあ。見た目やかましさを除けば、割と掘り出し物ですぜ。」

「ふん。おいくら?」

「中古なら100エキューなんですが、こいつは厄介払いも含めて50で結構です、へえ。」

値段もなかなかお手頃で、才人の治療の秘薬代ですっからかんの財布にも優しかったので買う事にした。

「買うわ。」

「へい毎度あり。」

店を出ようとした所で、才人が気づいたように戻ってくる。

「まだ、何か?」

「いやあ、忘れてたんだけどこの弾ってあるかな？」

と、ポケットに入れてきたSAA（シングルアクションアーミーの略）とその薬莖を取り出した。

「ん？ちよと拝見。」

店主は手渡された銃と薬莖をしばらく凝視していたが、すぐに驚いた声を上げた。

「やや？！やややややややや？！こいつは、おったまげた！」

「そんなに、凄いんですか？これ。」

「あつたりめえです。何しろこれ一丁で3000エキューはするとか。ゲルマニアの貴族の間でも人気だとかで。あつしも直に見るのは、始めてでさあ。」

才人は目を白黒させて、俺とんでもないもの貰っちゃったんだ。と黒光りする拳銃を見ていた。

「ところで弾は？」

「悪いですが、その弾は扱ってねえんですだ。」

そうか、と肩を落とすサイトに御贖戻にと店主は言った。

剣を買った後리즈とサイトは、残りの買い物（サイトの替えの服など）をするために、ブルドンネ街に戻った。

その道すがら、デルフリンガーと自己紹介していると、才人の鼻にある香りが引つ掛かった。

「こ、この香りは！」

「なんでえ？相棒？」

「あんだ、どうしたの？」

急に立ち止まったサイトに声を掛ける。

だが、サイトは主の声を軽くスルーし、とある建物を目指した。

才人の頭の中には、一つの事しか無かった。

「（この油の香ばしい匂い。間違いない。これは……………）」

犬のように匂いを辿りながら通りを走る。

匂いに近づくとつれて子供の声と別の声が聞こえてくる。

「ここだ。」

才人が角を曲がると。

「みんなも一緒にやってみようよ。いくよっらんらんらんー」

「らんらんらんー！ー！ー！」

赤と黄色の原色ストライプのドぎつい衣装を着て、顔を白くした道化が子供達を洗脳していた。

「ドナルド!!」

才人の声に気がついたようで。

「やあ。僕の事を知ってるのかい?うれしいなあ。」

すると、後からやって来たルイズがそれを追っ払う。

それでも終始笑顔であるのは、流石である。

「ちよつと、主人を置いて何処いくのよ!」

「ルイズ、あれはなんだ?」

「え?」

才人が指差した店を見て顔をしかめる。

「あれはベルカの出店よ。トリスタニアでも後二軒あるわ。そうやって、平民から財布の中身を締め出しているのよ。」

「名前はマクドナルドとか言わないか?」

「あら、知ってるの?」

「まあな。俺の世界でも有名だからな。」

「ふうん、そう。ってちよっと！」

サイトは、ふらふらと店内に入って行く。

「いらっしやいませ。ご注文はいかがなさいましょうか。」

ああ、これだ。懐かしく感じる。

「あゝ。テリヤキバーガーてっありますか？」

テリヤキは日本だけだったから、外国には無いとは思つが聞かずにはいられなかった。

その行動は正解だった。

店員は笑顔で、ありがとうございますよ、と告げた。

その時の才人の気持ちは、

ありがとう！本当にありがとう！！誰だか分からないけど、マックを作ってくれた人。マジで感謝してる！！俺に夢と生きる希望をくれて！もし会えたらキスしたいぜ！！

そして今。マックの常連客がまた一人誕生したのだった。

「へっくしゅん！」

「どづしたのティリエル？急にくしゃみなんかして。」

「さあ？風邪か空気が悪いせいかしらね。」

パラ……

その頃、キュルケ達はようやくルイズ達に追い付き、尾行していたのである。

窓を突き破るつたお詫びも兼ねてティリエルもつれてきたのである。

ティリエル自身、夜からトリスタニアで用事がある事もあってその申し出を有り難く受けた。

暇潰しにも丁度いい。

キュルケは、少し前から見失ったルイズ一行を捜す為にあたりをキヨロキヨロしている。

ペラ……

こんな時でも読書を止めないタバサは大物である。

こちらは、する事もないのでスリをしようとしてくる不届き者の手を優しく砕くくらいしかする事がない。

「あつ居たわ！」

キュルケが指差す前に、何かに憑かれたような表情で一心不乱に走る才人の後ろを何やら叫びながら追い掛けるルイズ。

才人の背中にくる時には無かった剣を
背負ってるのをキュルケは見て

「んもう！ヴァリエールの癖にダーリンにプレゼントして気を引くうなんて許せない！」

と、一人で地団駄を踏んでいる。

「ごうしちやいられないわ！」と叫ぶと、急いで武器屋に歩き出すキュルケを冷ややかに見つめながら、ゆるりと後を追うタバサとテリエル。

「つけられてる。」

「ええ。3人。基本的な尾行術ですわね。」

本に目を通しながら、呟くように小声で言うタバサに、同じようにキュルケを見つめたまま答える。

今までのキュルケの好奇心からのストーキングのような、生易しいのでは決してない。

明らかに殺る気だ。

「恐らく私でしょう。」

気配はまだ後ろの方でまだ遠い。

一人になるのを待っているのだろう。

「流石に人目の着く場所じゃあ、やらないでしょうに。こちらで処分しますから。」

まあ、得物は幸いにもこれから行く店で調達しましょうか。

「おや！また、貴族様だ！」

店主が素っ頓狂な声を上げるのは当然だろう。

ルイズの後に、貴族がまとめて三人。

もっとも買うつもりなのは、二人だが。

「ねえ、ご主人。」

キュルケは、色っぽくカウンターにしだりかかり、髪をかきあげる。

「へ、へえ。何でさ。」

「わたし、少し知りたいことがあるのだけれど。さっき来たピンクの貴族が何を買ったかご存知？」

「ボロボロの大剣ですか。それがどうかしまして？」

「ふーん。そう。それじゃあ、何か欲しかった剣とかあるかしら？」

「へえ。少しお待ちください。」

鼻の下を伸ばしながら、店の奥に消えて行く。

ちなみにタバサは、壁にもたれて読書中。

ティリエルは、合いそうな武器を片っ端から手に取って物色している。

「お待ちどうぞさま、こちらでさあ。」

と、件のシュペー卿の大剣をカウンターに置いた。

「あら、綺麗な剣ね。」

「そうでさ、かの有名なシュペー卿が鍛えた有名な業も、それは儀礼用の装飾剣でしょう。」

「え？」

突然割って入ってきたティリエルの声。

「ちょっと、どうゆうこと？」

キュルケの疑問に目線と身体は武器を見つめながら、説明をする。

「儀礼用装飾剣。主に祭儀や栄誉に値する際に授与される物の事ですわ。」

店主が、余計な事を！と齒噛みする。

「儀杖のようなお飾りみたいなものだから、実戦で使うよりは見て楽しむ品ね。」

そんなのは意にかえさず、得物を選んでカウンターに持ってゆく。

「まあ、中には業物もあるでしょうけれどね。」

カウンターに置いたままの大剣を手に取り笑う。

「まあこれは、ひどい。過剰すぎる装飾に鍍金。切れ味はまあまあでしょうけど、刀身は鍛える所か铸造。こんな生鉄では、一人切つたらもう使い物にならなくなりますわね。はつきり言って、戦いになんて使う剣じゃあ無いですわ。実用と鑑賞用は違いますから。芸術品としてはいいとして、武器としてはそこらの粗悪品と対して変わらないでしょうに。」

カウンターの近くのナイフを弄びながら、ぼろくそに言ってやった。

「あと、これ下さいな。」

と、鉤爪と小型ナイフとサーベルを指差した。

キュルケも店主も、ここまで言われたらこの剣には手を出せない。

店主はいそいそと、大剣をしまう。

「そ、そついや他に欲しがってたもんが、ありましたなあ。」

この変な空気を排除しようと、店主は白々しく呟いた。

「確か。そう！ベルカ製拳銃の弾を探しておりましたぜ。」

そつえば、決闘の時から返して貰うの忘れてたわ。

「へえ。ここには無いのかしら？」

「残念ながら、うちでは生憎扱つとらんです。もしかしたら、ピカデリー街の武器屋なら扱つた気がします、へえ。」

「おいくら？」

空気に成りつつあったので、もう一度聞いた。

「それなら、しめて300エキューで。」

「高いわね。100。」

「ここらへんが、相場でさあ。」

「赤錆の塊を相場で売るのはかしら？」

「なら、250エキューで。」

「ベルカならもっと安いですわよ。100。」

「ここは、トリスティンでさあ。240。」

「100。」

「220。」

「100。」

「200。」

「100。」

「これ以上は、まけられませんぜ。」

「なら、結構。」

踵をかえして、店を出ようとする。

「わかりました！150では？」

「ナイフを後7本付けて下さるなら、それで。」

ぐうぐうと店主が唸る。

だが、ここで帰ってしまうと儲けはゼロだ。

仕方ないか。

一方ティリエルは、ニコニコ笑顔でナイフを選んでいる。

どれも、機能的でしっかりした物しか選ばない。

「お邪魔したわね。」

代金を払って出口に向かう。

帰り際に、キュルケが情報料か指で金貨を指で弾いて店主に渡した。

店を出るとキュルケが話しかけてくる。

「あなたもめずらしいわね。平民の、それも中古の品を買うなんて。」

メイジは、平民が使う武器を魔法に一矢報う為の道具として軽く軽蔑している。

タバサもその点似たような物で、予備の武器を全く持っていない。

これは、魔法が大胆の生活において万能であるから下手な物を持つよりも勝手が良いからだ。

ただ、今回の理由は違う。

「そうかしら？古い分足が付き難いし、それに……。」

「それに？」

不審な顔のキュルケとは対称的な朗らかな笑顔で、

「人間が作った物ですもの。使えないわけが無いでしょう？。」

あれから数時間。

手近な店でやや遅い昼食を済ませたあと、冷やかしをしながらピカデリー街の武器屋に向かう。

相変わらず、尾行の気配は消えない。

やはり、一人になるのを待ってるのだろう。

「それではここで失礼させて頂きますわ。」

「ええ？もう少しいいじゃない。せめて、店まで付き合ってよ。」

「残念ですが、色々用事が立て込みまして。また次の機会にしましょうか。」

会議の時間も迫って来ているし、処理の時間も入れれば丁度いい時間だ。

「そうでしたわ。弾の事ですけど、45口径と言えば通じますから。」

それだけ言い残して別れる。

うん。仕草で別行動に移ると分かったのだろう。

距離を詰めてくる。

気づいていると悟られないように裏通りの角を曲がる。

気配で、駆けてくるのが分かる。

ん？一人増えたか。

一目が着かないからチャンスだと思ったのだろう。

だが詰めが甘い。

気づかれるようではまだまだだ。

気配はすぐに、後ろまで迫った。

私は丁字路を曲がると、身を隠す。

街の死角は、裏通りや角、積み上げられた荷物の陰ばかりでない。

確実に身を隠せ誰もあまり見ようとは、しない場所。

それは、屋根の上だ。

特にこのような狭く密集している路地の屋根などはなおさらだ。

屋根の上で、気配を消して買った武器を装着する。

やがて、足音が聞こえて追跡者（ネメシスではない。）が姿を見せる。

見たところ、こいつは傭兵だとばかりの服装をした男達だ。

彼等は、突然消えた標的に焦りを若干みせている。

「おい、何処に行きやがった!？」

「俺に聞くなよ。」

「まさか、気づかれたか……」

「馬鹿言え。相手はただのガキだぞ。」

さて、狩る者が逆に狩られる。

そういう気分にならせてあげましょう。

別にこのまま、やり過ぎしても良いのだけれど黒幕が知りたいし、
そうでないとい枕を高くして眠れないので、オ・ハ・ナ・シだけ聞か
せてもらおうとする。

静かにサイレントを唱えて、一帯の音を遮断すると音も気配も無く、
後ろに着地する。

まず一人目、左手でサーベルを振り抜き、最後尾の首を撥ね飛ばす。

二人目、まだ気づかないようなのでサーベルで胸を貫く。

三人目、ようやく何が起きたか気づいたようで、こちらを振り向く。

手には、ボウガンが握られている。

抜けなくなった、サーベルから手を離す。

空いた手でボウガンを抑え、右手に隠していた鉤爪で顔面を切り裂
く。

顔面を切り裂かれ、痛みに顔を抑える。

あと、一人。

やや遠い。

鉤爪を付けたまま、ナイフを男目掛けて投げる。

ナイフは狙った場所、柔らかく無防備な首に突き刺さる。

男は膝を着いた。

息を吸おうとすることができない。

震える手で己に突き刺さる、血まみれのナイフを抜く。

抜くと同時に、傷口から噴水のように血を吹き出す。

口からは、息の代わりに血を吐き出しバタリと倒れる。

これで追跡者は顔面を裂かれ、両目を潰された男以外はピクピクと痙攣している屍だけになった。

「うゝあゝ あああああああ！！！！」

顔面を手で覆い、激痛で苦悶の悲鳴を上げている傭兵に近寄る。もちろん悲鳴は周りには聞こえていない。

「ねえ、聞こえてるかしら？」

足元で、うごめいているのを足で小突く。

「た、頼む！悪い、悪かった！！いい医者を呼んでくれ！！死にたくないいい！！」

「なら、私の質問に答えて下さいな。」

そう言っつて、相手の喉元に鉤爪を突き立てる。

傭兵にしては、白い肌に赤い珠が出来る。

「わ、わかった！わかった！なんでも話す！話すから！」

うん、やっぱり若いのを狙ったのは正解だった。

傭兵になるようだから、死に対する恐怖は少ないと思うが、それは即死の話で重傷でゆっくり死んでゆくものには耐えられない。

「なら、雇い主はどなたで？」

「ロレーヌ！ロレーヌって貴族のガキだ！あいつは、あんたを一番酷い方法で殺せつて、」

ロレーヌか、なるほど。あいつならやりかねないな。

「そう。」

「早く、早く医者を！」

「安心してくださいな。すぐに楽にして上げましょう。」

そう言っつて、ナイフを心臓に突き立てる。

グハッ！つと咳をして息絶える。

一撃で楽にしてやったのは、ほんの優しさだ。

血で染まった凶器を投げ捨てる。

これで傭兵同士の殺しか、殺しを失敗し逆に殺されたと見るだろう。

さて、急がないと。

時間が迫ってきた。

どんな理由があれ、窃盗は犯罪です。(前書き)

万引きは死刑。

by ショッピングモールの店長&保安官気取りの警備員。

どんな理由があれ、窃盗は犯罪です。

夜中。

魔法学院の寮の一室は騒がしい。

もちろん、ルイズの部屋である。

騒動の中心はルイズとキュルケで、お互いに睨みあっている。

タバサは険悪な空気など、どこ吹く風、といったかんじで本を読んでいる。

才人はというと自分の寢床である藁束の上に座って恍惚の表情で拳銃に弾を込めながら、包みの紙を鼻に当て「ドナルドありがとう。また絶対行くぜ。」と呟いていた。

ドナルドはせんのにせいこうした。

「どういう事？ツエルプストー。」

ルイズは凄みのある目で睨みつけているが、肝心のキュルケはそれを軽く流している。

「だから、ダーリンが持つてる銃の弾を手に入れたから、プレゼントするって言ってるのよ。」

「生憎だけど、使い魔の使う道具はもう間に合ってるのよ。ねえ、

サイト。」

「え、いや。飛び道具が一つあるのはありがたへブツ！」

ルイズの思い通りの発言をしなかった才人は、ルイズの足で蹴られる。

「そんなガラクタ捨てなさいよ。銃なんて野蛮だわ。」

ルイズとしては、気に入らない要素が沢山だ。

まず、トリステインに限らずメイジは当然武器を嫌うが特にトリステイン貴族は銃を持つ事を嫌う。

それは、剣とは違い杖と似たよった部分が、あることでこれを持つことは外道とされるからだ。

もう一つは、それがベルカ製だということだ。

ベルカはメイジの数が少ない分、銃兵が異常に多い。

そして、銃の性能が異常に高い。

故に、それがメイジの地位を揺るがすのではないのか。と思われるのもあり、またそれによってトリステインはベルカと戦争する度に大損害を被っていること。

そして、最後にその弾丸を宿敵のツェルプストーが持ってきたからだ。

これで完全にダメだ。

だが、

「ふざけるな。男のロマンをそう簡単に捨ててたまるか！」
と反論した。

そりゃあ、西部劇で主人公らが愛用している銃だし、メタルギアをやった人なら多少は憧れる銃である。

「ほら、ダーリンも嫌がつてるじゃない。そんなボロボロの剣よりも、ずっと使えるわよ。」

「ダメよ。あんたなんかの施しなんか豆の一粒、麦の一掴みも受け取るもんですか！」

しかしルイズも頑なだ。

「こうなったら、ルイズ。ツエルプストーの名を賭けて決闘よ。」

「望むところだわ！先々々々々々々々々々代までの恨み。今ここで晴らしてあげるわ。」

双方杖を抜いて、睨み合う。

だが、風が手で吹きし杖はお互いの手元でくるくる回ったあと、飛んで行く。

「ちよつとタバサ。いきなり何するの。」

「室内。」

タバサが静かに言った。

「な、なあ。別に二つとも使うから構わないんゴフツ！」

意見を申し上げた才人は、今度は二人の蹴りを腹に喰らい悶絶している。

「でもこれくらいで、消えるほどわたしの情熱は小さくはないわ。」

「盛りの間違いじゃないの？ゲルマニアで男漁り過ぎて退学したんでしょうが。欲情してるんならロマリア辺りにでも行って子作りに励んだら？」

「あなたみたいな万年生理不順に言われたくはないわ。」

「お、お、表に出なさい！！！」

お互いに怒鳴り合いながら、部屋を後にする。

「なんで俺が、こんな目に会ってんだ……」

「一から説明しようか？」

「いや、空気読んで黙って聞いてたから、理由は分かってんだ。」

才人とデルフリンガーは二つ塔の下で話していた。

不思議なことに、デルフリンガーの柄にはロープが一本結び付けら

れている。

タバサが柄を振ると、ロープが上に引つ張られデルFRINGERも浮き上がる。

「なんか、縛り首になる奴らの気分がわかった気がするぜ……」

どういふ訳かは知らないが、決闘の内容はこうなった。

ロープに吊されたデルフを魔法で撃ち落とせば、お互いの勝負が決まる。

まあ、的代わりになったデルFRINGERにしてみればたまったもんじゃないだろう。

「じゃあなデルフ。短い間だったけど楽しかったぜ。」

「勝手に不吉な事言んじゃねえー!!」

「じゃあ、まずわたしから。」

とキュルケが優雅に、ファイヤーボールを唱えて撃ち出す。

真っ赤な火の玉は、まっすぐデルFRINGERに飛んで行き……
・刀身に触れた途端掻き消えた。

「おおおおおお!!」

「嘘!?!?どうなってるの!」

勝利を確信していたが、まさかの結果にキュルケは啞然としている。

「おおお、思い出したぜ！俺には魔法を吸収する程度の能力があったんだ。」

どこの東方だよ！と声が聞こえたが、とにかく次はルイズの番だ。

これで決めなければ、もう一度キュルケの番だ。

そうしたら、確実にロープを狙ってくる。

そうなったら負けだ。

ルイズは、今までに集中する。

しかし、結果は変わらず宝物庫の壁の爆発で終わった。

ただ壁の破片と爆風で、ロープが切れたのでルイズの勝ちだ。

その光景を近くの茂で見ている影があった。

最近巷を騒がしている怪盗フーケである。

平民からは金持ちの貴族から秘宝財宝を盗み出す義賊とも言われているが、いるが実際に売却した金を貧民街でばらまくようなロビンフッドとは違い、自分達の為に使っているから正確には義賊でもなんでもない、ただのこそ泥である。

ただ腕が良く大胆不敵で、おまけに犯行予告や「」を承りました。」
といった犯行声明で、貴族達をいらつかせ全国指名手配されている。

もったも、風貌や似顔絵どころか性別すら不明であるのに指名手配など殆ど意味無いが。

フーケは今回、宝物庫の中の秘宝、『破壊の杖』を狙ってロングビルの偽名を使って学院に潜入した。

そして、雇い主のエロ爺のオスマン校長のセクシャルハラスメントに耐えながら、機会を伺っていたのである。

そのかいあって、宝物庫は衝撃に弱いという情報を聞き出して、人気がいなくなつてからゴーレムを作り壁を殴っていたが、崩れる所か輝一つ入らない。

さてどうしようと、悩んでいるところにルイズやキュルケ達がやつて来て、何やらやり始めた。

すると、ルイズの爆発でなんとさっきまで難儀していた壁がえぐれたのだ。

これ幸いとばかりに本業に移る。

ゴウウウウーン！

勝利で小躍りしているルイズの横でorzの格好で落ち込んでいるキュルケ。

そこに月明かりを遮るようにそびえ立つ30メートルはあるゴーレム。

ゴーレムは、彼らが邪魔とばかりに遅く大きなモーションで地面を

えぐった。

キュルケは悲鳴を上げて逃げ出す。

「土くれのフーケ。」

タバサが僅かに強張った表情で言った。

残ったのは、恐怖で動けないルイズだけだ。

視界が、土で構成されたゴーレムの足でうめつくされる。

ルイズは目を閉じた。

死を覚悟している暇もない。

だが、痛みを衝撃も何も無い。

目を開けると、目の前に自分を庇って足を剣を翳して防いでいる自分の使い魔の姿が見えた。

「なに、してんだよ！さっさと・・逃げろよ。」

「あ、あんた何してんのよ？」

「この、状況で、言う台詞が、それかよっ！」

予想もしなかった光景に驚いているルイズと内心さっさとどけつてんだろ！と叫んで膝をガクガクさせた才人。

「やべえ、相棒！逃げる！」

「逃げられるならとっくに逃げてるよ！」

うおおおおお！、と叫んで足を跳ね退ける。

ぐらついたゴーレムだったが、すぐに体勢を立て直し、今度は拳を振り下ろす。

拳にぶつかる瞬間。

かるじて飛来したシルフィードが拾い上げる。

上空に退避したのを尻目に、邪魔物が消えたフーケの操るゴーレムは安心して、壁を穴を開ける。

そのゴーレムの肩の上にはロープを羽織ったフーケが立っている。

その光景をルイズ達は上空で見ているしかない。

杖を下に落としてしまったからだ。

杖が無いメイジなどなんの役にも立たない。

やがて、目的の物を手に入れたフーケはさっさと撤収する。

ゴーレムは悠然と門から出ようとして、入ろうとしていた馬車を蹴飛ばした。

馬車は馬から外れ、何回転もしながら50メートルほど吹っ飛んだ。

「あつ」

思わず声を上げる。

すると、逆さになった馬車のドアが吹き飛び、中から人影が現れる。影から、銃声と共に閃光が煌めき、少し遅れて火球が釣瓶撃ちに発射され、ゴーレムの表面で炸裂する。

攻撃でえぐれていくゴーレムは、突如崩れさった。

だがこれは攻撃によるものではなく、撤収に際し、もう必要なくなったから破棄したまでだ。

やがて人影は、大破した馬車から荷物を回収すると、着地したシルフィードに近づいてきた。

月明かりで浮かび上がったのは、擦り切れたり裂けたりしたドレスを着て、不機嫌顔を頭から流れた血で染めたティリエルだった。

「あら、あなた達だったの。」

「ちょっと。怪我大丈夫なの？」

「ええ………全く、本格的に災難の相でも出てきたのかしら………」

流石に心配したルイズに、皮肉半分いらつき半分な返事をした後ため息を尽く。

どうやら見た目以上に軽傷で元気なようだ。

「今のは？」

ティリエルがもはや小山と化したゴーレムを指差す。

それにタバサが

「フーケ。」

と答える。

「ああ、そういう事。」

なんか納得したようで、ティリエルは騒ぎを聞き付け寮から出てきた生徒とは逆に部屋に戻っていった。

全く今日についてはない。

刺客を丁重におもてなしした後、会議に参加するためトリスタニアにある、ベルカの大使館に向かった。

モニターには、会議に参加する面々が席に座っている。

国王、帝国宰相（首相）、外務大臣、国防軍総司令長官、陸軍大臣、海軍大臣、空軍大臣、親衛隊長官、財務大臣などのベルカの首脳たる面々が揃っている。

今回の議題は、アルビオンについての対応だ。

現在、シティーオブサウスゴータで王政派が貴族派を迎え打つ為に布陣している。

ただ、兵力は貴族派が遙かに優勢であり、正直王政派に勝ち目は無いだろう。

そうになると、新政権となるであろうレコンキスタに対してどのような対応をすべきか議論している訳です。

「レコンキスタの勢力は日に日に拡大の一步を辿っております。ここは彼らに譲歩し、友好関係を結ぶべきではないかと。」

「馬鹿な事を。」

そんな事をすれば、必然的に聖地奪回運動に参加する事になる。それに奴ら貴族主義で聖戦賛同の狂信者共だ。

同盟などを結んだ日には、奴らはこの国の隅々まで口を出してくる筈だ。

我々とは何もかも違う。」

「たしかに、共和制程度を掲げているなら構わないでしょう。我等とて手を結ぶ余地はあるはずだ。

だが問題はその目的です。聖地奪回？そんなの馬鹿げている。

我々はそれのような意味の無い絵空事に付き合っている暇は無い。

ここは、断固とした態度で望むべきでは？」

「そうかもしれないが、あの空飛ぶ大陸に軍を派遣すれば今まで以上に莫大な戦費がかかる。

内戦で疲弊しているアルビオンにその戦費以上の価値があるとは思いがたい。

それに占領地の管理も民衆の感情もあります。
離れた土地ほど面倒な事この上ない。」

「仮に送ったとして、あのトリステインの馬鹿貴族共やゲルマニアの強欲皇帝が黙っているだろうか？

恐らく何等かの圧力がかかる可能性が高い。

まずアルビオンの狙いはトリステインだろう。

それにレコンキスタ軍は将官の大粛清で弱体化しているそうだ。

何よりトリステイン王とアルビオン王は親戚でトリステインはちかじかゲルマニアとのレコンキスタに対する同盟を結ぼうとしている。そうなれば、トリステインとゲルマニアがアルビオンを攻略するだろう。

我々は静観を決め込むだけでよい。」

「それはまずいことこの上ないのではないの？」

「たしかにですな。」

「仮にアルビオンがトリステイン、ゲルマニアに占領されたとしたら、確実にあの大陸は分割されるでしょうね。

そうなってしまうたら、我が国は完全に包囲されます。

それに勢いづいたかの国が、進攻してくるかも限りませんわ。最悪、全交易ルートを断たればかなりの痛手になるでしょうし、戦略的に見てもアルビオンを拠点とすればかなり有利な立場になる上、外交的な地位も同時に上がるでしょう。」

「では、どうすればよいのかね？」

「まず、アルビオンの王政派を支援すべきでしょうな。

大陸を追われるようなら、亡命も視野に入れておくべきだと。」

そうすればトリスティン、ゲルマニアは王政復古という大義名分に縛られざる得なくなるでしょうし領土割譲も最小限で済むでしょう。身柄をこちらで確保していれば、彼らの同盟の仲間入りが出来て、派兵も最低限に抑えられ戦後は好感情が得られるはず。」

侵略と解放では、響きが全くちがう。

これは重要な事だ。

「ただ、デメリットとしては大陸封鎖戦法は使えませんし、レコンキスタからの引き渡し要求もあるでしょうが、現状としては最良の手段だと思いますが？」

大陸封鎖戦法を使えば、時間はかかるが確実に相手の喉元を締め上げることが出来る。

ただ、それをしてしまうと大量の餓死者が出るだろうし、国民感情も良くない。

「では、レコンキスタとは今後敵対関係とすることではよろしいかな？」

国王が周りを見渡す。

だれも反対する者はいない。

少なくとも全員はレコンキスタとは相容れない存在であると認識しているからだ。

「ならば、財務大臣。アルビオン王政派への臨時予算を編成し、王

党派の支援を行え。各自、己の職務を果たすように。」

その帰り道で、いきなりフーケのゴーレムに蹴っ飛ばされてしまった。

おかげであちこち打撲や切り傷だらけだ。

特に頭からの出血が少し酷かったが、幸いどこも骨折しなかったのが幸いだ。

まあ、風呂で洗って薬を塗ればなんとかかなるかな。

そう思っただけで部屋に戻ったが、壁がまだ修理もされておらず、ベッドもとても使える状態ではなかった。

仕方ないので、治療の名目で医務室で寝よう。

結構悲しかった。

翌日

「おのれ、土くれのフーケめ！貴族の財産を荒らすのだけでなく、魔法学院にまで手を出すとは、随分とナメられたものだな！」

「当直の教師はだれだったんだ！」

学院長の部屋では、何人もの教師が無毛な会議をしている。

別名責任のなすり合いとも言つ。

「も、申し訳ありません……本を書くのに熱中してしまつて……」

「著書を書くのは結構だが、職務怠慢では困りますな。」

ミスター・ギトーが、ミセス・シュヴルーズを責め立てている。

ちなみに、こちらは入口の辺りで空気になっている。

ルイズは緊張した面持ちで、キュルケは手で扇いでいて、タバサは自然体。私は欠伸を噛み殺している。

その頭には、包帯が巻かれている。

予想よりも深く切れていたらしい。

一人で包帯を巻くのは、慣れているとは言え頭は少し大変だった。

正直まだ少し痛む。

「これこれ、止めんか。か弱い女性を虐めるのは貴族のすることではないぞ。」

オスマンが庇うもギトーはなおも食い下がる。

「しかしですな！ミセス・シュヴルーズは当直をサボり、盗賊が学院を襲撃している時にあるつ事が執筆に夢中になっていたのですぞ！責任は彼女にあります。」

「なるほど、なるほど。ところで、一昨日の当直は誰じゃったかな？姿が見えんかったが……」

うっ！とギトーが引き下がる。

一昨日の当直は彼だったのだ。

「この中でまともに当直をしていた教師は挙手をせよ。」

殆どの教師がお互い顔を見合わせるなか、ミスター・コルベールのみが、静かに手を挙げる。

「これが、現実じゃ。この中で責任を追求する事が出来るのはミスター・ホロコースト君だけじゃ。ホロコースト君は彼女に責任を取らせるかね？」

「いえ、そんなことは……それと何の当てつけですか！私はコルベールです！」

名前を間違えられたコルベールは、オスマンを睨み付けるが飄々と流している。

まあこちらら暇なので、足元にいた白いネズミの尻尾を踏み付けてやった。

中覗こうつたてそうは問屋が卸さない。

痴漢、覗きも犯罪です。

こちらから見ると、オスマンがシュヴルーズの尻を撫でてるのがま

るわかりなのだが、敢えてスルー。

そこに、秘書のロングビルがやってきた。

ここで犯人コイツだよって言ったら、たぶん友達が読んてる推理小説の犯人ばらしたりした時の冷たい目で見られるだろうから敢えて言わない。

「ミス・ロングビル。どこに行っておったんじゃ。この非常時に。」

「申し訳ありませんオスマン学院長。調査をしております。」

「調査？」

「はい。夜に音で目が覚めて、気づかれないように尾行したのです。」

「流石じゃの。ところで、犯行現場を見ていたのはこの四人かね？」

「はい、この四人です。」

コルベールが後ろの四人を指差した。

ちなみに才人は使い魔で平民なので数には入っていない。

メイジ以外は人間と見ないトリスティンの悪しき習慣がはっきりと現れている。

「一番最初に見ていたのは誰かね？」

「私とツエルプストーとタバサです。」

「容姿はどんなだったかね？」

「暗くて黒いローブを羽織ってましたから良くはわかりませんが、女性に見えた気がします。」

「ふむ。最後に近くにいたのは………君か………
今回は災難じゃったのう。」

と、オスマンはティリエルを見つめる。

主に包帯が巻かれた頭を。

当事者としては、笑い話にもなりやしない。

苦笑しながら、

「馬車から出て、すぐに攻撃を仕掛けましたがどうやらダミーだったようです。ダミーも先程ヴァリエール嬢の話と同じでしたから
なんとも。」

「そうか。」

「オールド・オスマン。続きをよろしいでしょうか？」

「おお、そうじゃった、そうじゃった。すまんの。」

「いえ、それでなんとかフーケの隠れ家らしき物を見つけました。」

「なんですと!」

教師陣から素っ頓狂な声上がる。

「してそれはどこかね？」

「はい。ここから徒歩で半日。馬で四時間程度の距離の森の中の廃屋です。」

「すぐに王室に連絡すべきです！王室に連絡すれば兵隊を出勤させてくれる筈です！」

ギトーは叫んだが、オスマンは首を振る。

「だめじゃ。今から報告したのでは間に合わん。兵隊が着く頃には影も形も残っておるまい。その上、魔法学院の宝が盗まれたのじゃ。これは魔法学院の問題であって、当然我らで解決するのが筋であるう。」

「しかし、相手はあのフーケですぞ。固定化のかかった壁を破壊するほどの力量です。ここはプロに任せるべきでは……」

ギトーの抗議にオスマンは椅子に寄り掛かると、

「ミスター・ギトーがどうしても言うなら報告しても構わんが、そうなるかわしらは責任を取って全員職を辞さなくてはならなくなるじゃろう。それで良いのなら構わんが。」

その言葉で、ギトーは黙る。

辞職で済むならまだ良い方。

最悪、貴族の地位を剥奪され厳罰に処されるだろう。

「では、捜索隊を編成する。フーケを捕らえて汚名を返上し、誉れを授かるうとする貴族はおらんか？参加するなら杖を上げよ。」

だが、誰も杖を上げない。

怖じけづいたのか、命が惜しいからなのかとにかく誰も挙げるそぶりを見せない。

小声で、あなた行きなさいよ。君、行ってくれ。と気弱な声が聞こえる。

すつと杖が上がる。

ルイズである。

「私が行きます！」

それを見て他の教師はほつとしている。

教育者としてどうよ、そこらへん……

「情けないのお。君達はそれでも教壇に立つ教師かね。」

でもやっぱり誰も杖を挙げない。

彼らの殆どは、勤め人で教育者という自覚を持って教師をやっているのではない。

そのくせ、変にプライドが高いから全くもって困ったものだ。

「まあ、彼女達なら大丈夫じゃろう。ミス・タバサは若くしてシユヴァリエの称号を持つと聞いているし、ミス・ルーデルは軍の将校をしていると聞いておる。」

教師達は驚いたような顔をしている。

一部は嫉妬からか顔を歪ませている。

やだねえ〜ほんと。

「ミス・ツエルプストーは、火のトライアングルメイジで成績も良いしな。ミス・ヴァリエールは……まあ……うん……なんじゃ……そんなところであるが。」

ルイズの部分は盛大にはぐらかせられる。

「まあ、善は急げと言っじゃろうから。ミス・ロングビル。」

「はい。」

「彼女達に馬車を用意しておきたまえ。」

「畏まりました。」

「では、君達。期待しておるぞ。」

ここで済ませれば良いものを、変にちょっかい出すものがあるものだ。

それが例によって無駄にプライドと自己主張が強いギトーだったりする。

「ふん。せいぜい頑張りたまえ。」

恐らく彼は、年下の生徒達（タバサと私）が自分にはない称号を持つてるので妬んでいるのだろう。

「つか、だったらお前行けよ。」

「あら、誰の尻拭いをしているかと思ってるのかしら。ギトー先生？」

「やめなさいミスター・ギトー。」

だが、変に空気読めない（風メイジの癖に）ギトーは構わず続ける。

「調子に乗るなよ、ルーデル。私だって風のスクエアだ。」

「あらそう。なら一緒に来ますか？風最強の自説を証明する良い機会ですけど？」

「黙れ！ベルカの軍人気取りの雌犬が！」

「これ、ギトー！やめんか！」

それで、こちらのあしどりが止まる。

私にだって軍人としてのプライドはある。

小さくため息をついて、

「オールド・オスマン。少しばかりの無礼をよろしいでしょうか？」

「ミス・ルーデル。まあ、仕方ないじゃろつ。」

オスマンは、諦めたように言う。

「ありがとうございます。」

そう言って、振り向き様ギターの髪を掴み、テーブルにたたき付ける。

痛みと衝撃で、声が出せないギターの耳元で、

「忠告だけしておきましょう。私がこの世の中で我慢できないものが三つありますの。」

凶悪な微笑みで、周囲が固まってしまっているのも気にせず。

「一つは、気の抜けた炭酸。次に宗教とその狂信者共。最後に間抜けで糞の役にも立たない無能貴族のクソ野郎ですの。」

普段からではわからないほどの汚い言葉をはく。

皆震えている。

「困ったものでしょう？首だけは撥ねられないよう、頭は低く生きていけ。」

そしてギトーを解放する。

「では、失礼しました。先生方。」

自失状態の先生を無視して部屋をでる。

パツカ、パツカと馬は規則正しく足を進める。

馬車と言っても、多目的用の屋根のない物である。

そこに、合計6人が乗り合わせている。

ちなみに御者はロングビルだ。

なんと言いましょか。

コイツら、絶対ピクニックや遠足の類いと勘違いしている。

「ちよつと！使い魔に何渡そうとしてるのよ！」

「別にいいじゃない。勝負には負けたけど、両方使えば。それにいざって時に使えるじゃない。」

「だから、俺は最初から「役に立とうが立たなとうが、とにかくダメなものはダメなの!!」」

ギヤーギヤ、ギーギと緊張感のないことで。

出発までに何かしらの準備をしたのは、ティリエルとタバサだけだ。

タバサは、先日のキユルケの買い物時に、ベルカの武器屋で無理を言って買った迷彩マントを羽織っている。

こちらは、迷彩服を肩から羽織り、靴を頑丈な軍靴（鉄板入り）に履き替え、必要な物を幾つか持ってきた。

それは、迷彩カバーで巻かれて傍らにおいてある。

ルイズらが口論に夢中になるなか、周りを警戒している。

タバサは、読書しているようだが同じように周りの空気を探っている。

どうでもいいが、本の題名は『現地調達！サバイバルでもおいしい料理を』である。

内容は自然の物（蛇やら昆虫、野草など）を使って身近な素材（植物の繊維やら木の革など）を使って美味しく頂くとういうものだ。

どんな生物のどの部位がおいしいのかが書いてあるので、敢えてこれを選んだのだろう。

やがて馬車は、深い森の中に入る。

鬱蒼とした森の中は、暗いが木の葉の間から突き抜ける日光のカーテンおかげでかろうじて美しい。

「ここから先は徒歩で行きましょう。」

ロングビルがそう促し、皆それに従う。

道は砂利道から獣道のような細いものになったので一列で移動する。先頭からロングビル、ルイズ、才人、キュルケ、タバサ、ティリエルの順だ。

「なんか、暗くて怖いわねえ・・・そういえばタバサ。あなたを着てる、なんとかマントって意味あるの？色もなんか汚らしいじゃない。」

気を紛らわす為か、タバサに話し掛けるキュルケ。

「ある。」

「どんな？」

「目立たない。」

そう言ってマントの端を持って茂みにかざす。

草と一体化してるのを見てなるほどとキュルケは理解する。

才人は、拳銃を握り締めていた。

視界が悪い森の中、何となくジュラシックパークやロストワールドを連想してしまう。

「こんな時って、たしか先頭と最後尾が一番先に襲われるんだっけ。」

とするならば、真ん中に位置している才人は安全なポジションであ

る。

ちらつと後ろを振り向くと辺りを見回しているティリエルが目に入
った。

全周警戒しているのが、ありありとわかった。

「ちょっと。あんたどこ向いてんのよ。」

先程からのイライラが抜けていないルイズは険悪な声で言った。

慌てて前を向き直る。

はあ、とため息をついた。

「よお、相棒。浮かない顔してんな。」

「うおー！」

突然耳元で響いた声に思わず跳び上がってしまう。

「なんだよ、デルフ。脅かすなよ！」

「悪いなAIBO。ただ俺も空気読んだ結果が黙るしかないっての
は流石に悲しいだろ。」

「AIBOって、どこのカードゲーマーのもう一つの人格だよ。ち
ようどいいやデルフ。聞きたいことがあったんだ。」

「なんだ？俺の知ってることなら、何でも答えてやるぜ。」

「セットアップって言ったら、変形したり俺の服が変わったりする

か？」

「……おまえさん、何言ってるんだ？」

「物は試した。やってみるか。」

「なあ、相棒。空気の読める事で定評のある俺が思うに、そいつは止めたほうが……」

デルフリンガーが止めるのも聞かず、剣を掲げて叫ぶ。

「デルフリンガー・エクセリオン。セエットアップ!!」

「おーらい、すてんばぁーい。」

静寂を破る叫び声を上げる。

「」「」「」「」「」「」

敢えて何か変化があったとするならば、皆の視線がアブナイ人を見るような冷たい視線に変わっ事くらいだ。

「だから言ったる。やめとけて。こうなるのは目に見えてたと思うが？」

「そうだな……」

あれから、とりあえず何も無かった事にして、一行は先を急いだ。

「いやぁ。気を紛らわそうと思ってた。」

「まあ、相棒がかなりアレだったって事はわかったな。流石にエクセリオンはないだろ。なんかカツコイイけど。」

急に落ち込んでしまった才人。

「ところで、話は変わるがよ。お礼言わなくていいのかい？」

「誰にだよ？」

問い掛けに頭を上げる。

「腰の拳銃。」

「ああ。これか？」

「そうだよ。くれたのは、最後尾の嬢ちゃんだろ？」

「なんでわかったんだよ。」

驚く才人にカタカタと笑うデルフリンガー。

「そりゃ、メイジで銃持つてる奴なんざこの中で一人しかいねえだろ？」

才人はもう一度見る。

見たところ、杖を構えているが銃などどこにも見えない。

「右の腰に一丁。左の脇にも一丁、持ってやがる。」

良く見れば、たしかにそこだけ僅かに膨らんでいる。

「マジだ。」

そこで、才人の視線に気づき怪訝な表情をする。

前を見ると、急に開けた場所に出る。

その中央に小屋が一軒、佇んでいる。

「あそこが、フーケの隠れ家です。」

6人は茂みに隠れる。

小屋は見た感じ使用されている気配はない。

だが、最低限の手入れはされている。

恐らくこの辺りに住んでいるハンターが、寝泊まりしたりする時に使う物だろう。

フーケの隠れ家にはうってつけの物件だ。家賃もつかないし。

相談を始める。

とにかく、あの小屋に居るのだと仮定したら奇襲が一番だ。

タバサが立てた作戦は、偵察兼囿が小屋の中を確認し、居ればこれを挑発して外に出し、フーケが出て来たら一斉攻撃をする。

だが、それにティリエルは物足りないと思見した。

仮にフーケが居たとして、そう安々と挑発に引っ掛かるだろうか。

そもそもフーケは戦士ではない。

挑発されれば、相手の出方や規模が不明な以上まず逃げを選択するだろうし、相手に多少の対応を与える隙を作るのはどうか？

そのような理由でティリエルが提案した方法は、より攻撃的なものだった。

まず、バックアップと突入班に分け、突入班は小屋に突入する。

もし突入後フーケがいなかったら、突入班は搜索に移る。

もしも罠であり、フーケが小屋の外に現れたとしたら隠れていたバックアップがそれを攻撃するもの。

「それで、突入は誰がやるの？」

「二人はせめて欲しいですわね。まず、言い出しっぺの私と後一人。」

「わたしが行くわ。」

「寝言は寝てから言ってくださいな。」

ルイズが行くとほざいたので、阻止しておく。

「なによ！わたしじゃ不満だっていうのー！！」

「ええ。勇気は認めますが、実力は伴っていないければ逆に足手まといになるだけですわ。」

適材適所。素人が爆発だけでどうこうできるほど簡単じゃあない。

「ミス・ロングビル。あなたは、何系統で？」

「わたしは土系統ですが。」

「ならルイズとキュルケ、タバサとロングビルは後衛。才人と私は突入でよろしいですか？」

「って俺もかよ。」

「素早い身軽。」

結局才人は行く事になった。

「タバサ、私は破壊の杖を見たことないから、呼んだら来てくれますか？」

「わかった。」

生憎と破壊の杖はどのようなケースで、どんなのか見た事が無かったので入学式から居るタバサに聞いたのだ。

小屋の窓などから絶対に見えない場所に移動してから、小屋に向か

う。

このような場所は遮蔽物が全くない為に、屈みながら行く。

途中、土を一掴み取る。

ドアの前までくると、才人を壁に張り付けさせる。

「どっするんだよ。」

小声の才人に向けて口元で指を立てる。

先程取った土を錬金する。

そして出来た粘土状の物体にポケットから取り出した銅線を突き刺す。

身振りで耳を塞げ、と指示するとライティングの呪文を唱える。

途端に粘土状の物体が爆発してドアノブが吹き飛ぶ。

直ぐさま滑り込むように小屋に入り込む。

「動くな！武器を捨てなさい！」

爆発の衝撃で舞い上がった埃が空中を漂うが、小屋の中に人影は見えない。

「異常なし。クリア。」

「終わったのか？」

おいてけぼりを喰らった才人が恐る恐る覗き込む。

「ええ。中に誰もいませんよ。」

「怖えええ。」

別に腹かっぱ裂いたわけじゃあないのに。

「とりあえず、タバサ呼んでくる。」

駆け出していった才人。

よし、早速搜索だ。

と思ったら、律儀に机の上にチェストが置いてあった。

原作と同じくトラップのようだ。

ふうん、コイツか。

と、タバサがやってきた。

チェストを指差すと無言で頷く。

さあ、何が出るかな、何が出るかな。

原作通りM72か？それともジャベリンか？SMAWか？カール・グスタフか？

パカッと蓋を開ける。

「破壊の杖ってまさかこれか？」

才人が呻く。

「RPG - 18に、AT - 4ですか。予想の斜め上でしたわね。」

その言葉に才人は驚く。

「なんでそれを「フーケが出たわ!!!」」

その言葉はキュルケとルイズの声に掻き消された。

途端。小屋の屋根が剥がされた。

そして巨大で火だるま（キュルケが火炎で攻撃したから。）ゴーレムが覗いていた。

「ゴーレム。」

タバサが呟く。

素早く呪文を唱える。

竜巻が舞い上がり、ゴーレムに襲い掛かった。

だが、風故の破壊力不足かさほどダメージを与えられなかった。

虚しく、ゴーレムを覆っていた火を吹き散らしたただけだ。

キュルケの火炎もあまり効果が無かった。

対人に対しては効果は高いが、対物に対してはさほど効果がない。

火炎放射機で戦車に挑むみたいなものだ。

ティリエルは対物用にアレンジしたフラムボールを放つ、回転を加えて初速と威力を上げてある。

さらに温度も高めで、鉄も蒸発させる。

ただ、土で巨大なゴーレムには相性がやや悪かった。

穴は穿つ事はできるが、致命的なダメージにまでは至らない。

そのゴーレムが拳を振り上げる。

「ッ退避！」

慌て小屋から飛び出す。

ガアン！ガアン！ガアン！

才人のシングルアクションアーミーが、火を噴く。

しかし、45口径の弾丸は虚しく土にめり込むだけだ。

撤退し始めるキュルケとタバサ。

なお、ティリエルはと言うと魔法を唱えながら、片手で肩の迷彩ツエルトバーンに包まれたあるものを取り出す。

棒状の握りに金属で出来た缶詰型の炸薬入れが束になったもの。

つまり、M24型柄付手榴弾の収束装薬である。

その安全キャップを外して、中の紐を手首に巻き付けおもいつきり投げ付ける。

弧を描くように投擲された手榴弾は、ゴーレムの足元で爆発してその足を吹き飛ばす。

支えを失ったゴーレムは、地面に伏す。
よし。

これで時間稼ぎにはなった。

破壊の杖を持った才人の前に着陸したシルフィード。

「乗って！」

タバサが珍しく焦って叫ぶ。

だがルイズの姿が見えない。

後ろには、ゆるりと後退しながら魔法で攻撃しているティリエルがいるだけ……

いた！

足を再構成しようとしているゴーレムの後ろでしきりに呪文と唱えている。

それはゴーレムの表面をえぐり取るも、やはり致命的なダメージにはならない。

「何やってんだルイズ！早く逃げろよ！」

「いやよ！あいつを捕まえてみせれば、もうだれも馬鹿にしくなるでしょ！」

ルイズはまたとないチャンスを逃がすまいと攻撃で我を忘れてしまっている。

「現実見ろよ！」

ルイズ目掛けて突き進む才人。

その時、ゴーレムが体を無理矢理捻る。

流石に二方向から攻撃されては堪らないと悟ったのだろう。

緩慢な動きながらも唐突であった。

ティリエルは、それに合わせて火力を集中したが、呪文を唱えるのに夢中だったルイズはそれができない。

それは、たまたま射線上に立っていたティリエルに襲い掛かる。

至近距離の爆発と土柱で身を屈めて、攻撃から防御に移らざる得なくなる。

「ルイズ！あなた、敵なのか味方なのかどっちなの！？」

糾弾の音がする間に、攻撃が止んだゴーレムは足の再構成を終えた。振り下ろされる鉄拳を跳びすさつて躲す。

ゴーレムは次のターゲットを腰が抜けて立てないルイズに決めた。土で構成された巨大な足が、プレス機如く踏み付ける。

「二度も通じるか！！」

デルフリンガーを手にもった才人が間一髪、ルイズを助け出す。

「馬鹿野郎！何で逃げないんだ！」

「だって、だって、悔しいくて……わたし、見返してやりたくて……だから……」

目から涙をポロポロこぼすルイズに、才人は困ってしまった。

「大丈夫だ。使い魔の手柄は主人のもんだ。」

「え？」

理解できない言葉に、啞然としているルイズを尻目に二本の破壊の杖を両手に持ち直し走り出す。

「あの土野郎を止めてくれ!!」

その声に少し遅れて、地面から無数の水晶の柱が突き出し、ゴーレムの動きを封じる。

「喰らえ！武器を舐めるな！」

安全装置を外して、内蔵式のフォアグリップを引き出し、照準を立てる。

そして、上部のトリガーを押した。

パン。

軽い音がしてロケットの代わりに一発の曳光弾が飛び出した。

燐が入った曳光弾は、飛び出す筈だったロケット弾と同じ弾道を描き、狙った通りにゴーレムに命中し表面で跳ね返った。

今までの期待とは裏腹の結果に呆然としていたが、才人の叫び声で我に返った。

「ってこれ、訓練用じゃねえか!!」

地面におもいつきりAT-4（訓練用）をたたき付けた。

次に、RPG-18を構える。

M72のコピーとも呼ばれるこの携帯式ロケットを急いで組み立て

る。

若干焦っているのは気のせいではないだろう。

「今度こそ、喰らえ!!」

同じように上部のトリガーを押す。

バシューウ!!

後ろから発射ガスが吹き出しHEAT弾が飛び出す。

白煙を吹きながら、標的に一瞬で到達する。

だがそこまでだった。

信管不良か装薬が対応年数を超過していたのか、とにかく命中はすれど爆発する事はなかった。

砲弾は空しくゴーレムの胸にめり込んでしまっている。

「ちきしょう!なんでなんだよ!」

既に用済みとなった発射器をゴーレム目掛けなげる。

万策尽きた、これまでもかもしれない。

そう思った。

とても拳銃と鎗だらけの大剣だけで勝てるとは思えない。

ふう。

ため息が聞こえた。

才人の前に迷彩ツェルトバーンが投げ出される。

これを使えってか？

でももう勝てそうな武器も……

しかし、ツェルトバーンが少しめくれて中の物体が視認できると体は素早く動いていた。

巻き付けられていたツェルトバーンを外すと中身が明らかになった。

鉄パイプの先端に坪のような物が取り付けられた物。

A T - 4 や R P G - 1 8 のような使い捨て対戦車兵器の元祖となったもの。

パンツァーフアウストがそこにあった。

才人は構える。

左手のガンダールヴが、先のに比べかなり旧式だが問題ないと教えてくれる。

「三度目の正直だ！」

先とは違い、脇に挟むようにして放つ。

ドン！

大砲を撃つような発射音がして、弾頭が飛び出す。

弾頭は白煙を発しない。

ロケットとは違い、弾自体に推進力はない。

放物線を書くように命中する。

お椀型に整形された弾頭は、内部で爆発させた燃烧ガスを一点に集中させる。

一瞬で金属を蒸発させるメタルジェットとなり、ゴーレムの内部を破壊した後爆発する。

同時に、不発だったロケット弾も爆発して二倍の爆発力を生む。

結果ゴーレムは上半身を粉碎され、再生も出来ずに下半身も土くれとなる。

「終わった・・・ぼいな・・・」

安堵から脱力してへたりこむ。

上空からタバサが降りてきて、隠れていたキュルケが出て来た。

「すごいじゃないダーリン！あのゴーレムを倒すなんて！」

と、抱き着いてきた。

「フーケはどこ?」

タバサが聞いてきたが、才人は答えようがない。

「さあ?でもゴーレムを操るくらいですから、さほど遠くにはいないでしょう。」

ティリエルは、いつもの口調に戻り、泥や土で汚れた髪をかきあげる。

「そういえばミス・ロングビルは?姿が見えないようですけども。」

「ミス・ロングビルならあなたが行った後、辺りを偵察してくるって。」

「弱りましたわね。これでは犯人が捕まえられませんわ。」

「どうということ?」

「つまり、あたしが犯人って訳さ。」

いつの間にか後ろに立っていたミス・ロングビル事フーケが、RP G-18を構えている。

「嘘でしょ!どうしてミス・ロングビルが?」

「説明をしてやりたいが、生憎盗賊稼業ってのは年中無休、24時

間フル稼働だから時間に煩くてね。割愛させてもらおうよ。」

タバサが杖を向けようとする。

「おっと。動かないほうが身のためだよ。破壊の杖でバラバラにされたくないやね。杖を捨てな。」

ルイズ、キュルケ、タバサは杖を捨てる。

だがティリエルは捨てない。

「あたしの言うことが、聞けないのかい？困った軍人さんだねえ。」

「あら？盗人程ではありませんわ。それにそろそろ仕事にも疲れたでしょうから解放されてみます？永の休暇でもお取りになる事をお勧めいたしますわよ。牢獄の中で。」

「なるほど、休暇は悪くないアイデアだね。だが遠慮させてもらうよ。さあ、さっさと杖を捨てな。腰の銃もだよ。この状況がわからない程の間抜けじゃあないだろう。」

フーケは、凄むがティリエルは笑いを堪えたような表情のままだ。

「この状況がわからない？何を言っているのかしら。わかってないのはあなたの方ではなくて。」

「ちよつと、ここは従っておきなさいよ。」

「いや、ルイズ。大丈夫だ。」

才人がルイズに囁くと剣を握ったまま前が出る。

「フーケって言ったな。お前は根本的な間違いを侵している。」
訝しむフーケに才人はなお続ける。

「たしかに良い武器だ。けどそいつの本分は対物用だ。人に撃つよ
うなもんじゃない。それに」

一旦切ったあと、威厳良く叫ぶ。

「お前は俺達を殺せない！！」

「そうかい。じゃあさようなら。来世じゃあ、もう少しましな死に
かたをするんだね。」

カチッ。

フーケは、見ていた通りに引き金を押した。

だが、当然のように何事も起こらない。

「な、どうして？」

何度も引き金を押すが、変化はない。

「ふふふふふ、は、は、はははははははは！！」

ティリエルが、堪らないといった表情で腹を抱えて笑い出す。

突然の哄笑でフーケは顔を真っ赤にして怒鳴る。

「なんだい！？何が可笑しいんだい！」

「ははは、当然でしょう。そりゃただの鉄屑を自信満々に向けて勝ち誇りつている愚か者を見れば、誰だって笑わずにはいられないはずですもの。」

思ってもいなかった事を言われぎよつとするルイズ達とフーケ。

慌ててフーケが杖を取り出すが、それより早く才人がデルフリンガーを振り下ろしフーケの杖を中程から切断する。

驚くフーケの腹に剣の柄を叩き込む。

「一発だよ。そいつは、俺の世界の………えつとエールペーゲー………なんたらつていうロケットランチャーだ。」

だが気絶したフーケは、そんな事は聞いていない。

「これで仕事は終わったん………だよな？」

ルイズ達に振り返る。

それから学院長室。

戻って報告をしてきた。

途中、ロングビルの採用について酷く抗議されたのは、敢えて割愛する。

「何はともあれ、君達は皆無事に戻って来た。宝も無事取り戻し、フーケも捕まえる事が出来た。これほどの朗報は他に無い。」

「ありがとうございます。」

「君達のシュヴァリエの爵位申請を、宮廷に出しておいた。といっても、ミス・タバサは既にシュヴァリエの称号を持っており、ミス・ルーデルは伯爵の称号とベルカの騎士の称号を持っており、精霊勲章の授与の申請も出しておいた。」

三人の顔が輝く。

爵位のある貴族と、ペーパーの貴族とは雲泥の差だ。

爵位の称号をこの歳で貰えるのは、殆どない。

貴族は爵位に応じて年金が支給される。

勲章も同様である。

収入源を親元に頼る学院の生徒達に取って、自分だけの収入源があるのはうれしい事だ。

ティリエルはというと、まずベルカでは貴族の特権は無いため年金は無いが、ちゃんと仕事をしているし、やはり勲章を幾つも持っているから、生活に不自由はしていない。

「使い魔君もようやってくれた。だが貴族ではないから勲章はあげられん。しかし、それではあまりに不憫じゃ。」

オスマンは机の引き出しを開け、袋を取り出す。

「少しですまんが、わしからのほんのお礼じゃ。受け取っておきなさい。」

受け取った革袋の中には、金貨が200枚ほど入っていた。

「さてと、今日はフリッグの舞踏会じゃ。予定通り行こうとしよう。楽しむのじゃぞ。」

「ありがとうございます。」

5人は礼をして、ドアに向かう。

「素晴らしいですか?」

才人はルイズに一瞥すると部屋に残った。

「言っでごらん下さい。答えられる範囲なら答えてあげよう。」

「はい。あの破壊の杖は、俺のいた世界の武器です。」

「そうか……」

オスマンは椅子に寄り掛かり、遠い目をして言った。

「あの破壊の杖をくれたのは、わしの命の恩人で友人じゃ。」

「その人は、どうしたんですか?その人は、俺の世界の人間です。」

「わからん。どこで何をしておるのか、生きておるのかもわからん。もう20年以上も前の話じゃ。」

「なんだって？」

「20年前。森を暇つぶしに歩いておつたらう。巨大なワイバーンに襲われた。そこを破壊の杖を使って救ってくれたのじゃ。ニコライという名でのう。中々馬の合う奴ですぐに友人となった。彼は戦争で、『あふがにすたん』という場所で戦っておつたらし。彼は良く言っておつてな、「我が祖国は、すべての民が平等で素晴らしい国だ。」と、正直わしはあの時信じようとせんかった。」

「それで………」

オスマンは、目元を擦り。

「彼はこの世界の現状を知ると嘆いてな。全ての民族が平等な社会を作ると言い出してのう。わしは、理想だけでは何もできん！と言つたのじゃが。「大丈夫だオスマン。俺の祖国を作つたレーニンはそれを成し遂げたんだ。じゃあな。俺の話聞いてくれてありがとう。じゃあな同志、革命の日まで。ダスビダーニヤ（また会おう。）。」彼の姿を見たのはそれっきりじゃった。わしはあちこち探し廻つたが……。」

「そうですか………手掛かりになると思つただけどなあ。」

才人は嘆いた。

ルイズには、すぐにあとから行くと言つてあるから聞きたい話はまた今度と言つたら、オスマンはいつでも来なさいと柔和な笑みで答

えた。

才人がドアに手を掛けた時。

「のう。彼の国、『ソビエト』はどっになったのか？」

オスマンは思い出したように聞いた。

才人は、少し間をおいて

「ソビエトは……10年程前に崩壊しました。」

「そうか……」

才人は、ホールのバルコニーにもたれながら、自分とは正反対な雰
囲気の舞踏会のホールをワイン片手に眺めていたのだ。

バルコニーの手摺りにはシエスタが持ってきたつまみの入った皿が
置いてある。

「なあ、さっきから飲み過ぎてねえか？やけ酒は体に良くねえぞ。」

「いいじゃか。飲まなきゃやってられねえ時もあんだよ。」

ワインを瓶ごと煽る。

酒精がだんだん回ってきて、ボーっとした頭で考える。

オスマンの話からして、たぶんアフガン紛争の時のソ連兵だ。

そして彼は知らないだろう。既に自分の祖国も思想も主義も存在していないのだと。

もし、自分が上手く帰れたとして果たしてその時まで帰る国がいるのだろうか。

いや、もしかしたら家族が居なくなっているかもしれないんだ。

それを才人はこの数日間でいやというほど知った。

昨日までであった日常は今日にはなくなっている。

それを紛らわすように酒をもう一度煽る。

なんか、会社から帰ってきた父が酔い潰れるほどまで酒を飲むのがわかった気がする。

だが結構、飲んだがまだ酔い潰れる気配はない。

中学の卒業式のあと、友人と馬鹿騒ぎをしてビールを飲んで一番最後まで起きていたのを振り返る。

案外、酒に強い方かなど思っていると、隣のバルコニーの扉が開いた。

リボンをあしらったドレスを着たティリエルだった。

見た目等身大のフランス人形のような格好でポケットに入っていたケースから葉巻を取り出し、ジッポライターで火を付ける。

やっぱり。

シエスタを手伝った時に見たが、火を付けるときは専ら火打ち石を使う。

だが、目の前でさも自然にライターがある。

「いい機会じゃねえか相棒。嬢ちゃんに聞きてえ事あんだろ？聞いちゃえよ。」

デルフもああ言ってみるし、行ってみるか。

もしかしたら帰る手掛かりがあるかもしれないし。

デルフを肩にかけて隣のバルコニーに移動する。

月はいつ見ても良い。

空をみれば、自分などちっぽけな存在に見える。

中でも月は神秘的だ。

日の光が無ければ輝く事ができない。

まるで自分のようだ。

まあ、それも悪くはない。

表と裏、陰と陽、黒と白、光と影。

自分はどちらかと言われたら、表面的は表で本質は裏かもしれない。

そんな無駄で意味のない事を考えるのが楽しい。

舞踏会は正直好かない。

目が濁り過ぎているから。

「よ、よう……」

振り向くと、そこには気の抜けたような顔があった。

（我慢だ。平常心を保て。）

「何か用でもあるのかしら？」

葉巻の火を消して、ケースに戻す。

「ああ、いやその。」

困ったような顔で頭をかき、

「えっと、ありがとな。なんか色々助けて貰ってさ。」

何となく言いたい事はわかったので「たいしたことありませんわ。」と返しておく。

しばらく後ろに立っているが、何か言いたそうにしているだけだ。

気にはなるが声は掛けない。

気づかないふりをする。

「あのさ！もしかしたらなんだけどさ！ティリエルって……」
ここまで言われたら流石にね。

「俺の世界を知ってるのか？でしょう。」

「知ってるのか？」

才人が必死になって聞いてくるのが面白くてつい小馬鹿にしたような口調になる。

「それどころか、同じ日本人でしたよ。平賀才人君？」

過去形が大事だ。

「なら。「サイト。」

バルコニーにやってきた盛装のルイズが、こちらを交互に見る。

ありゃ。勘違いされちゃまずいわ。

「では、失礼させて。ヒロインのご登場ですから、引っ込ませて頂きますわ。」

ホールに戻り。

ダンスを始めた二人をよそに、夜空を見る。

視線は月ではなく、ここからは見えない場所を見つめる。

「もうすぐ、もうすぐ始まりますわ。戦争が。全てを巻き込む一心不亂の大戦争が。殺し殺され、死んで死なせる戦争が！」

ひとりでに口が動く。

溜まった、殺戮衝動は戦場の高揚感で晴らすとしましょう。

だから、もう少し持ちこたえて。

心に念じながらバルコニーを後にする。

その口は、今昇っている月のような二日月であった。

予期せぬ成功と狼の巣(前書き)

わかる人には、わかるネタ

予期せぬ成功と狼の巣

ベルカ南部のラウベ山地の内側には広大な建造物がある。

名称は『狼の巣』と言う。

対トリスティンを目的に建設された鉄筋コンクリート作りの要塞は、戦時には、ベルカの盾となり西部方面最高司令部となる。

平時には、西部方面に置ける情報を管理する部門となり無駄が無い。

もっとも要塞としてあったのは昔の話であり、結局中途半端な位置で中途半端な規模であったために一度の戦闘を経験しただけで、より立地条件で戦闘向きな要塞がハルベ山脈のトリスティン沿いに完成すると、要塞としての役割は放棄された。

しかし重砲を撤去して残った設備を有効活用した結果、防空要塞として生まれ変わり、また飛行場なども設営されて西部方面で最大の飛行場となり、後方支援施設として活躍している。(通常の要塞としても、高射砲を重砲陣地に水平に構えれば十二分に対応できる。)

その情報管制部門の一室で、二人の職員が働いている。

二人がいる部屋は、数多くある通信室の一つである。

ここには各国(主にトリスティンやアルビオン)に潜入したスパイや工作員からの無線通信を24時間体制でキャッチしている。

24時間体制というのは、当然情報は時間を選ばずにくるからである。

その中には、一刻も早く本部に届かないと価値が無くなってしまいう物もある。

しかし、24時間勤務をしるは流石に酷なので3シフト制にして8時間交代で作業している。

時間はもうすぐ9時半になる。

10時になれば交代の職員が来て彼らはタイムカードを押して家に帰るだけだ。

そして午後2時に出勤して仕事をやる。

「ふわあゝあ」

一人が大欠伸をする。

ぶっちゃけて言うところの仕事、かなり暇で退屈である。

基本的に仕事の内容は、椅子に座って通信機に繋がったタイプライターを見つめて、通信が来て内容が印刷された紙を眺めて、どこの方面か確認した後その担当官に書類を送るだけである。

昔は、無線の交換手の作業もあったのだが、今では全部自動でそれ以外の仕事はたまにかかってくる電話をその部署などの内線に繋ぐことくらいである。

しかも、不定期で時期によってはシフトの時間中一本の連絡も無かったり、情報が殺到して猫の手も借りたい程忙しい時もある。

まあ、問題は退屈な時にどうやって時間を潰すかである。

室内は勿論禁煙で、書類や機器が大量にある為飲食も禁止。おまけに役職上部屋を離れたり、眠る事も出来ないのである。

だから、皆工夫を凝らしている。

電話で暇な部署の奴とチェスをしたり、小説を読んだり、情報を送ってきた諜報員に劳いの言葉を送ったり。

そこに、一本の連絡が入った。

発信先はアルビオン。

コードネームはアーベール。

内容はシティーオブサウスゴータでの決着がついたそうだ。

大敗を決した王制派は、ウェールズ皇太子と親衛隊及び忠誠心のあ
る民兵や傭兵と共にニューカッスルに向けて撤退するが、ジェームズ一世ほか重鎮が捕らえられたとの事。

一通り内容を見た後書類をアルビオン担当の所までの高圧パイプ（高圧の空気が流れているパイプで、書類を丸めて入れる事で目的の場所まで運ばれる。）に入れて送る。

「これじゃあもうジェームズ一世は終わりだ。間違いなく処刑されるな。」

「つーことは、これで残りはプリンス・オブ・ウェールズだけか。」
机の上に足を載せて相方に話かけた。

「どのみちニューカッスルからは、まず逃げられない。これで命運尽きたかな？」

「いや、それはないさ。何せほら。正式に王制派への援助が決まったようだしさ。」

「本当か？それ」

「ああ、嗜好きのカールが言ってたんだ。間違いねえよ。」

「なら、戦争か？」

「普通はそうなるだろうな。まあ、俺達にはさほど関係ねえよ。仕事の量が増えるだけさ。」

「はあ。残業手当、支給されねえかなー。」

「何言ってるんだ？超過勤務手当なんて出やしねえよ。業務時間固定で、こんな単調な仕事して普通より高めの給料もらってるんだぜ？虫が良すぎるぜ。」

「いや、ほらなんて言うか……カミさんに給料上がらないのかって聞かれてさ。上がらないよって言ったら呆れられてさ……」

・・・」

「収入が安定してるって言ってやれよ。」

「それが言えたら苦労しねえよ・・・」

ベルカは（まだ）平和であった。

アルビオン

シティーオブサウスゴータ。

街は今騒がしい。

悪い意味で。

その街のある、市庁舎から両脇を屈強な兵士に支えられた老人が出てくる。

それは、アルビオン国王のジェームズ一世であった。

しかし既にこの土地はアルビオン王国では無かった。

豪華な衣装はボロ雑巾となり、威厳のある風格の顔は痣で腫れ、見る影もない。

兵士達も支えると言うよりは、むしろ引きずるような形だ。

演説が聞こえる。

「まさに今日、我々は一人のブリミル教徒として立ち上がる！裏切りと荒廃とに訣別し、我らが国家は再生する！」

あちこちに設置された魔法具からレコンキスタのリーダー。オリヴアー・クロムウエルの声が聞こえる。

両脇にいるのもレコンキスタ兵だ。

上空には、鑑名をレキシントンと変えたロイヤル・ソブリンが巨大な姿を見せつけている。

通りで待っている馬車は、今まで使っていた王族御用達の馬車ではなく、囚人輸送用であった。

その事が彼の今の扱いを簡潔に表している。

「我々は、伝統ある王族こそがこの壮大なるアルビオンに平和と秩序と繁栄の栄光の時代をもたらしてくれると皆が信じていた！」

乱暴に馬車に押し込まれる。

責めてもの抵抗と自分を捕らえていた兵士を睨みつけようとしたが、その前にマスケット銃の銃床で顔面を殴られる。

「しかし、この男もかつての王族と同様に、私心の赴くままに忠臣たる貴族を罰し、我が国を弱体化させた！」

御者が馬を進ませる。

街中で兵士達が略奪を繰り返しているが今の自分にはなすすべがない。

「我々は家臣の鎖に繋がれた奴隷ではない！」

目の前で罪も無き市民が、暴力の嵐を受けている。

演説の中に聞こえる大歓声は一体だれのものなのか？

馬車の目の前で、小規模な戦闘が始まった。

まだ王族を信頼している、民兵だ。

だが、すぐに鎮圧されてしまった。

「真の強さを見せる時がきた。我らの信仰が試されている。勇気を示すのだ。」

竜騎士が、上空を飛び回る。

「ブリミル教徒の一員として、エルフの呪いから同胞達を解き放て！」

壁に並ばせられた、一団が見えた。

貴族派に盾突いた者たちだ。

次の瞬間、魔法の一斉射撃で処刑された。

「我が兵士は強く、我らの大儀は正しい。まさに今、戦士達は前進し国家の威信を取り戻さんとしている。」

ようやく目的地に着いた。

そこは処刑場だ。

馬車の扉が開かれて、襟首を掴まれ引きずり落とされる。

「聖戦は始まった。」

引きずり落とした兵士が、こちらを見てサドスティックな笑みをしたあと、顔面を踏み付ける。

朦朧とした意識の中、先程と同じように脇を掴まれ引きずられる。

やがて目の前に、妖艶な女が現れ顔を値踏みするようになっている。

そして柱に縛られる。

「我らの聖地を荒らすならば、逆に奴らの土地を荒らし返すだけだ。」

現れたクロムウエルのとなりにあの女が現れる。

そうか。奴が黒幕か……

わかった所で、どうしようもない。

今自分は、処刑される身なのだ。

クロムウエルが女からフロントロックの拳銃を受け取る。

貴族としての情けも無しか……

「これが革命の始まりだ。」

クロムウエルは聖職者らしかぬ表情で、こちらに歩いてきた。

その顔は、まるで玩具を貰った子供のようだった。

クロムウエルは、ジェームズ一世の顔の前でハンマーを上げて、引き金に指をかけた。

至近距離で放たれた鉛の弾丸は、ジェームズ一世の頭蓋骨を砕き、意識を永遠の闇に追いやった。

255

「総司令官、ジェームズ一世が処刑されました。」

「なんだ、存外に早いな。」

報告を持ってきた将校がデスクに座っていた小太りの男に書類を手渡す。

「これでどのみちジェームズ一世は手遅れだ。これであの狂信者共の軍隊は、なんの問題もなくウエルズに殺到するだろう。完璧だ。これぞまさしく完璧だ。ようやくこれで戦争が出来る。悲願の侵略戦争の火蓋が落とせる。」

頬を吊り上げて笑う司令官。

「素晴らしいと思わないかね。このひたすら停滞し続けた時代がこれでようやく終わる。戦争だ。激動騒乱の大戦争だ。これぞ我がベルカがようやく日の本に出る最高の機会だ。この日を、この報告を。我々は待っていたのだ。国王陛下もさぞお喜びだろう。」

将校は頭を垂れて肯定する。

司令官は、すぐにデスクの電話を繋ぎ連絡をする。

連絡するのは、国会議事堂。

国王に連絡して、戦略会議の召集を願うためだ。

「ギンシュ大佐。これは、大事な大事な前哨戦だ。ここで芽を摘まれる訳にはいかない。せつかくフルコースを用意して貰ったのに前菜で席を立つなど言語道断だからな。だが、強行は避けるように。事は慎重に運ぶのが一番だ。」

ダイヤルを回しながら、傍らの将校に話し掛ける総司令官。

「さて、もう夜中だ。しかし私は興奮して眠れないよ。まるで、青年が明日恋人とのデートに行くような気持ちだ。」

事態はゆっくりと確実に進行しつつある。

それを止める事など誰も出来ない。

予期せぬ成功と狼の巣（後書き）

少しやり過ぎたかな・・・

奇襲？強襲？夜襲？急襲？とりあえず、ゆっくり死んで逝ってね！！！！

ジュール・ド・モット伯爵は、トリステインの勅使の一人である。

彼は女癖と服装のセンスには問題があるが、能力は優秀で腐敗塗れの貴族の中では、良識派に属していた。

彼は真剣にトリステインの実情を改善しようと躍起になっていたのだ。

ただ、今回だけは運が悪かった。

新型大砲の設計図が入ったモットは、これを量産する事で来るべき戦に備えて軍事力を強化し、出来るならば輸出してトリステインの収入源の一部としようかと画策したのだ。（工事長の転売は独断であった。）

そんな彼の失態は一つ。

情報の出所を深く追求しなかった事だ。

いや、知っていなかったと言ったら嘘になる。

大体において察しはついていた。

ただあまり深く考えていなかった。

それには他の貴族と同じ、少なからずあるベルカに対する蔑視があった。

それに舐めていたと言える。

常識的に解かるわけ無いし、わざわざ外国にまで来るわけないと思っ
っていたのだ。

故に工場の爆発も単なる事故と疑わなかったのである。

それにそれ以外にも仕事は山積みであった。

そしてその分のツケは、本人に返って来る。

己の死と言う形で。

魔法学院からそう遠くない（とはいえ目視出来る距離ではない。）
モットの別荘の屋敷の前の森には、隠すように馬車が佇んでいる。

その窓にはカーテンが掛けられている。

「行っ
たみたいだぜ。どうする？」

「そう。」

カーテンの影から屋敷の入口を覗いていた一人が声をかける。

「もう少し距離を置いてから行動しましょう。ばれてしまったら、
殺さなくてはいけなくなるでしょう。なるべくそれは避けたいもの。」

「

先程までシエスタがどうのこうなので、モット宅で揉めていたのでそれを観察していたのだ。

馬車の中では、ティリエルが水筒の水を飲んでいる。

空は暗くなっているが、まだ少し明るい。

完全に夕闇に閉ざされるまで待つ。

馬車の中には、3人が待機している。

ティリエルは勿論のこと、ヴィルヘルミナ、そしてティリエルとは対象的な黒いエプロンドレスに山高帽子を被った少女マリサ・ガールランドだ。

ちなみにもう一人いるのだが、裏口で待機して貰っているため姿は見えない（当たり前だ。）

真っ暗な空に星が瞬いている。

しばらくすると、カンテラを持った門番がゲートを開ける。

これぞ待ちに待った物だ。

中から出て来たのは、荷馬車に乗った荒くれ者の集団であった。

彼らは傭兵だ。

フーケ騒動に対し各貴族が取った主な防衛手段は二つ。

まず召し使いや衛兵に武装させることである。

これが一番安上がりであったが、欠点として衛兵はともかく召し使い等は、まず武器を取ることはないため戦力としては若干微妙である（無いよりましといった程度）。

もう一つが、傭兵を雇う事である。

これは、確実な手段だが欠点は金がそれなりにかかる事と、住む場所や食事を賄わなければならない事である。

が、もしもの保険としては、後者がオススメである。

とにかく彼らは、フーケが捕まった事を知った雇い主が契約を解除したのでお払い箱になったのだ。

傭兵としては、殆ど何もしないで金が貰えたのだったから楽な仕事であった。

傭兵の数は一個中隊、120人程だ。

そして残った守衛の数はわずか一個小隊前後（30人程）しかない。

「では、行きましょうか。」

ティリエルは舞踏に誘うようなかるい様子で馬車から下りる。

「交戦規定は？」

サーチ&デストロイ

「見敵必殺。それ以外にありますか？」

「いや。無いな。」

「見敵必殺。了解したのです。」

心強い答えを背に、門に向かう。

門の前には、守衛が二人立っていた。

やる気なさげな様子は、フーケが捕まったことか、厄介な連中が居なくなつた事の安堵か。

とにかく緊張感が無かつた。

まあ、基本的に貴族の邸宅を襲おうなんて馬鹿な輩は殆どいないため、基本平和な職業だ。

二人とも槍を背負っている。

そこに正面から、二つの人影が現れた。

ティリエルとマリサだ。

衛兵はマニュアル通りに制止させる。

「なんだ、お前達は。」

「ここはジュール・ド・モット伯爵の邸宅だ。」

見た目無害そうな少女だ。

だが、只の少女がこんな夜中にしかも、貴族の館に来るなどあまり普通ではない。

「私達、伯爵に仕事をしに来ただけと聞いてない？」

衛兵はそのあどけない微笑みに一瞬引き込まれそうになった。

いかんいかんと首を振る。

しかし『仕事』と言われたら納得がいく。

あのロリコンめ、と心中罵る。

だが、大体においてそういう事は事前に伯爵は知らせていたので、その点は不自然だった。

単に伯爵が忘れていただけかもしれないが、許可が無い者を通すわけにはいかない。

「悪いが許可の無い者を通すわけにはいかん。即刻立ち退きなさい。」

「はいはい、わかったぜ。」

と黒い方が答えた。

「なら、貴方で良いわ。『遊ばない？』」

年輩の衛兵がある事に気づく。

「『遊びましようよ。』」

その笑顔の目は笑っていない事に。

「サムツ!」

優しげな表情を戦士の表情にして槍を掴む。

「コイツらは違う!コイツらは……」

その額に闇夜から飛来した矢が突き刺さる。

鏃は頭蓋骨を貫通して、後ろの白い壁に赤い塗料を付着させる。

突然の事で理解出来ていなかったサムと言われた衛兵は、後ずさる。

「顔色が悪いみたいだぜ。」

「大丈夫かしら。」

二人の表情が悪魔に見える。

「血行を良くしてあげましようか?」

白いのが、何かを振り上げる。

(嘘だろ。ハルバード?どっから出したんだ?)

分の姿だった。

屋敷まで続く庭は典型的な貴族の邸宅と同様に趣向を凝らしたガーデンニングとなっている。

低い木を動物やら幻獣の形に剪定して、大理石の柱の上には騎士やら女神像がいくつも乱立している。

こういった物は芸術としては素晴らしいが、これは侵入者に対してのプラインドになる。

故に警備する側としては、あまり好ましくない地形となる。

その中程にある警備詰め所には、6人の守衛が待機、もとい休憩をしている。

全くもって緊張感が無い。

当然だ。

今彼らには、門の外の連中がどうなった、シフト中だった同僚の末路など何も知らないのだから。

彼らは、パイプを吹かすか支給されたパンとシチューを腹に納めているか、カードゲームに耽っている。

「どっつする、ベットするか？」

「いいだろう。ドウニ銀貨3枚だ。」

「俺はここで一発エキュー金貨1枚だ。」

「俺は下りるよ。」

「なら行くぞ。」

4人は手札を見せる。

「ツープエアだ。」

「ちょ……おま。それでやる気だったのか？」

「うるせえ！お前の役は何なんだよ！！！」

「なにしてフルハウスだけど。」

「はあ？俺はフラッシュだぞ。」

「ふっふっふ。残念だったな、俺はロイヤルストレートフラッシュだぜ！」

「なんだと teme。ちきしょう、おれの金があ〜。」

「くそあ〜。」

「あぶねえ、あぶねえ。」

テーブルが盛り上がっている所で、一人が席を立つ。

「わりい。ちと催しちまった。」

「じゃあねえな、ささっと思ってこいよ。」

そそくさと小走りで詰め所を出る。

詰め所からやや離れた死角になる所で、立ち小便をする。

普通ならとんでもないが、何せ夜中で監視してる奴もいない。

鼻歌混じりに、花壇に水をまく。

その時、後ろから口を塞がれる。

「んぐぐっ!」

突然のことで呻く事しか出来ない彼の心臓に、ナイフが深々と突き刺さる。

しばらくもがくが、やがて白目を向いて息絶える。

その死体を引きずって隠す。

やや離れた場所でも、喉笛をかき切ったマリサが死体を茂みに隠している。

「ピエールの奴遅えなあゝ。何やってんだ?」

「なに、大の方もやってんじゃねえか?」

「ったく。それにしても遅すぎないか?」

男達はカードを切り終わってあとは、人数が揃うのを待つのみだ。既にテーブルの上に五枚カードが配られているが、セコい手を使つてまで勝つ程仲が悪い訳もはないのでイカサマはしていない。

「そついや、ジェロームも帰ってこねえなあ。」

シチューを掻つ込んでいる男も、気になっていたようだ。

だが、流石に今気に掛けている二人が既にこの世を去っているなどとは夢にも思わない。

すぐに後を追うことになるのだが。

風が一阵、舞い込んだと感じた瞬間、テーブルの上に誰かが膝をついていた。

テーブルに付いていた三人が凍りついたように固まった。

否、既に死んでいた。

テーブルの上の少女が持つ得物（右手のククリ、左手のショーテル）からは赤い滴がポタポタたれている。

男達の首には赤いラインがついている。

途端、首が達磨落としに失敗したかの様に吹き飛ぶ。

首から噴き出す鮮血は、壁や天井を赤くデコレートしていく。

シチューの男は突然の事で、呆然としていたが慌てて腰の鞘から剣を抜き、そして手から取り落とした。

体がガクガク震えだしたのだ。

残念ながら、それは恐怖によるものではない。

「やけに気持ち良いみたいだな。」

男の背後からマリサの声がする。

右手に何かを持っている。

「遠慮すんなって。女に挿すばつかで刺される事なんて滅多にないんだろ？良い機会なんだから、ゆっくり楽しんでくれよ。」

マリサが、ぐっと右手を押し込むと男のシャツの胸が少し膨らみ、皮膚を突き破って刃先が飛び出す。

ゴハッ、と血を吐きカクンと糸の切れたマリオネットのように首を倒すと、その身体を串刺しにしたマチエットを抜くマリサ。

その時、詰め所の異変に気付いた二人の守衛が中に入ろうとした。

彼らは叫ぼうとしようとして、バシュ！とくぐもった音と同時に前のめりに倒れる。

その後ろには銃口から煙を僅かに上げる、簡易サプレッサー付きマスケット拳銃を両手に持ったティリエルが立っていた。

「手助けは要らなかつたかしら？」

後頭部に大穴を開けた死体を一瞥して、二人は答えた。

「「当たり前ひんじ(だぜ)。」」

詰め所を出ると、屋敷の入口が見える。

律義に見張りをしていた門番さんには永遠の居眠りをしてもらって、扉の前に立つ。

突入の合図でマリサともうひとりの少女ニナ・デイトリヒは無言で頷く。

オレンジ色の髪を肩まで伸ばして、バラクラバを被っている。

今は見えていないが、身体的特徴は尖った耳と背中に置まれた翼だ。

既に呪文は完成している。あとは……… ドアを蹴破るだけだ。

ボタン！！

観音開きにおもいつきりドアが、開かれ中で仕事をしていたメイドやら執事やらが驚いてドアの前に立つ三人の少女を見つめている。

「従者諸君。お勤めご苦労様。さようなら。」

口上が終わると、杖の先から炎の奔流がホールに溢れ出す。

その灼熱の炎は叫び声をあげようとした執事の喉を炙り、全身を焼き尽くす。

華美なホールは一変して地獄の釜の底になる。

炎は舐めるように、床を這い天井を焦がし、哀れな犠牲者に絡み付く。

それをいつこうに無視して先に進む。

途中ドアが開き、剣を上げて躍りかかる兵士には拳銃を撃ち、槍を持って突撃してくる執事にはハルバードで穂先を切り落としてから胴を風ぐ。

盾を構えて突進してくる輩には、マリサの持つ伸縮可能なハンマーで盾ごと頭を砕く。

曲がり角で待ち伏せする奴には、ニナが舞うように振るう得物で、身体中から鮮血を振り撒く。

階下では、外に逃げようとしたメイドや執事、衛兵が次々と矢で串刺しになっている。

命乞いするメイドにも情け容赦なく、鉛弾か魔法を食らわす。

「なに事だ！これは！」

体にガウンを巻いただけのモット伯爵が執事長に怒鳴る。

つい先程までベットのうえで、やっと手に入れた『召喚されし書物』（エロ本）の内容を見よう見真似でプレイしていた真っ最中であつた。

「は、申し訳ございません。全力で対処していますが。」

冷や汗を垂れ流しながら続ける執事長。

「既に入り口を突破され、現在賊がどこまで入り込んだのかも把握出来ません。」

その自信なさ気な態度は、モットーの怒りを煽る。

「直ちに賊を捕らえよ！ 生きたままだ！ 貴族に反逆する愚か者としてこの手でくびり殺してやる！」

「わかりました。」

執事長が部屋から出ようとドアノブに手を触れた時にドアが開かれ、伸ばした右腕と剣を握った左腕を縦に切断される。

呆気に取られる執事長の首に先程肉を切り裂いた刃を交差させ振り抜く。

ポトリと飛んだ首がモットーの足元に転がる。

「こんばんはだぜ、モットー。滅びの時間がやって来たぜ。覚悟しな。」

異様な雰囲気少女達が歩みを進める。

「お手洗いは済ませましたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えながら命乞いする心の準備は宜しいかしら？」

屋敷を襲った賊の正体を見てモットーは、激昂する。

「なんだと？ふざけるな！こんな餓鬼共が私の屋敷を荒らし回っただと？！」

怒り狂ったモットーはテーブルの上の杖に手を伸ばす。

「だめよ。」

風を切る音がして、モットーの右手にナイフが突き刺さる。杖まであともう少しの所だった。

「ぐおおおおお！！！」

それだけでは、済まさない。

投げナイフを投げたニナは、そのままテーブルに串刺しになった右手にククリを当て、笑顔で引いた。

「つぎやあああああ！！！」

指が全て切断され、血が噴き出し激しい痛みをよじる。しかし、右手机に縫われたままだ。

「き、貴様らあ！誰に手を出したかわかっているのか！私はトリスティン王宮の勅しい……」

今頃、七割五分殺したモットーはいい感じにウルトラ上手に焼けているだろう。

既に館全体に延焼して、窓という窓から黒煙と炎が噴出している。

庭にも火を放ったから、明日には灰しか残らないはずだ。

さて、帰ろう。

これからもっと忙しくなるから。

旅は道連れ

モットー暗殺の翌日。

偏在と入れ代わりに学院に戻り、何事も無かったように授業に出る。

問題は何もない、あえて言うなら授業の講師のギトー先生がこちらに目を合わせずに無視を決め込んでいる。

まあ、あれだけの事をすれば当然の結果でしょう。

反省する気はありませんが。

ただ気になっている事が一つ。

報告では今日、トリステイン王女一行がここに立ち寄る予定なのである。

それ自体はさほど問題は無い。

問題なのは、明後日大使兼護衛としてアルビオン皇太子のウェールズ・テューダーをベルカに無事に亡命させる事。

そして、船が待つラ・ロシエールに行くのが明日。

女王がルイズに手紙の回収と亡命のお願いするのが今日。

日程が完全にダブるのだ。

まあ面倒な事にならなければ良いが。

「では次の「失礼しますぞ!!!」」

講義を遮り突如コルベール先生が、不釣り合いなロールかつらを被って教室に入って来た。

やっぱり、来たか。

その夜

「ああ、ルイズ、ルイズやっぱりだめだわ。」

「姫様。何をおっしゃいます！姫様の為なら私、火の中、水の中、オーク鬼の中（ry）」

知らない人が見たら、二人の周りに百合の花園が見える気がするだろう。

だが、実際話の内容は物騒極まりない。

才人は傍らで待機（無視）させられていたが、なんか姫様の恋人の王子が敵に包囲されてて、その恋人の持つてる手紙が敵に渡るとゲルマニアとの同盟がおじゃんになるとか、そんなとこってのはわかった。

つーか友達を戦場に送るなよ。そんだったら、あのヒゲ野郎にでも頼めばいいじゃんかと心中思う才人だった。

なんか芝居かかってて良いようにルイズを利用してるんじゃないかって思えてくる。

一方ルイズはそんな言葉に酔っている。

なんだかんだ行って、結局やるのは俺なんだ。

流石の才人も呆れた。

気がつくとも目の前にアンリエッタが左手を差し出していた。

はて？どこまで話が進んだのだろう。

「いけません姫様！平民にお手を許すなんて！」

「いいのです。忠誠には報いるところがなければいけません。」

おれ、いつ忠誠誓った？

「わかりました。ほら才人、早くキスしなさい。」

「お、おう。」

やけに鋭い剣幕で言われ、言われた通りにキスをした。

唇に。

キスをした途端、アンリエッタの全身の力が抜けベットに倒れ込む。

「あり？」

「ひ、ひ、ひ姫殿下にな、な、何を！」

同時にドアが開いて誰かが飛び込んできた。

「貴様ツ！！殿下になんてうらやま、ゲフン、ゲフン！！無礼を働くとは！」

「ギーシュ！？」

それは、決闘に負けたギーシュであった。

「あ、あ、あ、あああああああああーッ！！」

「ち、ちよつとまでルイズ！」

突然連続して起こるハプニングにルイズは混乱してしまった。

ど、ど、ど、どうしよう！どうしよう！姫様は気絶しちゃうし、馬鹿犬はキスしちゃうし、ギーシュは機密を聞いちゃうし、ああああもももももも、どうすればいいの！

パニックに陥ったルイズは、魔法を唱える。

「や、やめろ！やめぎゃあ！」

「ひでぶー！」

爆発で吹き飛ぶ才人とギーシュ。

そして上から降ってくる人影。

訳は簡単だ。

爆発は下でなく天井で起こった。

学院の建物には、固定化の魔法がかかったが、今までの度重なる爆発で天井板が限界に達していたのだ。

衝撃で床が抜け、丁度上に居たティリエルと幾つかの家具が落ちてくる。

「え？」

準備が終わって、さあ寝ようと思ったら、いきなり衝撃と共に床が消えた。

流石に突然過ぎて対処のしようがない。

力を込める場所も、バランスをとる時間も魔法を唱える時間もない。

一瞬だ。

頭から固い床にたたき付けられ、意識が飛ぶ。

ドシン！

何か落ちてきたようで、床に伏す人が見える。

たまらず激昂する。

「なんであんたまで来んのよ!!」

むくつと、アンリエッタが起き上がる。

爆音とルイズの怒号で目が覚めた。

どうやらサイレントも効いていたようで騒ぎにはなっていない。

ようやく、床に倒れている3人と立ち尽くしているルイズ気づく。

「なにが起こったのかしらルイズ。」

「あ、ええ!い、いえ姫様、何でもありません。」

ルイズが慌てて取り繕うが、流石に無理だ。

そんな中、テイリエルが起き上がる。

「イタタタ。本当に災難続きね、まったく。」

ポタポタと床に血が滴り落ちる。

「あら、傷口が開いたのかしら。しょうもない。」

頭に手を当てると、手の平が真っ赤になった。

「怪我してるじゃありませんか!すぐに治」

こちらの顔を見たアンリエッタが驚く。

「あ、貴女は！」

「こいつを知ってるんですか。」

「ええ、ベルカ王家の姫君ですわ。」

結局、機密隠蔽の為にラ・ロシエールまで同行させられる事になり（本国に連絡させない為）、その日はそれで終わった。

ティリエルはぶつくさ文句を言いながら、床に穴が空いた自室に戻っていった。

外は、これからの道の険しさを表すように暗雲が立ち込めていた。

朝方。

夜中から降り出した雨は豪雨となり、日光の代わりに稲光が室内を照らす。

窓には大粒の雨が、バシバシたたき付けていて、閃光から少し間を置いて轟が聞こえる。

「これ。起きなさい。」

浅い眠りから覚めると目の前にオスマン校長が居た。

「ダンブルドア学院長先生！いきなりどうしたんですか？」

「これ、これ、静かにしなさい。まだ皆寝ておる。それとわしの名前はおスマンじゃ。」

慌て飛び起きる。

時間はまだ出発するにはまだ早い。

「でも、どうして。」

「アンリエッタ姫様から聞いたのじゃ。ついて来なさい。渡したいものがある。」

オスマンは手で招き、才人は後に続く。

向かった場所は宝物庫であった。

「これから、おぬしが向かう先は戦場じゃ。危険が満ち溢れておるう。身を護る武器があればあるほど心強いじゃろつて。」

ガチャ、と鍵を外すオスマン。

ギイイと軋んだ音
を出して扉が開く。

「この中に、おぬしの世界の物はあるかのう。」

中には、絵画や棚、テーブルや鏡などが並んでいる。

その殆どは芸術品だ。

その中で立てかけてあった物に才人の目は止まった。

木製の銃床を手取る。

「M1 ガラントだ。」

映画などで良く出てくる、第二次大戦時のアメリカ軍標準ライフルだ。

近くには金属で出来た箱があり、中にはバラの弾とクリップ入りの弾が大量に入っていた。

頑丈な作りの銃身には使い込まれていた跡があり、銃口に付けられたままの銃剣には僅かに血痕が残っていた。

この銃の持ち主はどうなったんだろうと考えが頭を過ぎった。

「あつたのかね？」

「はい。」

「ならそれは君にあげよう。」

「良いんですか？」

「宝物庫の中で永久に眠っておるよりは、よっぽど役に立つじやろうて。何よりわしは、君達全員が無事に帰ってくるのが最高の幸せじや。けして諦めてはいかん。」

「ありがとうございます。」

「かまわんよ。何かあったらわしに言いなさい。出来る事なら力になろう。それよりそろそろ時間じゃ。レディーを待たせてはいかん。」

オスマンは笑顔で肩を叩いた。

そして出発の時。

「貴方が護衛のワルド子爵ですね！！よろしくお願いします！！」

「なに！！こちらこそよろしく頼むよ！！」

「才人！！早く乗りなさいよ！！」

「わかってるよ！！」日が明けてくる時間になるが、まだ空は暗いままだ。雨足も弱まる所かますます強まるばかりだ。

「この雨では、流石のグリフォンでも無理だ！！馬車で行こう！！」

「大丈夫なの！！？」

「平気だ！！時間まだたっぷりある！！問題なく着けるはずだ！！」何故に皆叫んでいるかというと、雨音が五月蠅過ぎて大声を出さないとお互い聞き取れないのだ。

ちなみに、御者はわたしがすることになった。

迷彩ポンチョ（雨合羽みたいな物）を被って、傍らに上下2連シヨ

ツトガンを持っている。

「レディーが銃を持つなんて、ベルカ貴族って野蛮ね!!」

「え?!?!」

ルイズが皮肉の言葉を吐くが、こちらには聞こえない。

「レディーが銃なんて持つなんて野蛮だって言ったのよ!!」

「なんですか?!?!もう少しはつきり大声で言ってくれないかしら
!!」

「レ・デ・イ・が・じ・ゆ・う・も・つ・な・ん・て・や・ば・ん・
ね!!!!」

「レディーが銃を持たなくちゃ遠出も出来ないほど、ろくに治安が
維持出来ない貴方達トリスティン貴族に言われたくわありません
わよ!!」

憎まれ口を叩いた後馬車を発進させる。

視界は限りなくクリアの反対だ。

20メートル先も見えない。

「ふう。やっと落ち着いて話せるね。僕の可愛いルイズ。」

「いやだわ、ワルド様。」

隣の席同士でイチヤイチャしているルイズとワルドをお向かいの席に座る二人はまるつきり違う視線を送っていた。

一つは羨望。もう一つは敵意丸出しの視線だ。

だれがだれとは、言わなくても分かるはずだ。

冷たい目をしながら黙々とクリップに弾を込めている。

雨足はますます強くなってきて、外が全く見えない。

「なあギーシュ。港って海にあるんじゃないか？なんかずっと上りみたいけど。」

「君は知らないのかい？ラ・ロシエールの港は山にあるんだ。まあ、見ればすぐに分かるさ。」

その時、才人の頭の中ではウォータージェットのように、山のとっぺんから下に船が落ちていくのを想像していた。

弾を込め終わると何もする事が無くなる。

男同士の会話はレパトリーが無いためすぐに終わった。

目の前の光景を見続けることは拷問に等しい。

道沿いにある切り立った崖。

その上で傭兵達が待機している。

ある貴族に雇われ、待ち伏せをしているのだ。

だが………

「おい！何か見えたか？！」

「駄目だ！！何も見えやしねえ！！！」

視界が悪すぎて、何が何だか検討が着かない。

方向感覚すら乱れる豪雨だ。

「これじゃあ馬車どころか、ゴーレムだって見えやしねえ。」

結局、彼らは馬車を見逃してしまった。

一方。

「どう？タバサ。見つかった。」

馬車のほぼ上空を竜が飛んでいる。

タバサとキュルケだ。

朝方、物音に気づきこっそりついてきたのである。

だが、尾行と言つよりは憶測や勘を交えて予測したの方が正しいだろう。

「駄目。雲が厚過ぎて見えない。」

シルフィードは、雨や雷を避ける為に雲の上を飛んでいる。

いくら竜が素晴らしい視力を持っていたとしても、雲に遮ぎられたらどうしようもない。

「ならラ・ロシエールに向かって。どのみち目的地には来るんだから、先回りしましょうよ。」

タバサは頷いてシルフィードを急旋回させ、ラ・ロシエールに針路を変えた。

ラ・ロシエールは、アルビオン貿易の主要港である。

標高3000メートル地点にあるこの港は、アルビオン貿易にもその他遠方の貿易にも重要な役割を果たす。

標高が高いため、浮遊大陸アルビオンに行く船は、その他の港から出るより風石の節約が出来て、早く風に乗って目的地に荷物を送る事が出来るのだ。

雨足は酷い時よりは大分収まって来たが今だ激しい。

船が係留してある巨大な樹の栈橋には、数しれない船が羽を休めていた。

皆、明日のスヴェルの日を待っているのだ。

一行は、ラ・ロシエール一番の宿『女神の杵』亭に泊まる事になった。

いわば五つ星ホテルである。

当然宿泊料金も馬鹿にならない程高い。

だが、王女の勅使で魔法衛士隊隊長もついでに代金は全部王室あてになる。

さっさとワルドがチェックインを済ませたので、あとは部屋割なのだが空き部屋が二つしか無いために、ワルドと才人とギーシュ。

ルイズとタバサとキュルケとなった。

私は仕方ないから、食堂の椅子を占領して見張りでもしているからと言って部屋を譲り、丸く(?)収まった。

さて、ルイズとワルドがワイン片手に使い魔と将来の事で語り合い、それを才人が、サム・フィッシャーばりに窓からその様子を偵察している頃、下の食堂ではウイスキーをグラスにちびちびやりながら、銃の分解整備をしていた。

時とおり、注文したつまみを口にほつり込みながら、油の染みた布で部品を拭いて汚れを落としてゆく。

しばらくそうしていると、店のドアが開いてフードを被った人が私のある端のテーブルに近づいて来た。

顔を上げる。

「グーデントーク。『ヘル・ジヨンプルはお元気かしら？』」

これは暗号だ。

相手か味方かどうかの確認をしているのだ。

「『ヘル・ジヨンプルは、風邪を拗らせて今治療中だぜ。入院も近いみたいだな。』」

「なるほど。」

フードから見えていた口がニカッと笑いう。

「いつまでも来ないから心配したぜ。ティリエル。」

「ええ、ごめんなさいね。マリサ。」

フードを取ったマリサに椅子を引いて座らせる。

「よくここがわかったわね。」

「合図してきたのはそっちだろ？」

テーブルにやって来たウェイターに幾つか注文を頼んでいる。

「それで状況は？」

ベルカ語に切り替え話を進める。

周りの殆どのトリステイン人には、わからないだろう。

例外はゲルマニア人のキュルケぐらいだ。

「ラ・ロシエール中の傭兵に声がかかったらしい。今も金の樽亭にて集結中でこの宿の周りにも、複数待機してる。」

「限りなく黒ね。船の方は？」

「そつちは白だ。うちの連中がへまかますとは思えないし、内通者は『ここ』だ。」

「でしょうね。奴らは『癌』だし、余程転移させたがってるみたいものね。」

「まあ、ヘル・ジョンブルのときには点滴は打ち込んでるけど、入院は避けられないな。」

「そして、私達が外科手術をして、その後内科。」

「んで、最後に退院してめでたし、めでたしってか。」

「ジョンブルは元気になって、私達は治療費を貰って仲良くなって両方得して、ハッピーエンド。そんなシナリオかしら。」

点滴は援助。入院は亡命。外科は武力行使。内科は政治的。治療費は、賠償金の意味だ。

「もつとも、入院の時点で断られたら、彼らは死ぬしか無くなるでしょうが。」

「そんなときには、力付くでも連れてくさ。」

「まあ、これだけの好条件を断るほど連中が馬鹿な判断をしない事を祈りましょうか。」

「だな。」

「そついや、トリステインの連中も大使を送ったそうだけ。」

「完璧に筒抜けね。どこから情報が漏れているのか、是非知りたいものだわ。」

銃を組み立ててホルスターにしまい、別の銃の分解整備を始める。

「金だつてよ。金さえ渡せば、誰だつて。高級官僚から衛士隊まで、みんな笑顔でベラベラ情報をくれるらしいぜ。その筋に詳しい奴が教えてくれた。」

「色々末期ね。本当に。」

端金で平気で国家機密を話すようになったら、その国はもう終わるだ。

「それで、その大使の一行なんだけど……」

マリサはテーブルにあったウィスキーを瓶ごと煽ったあと続けようとして

「護衛の魔法衛士隊グリフォン隊隊長一名、魔法学院の生徒二名、剣士の少年一名、正体不明の御者一名。」

「なんで知ってるんだ？」

つまみを取り落としたマリサが聞いて来た。

まあ、先程入ったばかりの情報だから知っていたのが不思議でならないのだろう。

「正体不明の御者。私。」

と、自分を指差す。

啞然としていたマリサだが、少し間が経ってから呟いた。

「末期だな。」

「末期よ。」

二人して頷いた。

「しかしなら、参ったなー。」

ぼりぼり頭を掻いているが、全然困ったような表情ではない。

「だとしたら、ベルカとトリステインの競争になるな。」

「無問題でしょう。」

分解整備も終わり、もう一丁もホルスターにしまっ。

「我々はアルビオンに大量の投資をしましたわ。」

火薬、弾、銃、大砲、医療物資、土木資材、傭兵も。

更にこちらは、政府公認の大使が正式な書類を持って、ヴェアヴォルフと姫君を同伴して、ベルカの政府の船でさらに全員を乗せられる船も連れて行きますのよ。

それが、家柄は良くてもただの学生が、護衛は名高い魔法衛士隊の隊長ただ一人と少年一人を同伴しただけで、私的な手紙を持ってチャーター船ないし徒歩で行こうというのだからまさに天と地。

あちらは、アンリエッタ関係を考えれば微妙ですが、条件には大きすぎる程の差がありますのよ。

これで負けるようなら、少々手荒い手段をことうじる必要があるでしょうけどね。」

気がつけば、結構な時間が経っている。

「それじゃあ、またな。グーテナハト。（おやすみなさい。）」

「ビスモルゲン。（また明日。）」

翌日

「駄目だ。殆ど船は明日の夜まで出港しないそうだ。」

棧橋や船乗りのたまり場となっている酒場まで足を運んだワルドだったが、殆どの船が出発の延期もやむなしといった所だ。

「そんな！私達は急いでるのよ！いつまで王政派がもつか分からないのに。」

「無理を言うてはいけないよ、ルイズ。そんな簡単に船は飛べないんだ。」

焦るルイズをワルドが諭す。

雨は幾分小雨になってきているが、昨日までがまでだ。

海の船もそうだが、それ以上に空の船も天候に大きな影響を受ける。

雨だけでも船自体に無駄な重量を加える上に、帆や羽が水分を吸って重くなってコントロールが効かなくなり、速度も落ちる。

そんな中で強風が吹けば、たやすくマストは折れてしまう。

また、風石の消費が激しくなる事は利益が減る事にも繋がる。

何より殆どの船長はまた天候が悪化する事を心配しているのだ。

他の連中はさほど緊張感もなく、食事をしている。(ティリエルは空いたベットと熟睡中)

「ねえ、あなた達まさかアルビオンに行くつもりなの？」

「そうだけど、ツエルプストー。これはお忍びなんだから口出さないでよね。」

「大丈夫よ。面倒事には、関わらないようにしてるから。ところでダーリンはどこ？」

「知らないわよ。あんな奴。」

「続きをいいかなルイズ。」

一旦止まってしまっていたが話を続けるワルド。

「だがなんとか船を見つけてね。一隻は今日の夜。もう一隻は明日の朝出るんだが。」

ここでワルドは困ったような表情をする。

「何か問題でもあるのですか、ワルド様。」

「うん。肝心の船が問題でね。今日、出港する船は、『アドラー号』と言ってベルカ国籍の商船なんだ。」

「ベルカですって!」

「そつだ。彼らは王政派とは言っていたがな。」

「そんな野蛮な奴らの船には乗れませんわ!もう一隻は?」

「こちらは、『マリー・ガラント号』と言ってトリスティン国籍なんだが。」

「じゃあ、それでいいじゃありませんか。」

ルイズが叫ぶが、次の言葉で固まった。

「貴族派に硫黄を運ぶみたいだ。」

「そんな。」

どこの馬の骨とも分からない船で行くか、自国の船だが敵に補給をする船に乗るのか、どちらも貴族たるプライド諸々に障るものであった。

「ならマリー・ガラント号で行きましょう。ベルカなんて信用出来ないわ。」

散々迷ったルイズはトリステインの船を選んだ。

「わかった。行き先はスカボローだから、それまでの道のりを考えておこう。」

ワルドは席を立った。

もう一度酒場に行つて、船長に乗る事を告げるのだ。

入り口に向かう際、ルイズに囁く。

「あの御者が何者か知らないが、用心した方がいい。昨日ここで、密談をしていた。」

そう言い残してワルドは歩いていった。

ちなみにサイトとワルドの決闘は、練兵場が水びたしで出来なかった。(ただ、口頭で「君はルイズを守れない。」と言われてはいる。)

サイトは、悩んでいた。

目の前のドアを開けようか開けまいか、悩んでいた。

「どうするかな。いや、でも聞きたい事もあるしなあ。かと言って寝てるのを起こすのもなあ。」

それに、女子が寝ていた部屋に入るというのも、背徳感があるというか興奮するというか。

意を決してドアを開ける。

カチャ。

ドアを開けると、存在感が薄い事で定評のあるデルフリンガーが叫んだ。

「それ以上近づくんじゃあねえ！」

思わず止まると、一番窓側のベットで寝ていたティリエルが起き上がる。

その手には拳銃が。

「さつきから銃口向けられてたぜ。」

こええ。どこのゴルゴだよと思う才人。

「ドアの前に立たねれば、流石に気づきますわ。一体全体なんの御用で？」

目を擦りながらこちらを見るのは、とても先程までの危険な雰囲気漂わせていた人物には見えない。

「えっと、なんだ。その、これ。」

言葉を濁しながら、とりあえず背中に背負ってきた銃を渡す。

「なんだか分かるか？」

「M1ガーランドでしょう。そんな事一目見れば分かりますけど。」

若干呼びかたが異なるが問題は無い。

自然な動作でセフティを外して、ボルトを引いて弾が入っていない事を確認すると、何も無い空間に向けて構えて、引き金を引く。

カチ

乾いた空撃ちの音がした後、セフティをもどしてそれを返す。

「それで用件は終わりかしら？」

「なあ。」

話を終わしたがるのを遮るように無理矢理話を繋ぐ。

「俺って弱いか？」

正直ギーシュには勝った。フーケにも負けてない。

ただどワルドに言われてから、心のもやもやが取れない。

だから聞いたのだ。

俺は本当に弱いのか？

俺はルイズを守れるのか？

それを聞いたティリエルは薄く笑った。

「さあ？どうでしょう。」

「強いというのは、何を基準に？何から？何に対してかしら？」

妖艶な笑みには、微かに何か混ざっている。

「強さ。それは難しいもの。腕力？知力？いやいや、総合的なもの？」

逆に聞かれて戸惑う才人。

「確かに、ギーシュには勝ちました。ただそれは戦いにおいてだけ。いや、それでも一回勝っただけですから、確実に強いとは言えませんわね。」

困ったように首を傾げるが、困ったようには見えない。

「強さとは一度ではわかりませんし、そもそも強さは第三者の客観的な目でなければ計ることが出来ない。それに強さは考え方次第では逆転しますから、はてさてどうにも困った。」

わざとやっているのだろう。

「ワルドは、俺じゃあルイズは守れないって言った。俺はどうしたら良い？」

「成る程、成る程。確かにワルド子爵は衛士隊隊長。戦闘での強さはピカイチでしょうね。ただ、それが全てとは限りませんわ。戦いにおいては、戦闘状況や相手の状態、相性など数え切れない差異の中では、勝負などどうともなるでしょうから。一番大事な事は、自分が相手より勝っている部分で戦い、そして確実に勝つ気概で挑むこと。これが戦いに置ける全てでしょう。」

なんか半分くらいしか、分からなかったが言いたい事はわかった。

「まあ、私の言ったことは100%正しい訳ではありませんから。まあ」

そこで凶悪な笑みをしながら、

「これから実地で嫌とゆうほど経験するでしょうから、せいぜい緊張って確かめて下さいな。」

と、言った。

「あ、ありがとな。」

「例には及びません。では、お休みなさい。」

ドアを閉められ部屋から追い出された。

よし、なんか自信がついた。

しかし、もう夕暮れか。

寝すぎたな。

下でギーシュ達が酒盛りをやっている。

こんな状況なのに、良く酒なんか飲んでられるなと思う。

もしかしたら、こんな状況だから酒を飲まなきゃ、やってられないかもしれない。

夕飯もそろそろだし、行ってみるか。

酒場のバツカーノ（馬鹿騒ぎ）は、絶頂を迎える。

同時に招かるざる客をも呼び寄せ。

祭は始まったばかりだ。

女神の杵亭の入口に、傭兵達が集結しつつある。

「配置終わったか？」

頬に刀傷を付けた厳つい男がタバコを上下に揺らす。

彼は、焦土のマイヤーの異名を持つ傭兵隊長だ。傭兵の中では、白炎のメンヌヴィルと共に五本の指に入る程知名度が高い。

「終わりましたよ、隊長。連中、寄せ集めの癖になかなかやる。」

副長が報告に来る。

彼はメンヌヴィルなどと個人の戦闘力で名を馳せたのとは違い、集団で組織的な戦闘を得意とした。

たいていの傭兵は徒党を組む事はあるが、それは成り行きで継続的な物ではない。

だがマイヤー率いるブラッド・カンパニー傭兵団は統率の取れた手練の戦争屋を一つの軍隊として稼働させる凄腕奴の集まりだ。

今風に言うなら、PMCである。

故に人気が高く、紛争などでは双方で引つ張りだこだ。

「そうか。なら始めようや。」

マイヤーの後に何人者軽装鎧を付けた傭兵が続く。

ワルドやギーシュが飲んでいると急にドアが開かれる。

「イエア、楽しんで飲んでるか？クソ野郎共！！」

両手には導火線のついた黒い固まりが幾つも握られている。

当然だが、導火線には火がついている。

「俺からのささやかなプレゼントだ。受け取れ。」

手の中の爆弾を啞然としている貴族の客目掛けて投げつける。

悲鳴を上げて席を立とうとする前にそれが爆発する。

何人かまともに喰らった貴族が血煙になり、残った者も少なからず影響がでている。

「逃げる奴はクソ共だ！逃げない奴は良く訓練されたクソ共だ！全く戦争は地獄だぜ！ハハハハハハ！！！」

残っている者にも無差別に攻撃を加える。

オーナーも、俺の店が何をした！、と言ったところで胸に鉛弾を喰らって崩れ落ちる。

生き残っているのは、テーブルを楯にして持ちこたえたルイズ一行だが、攻撃は激しさを増す。

ギーシュが机を錬金で青銅にしていなかったら辛くも破られていただろう。

一方傭兵達も、予想通りの反撃を喰らい一旦有効射程圏外に後退した。

だが室内のが不利だ。

外からは明かりで中が丸わかりだが、中からは外は暗くて何も見えない。

おまけに射程の長いロングボウ部隊がいて、それが常に攻撃しているから頭も出せない。

おまけに圧倒的な数の差がある。

このまま攻撃し続ければ、いずれ精神力が底を尽く。

そしたらゆっくり鬨り殺すなり、犯すなりし放題だ。

ただ幾つか例外もあった。

ガンン！ガンン！ガンン！

テーブルの間隙から銃を突き出し発砲する。

銃だけを見せている状態なので向こうは攻撃出来ない。

だが、弾切れになるとすぐに矢が飛来する。

入れ代わりに杖を突き出し、射程が長めの火球を勘でばらまく。

「参ったね。」

ワルドがぼつりと呟く。

才人がフーケを見た事をワルド達に伝えたが、玄関からゴーレムの足が見えている。

「脱走したフーケがいるって事は、背後にアルビオンの貴族派が一枚噛んでいるな。どうやら僕らの任務の情報が漏れていたって事だね。」

「まずいわね。このままじゃ八方塞がりじゃない。いずれ精神力切れを狙って、突入してくるわよ。そしたらどうすんの？」

「僕のワルキューレが防ぐさ。」

ギーシュが勇ましげに言ったが、膝がガクガクしては信用などまず無理だ。

「あなたのゴーレムじゃあ、一個小隊防げれば良い方ね。戦争慣れた傭兵を舐めないほうが良いわよ？」

「うぐ、安心したまえ。僕はグラモン元帥の息子だぞ。卑しい傭兵共に遅れを取るはずがない。」

気障っぽい口調で言うギーシュ。

「『安心したまえ』？希望的観測で戦った軍隊で敗北しなかったためにはありませんわよ。勝つに足る根拠を示してから大口を叩いてくださいな。」

寝起きで不機嫌そうな顔でマガジンを交換しながらギーシュに言った。

才人は立ち上がってM1ガーランドを連射する。

ピン！、と音を立て空のクリップが宙を舞う。

「いいか、諸君このような任務は半数が目的地に辿り着けば、成功とされる。」

ワルドは低い声で言った。

「なら、さっさと行って下さいな。」

タバサが杖で才人とルイズとワルドを指す。

「なら裏口から行こう。」

「援護しますから棧橋へ。」

「早く。」

皆に言われて頷くルイズと才人。

「援護射撃！」

合図と同時に、一斉に魔法と銃弾が放たれる。

激しい弾幕で敵の攻撃が止む。

「今だ！行け！行け！行け！」

攻撃が止んだ隙に

姿勢を低くして裏口から逃れるルイズ達。

弾幕が止むと、お返しとばかりに攻撃される。

「それで、どうするのだね？僕達は動けないじゃないか。」

弱みを吐くギーシュに、床を転がってきたシャンパンを一口煽って言う。

「あと、30秒で片付きますから、焦らずに行きましょう。」きっかり30秒後。

パツ、と突然外が赤く明るくなり、闇にはゆらゆらと幽鬼のように漂う光源が浮かんでいる。

あまりの突然の出来事で思わず攻撃の手を緩めて空を見上げてしまふ。

それが命取りになった。

「つまずい！攻撃だあ！！」

マイヤーが直感で気づいた。

そして頭から脳漿と骨の破片と血を撒き散らして崩れ落ちる。

同様に数人、頭を吹っ飛ばされる。

「なんだ、ちきしょう！！」

「どっから来やがった！？」

パニックに陥る傭兵達。

圧倒的優勢から、急に苦戦し出すと兵士は結構脆い。

おまけにまず狙ったのは指揮官だから、連中は頭をもがれた状態である。

こうしている間にも、次々と狙撃されて行く傭兵達。

蜘蛛の子を逃がすように散ってゆく。

迂闊にも入口背を向けていた傭兵は、後ろからの射撃でこそって倒れる。

狙いを替えると事態を把握出来ない奴と目が合った。

こちらを見て理解出来ないような表情をする。

引き金を引き、反動でポルトが後退して薬莢が弾き出され、銃口から発射ガスと音速を超えた7・62ミリの拳銃弾が飛び出しほうけた表情の額に穴を開ける。

薬莢が床に落ちた時には、ラ・ロシエールから銃声は消えていた。

理解が追い付いていないキュルケやギーシュを置いて、宿を出る。

辺りには暗闇から現れた兵士が、死体をチェックしている。

そのうち一人が声を掛けてくる。

顔は良く知っている。

「少し遅かったわね。」

「ちゃんと来てやったろ。文句を言われる筋合いは無いぜ。」

M G 4 2を肩に掛けたマリサが笑顔で立っていた。

「お迎えにあがりましたぜ、お嬢さま。」

わざと行儀しい態度を取るマリサに苦笑する。

「一応聞くけどメンバーと装備はは？」

「全員揃ったぜ。装備はフルだ。一応な。」

「上出来ね。では行きましょう。」

アドラー号は、帆船だがディーゼルエンジンを積んである中型の貨物船だ。

表向きは。

実際の正体はベルカ海軍に所属する偽装商船である。

また、仮装巡洋艦としての能力をも持つ。

この船の目的地はロサイスとなっているがもちろん違う。

行き先は、勿論ニューカッスル城だ。

ニューカッスルを目指して(前書き)

連続投稿は疲れる。

ニューカッスルを目指して

天気はやや回復しつつあり問題は特に無い。

敬礼を受けて返礼すると、士官に部屋まで案内される。

部屋と言っても、通常の船にある豪華な貴族用の個室ではなく、二段ベットが二つ並んだ士官室だ。

一応貨物室も存在する上、武装もしてありスペースを稼ぐ為に皺寄せが来たのだ。

まあ、これでも全然困らないが。

「そういえば、フーケはどうしました？姿が見えないようでしたけど。」

「馬鹿でかい図体にパンツァーシユレックぶち込んだらさっさと逃げ出したぜ。流石盗賊だな。」

山高帽子を外して髪についた泥を落とすマリサ。

荷物をまとめていると、窓から動き回っているのが見える。

「もやいを解け！タラップを上げろ！」

どうやら船員はその作業をしているようだ。

船が僅かに振動しているのはディーゼルエンジンが始動したのだ。

マリーガラント号は既に出港しているから、追い掛けるような形になる。

が、到着は朝方になるようだ。

それまでゆっくりベットに横になる。

トリステイン沖合上空。

マリーガラント号。

マリーガラント号は他の船がガレオン船なのと違いクリッパー船だ。

積載量はガレオン船よりやや少なく、強度も低いがその分機動性が高く、速度も早い。

その貴賓室では三人が港に着くのを待っている。

空はまだ雲が覆っているが、それだけだ。

航海は順調に進んでいるように見えた。

そしてようやく目的の姿が目に入ってくる。

「うおお！すげえなー。」

丸く窓に張り付いて外を見る。

白い霧に包まれた浮遊大陸アルビオンが現れた。

「すごいぞ。ラピユタは本当に合ったんだ！」

実際は、ラピユタの比ではないほどでかい。

大陸と呼ばれているだけある。

ただもちろん、実は内部が王族しか入れない領域だったり、エネルギー兵器があったり、ロボット兵器が積載されていたりなどはしない。

あつたら王政派が勝っていた。

ただ飛行石の代わりに風石のせいで飛んでいる点は、よく似ている。

才人の中では、風石イコール飛行石と捕らえている。

まあ、ピンチの時に自動で助けてくれたり、呪文で光ったり、滅びの呪文で「目が、目があゝ！」みたいになつたりもしない。

初めて飛行機に乗った子供のように過ぎ行く景色を眺めていると一つポツンと黒い点が見えた。

それは近づいてくるのか、段々大きくなってゆく。

それはやがて黒い帆船の形になる。

全体的にマリーガラント号よりごつく、一回り大きい。

そして全体をタールで染めて、舷から幾つもの大砲が突き出ている。
軍艦だ。

船の上が騒がしくなる。

ルイズが様子を見に行こうと言ったので甲板に向かう。

「どうした？」

船舵を操っていた船長にワルドが聞く。

「へえ。もしかしたら、貴族派の臨検の可能性があります。丁度呼びに行こうと思ってたところですよ。」

「貴族派か？厄介だな。」

望遠鏡で船を見る。

サイズからいって巡洋艦クラスだ。

そのマストには、レコンキスタの旗と停船命令の信号旗が翻っている。

「この船はレコンキスタの旦那方がチャーターしたもんですから問題は無いでしょうが、あんた達は……少し厄介ですな。もし聞かれたら適当にごまかしてくださいませ。」

もし怪しまれたら厄介な事になる。

船は完全に停止して、臨検を待っている。

ルイズが不安げにその作業を眺めていた。

敵が乗り込んでくるのである。

しかし状況は更に変わりつつある。

向こうのレコンキスタの旗がスルスルと下ろされて、代わりに別の旗が上がってゆく。

その旗をレンズ越しに見た、船長の顔が青ざめて引き攣る。

新しく上がった旗には、黒地に白く頭蓋骨と交差する骨がかかっている。

「く、空賊だあ！」

そうだ、とばかりに並んだ大砲の一つが火を噴く、丸い砲弾が船体を掠める。

逃げたり、抵抗したら撃つとの意思表示だ。

いくらクリッパー船が速いとはいえ、完全に停止した状態では最大速度に乗るまで時間が掛かる。

それにこの距離では大砲の射程圏外に逃げる前に撃沈されてしまう。

一般的な帆船は装甲など無きに等しい。

ましてや、速度と積載重量を稼ぐ為に極限まで頑丈さを犠牲にしているクリッパー船など紙だ。

砲弾一発で竜骨が折れて真っ二つだ。

甲板には、移動式の大砲とカロネードがついているが軍艦のに比べたら小口径で、おまけに攻撃など想定していないから、誰もっていない。

「白旗を上げる。抵抗する意思が無い事を伝えるんだ。」

船長は力無く、水夫に命令を下した。

空賊船が、接舷するとサーベルやマスケット銃などの得物を男達がマリーガラント号に乗り移ってくる。

ワルドのグリフォンも異変に気づいて暴れだしたが、スリープ・クラウドで眠らされてしまう。

どうやらメイジも混じっているようだ。

ルイズ達の前にも屈強な男が剣を突き付ける。

「貴族様方、杖を捨ててくだせえ。坊主は武器だ。」

この状況下での戦いは博打である。

数は多く、相手は空賊で抜目ない。

「絶対に武器を捨てちゃだめだからね。」

ルイズが虚勢を張るが左右に控える男性二人は、より理性的だ。

ワルドは腰の軍杖を外して床に置く。

才人も構えていたライフルを床に投げ捨てる。

「あんちゃん達は、物分かりが良くて助かるぜ。」

男は、剣先と目線を外さずに杖と銃を回収する。

「ちよつと！なんで捨てるのよ！」

空気を読めないルイズが抗議する。

「ルイズ、やめておいたほうがいい。この数では流石に僕でも無理だ。それに甲板の彼らを倒したところで大砲を撃たれたら一巻の終わりだ。」

「あのなあ、この状況で空気読めないと死ぬぞ。映画だって武器を捨てなかった奴らは蜂の巣になったんだし。」

そして、

ガシャン！

海賊船の船倉に閉じ込められた。

「さて。」

とりあえず何もすることがない。

周りには、樽に入った火薬やら食糧やら砲弾とかが置かれている。

つか、流石に火薬とか無用心過ぎるだろうと思っていたりする。

しかし、海賊船なのに牢屋が無いなんて不思議だなあと思いながら何か使えそうな物を捜している。

ルイズは、せわしくうろつろしている。

ワルドは神経が太いのか自然体だ。

「とりあえずどうします?」

座って目をつむっているワルドに小声で話し掛ける。

才人はこっそり隠し持っていた拳銃とナイフを取り出す。

「でかしたぞ、使い魔君。」

ワルドがナイフ、才人が拳銃を手に取る。

問題はどっやって外に出るかだ。

鍵のかかったドアは木製で拳銃でも壊せるが、そんな事をしたら銃声で文字通り一発ではれてしまう。

そもそも看守がドアの前にいるのだから駄目だ。

後は火薬樽に銃を向けて、爆破するぞと脅しをかけるか、適当に理由をつけて看守を中に入れさせるか。

ただ前者は、今マリーガラント号を曳航しているから非常時には乗り移ることが出来る。

後者はルイズの演技力だ。

「だから、腹痛でもなんでもいいから適当に呻いたり泣いたりしてくれよ。」

「嫌よ。なんで私がそんな事しなきゃいけないのよ。」

二人が言い合っていると上がなにやら騒がしい。

「なんだ？」

その時何かが壁を突き破って中に入って来た。

そして、横板を破壊した威力を失わずにドアにぶちあたる。

ドアは何も抵抗が出来ず、吹き飛んだ。

看守と共に。

ルイズと才人が、ドアが外れた出入口から顔を出す。

そして、ドアの外に広がる光景にぞっとした。

目の前には看守だったモノが散らばっている。

反対側の壁には、煙をあげる砲弾が減り込んでいた。

砲弾をまともに腹に喰らったらしく上半身と下半身が分かれてしまっている。

下半身は床にソーセイジの出来損ないのように腸をこぼして、上半身も胸が裂けて肋骨が見えている。

あまりの光景にルイズは口元を押さえて、顔を逸らしそこから逃げる。

「う・・・ぐっ・・・ゲホッ・・・」

耐え切れずに胃の内容物を吐き出す。

ドアが吹き飛び、船体に穴が空いたせいで、喧騒が大きくなる。

大砲も撃っている。

「全く、最悪だ。」

ワールドが呟く。

裂け目から見えたのは、こちらを砲撃する3隻の海賊船だった。

「艦長。」

アドラー号は目的地のニューカッスル城の辺りにまで近づいた。

「どうした？」

部下の返事に返す艦長だが、彼は人間ではない。

黄色い皮膚に大きくずんぐりした身体。

とどめに帽子を外した頭に小さな椰子の木が突き出している。俗に言うモンテ族だが、そんなことはどうだっていい。

何故ここにいるのかも聞いてはいけない。

「レーダーに感あり、2時の方角に5隻を探知しました。同時に聴音機が、砲撃音らしきものを捉えました。」

「なんだと！」

「艦長！見張りより報告です。」

別の船員が入ってくる。

「海賊船三隻が、貨物船一隻と同伴する別の海賊船と交戦中。なお貨物船はマリーガラントで、同伴する海賊船は海賊旗を掲げていますが、船の形状からおそらくインヴェンシブル級軽巡のイーグル号かと思われます。」

「成る程、インヴェンシブル級なら王政派も二隻持っていたはずだ。

「イーグル号は、二年前の接触事故で艦首部分を改装してありますから見分けがつかしました。」

満足のいく答えに船長は頷く。

「それで現状は？」

「は、現在イーグル号が苦戦中です。なお、彼らの進路はこちらを向いています。」

艦長は髭を弄りながら思索する。

「戦闘は避けられんか。ならばこちらから先手を打つまでだ。総員、第一級戦闘配置。イーグル号を援護する。機関全速、針路045。」

「了解！機関全速、面舵一杯！」

戦いが始まる。

うって代わって、イーグル号。

現在、イーグル号ははなはな不利である。

純粋な戦闘能力では、明らかにイーグル号に軍配が上がる。

そもそも、民間の改造船が軍艦に敵う筈がない。

だが、それはあくまでデータ上の話だ。

相手が複数の場合はその限りではない。

しかも、装甲の無いマリーガラント号を計らずとも護衛しなければならぬので巡洋艦自慢の機動性を活かせず、相手より優位な立ち位置に着くことが出来ない。

仮に逃げようとしても、ニューカッスル城にそのまま逃げれば、当然ついて来る事になる。

そうなれば、秘密の港の位置がばれて、完全に包囲される事になる。そんな事になれば今度こそ終わりだ。

それを悟っている（そうでなくては、普通軍艦に勝負など挑まない）海賊側も数の多さを生かしてイーグル号を囲むように砲撃してくる。

この時代の船の大砲は設計上、ほぼ真横にしか攻撃出来ない。

そのために、単一目標にしか狙いを定める事しか出来ない。それに命中率も悪い。

さらに最悪な事に、イーグル号は航続距離と機動力を増す為に、大砲を半分しか積んでいない。代わりに、樽で作ったハリボテの筒先を突き出してはいるのだ。（その降ろした分の大砲で、ニューカッスル城を強化している。）

一方の敵は、一隻辺りの砲数も練度も低いが、3隻でカバーしあっている。

「第3砲室がやられました！第4、第5も使用不能！このままでは危険です！いつまでも耐えられるかわかりません！殿下、今すぐにもマリーガラント号に移譲し脱出して下さい！」

損害を報告しに来た親衛隊の士官が悲痛な声で指揮を取っている崇拝するウェールズ皇太子に告げる。

「ニューカッスル城に伝令は送ったのか？」

「送りましたが、無事に届いたかどうか・・・届いていたとしても、インヴェインシブルの到着まで持ちこたえられるか・・・」

現在王政派の保有するのはイーグル号を含めて三隻しかない。

一つは、インヴェインシブル級の二番艦のイーグル。

もう一つは、同じくインヴェインシブル級の一番艦、インヴェインシブル。

最後にロイヤル・ソプリン級の三番艦、ロイヤル・オークのみとなっている。

だが、インヴェインシブルは一昨日貴族派の陣地を攻撃した際に対空砲火で損傷しており、万全では無い。

ロイヤル・オークに到っては未完成の状態で引っ張り出してきたので、ろくな武装すらしていない。

その時、一隻の海賊船が針路を変えて明後日の方向を向く。

船先の向こうには、黒い煙を上げる船があった。

突然のアラームで横になっていたベットから飛び起きた。

軍人をやっていると、自然と目が覚めるように身につく。

外は慌ただしい。

マリサも後から来たヴィルヘルミナと二ナも体を起こす。

ドアが勢いよく開き、甲板士官が顔出す。

「敵です！出来るならば武装して配置についていただきたく。」

そこまで言っただけで去って行く。

成る程、ゲストにも区別無く戦えと言う訳か。

確かに沈んだら、運よく内火艇で脱出しない限り船と共に海の底に
逝く事になるだろう。

軍服は下だけ着ていたので、上着を羽織るだけですんだ。下の方に
ある武器庫に急ぐ。

武器庫には先に来ていた武装親衛隊の隊員が重火器を担いで甲板に
向かう。

武器庫は、そこらのより立派だ。

流石にライフルで船と撃ち合うのは御免被りたい。

手元のパンツァーシュレックを肩に担いで、ロケット弾が入った箱を脇に挟んで他の兵士と入れ代わりに外に出る。

マリサはMG42に弾薬箱から取り出した弾帯を巻き付け、首に掛け、ロケット弾の入ったバックを肩に掛けて、片手に替えの銃身とギチギチに詰めた弾薬箱を持ってゴテゴテの状態でついて来た。

良く狭い入口が通れたな。

甲板に出ると、水兵達が慌ただしく動いていた。

一番近い水兵は、備え付けられた銃架に20ミリ機関砲を取り付けている。

船側には、砲弾の破片や弾を防げる装甲板がついている。

そこに体が隠れるようにしゃがむと、パンツァーシュレックの後ろからロケット弾を装填する。

正直、88ミリの成形炸薬弾が木造戦艦にどんな効果をもたらすのか、分からないが効かないことは、流石に無いだろう。

ほぼ全員戦闘体制を取ったようだ。

マリサは装甲板にMG42を掛けて装填した。

ヴィルヘルミナはロケット弾の箱を山のように持ってきた。

ニナは艦橋の上からライフルを構えている。

狙撃でもするつもりだろう。

他の兵士は、主にパンツァーシュレックを構えている。

彼我の距離は、3リーグに近づいた。

海賊船の船長は、こちらに正対する勇敢な輸送船を見つめている。

彼ら海賊にとっては、鴨が一匹増えたに過ぎない。

最近縄張りを荒らす、新参者を潰しに来たついでだ。

輸送船の荷物を貴族派に高く売れば儲けが出るし、人質の身代金も馬鹿に出来ない。

おまけに押収した船を売却したり新たな戦力に出来たりも出来る。

つまり美味しい商売だ。

ついてる事に今回の獲物は、ベルカ船だ。

これならば、貴族派もかなりの金を出してくれる。

いや、これならば売らずに取っておいたほうが良いかもしれない。

口髭を弄りながら、拿捕した後の皮算用をする船長。

その時、標的の船の上甲板で激し光と煙が上がった。

だが、誰も焦らない。

この距離では大砲はまず届かないし届いても当たらないと知っているからだ。

せいぜい悪あがきしてもらうか。

これから手に入る新しい船を思うとにやけてくる。

だが、その夢は叶わない。

目の効く見張りが頭上を指差しなにやら叫ぶ。

見上げようとして、気がつくとも木片の中で空中を待っていた。

「ほう。当たりましたか。」

首から下げた双眼鏡を覗いて、炎上する海賊船を見つめる。

アドラー号の艦橋の前方に積まれた、ネーベル・ヴェルファーから発射された6発のロケット弾の内の一発が敵艦を直撃したのだ。

15センチのロケット弾は、船長他操舵手など航海に重要な役割を果たす船尾楼甲板を吹き飛ばした。

榴弾は甲板こそ貫通しなかったものの爆発は激しく船長以下、楼にいた人員のほぼ全員が死亡。または再起不能の重傷を負い、操舵も不可能になってしまった。

また、衝撃波で甲板の水兵が吹き飛ばされた他マストが3本中2本

が根元から折れて速度がグッと下がった。

しかし、竜骨が折れる事も火薬に引火する事がなかったのはまさに奇跡である。

全体的に見れば小破ないし中破である。

だが戦闘能力自体は健全でも頭が消えてしまったのは痛い。

何より操舵が効かないのが最悪だ。

しかし海賊船も黙ってはいない。

船側から白煙が吹き出して砲弾が飛来するだが、距離が遠すぎてま
ず当たりっこ無い。

性能上は届くがこの時代、狙いを付けるのは専ら舵取りが左右した。
砲自体も測距儀どころか簡単な照準もろくについていないような代
物だ。

なのでお互いが近く船側を敵に向けたら一斉に撃つのだ。

そうで無い時は、勘か確率に頼って撃つしかない。

アドラー号からも応射する。

88ミリ砲と、船腹に突き出した105ミリ砲が火を噴く。

衝撃で船体が僅かに揺れる。

だが流石に百発百中とはいかない。

狙って、撃って、当たればさほど苦勞はしない。

弾道計算をしつつ、攻撃するのが大砲の基本だ。

艦首の37ミリ機関砲と20ミリ機関砲も発砲炎を噴き上げながら撃ちまくる。

時たま飛び出す曳光弾が射線をなぞる。

こちらは、打撃力は劣るが弹幕は確実に命中している。

命中する度に船体の一部が木片となって飛び散る。

再び砲声が響き、砲弾が飛び出す。

今度は、88ミリだ。

弾は船腹に命中した。

そして、爆発せずに反対側に突き抜けてしまった。

装甲がお粗末過ぎて逆に炸裂しなかったようだ。

だが、20ミリと37ミリで蜂の巣状態であるから地獄には変わらない。

最後に105ミリ砲が発射されて、今度はちゃんと炸裂した。

砲弾は中に飛び込み内部で炸裂した。

同時に火薬庫に誘爆して風石も暴走して炎を煽り、破口と砲口から紅蓮が噴き出る。

炎の圧力にも耐えられなかったようで船体が真つ二つに折れ曲がり、落ちてゆく。

裂け目から、砲弾やら積み荷やら、生きた人間やら死んだ人間やらが落ちてゆく。

生きた人間と死んだ人間の区別？

悲鳴を上げて手足をばたつかせながら落ちていくのが生きた人間。

死んだ人間は、なんの反応も無く頭から落ちてゆく。

まさに、人がゴミのようだ。

一歩間違えれば、自分達も同じ目に会う事になるわけだから難しい。

さて、一隻は沈めたがまだ二隻残っている。

もともと、今回の主役は水兵達なわけで私たちは150メートル（マイル）以内に近づかなくては仕事がない。

まあ、仕事が無い方が良くに決まってるが……

……

……どうせなら、ね？

また、ところ変わってイーグル号。

海賊船の爆破は、こちらでも視認出来ていた。

「うおおおおー!!」

「やったぞ!!」

「イエーア!!」

「やりやがった!!」

甲板で歓声上がる。

先程、発光信号でこうあった。

『アルビオン空軍イーグル号へ。ワレ、ベルカ海軍アドラー号。コレヨリ貴艦ヲ援護ス。アドラー号艦長。』

「有り難いところに来てくれましたな殿下。」

油塗れの顔を拭う副長が傍らで同じく歓喜の表情のウェールズを仰ぐ。

「本当だな。まだ我々も神に見捨てられてはいないようだ。」

ウェールズは変装を外すと、忠誠厚い部下達をたきつける。

「諸君、勝機は今だ。我々はこんな場末の戦いでは死ねぬ。撃って、撃って、撃ちまくって海賊共にアルビオン王立海軍の勇猛さを見せ

付けるのだ!!」

ウェールズが拳を振り上げると同調して水兵達が雄叫びを上げる。その声乗り移ったように、アルビオンの新式砲弾、爆裂弾が、混乱してイーグルに船首を向けた海賊船に命中した。

砲撃に耐える為に分厚くなっている舷側と違い船首と船尾は薄くなっている。

砲撃はそこを貫通して艦底で爆発した。

爆発は風石を損傷させ、暴走こそしなかったが船体のバランスが崩れる。

コントロールが取れなくなり、ゆっくり右に傾斜してゆく。

砲列甲板では係留索が切れた大砲が、ドスン、ドスンと滑って右に寄ってゆく。

船内に逃げ込めなかった、水兵が滑り落ち雲海に消えていった。

上下逆さまでもはや復元不能になった海賊船は徐々に下降していった。

残る一隻は、分が悪いと悟って遁走する。

たぶん、戻っては来ないだろう。

イーグル号とアドラー号の上では、万歳の声が響き渡っていた。

「はあ〜」。

パンツァーシユレックを武器庫に戻した後、元の部屋に戻る。

水兵達のまだアドレナリンの抜け切っていない顔をして作業している。

一方、親衛隊の隊員達はやや不満顔だ。

結局、あの海戦で一発の銃弾も撃たなかった。

そりゃ撃たない方が良いに決まってるが、武器弾薬を持てるだけ持つて意気揚々として行ってみれば、見ているだけで何もする事がなかった。

ヴィルヘルミナなんて人化を解いて、爆雷をたたき付けようとしたが、結局すごすごと戻って来た。

まさに拍子抜け状態だ。

人間としては嬉しい限りだが、兵士としては物足りない気分だ。

「全くなんなんだ？ 一体……」

乱れた髪をガシガシ掻き回しながらマリサが悪態をつく。

今アドラー号は、イーグル号の先導の元、ニューカッスルの秘密の洞窟ドックに向かっている。

マリーガラント号は完全に空いだ。

「さあ。でもまあ、これからが本格的な仕事ですから、落ち込みで下さいな。」

「その『本格的な仕事』が問題なんだよ。ただ単に、王様のケツ守って帰るだけだろ。それなら私たちが出る幕じゃない筈だぜ？」

「失敗すると厄介だから私たちが行くわけでしょう？。さほど難しいことじゃあ、無いでしょうに。」

「まあ、仕事だしな。仕方ないか。」

「そう割り切りましょう。」

するとドアが勢いよく開いて、ヴィルヘルミナが現れた。

「なぐにごちゃごちゃ辛気臭くなってやがりますか。もう着きましたですよ！」

イライラした様子だ。

どうやら、ボーとしている間についたらしい。

その割には、砲撃音などは一切聞こえなかったが。

「八つ当たりね。」

「八つ当たりだな。」

軽口を叩きながら、正装を着る。

そして小さな箱を開けて、勲章を取り出して襟首に付ける。

首のところで柏葉付き騎士十字章が光る。

ただ面倒な事に、相手が皇太子（即位こそしていないが、事実上のアルビオン王）の面前だ。

全ての勲章を付けるなんて、少し前のパレード以来だ。

そして、ベルカの王家のあかし。

銀の大鷲が翼を広げて、嘴に剣を足にライフルを掴み、鉄十字の上に留まっている姿を刺繍された漆黒のマントを羽織る。

これなんて、最後に見たのがいつだったか記憶にない。

もともと、このうざったいマントも最初の謁見が終わって護衛任務の時には外す事になるが。

「八つ当たり〜〜 八つ当たり〜〜 ハーっ無いけど八つ当たり〜

〜

ヴィルヘルミナの背後からやけに綺麗な声で明るい即興の歌が聞こえて来る。

胸に鉄十字勲章やら戦功章やらをつけながら、現れた人影に声をかける。

「マリサが全員いるって言ったのに、姿が見えないから不思議だと思ってたのよ。どこに居たのかしら？ハンナ」

ヴィルヘルミナの後ろに立つハンナ・ローレイはSS下士官の服装だが、幾つか変わっているところがある。

まず一つは、背中から変な形をした翼が生えている事だが、今は先に行っているニナにも含まれるからこれは問題ない。

やや紫がかった桃色の髪から見える羽毛の生えた耳も同様。

問題なのは。

「さつきまで厨房にいたけど。暇で、暇で、暇で、仕方なかったのよ。イッヒ ヴァール ゴー フライー」

コックがするような白いエプロンをしている事だ。

空気？なにそれ、美味しいの？みたいに歌い出すハンナ。

こういうのは、ポーカーフェイスしてる人より考えが読みにくい。

読んでどうしろというわけでもないが。

「それに何を作る間もなく着いちゃうし、他のコックも誰もいないから話もできやしない。」

急に真顔に戻り普通に話すハンナ。

「そう。今回はこれからも料理を奮う機会は無いと思うから。残念

「ただ。」

それよりも、他の連中はもう並んでる筈だ、と言ったら、知ってる
と返ってきた。

さて、やる事の一段階は終わった。

さて、向こうも歓迎はしてくれている筈だ。

部屋を出て、デッキに上がる。

途中、親書を持った外交官と合流する。

やや損傷したイーグル号からウェールズ皇太子が下りると、この二
ユーカッスルで留守を守っていた、実質ナンバー2のパリーと親衛
隊員らが、駆け寄ってきた。

「よくぞご無事で殿下。」

老メイジの労いにウェールズは笑みを浮かべた。

「今日は、大戦果だ。船一杯の硫黄と、」

マリーガラントを指差しついでアドラー号に移す。

「強力な援軍の到着だ。」

その場に居合わせた兵士達が雄叫びを上げる。

「成る程、それは助かりましたな。弾が少なくなつて、そろそろ石

でも投げようかとしていたところでした。」

安堵の息を吐くパリーの目に、ウェールズの後ろに続く見慣れぬ三人を咎めた。

「殿下。この方々は？」

「トリステインからはるばる来られた大使殿だ。重要な用件で参られたのだ。」

パリーはそれを聞くと表情を改める。

「ようこそ、ここまで。私は殿下の侍従を仰せつかっております、パリーございます。持て成らしい持て成しはできませんが、ゆっくりおくつろぎ下さい。」

ルイズたち頭を下げるとウェールズに向きなおる。

ウェールズの前に親衛隊員が整列する。

アドラー号に向けて。

アドラー号でも完全装備の兵士や武装親衛隊がタラップの周り等に立つ。

「アフタウン！」

誰かが声を発して、右手を一斉に斜めに上げる。

入口から、二人の人影が現れる。

一人はスーツを着て、皮の鞆を持った外交官。

もう一人は言うまでもない。

二人は同じ敬礼で答礼してタラップを下りる。

ゆっくり歩みを進め、皇太子の前に立つ。

「遠路はるばるようこそ。私はアルビオン皇太子、ウェールズ・テューダーだ。」

「この度、親善と身辺護衛に参りましたティリエル・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデルと申します。殿下のご活躍は、遠くベルカでも存じ上げております。」

「ベルカ外相長官のリッペンドロップと申します。」

軽く挨拶をすると、握手をする。

ウェールズは握手が終わると悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「さて、できれば堅苦しいのは無しにしてくれないか。君達の貸与してくれた武器で僕らは生きながらえているようなものだからね。」

ティリエルもお返しに笑みを浮かべて、

「なら、お言葉に甘えさせて頂いて。状況の方は何か、変わりがありませんか？」

ウェールズは苦笑して、一週間前となんら変わらないと言った。

そこにパリーが思い出したように口を挟んだ。

「そうでした、殿下。連中からの通達で明日の正午に総攻撃をする
と伝えて参りました。奴らも多少の礼儀はまきまえているようです
な。」

「そうだなパリー。何度攻めて来ようとも、跳ね返せば良いのだ。
だが、油断は出来ない。ルーデル殿。済まないが積み荷を先に降ろ
してもらってくれないか。」

「既に作業は取り掛かっておりますゆえ。」

「それで、今回の積み荷は？」

「はい。新型後装式アームストロング砲8門、ガトリング砲12挺、
スペンサー連発銃120丁、ライフル250丁、弾薬10万600
0発。それと、別の輸送船があと二隻。武器弾薬を満載してこちら
に向かっています。報告では午後8時に到着予定ですので。」

目録を読み上げて、その紙をウェールズに渡す。

「成る程、早速だがそれを見せてくれないか？」

雨、時々砲弾

「8ポンド砲はここと4階に運んでくれ。ガトリングはそこそこのベランダ、残りは全部外にまわして欲しい。」

ニューカッスル城は、アルビオン大陸の北あたりに位置する港街ニューカッスルを見守るようにそびえ立つ古城だ。

かつて、強大であった頃のトリステインとロマリアから本土を守る為に建設した防衛ライン。

ハドリアヌスの防壁の東端に位置する軍事上の要衝となっていた。

「新式銃は狙撃隊と、最前列の塹壕の兵士に配るように。」

この城に王制派が立て籠もったのは正直正確だった。

トリステイン城などの宮殿とは違い、ニューカッスル城は戦う為の城であった。

街より高い岬の上に建てられた城は、街を含む周りを見渡す事が出来て、死角はほぼない。

さらに城壁も艦砲に耐えられるように特別分厚くなっている。

おまけに、何ヶ月分の非常食と秘薬、戦列艦とも渡り合えるように大口径の大砲も備え付けられている。

更に秘密の港。

防衛側にこれでもかと有利な状況のおかげで、10万対1500の圧倒的不利な状況でも王制派はかろうじて首皮一枚で持ちこたえている。

「殿下。アドラー号とマリーガラント号の積み荷を全て陸揚げしました。」

もつとも実際のところ艦砲射撃に関しては悩まされている。

なにぶん建設されてからしばらく経っていて大砲が旧式化していたからだ。

そのため射程が短く、現用の艦砲なら射程外から攻撃出来た事だ。

しかし相手も不用意に近づいて反撃されるのを恐れているので有効打が送りこめていない。

その使えない大砲は、今は陸の兵隊達に筒先を向けている。

「わかった。次の船が接舷出来るようにしてくれ。」

「イエッサー！」

ニューカッスル城内部も戦争一色になっている。

ホールや貴賓室（戦闘用とはいえ、それくらいは十分ある）は無駄な物は取っ払られて、大砲の弾やら火薬の袋やらが積まれて、バルコニーや窓には中型や小型の大砲やガトリング砲が敵の突撃に備えている。

しかし、待機する兵士達は殺気だっておらず逆にリラックスしている。

砲弾の一発どころか、矢の一本も飛んで来ない。

時刻は午後3時。

これが意味する事がわかるだろうか。

簡単な理由である。

「では紳士諸君。少し遅いがティータイムだ。」

ウェールズが配置の傍らに言うと、全ての人が一斉に仕事を止めてお茶を飲み始める。

これぞ、アルビオンの名物。ティータイム休戦だ。

アルビオンはスコッチなどのウイスキーが有名だが、お茶の消費量も半端ではない。

しかも誰が最初に気づいたが知らないが、ハルケギニアで通常飲まれているような緑茶のようなものでなく紅茶だ。

市場に溢れてから20年程だが、僅かな期間にアルビオンの主要な文化の一つとなっている。

ティータイムになると、砲兵隊は砲撃を止めて、騎兵は歩兵を置いて陣地に戻り、歩兵も得物を担いで陣地に戻る。

ある意味信じられないような光景が広がっている。

現に双眼鏡にも、貴賤問わず、お茶している敵の姿を確認出来る。

双眼鏡を下に向ければ、斜面に二重に掘られた防御用のこちら側の塹壕でも同じ光景が見える。

「全く。私達には信じられませんわね。こんな平和な戦争なんて。」
双眼鏡を降ろして通常視界に戻す。

「大尉。流れ弾が飛んでくるかもしれませんから窓には立たないほうが。」

護衛兵が注意を促してくれる。

「平気……ではないけど、大丈夫でしょう。相手にスナイパーがない限りは。」

軽く皮肉を交える。

この距離ではマスキット銃である限り向こうの陣地から銃弾は届かない。

弓でも大砲でも無理だ。

ただし、相手が擬装していて誰も接近に気が付かず、たまたまそれが奪ったライフル銃で、私に狙いを定めていたら話は別だが。

皇太子の護衛とはいえ、あまり好き勝手をするわけにはいかない。くっついてまわるだけだ。

ちなみに会談の方は、日が昇っている内は忙しいので夜にして欲しいと言っていた。

結構失礼だが、ルイズたちも同じ対応であった為に気にしていない。基本ハルケギニアに夜襲という戦法は存在しない（もちろんベルカは例外）。

まあ、一応歩哨は立てるそうだが。

「度々済まないが、私はこれから前線に激励しに行きたいのだが。いや、面倒なら来なくて結構なのだが。」

皇太子の仕事は多忙だ。

圧倒的劣勢なのだ。

だから度々激励して労い、士気を上げる。

特に最前線はの連中は、何倍もの敵兵を屠っているのだ。

その努力は計り知れない。

ウェールズと一行は城壁の出入口に掘られた溝にはいり、塹壕へ進む。

ウェールズの近衛二人、ティリエルと護衛二人、そして何故ついできたルイズ達三人だ。

塹壕の後には、掩蔽壕に入れられた大砲が睨みつけている。

地面は雨でグチョグチョのドロドロで状態は最悪だ。

塹壕の中はもっと最悪だ。

足首まで泥の水溜まりに浸かって不衛生窮まりない。

弾薬の入っていた箱がそこら中に放り捨てられている。

多くの死体が埋葬する余裕がないため野ざらしにしてあり、酷いのは腐敗が進行して皮膚が崩れてきている。

その死体から、プチプチ音がする。

皮膚の下で蛆がうごめいている音だ。

ティリエル達はあまり気にしないが、才人とルイズにはちょっとハード過ぎたようだ。

ウェールズが前線の指揮官と話をしていると、砲声と砲弾の落下音が聞こえる。

慌ててウェールズを壁に押し付ける。

壁に密着すれば、まず直撃はしない。破片がきても、周りの兵士がカバーすることが出来るからだ。

全く、本当に厄介な時に来る。

「頭を上げないで！壁に密着すれば当たらない！早く待避壕へ！」
どうやら敵の嫌がらせ砲撃だろう。

砲撃は肉体的以外にも、精神的にもダメージを与える。

四六時中砲撃されれば、何人かは頭がおかしくなる。

目の前で弾薬を運んでいた兵士が直撃弾を喰らう。

肉がえぐられバラバラになった。

別の方でも、たまたま姿勢が高かった一人が、バウンドした砲弾が顔面に当たり頭を持ってかれる。

しかし被害は、こんなもんだ。泥が衝撃を吸収してくれるし、爆発しないから塹壕に伏せていれば大体において無事だ。

壁にくっついていると、敵の方から突撃の哄の音が聞こえる。

「突撃か？」

「馬鹿な、正午から攻撃の筈だぞ。」

砲撃は既に止んでいたの、双眼鏡を上げる。

こちらに突撃してくるの兵士は、皆ちぐはぐな鎧などで統一性が無

い。

その上数が少ない。

どうやら敵は、先の砲撃を突撃の前のと勘違いしたものがいたようで、何人かが釣られて来たようである。

それでも数は一個大隊程もある。

敵も存外に疲弊しているようだ。

ニューカッスル城から断続的な砲撃があり、敵を粉碎する。

敵の集団の中心に命中した。

数人が空中高く舞い上がる。

また、炸裂弾が空中で爆発すれば破片が降り注いで兵士を薙ぎ倒す。勢いよく転がってきた砲弾に足をもがれて悲鳴を上げる者もいる。

更に、塹壕の後ろの大砲から対人用のぶどう弾の斉射が襲いかかる。ぶどう弾は何割かは無駄になるが、残りは巨大な散弾銃のように襲いかかる。

一発でも当たれば棺桶行きだ。

しかしそれで死んだのは、4割から5割。

良くて6割。

突撃はまだまだ続く。

「オープンファイヤー！」

王軍指揮官の掛け声で、ライフル銃隊と土嚢で防御陣地から、ガトリング砲が一斉射撃を開始する。

彼我の距離は150メートル前後。

発砲と同時に、敵がバタバタと倒れ始める。

敵兵も撃ち返すが、どだい届きはしない。

隠れる所も殆ど無く、泥に足を取られて走るのは困難だ。

一方の王軍側は、塹壕からは頭ぐらいしか露出していないからこの差は歴然だ。

残りは、あまりの被害に堪らず後退して行くが何人かは果敢に突撃してくる。

目指しているのは、こちらが潜む塹壕だ。

周りが見えていないか、よほどの英雄思考か。

その人影に護衛と私で発砲を開始する。

この距離だと拳銃とMP40ではややきついが、Gew43なら余

裕だ。

装填をおえたライフル隊が一斉射撃した後は、彼らは泥と先に斃た仲間の中に埋もれていった。

「撃ち方止め！撃ち方止め！」

ウェールズが叫んで、攻撃を止める。

騎士道精神で背中を見せる敵には撃たないらしい。

やっと一息入れて、銃を下ろす。

丁度弾が切れていたなので、新しいクリップを取り出して弾倉に押し込む。

立てていた照準器を直して、ストックを外す。

「・・・プ・・・プリーズ・・・ヘルプ・・・プリーズ。」

城に戻ろうと踵を返したところに、下半身がちぎれた兵士が手を延ばして懇願してくる。

服装からレコンキスタ兵だろう。

砲撃か何かを喰らって、ここまで吹っ飛んできて放置された口だろう。

もっとも助けようにもこちらにそんな余裕はないし、こんな重傷では治療したところで死ぬまでの時間が延びるだけだ。

だから楽にしてやるのがこちらの出来る最大限の気遣いだ。

泥まみれの顔に照門と照星を重ねて引き金を引く。

ピクンと一瞬体を震えさせてそれっきり動かなくなる。

これが戦争だ。

傍らの塹壕の壁に寄り掛かっている痩せこけた死体の口がモゾモゾ動き、中からでっぷり肥えた鼠が顔をだした。

前線を一回り見た後、ルイズらはウェールズに付き従って、彼の居室に向かう。

中は他の部屋と代わらない殺風景でこじんまりている。

せいぜいの飾りとタペストリが掛かっているだけだ。

ルイズらは中に入るが、ティリエル達はドアの外で待機だ。

ウェールズは、机の引き出しに入っていた小さな宝箱をしばらく見つめる。

そして迷いを断ち切るように手紙を取り出すと丁寧に封筒に入れてルイズに手渡す。

これが件の手紙だ。

「本当ならばこの場で燃やすのが確実なのだが、アンリエッタの手

紙だ。灰にしてしまうのは流石に忍びない。」

名残惜しそうな顔をしているが、どこかすっきりした表情だ。

「ありがとうございます。」

ルイズは深々と一礼して手紙を受け取る。

「失礼ですが殿下……その手紙の中は」

「ああ、アンリエッタとの恋文だ。」

「そうでしたか。姫さまのご様子が尋常ではございませんでしたから。まるで、恋人を想うようでしたので。」

もう昔の話だと、苦笑して付け加える。

その言葉で、ルイズは耐えられなくなり、ウエールズに言った。

「殿下！ 私たちと共に、トリステインに亡命くださいませ！」

「ルイズ！」

ワールドが止めるがルイズは収まらない。

「お願いです！ 後生でございます！ 姫さまの為。アンリエッタ様のためにも！」

「残念だが、それは出来ない。」

ウェールズは目を閉じたまま告げた。

「なぜでございますか？姫さまの手紙でもたぶん、亡命をすすめるよう書いてある筈です。ここで死ぬ事はありません。」

理解出来ないとはかりにルイズが叫ぶ。

「もし私が何もかも無くして、講じる手段も無く、絶望にうちひがれていた時にその提案をされればおそらくだが、喜んでその提案を受け入れたかもしれない。だが、そうではないのだ。」

ウェールズは呟くように口を開く。

「私はこの城を自分の墓標にするつもりなどない。私が明日の決戦で戦うのは、栄光ある敗北などが目的ではない。この城の者全てを救い、新たな勝利へと突き進む為だ。」

顔を上げてタペストリを見る。

そこには、剣状の杖を持った伝説の王、アーサー王が軍勢を率いている姿が書かれている。

「私は、この戦いが終わり次第ベルカに亡命する。」

思いもよらない答えにルイズ達は驚く。

「どうして、何故ベルカなどに亡命を？」

思わず、聞かずにはいられない。

「なぜ、彼らはこの敗色濃厚な我が軍にこのような多大な援助をしてくれたと思う？」

ウェールズは若干皮肉げに笑った。

「この援助の代わりに彼らと条約を結んだのだ。いざという時は、ベルカに亡命するようにと。」

それで、ルイズは理解した。

ウェールズは、アンリエッタと同じだ。

ゲルマニアが始祖の血を欲して、レコンキスタの脅威を利用し、アンリエッタの婚姻を条件にトリステインと同盟を結ぼうとした事。

ベルカはそれと同じ事をしようとしている。

「殿下、今すぐに条約を取り消してください。あの野蛮なベルカは殿下を利用するに決まっています。」

ルイズの物言いにもウェールズは気分を害した様子はない。

「確かに、彼らは私を利用したいだけかもしれない。だが彼らは亡命政府の設立も義勇軍の設立も協力を約束するともいったのだ。溺れかけた者は藁をも掴むとあるが正にその通りだな。とにかく、一度締結した条約を理由もなく白紙になど出来ない。」

「でも。姫さまはトリステインに亡命されることを望んでいる筈です。」

「それ故にだ。」

ウェールズはきっぱりと言い放つ。

「あの手紙には、亡命してほしい。それだけしか書いていないのだ。それ故に私は行けぬ。」

「なぜ……」

「私は、ウェールズ・テューダという一人の男であると同時にこのアルビオンを背負う王族なのだ。なぜ、アンリエッタは君に手紙を託したのか？なぜ、政府の正式な大使がいないのか？それは誰にも言うことが出来なかったからだ。アンリエッタ以外だれも私がトリステインに亡命するのを望まないからなのだ。」

「……」

言葉の出ないルイズに更に続ける。

「国はアンリエッタ一人の采配で回っているわけではない。大臣や官僚。大勢の人々が関わって成り立っている。だがこの手紙には、トリステイン政府の正式な事柄や返答はなにひとつ載っていない。故にアンリエッタの言葉に甘えるわけにはいけない。一国を預かる者として無責任な行動は出来ぬのだ。残念だ、実に残念だ。これが正式な国書ならば受け入れる余地もあったのだが……」

ウェールズは、どこまでも現実を見ていた。

公私を天秤にかけた時に、愛しいアンリエッタよりも国を選んだのだ。

気落ちしたルイズの肩を叩く。

「君はとても優しいな。ラ・ヴァリエール嬢。君のような正直で真っ直ぐな友がいるなら、アンリエッタも幸せだろう。だがあえて忠告しよう。そのような正直者では策謀渦巻く政事には向かん。ましてや情に流されるようでは、大使は務まらんよ。」

ルイズは俯くしかなかった。

「まあ、これが今生の別れでもあるまい。また戦争が終われば会える機会もあるだろう。それまでアンリエッタの事を頼むよ。親友である君には言うまでもないだろうが、彼女は辛い事があると内に秘めてしまう癖がある。」

その言葉でルイズは感じた。

ウェールズは本当に心からアンリエッタの事を考えている。

それと同時に二人の仲を引き裂こうとするレコンキスタとベルカに激しい敵愾心を抱いた。

「今日の夜、負傷者と民間人を乗せたマリーガラント号と輸送船がベルカに向けて出港する。マリーガラント号の船長には話をつけてあるから途中トリステインに寄港する時に降りなさい。」

そう言っつて首から掛かった懐中時計を見る。

裏にアルビオン語で『ベルカより愛を込めて』と彫られていてそれを見てしまったルイズは更に気落ちする。

「そろそろ会議の時間だ。話はまた向こうで。」

ルイズ達は部屋の外に出る。

ワルドは居残ってウエールズに一礼している。

何やら話があるようだ。

部屋の外の壁には、相変わらずの胡散臭い笑みをしたティリエルが寄り掛かって腕を組んでウエールズを待っている。

すれ違い様、ティリエルは小さく呟いた。

「大変ですわね。王族でもどこでも。」

その言葉でルイズは歩みを止める。

「聞いてたの？」

「聞かされていたと言ってほしいのだけど。」

「あんだねえ。あんだ達が原因じゃないのッ!！」

怒り狂ったルイズが食ってかかるが動じない。

「さてはて。なんの事やら。」

惚けた口調に更に詰め寄る。

「いますぐ取り消しなさいよ！いますぐ！あんな条約のせいで！あんなのせいで！！」

「ふふ、それは無理というもの。ただか一端の将校の意見で国是が変わるとでも？」

「あんな王族でしょ！！」

「この場ではただの将校の権限しか持ち合わせていませんから。」

「なら、トリスティン大使として命令するわ。いますぐ条約を取り消しなさい！」

「ふふふ、はははははははははは！！」

ルイズのその言葉で笑い出すティリエル。

「聞きましたか少尉？」

「ええ。しっかりと。」

少尉も肩を震わせて笑いを堪えている。

「ねえ、なんの権限があつて、貴女は私に命令できる立場なのかしら？」

「決まってるじゃないの！あんな達属国風前がトリスティン大使に逆らう……」

カチャリ。

ルイズの額に何か突き付けられて思わず口を閉じた。

「それ以上その舐めた口を利いたらどうなるかぐらい、その軽そう
なピンク色の頭でも理解はできるでしょう？」

それともここで、トリスティン大使など『居なかった』事にしても
よろしくてよ、と続けた。

ルイズは黙るしかなかった。

肝心のサイトはここに来ていらい腑抜けたみたいで、頼りになるワ
ルドは何やら皇太子と話こんでいる。自分は完全に孤立している。

「そもそも筋違いと言ったでしょう。言うなら大使か、トリスティ
ンの公使館に正式に抗議なさって頂きたいわね。私に言われた所で
せいぜい聞かなかったことにしか出来ませんし。」

スツと額から銃口を引っ込めると素早くホルスターにしまう。

「我々は貴女達と違って遊びや酔狂で此処に来たわけではありません
んから。国家の命運を左右する責任を背負ってここに来ました。故
にその妨げになるものがあれば即刻排除する。」

「私達だって国の命運を掛けてここに来たのよ！」

ティリエルはその言葉を鼻で笑った。

「その貧弱な様相で？ 国書は？ 全権委任大使は？ 正式な政府の外交
官は何処にいるのかしら？」

「それは……」

「これが国と国との取り纏めをする外交。たかが私用の手紙の運び手と一緒にされちゃ困る。初めてのお使い程度でいい気になるな。」

ルイズはそれ以上言い返せなくなって走り出す。

才人もぼーと突っ立っていたが、ルイズが居ないことに気づいて慌てて追いかける。

「しかし、宜しかったのですか？大尉。」

今からでも消せるとの意味だが、それをティリエルは手を振って制する。

「特だん殺せとも言われてはいないし、あれでもトリステインの公爵家御令嬢。消したら消したで後々面倒。それに私達の任務は？」

「ウエールズ皇太子の護衛。」

「そう。だから皇太子の命を狙う輩と、同盟を防ぎたい輩を殺すのが私達の任務。あんなのはもはや障害に値しない。どのみち、亡命さえしてしまえばこちらの勝ちよ。」

「わかりました。」

やがて、ワルドとウエールズが部屋から出て来た。

才人は貴族や隊長クラスの士官が集まっているホールの隅に立って

見つめていた。

作戦会議にしては重苦しい雰囲気は無く、パーティーにしては華やかさがカケラも無い。

各人がそれなりに上品な食事を皿に乗せている。

恐らくこの日為に取って置かれたごちそうだ。

そのテーブルの前には巨大な黒板に、城の防御配置と撤退の際の経路などが細かく書かれている所から作戦会議でも間違いは無いのだろう。

集まった貴族達の顔は悲観的な者は誰一人いない。

皆明日の戦いに闘志を蓄えているのだ。

「では諸君。決戦は明日である。輝かしい勝利とアルビオンの未来の為。全身全霊を持って戦いに挑んで欲しい。その勝利の為に明日に備えて良く食べ良く休息を取ってほしい。」

ウェールズ皇太子の音頭で貴族達は傍らにある、やけに多いワインやウイスキーのビンを取る。

「では、勝利を祈って。乾杯!!」

「乾杯!!!」

掛け声が重なる中一斉にビンの中身を一口口にする。

そして杖を向けて何やら魔法を掛けた後蓋を閉めて、別のビンを取ってまた乾杯と叫ぶ。

そんな不思議な光景を見ながら才人は考えていた。

一番に気になっている物。

それはベルカとその兵士達の事だ。

思えば、地球ではもはや使用などされていない旧式の銃が普及している世界に、肩を並べてより近代的な武器が共存している時点でおかしいと気づかなかつたのだろうか。

それにあの船とその兵隊達。

あの船を見た時、明らかに近代の船だとわかった。

そして船に積まれた大砲。

おもちゃみたいな、この世界の大砲に比べて遥かに高度な仕組みだ。

何より決定的だったのが。

ウェールズ隅で護衛についているティリエルを見つめる。

正確にはその服装。

そして友好の現れのホールの高い位置に並ぶ二つの国旗。

最初見た時、心臓が止まりそうになった。

ハーケンクロイツ。

歴史の教科書やテレビで見たあの形。

かつて肩を組んで戦い、そして破れてこの世から消え去った国家。

ナチス・ドイツ。

ドイツ第三帝国の国旗が、眼前で揺らめいていた。

そして、その国旗を掲げた船から降りて来た集団の服装は。

間違い無く、当時のドイツの物だった。

しかし才人に取って重要な事は一つ。

彼らもまた地球から来たに違いないという事だ。

つまり、元の世界に帰る手掛かりが掴めたという事であった。

だがそれを聞くとなると今は工作中だし相手にされるかどうか。

そんな感じに悩んでいると、ウェールズが近寄って来た。

「先程ラ・ヴァリエール嬢と一緒にいた少年だね。恋人かと思ったが使い魔とは。トリステインの魔法学院は随分変わっているようだな。」

「恋人なんてとんでもないですよ。」

そうか。とウエールズは笑った。

だがサイトの顔が疲れたようなので、心配して声をかける。

「少し疲れたのかな？辛いようなら薬を運ばせるが。」

いろいろ考え過ぎて気が滅入っていた才人だったが、大丈夫だと薬を断った。

「失礼ですけど、死ぬのは怖くないんですか？」

ウエールズは才人の顔を見つめて言った。

「怖い？死ぬのが怖くない者など、気違いと狂信者を除けば居る筈があるまい。」

「でも……死ぬかもしれないですよ。」

「知っているよ。」

「じゃあどうして。」

「何故君は軍隊があると思う？」

急に振られたので才人は戸惑った。

「それは国を、民を守る為だ。誰かが幸福を保つ為には、誰かが戦わなくてはならない。君は何故剣を握っている？」

そう聞かれて才人は自分の手を見つめる。

「彼女を守るため。そうだろうか？」

ウェールズは笑顔で言った。

「……はい。」

小さく呟く。

「それと同じだ。それに死の恐怖に耐えられなかったらとつくの昔に降伏していたさ。」

「君は先程恋人だと否定したが、彼女を愛しているだろう。」

いきなり話を変えられて焦って否定するが、ウェールズは笑った。まだ。

「何隠す事は無い。私だってアンリエッタに恋した身だ。それくらいはわかる。」

妙に鋭い皇太子だと思いつながら、それなら筋違いだろうか聞けるかもしれない。

「あの、全然関係ない事なんですけどよろしいですか？」

「何かね。恋愛なら私の体験した事で良いのなら相談にのろう。」

まだ、そこかとツツコミたくなるが我慢だ。

良く見ればウェールズの顔が若干赤いから少し酔ってるのかもしれない。

「ベルカってどんな国なんですか？」

言葉通り全然関係ない内容だったのでウェールズは面食らったが気を取り直して聞く。

「別に構わんができればその理由を聞かせて貰えないか？」

「えっと俺、ロバ・・・アルカトラスから来たんで。」

「ロバ・アルカリエの事か？なら知らぬでも無理もあるまい。」

いけね、刑務所になっちまったと焦ったが、ウェールズは気にした様子はない。

「となると、親族とも会えんだろうに。不憫だな。」

「ええ・・・」

ロバ・アルカリエと地球では全然違うが、とても遠い事には変わらない。

ふと、両親の事が頭に浮かんだ。

今ごろどうしているのだろうか？

父は会社勤めの筈だったが、もしかしたら駅前で自分の写真が貼られたチラシを配っているかもしれない。

ニュースでも行方不明の少年として報道されているだろうし、警察もあちこちで調べているだろう。

もしかしたら、北の拉致被害者の名簿に自分の名前が書かれているかもしれない。

そうになると、帰りたい反面、帰れた時の世間の反応が怖い。

「っと、話がズレたな。えっとベルカだがつい最近出来たばかりの新興国だ。一応、名目上はトリステインの公国に値するな。」

「最近つて、どのくらいですか？」

「大体150年くらい前になるな。」

この世界では最新武器の範囲が100年前ぐらいまでを表すので最近なのは、極々普通である。

10年、ないし2年や1年で兵器が旧式化する地球では考えられない事だ。(良い例がテレビゲーム。10年前のゲームなど、殆ど使われていない。)

そんな感じで時間は過ぎていく。

結局才人が分かった事は、ベルカはあちこちから移民を募集して今ではハルケギニア有数の軍隊と経済力を持っている事。

他の国々はもちえていない高度な技術力を保有している事。

あと国民は基本クソが付く程真面目でジョークが通じないなど、肝心な事は一つも分からなかった。

まあ、反ベルカ感情丸出しのルイズの説明よりは幾分ましである。

特に良かったのが、全ての人が平等であるという事だ。

まあ、これはどうしようも無くなったら行けば良いが、やはり直接聞かないと分からないらしい。

だがまずは、この戦場から生き残らなくてはならない。

どうにも、頭脳明晰で馬鹿なご主人様はここに残るらしい。

一人二人は学校に居る、頭は良いが人間的にバカな連中の具体例みたいだが、本質は（たぶん）優しいのと自分が護ってやらなきやとといった母性（？）と少しの下心さえあれば才人は許せるのだ。

結局才人は宛がわれた部屋に入り、久々のベッドの感触に浸りながらすやすやと意識をシーツごと沈めたのだった。

ニューカッスル城攻防戦

朝

窓の外では、レコンキスタ軍の兵士が隊列を作っている。

昨日の晩、たつぷり英気を養っていたようで士気も高いようだ。

もっともそれはこちらも同様であるが。

今の時刻は10時半程。

まだ、1時間半もあるじゃないかと思うかもしれないが、大勢の練度の低い兵隊を並ばせるのは大変で、過去には丸々2日かかった例もある。

しかし、まだ編成途中とはいえ、10万の軍が地平線を埋め尽くしているのを見るのは中々圧巻で、心が躍る。

こちらも昨日の内に細かい仕掛けもすんだのであとは待つだけだ。

作戦としては、実に簡単。

相手が撤退するまでひたすら守り続けるだけである。

しかし、これが難しい。

「いよいよだな。」

「ええ。」

双眼鏡で敵の指揮官の位置を再度確認する。

まず第一目標は敵の指揮官だ。

これを潰す事で円滑な指揮を妨げる事が出来る。

その為、塔や鐘楼に何人が狙撃班を配置させている。

後は王軍の連中がどれぐらい頑張ってくれるかに掛かっている。

あとは危険なメイジを排除していきながら兵力を3、4割削るだけだ。

3、4割の損害を受けたらたいいはいは全滅を意味して撤退するのが普通だ。

だが実際はそれ以上の損害を受けても止まらない事はよくある（逆もしかり）。

だから司令官が撤退の命令を決断する前に兵士自身の士気が崩壊してくれれば遥かに楽だ。

そうなれば再編成に多大な時間がかかり、脱出に十分な時間が稼げる。

つまりは、敵の兵士にこの城は難攻不落の城で俺達では勝てないと

思わせる事が重要なのだ。

やや後で指揮をする構えのウェールズにルイズと才人、ワルドが控えている。

結婚式の件だが、式を挙げる肝心の礼拝堂が負傷者の治療場所となっていて、しかもまだ撤退させる筈の負傷者の搬送が遅れていて（大多数の負傷者が共に戦う事を希望して、その選定に手間取ったから）おまけに礼拝堂自体が、血生臭い空気と死臭が漂う部屋になってしまいとても式を挙げられるような状態でもなかった（そもそも、死者や負傷者の目の前で結婚式をする事自体不謹慎であるから。）

ちなみにルイズ達は戦わないのかといえば、ルイズは魔法もろくに使えず（使えても味方を巻き込む危険がある）戦争のイロハも理解していないので、事実上の戦力外通知、才人も貴重な弾薬を無駄にするつもりはなかったし、ワルドも戦力としてはピカイチだが、ワルド自身がルイズを守る事を任務として請け負っているのでそちらを優先したのだ。

まあ、彼らの出番が来る頃には陥落直前であろうが。

こちらは狙撃班以外には、王軍支援の為に重機関銃や船から外した20ミリ機関砲を窓に取り付けている。

もちろん機銃手以外は、全員遠距離用の装備だ。

念のためサブマシンガンも置いてはあるが、これもルイズ達と同様に末期になってからの出番だ。

そんな事している間にも時計の針は11時を示そうとしている。

何かしら作業をしていないと、時間は長く感じられる。

大砲も銃も装填済み。

後は、引き金さえ引けば弾が飛び出る、いわゆるホットな状態だ。

突然、敵方の方で赤い光が幾つも立ち上がる。

それを合図に敵軍が、ニューカッスル城を押し潰せんと一挙に押し寄せてくる。

やはりというか、奇襲を狙ったらしい。

だがそれは予想済み。

開戦当初はともかく、そう何度もワンパターンな奇襲に引っ掛かる訳が無い。

敵が気づいている奇襲など奇襲では無い。

関の声と走る重厚な地響きが、距離を詰める事に大きくなる。

レコンキスタから援護の砲撃がくる。

だが距離が遠すぎて砲弾は届かない。

反撃を警戒して接近して来ない敵船も同様だ。

しかし無駄な訳では無い。

味方が敵を砲撃している状況では、攻撃する兵士に取っ手の精神的活力となる。

先頭は騎兵部隊。

一番乗りを目指す若い貴族の連中だ。

もちろんただで通す王軍では無い。

射程圏内に入った途端砲撃が始まる。

ついで、射程の長い20ミリ機関砲と狙撃斑の大口徑アンチマテリアルライフルが火を噴く。

狙撃斑は次々とターゲットを仕留めていく。

指揮官のメイジは派手な格好をしているから、狙って下さいと目印を掲げているようなものだ。

いくら、回復が早いメイジとはいえアンチマテリアルライフルを喰らっては流石にほぼ即死だ。

頭に喰らえば無くなるし、胴体に喰らえば最悪真つ二つ。

掠めても内臓を持っていかれる。

20ミリ機関砲に至っては、もはやスプラッターである。

弾自体が炸裂する為破壊力が尋常では無い。

おまけに敵が密集している為、一発で何人もの兵士を貫通する。

空薬莖が勢いよく保護ネットにぶつかると、敵が文字通り薙ぎ倒される。

だがそんなのは一割にも満たない。

何しろ十万。

並たいていの数では無い。

被害をもともせずにつっ込んでくる。

距離が一リーグを切った時に塹壕、城からライフルの一斉射撃がある。

命中した騎士が落馬し、最前列の槍兵がバタバタと倒れる。

敵も銃を一斉発射するが、掠りもしない。

何発かが城の壁に当たって砕けただけだ。

お返しと、大砲が火を噴く。

丸い砲弾をモロに喰らった馬が内臓を乗り手ごと撒き散らしてぐちゃぐちゃになる。

それでも薙ぎ倒される歩兵を盾に砲兵が大砲を城に向ける。

発射された砲弾は、城の外壁を崩す。

運悪くバルコニーに飛び込んだ砲弾が大砲とそれを操作していた兵士をバラバラに吹き飛ばした。

数でレコンキスタ軍はごり押ししているが、今の所王軍の一方的なアウトレンジ戦法にやられている。

いつもならハルケギニア最強の兵種である竜騎兵も城の守りが厚く近づけない。

おまけとばかりに、今回配備した銃弾は全てミニエー弾だ。

その為連射速度も早くて、威力も高い。

もっともアウトレンジ戦法こそが王軍が勝てる唯一の方法なのだ。

ティリエルが構えるライフルのスコープの中に標的が映る。

距離は500メートル。

砲撃で怖じけづいた騎兵と馬を必死にたきつけている。

格好からこの隊の隊長と判断する。

相手が動きを止めるまで待つ。

部下に指示を出そうと、馬を止めて杖を振る。

狙いは頭。

銃声からやや遅れて、騎兵の鉄兜に穴が空いて馬から崩れ落ちる。

ボルトを動かして空薬莖を排出する。

マガジンにはまだ三発残っている。

次の標的はやたら飾りの付いた悪趣味としか言い現せない中隊長だ。

チヨビ髭を生やしているが、年齢は二十歳ほどのデブ。

それがヒステリックな顔をして何やら喚いている。

流石に吸血鬼でも声は拾えない。拾いたくもないが。

こういうのはたいいてい家の血筋だけでのし上がった温室栽培のモヤシだと相場が決まっている。

それも腐りかけた。

まあ、それでも親切に殺ってやるが。

引き金を引こうと力を入れようとしたら、弾丸が飛び出る前にブタの頭が弾け飛び、脳の組織やら肉片やらが先程まで当たっていた副隊長にへばり付く。

先を越されたみたいだ。

舌打ちして代わりに副隊長に照準をずらして撃つ。

呆気にとられた表情のまま、薄くなった額に小さな穴をうがいて、

大の字に地面に伏す。

このまま続けていれば、来年はこの土地は豊作になるだろう。

嵐のような攻撃を喰らってもレコンキスタ軍は狂ったように突撃してくる。

味方の死体を乗り越え、負傷した味方を盾にし、鉄条網に絡まった戦友を踏み越えて、弾幕の洗礼を浴びる。

203高地の日本軍もそんな気分だったのだろうか。

もつとも彼らには、切り札の28センチ山砲は存在していない。

故に己の持つ武器が使える距離まで肉薄するしかこの戦場では勝てない。

しかしまだレコンキスタ軍の士気は今だ高い。

目の前に敵の頭がいるのだ。

これさえ倒せば、膨大な報奨金が払われる。

主君の主君は主君では無い。

これが傭兵のモットーだ。

金さえあれば敵陣営だろうがなんだろうが値段が一番高い所に付く。
(もちろん例外も居る。)

このような環境も全ては、今の世界情勢のせいだ。

まあ、世界情勢を考えるのは戦争が終わってから考えればいい。

副隊長を殺ったあと、続けてメイジを二人程屠り弾を装填して次を狙う。

次は馬に乗って歩兵を率いている将校に照準を合わせる。

やや強い反動と共に馬ごと将校が倒れる。

階級章からみて佐官クラス、大物だ。

だが、倒れていたがすぐムクリと起き上がる。

あれえおかしいな。

首を傾げる。

弾頭は確かに当たった筈だ、血飛沫が見えたから間違いない。

弾丸は身体を貫通して馬に当たったのに肝心の本人が平気ってのはどうゆう了見？

ボルトを動かして続けざま二発撃ち込む。

一つは頭、もう一つは右胸。

それでもなお平然と立っている。

ああ、そうか。

ようやく理解できた。

どつやら彼らはアンドバリーの指輪で蘇った屍兵らしい。

なるほど、そこは原作の知識しかなかった。

流石にライフル弾を頭に当てればくたばると思っていたが、甘かったようだ。

「パンツァーシュレック！目標、3時の方向！先頭に立っている紫と赤の指揮官、攻撃！」

「ヤボール。」

パンツァーシュレックの射手が狙いを定める。

さてライフルは駄目だったが、今度は88ミリ成形炸薬弾！

堪えられるものなら堪えて見ろ！

「ファイヤ！」

合図と同時にロケット弾が白煙を引いて飛び出す。

砲弾は走り始めた屍兵の身体にめり込み、爆発した。

直撃だ。

爆発は屍兵を微塵に変えて、ついでに周りにいた3、4人の手足を吹き飛ばす。

流石に四散してしまっただら再生も出来ないようだ。

ヒトデヤプラナリアのように分裂復活されたら困る。

そうこうしている間に、敵は50マイルにまで迫ってきた。

ライフルの代わりに、マスケット銃の斉射が敵に降り注ぐ。

城からも合図と共に銃弾以外に、石や弓矢、酒樽、箆笥などが投げられる。

そこに塹壕の兵士や手の空いた者が、酒瓶を敵に投げ付ける。

それは地面にぶつかった瞬間、勢いよく燃え上がった。

昨晚の謎の行動はその為。

皆で火炎瓶をつくっていたのだ。

火炎瓶は敵を火だるまにする以外に炎の壁で敵の足を止める。

そして敵に、前方には何人も火メイズが居る事を錯覚させる。

前の事情を知らない後ろの連中に押され、悲鳴を上げながら熱さに悶える。

ここをどう乗り切るかで生死が決まる。

むろん私達もだ。

敵はついに15マイルにまで達した。

「全員伏せる！」

「全員伏せ！」

「頭を下げる！」

各隊長が命令を出し、塹壕の者は身を隠し、建物に居るものは奥に下がる。

「点火しろ、早く！」

士官が傍らの装置を操作する兵士に叫ぶ。

「カポーン！」

そう呟いて握ったハンドルを回す。

その瞬間。

急に敵が消えたように見えた陣地に飛び込もうとしたレコンキスタ兵の足元で爆発が起きる。

今日の決戦に備えて、昨日から仕掛けられていた爆薬が炸裂したのだ。

爆発はニューカッスル城を守る陣地沿いに仕掛けられていた。先程まで撃っていた窓から濛々と土煙が吹き込んでくる。思わず噎せる。

土煙が収まるのを待ってライフルのスコープ越しに外を覗く。敵は目の前で突然起きた爆発で大混乱に陥ったようだ。

一目散に潰走中だった。

あの遁走ぶりでは、今日中には戻ってこないだろう。

「イエーア！」

「やった、勝ったぞ！勝ったんだ！」

「アルビオン万歳！！」

「タリホー！！タリホー！！」

皆々それぞれ歓喜を表している。

「ふうー」

壁に寄り掛かって力を抜く。

ボルトを下げ、弾を排莖する。

弾を追加に入れた後、セフティーをかけて壁にかける。

そして、ヘルメットを外して蒸れた髪を手でとかす。

後は撤退さえ上手くいけば完璧だ。

裏切り、そして脱出（前書き）

途中ネタあり。

裏切り、そして脱出

「焦らず進め！船は十分ある！」

「負傷者から先だ！」

「荷物は一人二個までだ。」

「武器や鎧は置いてけ！後でいくらでも手に入る！」

「宝物庫から残らず持ってけ！奴らには一ド二エも渡すな！」

レコンキスタ軍が完全に撤退したのを確認した後、王軍は直ぐさま脱出の準備にかかった。

非戦闘員はすでに脱出は終わっているから、兵士だけだ。

この戦いの戦死者は115人。

負傷者は214人だ。

いささか、死者の数が多いように思えるが、これだけの損害だけで十万の軍勢を退ける事に成功しただけでも奇跡。

更に負傷者の殆どが軽傷ですんだのも、また奇跡。

今の所、王軍は城の内側に鎧や剣を捨て、身周品だけ持って船に乗

ろうと列を作っている最中である。

もちろん最低限の兵士は見回りについているが。

その中には、武装親衛隊も含まれる。

ちなみにベルカ勢力の損害はゼロである。

まあ、芋っつてれば当然か。

ナイフキルや、カウンスナイプの心配が無いので、唯一怖いのは砲撃だけだ（それすら命中精度が低いのであんまり怖くない）。

彼らは、王軍と皇太子の乗船を確認した後に乗り込むのである。

その人でこった返す中をティリエルがやや急ぎ足で進んでいる。

すみませんを連呼しながら片手チョップで道を開く方法で掻き分けてすすんでいく。

そしてアドラー号の無線室に入る。

先程本国から連絡

があると伝令が来たからだ。

『どうだ？状況の方は。』

「極めて首尾よく進んでおります。大佐殿。」

『ならいい。』

「あとは、皇太子さえ乗ってくれさえすれば任務はほぼ完了ですが。」

『皇太子はどうしたんだ？』

「例のトリステインからの大使の結婚式を取りなうとかで……もちろん護衛と監視は怠っていません。」

『全くもって困ったものだ。これだからアルビオン人は……』

「ええ。」

『困ったついでに、もう一つ問題だ。先程アルビオンに潜入していた諜報員からの連絡で亡命を希望した貴族を確保したらしいが、敵に発覚して現在追撃を受けているそうだ。そのため正規の脱出手段がとれない。救出部隊もすぐには送れない。』

「それで我々が行けと？」

『そうだ。現在地点からさほど遠くない。』

「皇太子の方の護衛は？」

『ヴェアヴォルフがチームとケルベロスがいれば十分だろう。二ユーカッスル脱出後すぐに向かってほしい。』

「了解しました。」

『よかった。ターゲットのコードネームはアーベだ。詳しい座標は

これから送る。脱出は例の船を手配した。幸運を祈っている。』

受話器を置いて、伸びをする。

やっと戦争らしくなってきたかな。

ところ変わって、礼拝堂。

「新郎、並びに新婦。よろしいかな？では、式を始める。」

ウェールズの声で式が始まる。

「新郎、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は……
……」

礼拝堂に声が反響してして雰囲気が出ている。

もつとも神父も家族もいなく、椅子に生々しく残る血の跡や、空の医療物資の箱が無造作に転がっている教会など、荘厳さなど無きに等しい。

むしろホラーだ。

留めとばかりにステンドグラスに描かれた始祖降臨の絵など、顔が大砲か何かの破片で消えている。

それでも流石に、最前列だけは綺麗にされて、一人がぼつんと座って式を眺めている。

監視についているティリエルだ。

しかし考えてみれば滅多に無い光景だ。

荒涼として陥落寸前の城の礼拝堂で白い婚礼用のマントに身を包んだトリスティン貴族が向かい合い、礼装のアルビオン皇太子が仲介人となり、軍服のSS武装親衛隊の大尉が見物しているなど、有り得ない組み合わせだ。

遍在の視界でそう思う。

ウェールズは時たま懐中時計に目をやりながら式を進めている。

まあ時間に余裕があるとは言えない。

「この婚姻に異議のある者は今この場で……まあ反対する者はいないだろう。」

こちらをチラリと見てから続ける。

「では、指輪の交換を。」

「申し訳ございません。生憎持ち合わせがないもので。」

「では略してもよろしい……しかし、詔も家族も指輪も無いのではマズイのではないか？後日改めて正式に挙げたほうが良いと思うのだが。」

「いえ、大丈夫です。」

「そうか。」

ウェールズは不十分な準備では、と心配したがワルドがどうしても言うので続ける。

「では次に、」

「そろそろ時間です。なるべく早目に。」

「で、では誓いの接吻を。」

こちらが催促するとやや焦って式をとりなう。

かなりハイスピードだ。

ワルドはルイズの腰に手をやり顔を近づける。

急にルイズは顔を背けた。

来た！

案の定、表情を変えたワルドがルイズに詰め寄り、そのあまりの豹変ぶりをウェールズが目を白黒させて見ている。

ゆっくりとホルスターに手を伸ばしていつでも抜けるようにする。

「あまり好ましくない状況ね。」

「どうしたんだ？ 一体。」

アドラー号の準備室。

参加するメンバーに概要と、プランを考えた後必要な装備を準備している。

主に武器だが。

ヴェアヴォルフの装備は特別だ。

通常のベルカ軍や親衛隊では使用されていない武器が使われているのだ。

準備室の棚には武器が並んでいる。

それらは、木製のボルトアクションのライフルでもプレス加工のサブマシンガンでもない。

M203グレネードランチャー付きでドットサイトの付いたステア
ー AUG、太いサブレッサーを内蔵したMP5SD、全長が1メー
トルを越すM82バレット。

引き出しにもM92F、USP、グロック、コルト45、SIG、
ジェリコ、ミニウズIと拳銃（もしくはそれに類する物。）が数多
く入っている。

これらは全て別の世界から流入した銃^{モジュール}である。

このような逸材を元にベルカの科学力は、日々増進しているのであ

る。

これらのは武器はヴェアヴォルフ各人が自分の手に合って、尚且つ任務に最適な得物を所持していくのだ。

「まあ、少し急いだ方がいいわね。」

ティリエルの装備は、ウッドランド森林迷彩に動き易さを重視した迷彩ベストに必要な物資を入れた大きめの背囊。

そして鎧が通常よりやや大きいブッシュハット。

得物はM320グレネードランチャーとサブレッサー、赤外線レーザーポインター、ACOGスコープを付けたHK416。

バックアップはM1911のカスタム仕様にサブレッサーを付けたもの。

クレイモアとC4が幾つか。

「具体的には？」

マリサは、同じく森林迷彩服とベストにやや大きめの背囊と額にバンドナを巻いている。

得物はM249にレッドドットサイトと赤外線レーザーポインターを付けた物。

バックアップは50口径デザートイーグル。

クレイモアとC4が幾つかと赤外線マーカ―等など。

ヴィルヘルミナは、大体同様だがその上にギリ―スーツを着込んでいる。

得物はG3SG-1とインターベ―ションM200狙撃銃。

バックアップはG18Cサブレッサー付き。

二ナも同様だが背囊は小型のものでバラクラバ―を被っている。

得物はグレ―ードランチャ―とサブレッサー、サーマルスコ―プとを付けたFN2000と、ホロサイト付きM1014。

バックアップはサブレッサー付きMK23ソーコム。

最後にハンナも同様だが、衛生キットと中型遠距離無線通信機を持っている為背囊は大型である。

やはり頭を防護する為にニット帽を被っている。

得物はダットサイトとサブレッサー付きFN SCARでマスターキーをアンダーバレルに装着している。

バックアップは、USPサブレッサー付きだ。

そして共通の装備として幾つかの手榴弾、スタングレ―ード、スモークグレ―ード、タクティカルナイフを携帯している。

二ナ、ハンナは、接近戦用の為バリステックナイフを二本携帯している。

役割を表すと、ティリエルが指揮官兼グレネーダー。

マリサがSAWガンナー。

ヴィルヘルミナがスナイパー兼マークスマン。

二ナがポイントマン兼グレネーダー。

ハンナが衛生兵兼無線手だ。

この合計5人で一チームを形成している。

「トリステイン大使の護衛のワルド子爵の例の結婚式。」

「ああ。それが？」

「すぐに制圧しないとウェールズの身に危険が及ぶ可能性が高い。遍在で時間を稼がせるけれどいつまで持てるか。」

「なら迅速に！」

装備を確認した後、人波を掻き分け進む。

戻って礼拝堂。

「ルイズ、聞いてくれ！君さえ、君の魔法さえあれば、アルビオン、トリステイン。いやハルケギニアだって手に入れられる。僕と、僕と一緒に来てくれ！」

「嫌よ！私は世界なんて欲しくないわ。貴方は私の魔法だけ見ていたのね！」

「ヴァリエール嬢を離れたまえ、ワルド子爵！さもないと！」

「ウェールズ殿下！危険ですから離れて下さい！」

「貴様らは黙っている！」

「黙っているだと！花嫁を無理矢理婚姻させようとしている貴様のどの口が言える！」

「子爵！すぐに手を離して杖を置きなさい！」

ウェールズがワルドに飛びつきルイズを引きはがそうとするが、ワルドの肘打ちを腹に喰らって突き飛ばされる。

「おのれ！度重なる無礼もう許さん！！！」

二、三回咳込んだウェールズが顔を怒りで真っ赤にして軍杖を抜く。

ガアアンと反響した銃声が礼拝堂に響き渡り、皆動くのを止める。

「そこまでにしなさい。次は頭を撃つ。」

威嚇射撃をしたティリエルはまだ硝煙がでている拳銃を天井からワ

ルドに向ける。

銃口をワールドに向けたままウェールズを後ろに庇う。

そのまま片手で無線を入れる。

「こちら、ルーデル。アドラー号どうぞ。」

『こちらアドラー号。どうかしましたか？どうぞ。』

「すぐに礼拝堂に武装した兵士を数名よこして欲しい。目標はワルド子爵。すぐに身柄を確保せよ。繰り返すワルド・・・」

真横から突如風の刃が来る。

狙いはウェールズ。

すぐにウェールズを押しつけ盾になる。

風の刃を体で受け止めると同時に現れて魔法を放ったワールドの遍在を撃ち抜く。

ワールドの遍在が疑似血液が飛び、消える。

まあこちらの遍在も服ごと肉を切り裂いた風の刃が致命的なダメージとなり、血肉を撒き散らす。

ルイズがその光景を見て悲鳴を上げる。

消えゆく視界の中で詠唱の時間を稼いだウェールズがウィンドブレ

イクでワルドを吹き飛ばした。

これで時間は稼げた。

後は本体が到着するのを待つのみだ。

ウエールズの元の遍在が消えて意識を戻す。

矢継ぎ早に杖を振って6体の遍在を作る。

その内4体を2チームに分けて、別々のルートで礼拝堂に向かわせる。

突入しだいウエールズの身柄を保護。

ワルドの身柄は……まあ射殺する。

礼拝堂の方で爆発音が小さく聞こえる。

到着までの所用時間は約一分半。

「く、成る程あれは遍在だったか。まさか風のスクエアも使えるとは。」

ワルドは柱の影に隠れて様子を見ている。

まさかティリエルが、あの神聖な儀式を遍在で参加していようとは。

ウェールズと共にあわよけば仕留めようとおもったが一縄筋では行かないようだ。

逆に遍在を一つ葬られ、ウェールズの反撃で肋骨を数本持っていた。か

今ウェールズは、反対側の柱の影に隠れている。

だがルイズはこちらの手にある。

数の上でも遍在がまだ残っているこちらが有利だ。

入口は一つだけ。

迅速に片を付けるつもりだったが、仕方ない。

じわじわと包囲してくびり殺すでしょう。

突然爆音と共にウェールズの側の壁が崩れる。

「大丈夫か！ルイズッ！」

「危ない！！」

「うお！」

デルフリンガー片手に現れた才人は、ウェールズに腕を掴まれて柱の影に引き込まれる。

間一髪、エアカッターがさっきまで立っていた場所を通り抜けて、

後ろにあつた金属の燭台を切り裂く。

もしウエールズが助けしてくれなかったらと思うと冷や汗が出る。

「何故ここに来た！？危険だぞ！」

「ルイズは！ルイズは何処に！」

「あそこだ。」

ウエールズが指す先には倒れているルイズの姿が柱の影から見えた。

駆け寄ろうとしたが、その間にワルドが見える。

「遍在だ。身を出したら殺されるぞ。」

「なら俺の銃なら。」

才人はSAAを抜いて、狙いを付けようとしたが、その前に魔法が飛ぶ。

「くそ！これじゃあ八方塞がりじゃないか！」

「サンドイッチのハムだな。まるで」

皮肉を言う才人とウエールズを尻目に遍在は距離を詰めてくる。

その時、二階の天窗が割れて何かが二個投げ込まれた。

それは地面に落ちる前に強烈な閃光と爆音を発した。

その光は白く網膜を焼き付け、爆音は頭を揺さぶり鐘鳴を鳴らす。それは数秒間だが効果範囲にいた対象の全感覚を麻痺させる。だがこれはまず始めの段階。

「ロウス！」

爆発と同時に頑丈な檜で作られた礼拝堂の扉が外側から木っ端みじんになる。

扉に仕掛けた爆薬を起爆させたからだ。

煙、破片漂う中を一斉に突入する。

突入するや否や目の前のターゲットに短い射撃を加え、次の標的を移動しながら素早く照準する。

天窓からも遍在が動かないターゲットを狙い撃つ。

遍在の五感をフル活用すれば様々な視点を同時に把握する事が出来る。

故に無駄な弾は一発も出さないし、行動も早く出来る。

疑似SOPシステムだ。

銃を構えながら追伴していた残り2体の遍在をウェールズの元へ向かわせる。

全ての銃口は今だ安全が確認されてない方を向いている。

横隊でワルドが潜んであるつ地帯を囲もうとする。

ゆっくりとワルドは現れた。

だが観念した様子は無い。

むしろ喜悦で顔を歪めている。

気絶したルイズに杖を突き付けた状態で。

ゆっくり祭壇を上がるワルドに合わせて包囲を縮める。

「止まれ。」

ワルドが歩みを止める。

不審な動きをしたら直ぐさま撃ち殺せる。

ワルドは一人、こちらは13人勝ち目は無い。

「形勢逆転つと、武器を捨てなさい。」

「悪いがそういう訳にはいかないな。」

だがワルドには人質という切り札がある。

「う……………え……………?」

ようやく眠り姫が目を覚ましたようだ。

「おはよう。ルイズ」

そして自分の置かれている状況を知る。

振りほどこうとするが、ひ弱な学生が現役の軍人に腕力で勝てる筈が無い。

「ッルイズ！」

「サイト！？」

「静かにしてくれ。式はまだ終わっていない。」

ルイズはキツとワルドを睨む。

「何が、まだ式は終わっていないよ！あなたなんかとは婚約破棄よ！」

「そうか。それは残念だ。まあどの道、僕と君は付き合わざるを得ない。君の意思に関わらず。」

ワルドは天を仰ぎながら言った。

「そんな。どうして。」

「レコンキスタか……」

ウェールズが憎々しく呟いた。

「そうとも。僕は、アルビオンの貴族派。レコンキスタの一員だ。」
ワルドは高々と宣言した。

「なんで！どうしてトリステインの貴族であるあなたが！？」

ワルドはフツと鼻で笑い、言った。

「僕はもはや亡国たるトリステインの犬では無い。ましてやブリミルとの先約を蔑ろにして、私利私欲の腹を満たす王族や教会に従う訳が無い。国境を越え、かっこたる指導者の元でブリミルの教えに従う為に集まった貴族達の連盟さ。我々は国境も国も無い。あるのは思想。それだけだ。」

「特務の青二才め。本性を現しましたか。」

小さく楽しそうに呟く。

別に言ってみただけだ。

「だがこんな状況では仕方ないな。目的の一つは諦めよう。」

「目的？」

「一つはウェールズの命。だが、」

横目でウェールズを見る。

ウェールズの前には二人の遍在が立ち塞がっている。

不意打ちでさえ、攻撃は防がれた。

まず攻撃は通らない。

そもそも攻撃の仕草など見せようものならたちまち蜂の巣になる。

ティリエル達の考えは分かる。

『撃てない』のでは無い。

『撃たない』だけだ。

その気になればすぐに撃つだろう。

そうならない為にも現状維持は必須だ。

この場だけだが。

「これでは流石の僕でも無理そうだ。あわよけば、君の命も頂きたかったのだが。」

ワルドはティリエルを見る。

「しかし残りの二つはなんとでも成功させて見せよう。」

ワルドは礼拝堂の奥の時計を見る。

「時間だ。」

同時刻。

第三尖塔、見張り台。

スコープ付きミニエー銃を手に持って見張りをしている。

彼らがニューカッスル城で任務についている最後のアルビオン兵だ。

「ジャクソン。そろそろ引き上げるぞ。」

「待って下さい。ミラー中隊長。13時の方角から艦影。こちらに接近中です。」

「ホーバス軍曹。種類は分かるか？」

「待って下さい。あゝあれはフリゲート艦のハーマイオニーと輸送船です。」

小肥りの軍曹が答える。

「なんのつもりだ？」

敵艦は腹を見せるでも無い。

ただニューカッスル城目掛けてどんどん接近してくる。

ミラーは見つめているとその意図を察する。

「まずい！全員退避！退避！」

「急げライベン！遅れるな！」

「カパーゾ来い！」

「ウエイド何してる！メリツシュ早く！」

「アパム！！弾なんか置いてこい！！！」

既に時遅し、船体は塔にぶつかろうとしていた。

咄嗟にジャクソンは真下にいた兵士に叫んだ。

「パーカー伏せろ！！！」

宙にライアンの身体が舞った。

突然の轟音と同時に城全体が激しく揺れる。

そのせいで体勢と狙いが崩れる。

それを狙ってワルドは行動する。

まず狙いはウエールズ。

逃げ際にエアーカッターを放つ。

ティリエルの遍在が身を盾にしてそれを防ぐが、手応えは合った。

だが戦果を確認する暇は無い。

ルイズを抱えて飛び立つ。

バシユユユ!!

「舐めるな!!」

床に倒れた姿勢のまま狙って連射する。

サプレッサーのくぐもった銃声と共に撃たれた弾は左腕に集中して激痛を与え、ルイズを抱えられなくなる。

悲鳴を上げて落ちるルイズ。

他のメンバーさるもの。すぐに立て直し、空中のワルドの背中に銃弾を浴びせる。

ワルドの白いマントが穴だらけになってステンドグラスの向こう側に消える。

「全く余計な事を!!」

毒付いて、ウエールズの元へ向かう。

幸い腕の肉を切られただけのようだ。

出血も軽い。

今ハンナが止血するため包帯を巻いている。

本人も至って元気だ。

「血が、血が!!!!」

何やら騒いでいるのはルイズだ。

「死んじゃう、死んじゃう！」

傷を見たが、ただ弾が少し掠っただけだ。

大丈夫と、肩を叩いて無線を入れる。

「少尉。今の爆発は？」

『大尉、貴族派のフリゲートが第三塔に突入。自爆しました。』

無線越しに激しい銃声が聞こえる。

『ならびに、敵部隊が輸送船から降下中。規模は不明。』

礼拝堂の丁度才人が入って来たのとは逆の壁が崩れて人影が現れる。

銃弾を浴びせ、奇妙な踊りを見せた後事切れる。

鎧が今まで見たレコンキスタの軍隊のとは少し違う。

真っ黒の鎧を着て、兜には聖具が描かれている。

どうもレコンキスタの切り札、懐刀を投入したようだ。

『大尉、こちらはいつまで持つか。』

「分かった。軽く足止め程度に牽制して船に戻るように。私もすぐに向かう。」

『了解。幾つか通路を爆破するが。よろしいか?』

「私達の脱出経路だけ確保してさえくれれば構わない。脱出後はプランBを。」

『了解、幸運を』

「そつちも。」

無線を切る。

全く、この最悪のタイミングの時に来やがって。

「総員脱出の準備。ここに残すのは、死体と死にたがり屋だけいい。さあ撤退を。」

城の通路は爆発のショックで崩壊が進んで来ている。

暗い通路で時たま遭遇する敵兵には、鉛弾で静粛をお願いする。

「こつちだ!!」

向こうの通路で味方のアルビオン兵が手招きしている。

その時、目の前の天井が崩壊に耐え切れず崩れ落ちた。

「つお!?!」

才人は行きなり止まった先頭に反応出来ずに、瓦礫にもろに巻き込まれた。

頭を強く打って、意識が朦朧としてくる。

身体に瓦礫が積み重なる感触がする。

「ここだ！まだ生きてる！」

真っ暗で滲む視界が急に開けて、見慣れない顔がこちらを覗き込んだ。

そのまま襟首を掴まれて引きずられて移動させられる。

また視界が暗くなる。

そして再び聞こえるくぐもった銃声と叫び声。

「左だ！左！」

「脱出経路が全部潰された。こちらは構わないから先に………違う！別の脱出ルートを探すから、一刻も早く脱出を！ええ、分かっています。後はこちらで面倒を見ます！じゃあ！」

そして誰かに担がれて進む。

「敵は？」

「いないぜ。ビンゴだ。」

「二ナ、スモークを。奴らを足止めする。」

「ヤー。」

しばらくして地面に下ろされると、そこは固く冷たい石畳ではなく、緑の生い茂った灌木の窪みの中だ。

「上手く捲いたようね。今頃焦ってるでしょう、色々と。」

「ハンナ。彼、脳震盪みただけど一応見て上げて。」

「了解、了解。」

何やらごそごそやり始める。

「こちらは安全地帯に退避完了。いつでもどうぞ。」

視界には遠くに離れたニューカッスル城が斜めに見える。

こうして見ると中から見たのではわからない迫力がある。

塹壕の時は見る余裕はなかった。

「ティリエル………大尉。私の部下は？」

「全員無事に退避したそうです。よかったですわね。それとニューカッスル城ですが、これが最後の見納めになるでしょうから、見るなら今の内に。」

ティリエルの言っている意味がわからなかったが、それはすぐに分

かることになる。

ニューカッスル城では占領に成功した兵士が歓声を上げている。

ここからでも尖塔に掲げられたかつてのアルビオンの旗が引きずり落とされ、代わりにレコンキスタの旗が盛んに振られている。

いつの間にか城壁の下には敵兵がいた。

別動隊が、予備軍か。

とにかくそれが憶測2万はいた。

またすぐに静か……にはならないか。

「土砂に注意して、瓦礫にも。そろそろ」

言い終わる前に、ニューカッスル城で連続した爆発音が聞こえてきて、固定化の掛かった城が揺らぎ始める。

続いて一際大きな爆発音がすると、城自体が崩れ落ちたと思っただが、突然大爆発をおこして巨大な城の破片が飛び散った。

そして土台である地下の港も崩壊して、城自体が大陸から滑り落ちた。

少し遅れて、重力に負けた瓦礫や大量の土砂が雨のように降ってくる。

運が悪い者は石材の瓦礫で押し潰されたり、破片で頭をかち割られ

たりされる。

流石にこちらには瓦礫などは降って来ないが細かい土砂が降ってくる。

砂の雨が止んだ後には、激しい土煙と混乱に陥った敵の喚き声で満たされる。

「さて、敵が落ち着いてこちらに気づく前に早くここを去りましょう。あまり安全とは言えない場所ですから。」

銃を構えて立ち上がる。

「前衛はマリサと私。後衛はヴィルヘルミナとハンナ。ニナは先頭で安全なルートを探して。皇太子とあなたがたは中央に。良いと言うまで手は出さないで。」

「皇太子殿下。これを。」

マリサが背囊から防弾ベストと迷彩ツェルトバーンを取り出す。

「これさえ付けていればたいいていの弓矢や銃弾、ラインクラスの魔法でも大丈夫ですから。」

要人警護用のクラス？の防弾ベスト。

ライフル弾でも耐えられる。

ツェルトバーンは、迷彩用に森の中ではウェールズの礼服は目立ち過ぎる。

流石に後の二人は用意していない。

「それでどうするのかです？」

「変わらないわ。予定通りコードネームアーベを救出してから脱出ポイントに向かう。少し変わるのは道程が長くなる事と、『荷物』と皇太子の護衛しながら向かうことだけ。異論は？」

「無いですよ。」

「右に同じく。」

「やりましょう。」

「私は大尉にまかせるぜ。」

「ありがとうございます。荷物を纏めて移動しましょう。」

腕時計を見る。

針は午後4時間を指そうとしている。

夏とは言え高い位置にあるアルビオンの日暮れはやや早い。

そうならば、こちらの時間だ。

大混乱のニューカッスル城を背に一行は森の中に姿を消した。

裏切り、そして脱出（後書き）

これ書く直前まで、プライベートトライアン見てたんであえてだしましたw

エネミーライン(前書き)

一部ゲイ的な表現が入ります。

18禁じゃあ、ありません。

エネミーライン

西部方面総司令部

狼の巣

司令センター

「アドラー号、現在の状況は？」

『ザザープイーン、敵巡洋艦数隻の攻撃を受けましたが、振り切りました。被害は軽微。脱落艦もありません。現在予定通りキール港に向かい航行中。』

「了解したアドラー号。そちらに護衛の駆逐艦を2隻、公海上に派遣した。合流したらその艦の指示に従うよう。」

『了解しました。ブチン。』

無線が切れる音がして会話が途切れた。

アドラー号がキールに到着するのは今の時間からして7時頃になるだろう。

アドラー号の船員と無線越しに報告を聞いていた大佐が壁一面のディスプレイを変える。

この大佐がこの作戦の直接の指揮を取っている。

画面は黒一色からアルビオンのエディンバラ地方の地図に変わる。

そこから更に拡大してウェールズ辺りを写し出す。

ハルケギニアに普及している、世界地図もしくは子供の落書きに毛が生えた程度のは違い、細かい地形やどの家の領地などがかけられている。

もつとも自国の地図程鮮明ではなく、幾つか空白の地域もある。

これは無断で測量を行うしか、外国の詳細な地図を作成する事が出来なかつた為、に測量が出来ない所もあつたのである。

もちろん気掛かりなのは、ニューカッスルで脱出に失敗したリッター（これはコールサインでティリエル一行の事。）チームの事だ。

全員が若いとは言えかなりの場末を踏んできている。

もうすぐ無線が繋がる頃だ。

「こちら司令部、リッター1-1聞こえるか？」

『ザザー・・・ピーこガーガーター1-1ガガー部どうぞ。』

どうも電波状態が良くないらしい。

アドラー号経由で通信しているから仕方ない。

「リッター1-1応答願う。」

『ピーピー・パーパー。司令部どうぞ。』

弱冠声が割れてしまっているがどうしようもない。

派遣するニールンベルク級強襲揚陸軽空母が中継してくれるようになれば解決するだろう。

「リッター1-1。状況を伝えよ。」

『・・・ちらは、ジョンブルを確保。・・・から潜伏・・・です。現在敵影なし。尚、こちらに損害無し。・・・どうぞ。』

途切れ途切れであるがなんとか伝わった。

「無事で何よりだ。リッター1-1。今後どうするつもりだ？」

『こちらは、ジョンブルを護衛しながら予定通りアーベアの救出を行い、脱出ポイントにて到着を待ちます。』

「了解したリッター1-1。現在位置はどこにいる。」

『現在・・・ニューカッスルから北西約18キロ地点を移動中。アーベアの方はどのようなになっていますか？』

「彼もセーフハウスを転々としながら、リッシンメイズ方面に向かっている所だ。」

『了解しました。』

「それともう一つ問題が発生した。別の諜報員からの報告で、途中のローランドでレコンキスタらしき軍勢が集結しつつある。何等かの軍事作戦の準備かと思われる。十分に警戒せよ。」

『規模はどの程度？』

「約2個大隊から一個連隊程度との情報がある。」

『わかりました、警戒を密にして行動します。』

ニューカッスルから19キロ地点。「歩哨を確認。1時の方角に一名。12時の方角に二人。」

真夜中。

森の茂みに隠れながら街道の関所をに詰めている兵士を銃目越しに見ている。

「射程です。撃ちますか？」

「もう少し近づいてから。ニナは左を後ろから、ヴィルヘルミナは右のどちらか。私は余りを撃つ。」

兵士達は緊張感も無く、パイプを吹かせながら雑談に興じている。

時通り周りを見るが、なにぶん寂れた街道なので夜に通ろうなんて者はいない。

それで注意力が散漫になってしまっている。

こっそりとほふく前進しながら距離を詰める。

月明かりが森で遮られるせいで、後ろに忍び寄る二ナにも気づいていない。

「ヴィルヘルミナが合図したら撃て。」

「了解。」

2.5倍のレンズ越しに笑っている顔が見える。

暗視ゴーグルは付けていない。

自分とハンナは夜目が効くから必要ないのだ。

視界は昼間程ではないが明るい。

「位置に着いた。」

「こつちもです。」

「なら始めましょう。」

数秒間の静寂な時が過ぎた後、バスン！とくぐもったやや大きい音が一瞬間こえて、男が倒れこむ。

それに合わせて引き金を引く。

カシャ、と先程より小さい銃声と反動が身体に伝わり、十字線の男も同じ運命を辿った。

もう一人は、二ナに口を塞がれ背中をメッタ刺しにされながらブッシュに消えていく。

3人の命が消えても静寂な空気のままでは過ぎる。

「クリア。」

二ナが手を挙げて合図する。

「関所制圧。通過する。」

ブッシュから身体を起こして周囲を警戒する。

がさがさと森の中からマリサとハンナに護衛された三人が姿を現して無人となった関所を抜ける。

今夜中に、この先にあるロンダース村を突破してその奥にある森に行かないといけない。

でないと丸一日無駄になってしまう。

大佐から貰った情報でこの村にマーカライト男爵の2個中隊が宿泊しているそうなのだ。

彼らはどうも逃亡中の要人を拘束、又は殺害せよとの命令で動いているそうだ。

そして明日、近隣の貴族の部隊と共にニューカッスル城を中心に包囲網を形成して内側に狭めていくやり方で搜索をするそうだ。

何故、ここのロンダース村を突破口にするのかというと、幾つかある包囲網の隙間の一つの中で一番近いからだ。

もつとも、明日になれば包囲網は完成して逃げるのは困難になる。

「ねえ、いつまで歩くつもりよ。いったいどこに泊まるつもりなの？」

最悪、ばれた場合はとんでもない事になる。

そうなつたら、一人一発でも足りない程の敵に追われる事になる。

リアル鬼ごっこ（最後らへん）なんて絶対に御免被る。

「ちょっと、何処で寝るつもり？」

「静かにしろよ。」

ルイズが喧しいが何処かに泊まるなんてまず論外だ。

こういう田舎の村では収入がかなり限られている。

その上で重税を払わなくてはならない。

こうした辺境の村では村ぐるみで山賊だったなんて事も結構ある。

そして肝心なのが、賞金首狩りだ。

たまに御家取り潰しや犯罪などで逃亡中の貴族や犯罪者の首にはたいていかなりの賞金が賭けられる。

それがウエールズだったら、値段は分からないが数年は遊んで暮らせる程の大金である。

もし気づかれたら血眼になって殺しにくるだろう。

落ち武者狩りは、どの国にもあるのだ。

そもそも、そんな村にルイズの求めるような宿はまずない。

では宿場町はどうかと言われたらNO、としか言えない。

木を隠すなら森のなか人を隠すなら…、とかいう格言はあるが居る人行く人みんな鬼のところなんざ行きたくもない。

結果、誰にも気づかれず誰にも存在している痕跡を残さない幽霊のように去っていくだけだ。

「いつまで黙ってるのよ!。」

「歩くのは明け方日が出るまで。寝る場所は木の下。これでわかったかしら?じゃあ黙ってて。」

それを聞いてルイズの小さい堪忍袋の尾が切れた。

「いい加減にしなさいよ!なんで貴族の私達がこんな事しなきゃならないの!野宿?ふざけないで!!私は公爵家よ!もう歩くのもうんざり!もう一步も動かないから!!帰らせてよ!!」

枝や砂利で服はあちこちほつれたり、裂けたり、全身は砂ぼこりや

湿った森の土に伏せたり転がったりして泥だらけ。

純白のマントは地面を引きずったり引つ掛かったりで、赤ん坊のオムツのように黒いシミが幾つも出来て、裾はずたずただ。

おまけとばかり昼から食事一食、水一杯口にしていない。

更に8時間以上ぶっ続けて歩いている。

これらは全てルイズの常識の範囲外の世界だ。

「あんだ達もあんだ達よ！メイジなら、兵隊なら正々堂々戦いなさいよ！なのにこんな汚い事。貴族らしくなんかないわー！」

ルイズの考えていた戦争は威厳があり、上等で派手できらびやかな軍服を着て、馬に跨がり、装飾の施された杖を振るい他のメイジを率いて、相手に礼儀と忠を尽くして正々堂々と正面から戦うものだと思っていた。

しかし現実に見たのは、地味で泥のような軍服を着て、地面をはいずり回り草地に隠れて、銃など手に入る物をなんでも使い、正々堂々など微塵もない方法で手段など選ばずに殺していく。

そもそも、何も知らないおせう様なルイズには荷が重すぎる事であった。

何より貴族は華々しいのが好きだ。

歴史に残るような仕事をする英雄になるのが目的なものだ。

しかし目の前は歴史にも残らないような場末の戦いにしか思えない。もっともこんな苛酷な環境でここまで耐えてこれたのは奇跡に近い。ウェールズは、流石艦長をしていた事もあるだけに事態を把握して行動している。

「静かにしてくださいな。この状況が分からないの？」

「状況なんて知ったこっちゃないわ！もう帰るわ！こんなのもう沢山！！」

次に飛んだのは言葉ではなかった。

バキ！

ルイズの小柄な身体が宙を舞う。

能面のような表情で突き出したのは拳。

ルイズはティリエルに顔面を殴られたのだ。

顔は赤く腫れて、唇を切ったらしく血が滲んでいる。

「っ何すんのよー！」

痛みで涙目になりながら、怒りと腫れて赤く染まった顔を押しさえている。

カシャ！

その顔にサプレッサーが向けられる。

ルイズが周りを見れば、同様に自分に銃口が向けられている。

ルイズは震えた。

皆感情の籠っていない目で自分を見ている。

「だから、伊達や酔狂と一緒にしないで欲しいと言った。」

「私は本気……」

「ナイン。それなら文句なんて言わない。与えられた事を達成する事だけ考えればいいはず。ですが、あなたはただの我が儘な餓鬼ではない。」

「わたしは言いましたね？任務の妨げになる要素は全て排除すると。」

額にひんやりとしたサプレッサーが押し付けられる。

「貴女は今それに当て嵌まっている。ぎゃあぎゃああ鴉のように喚いて。害鳥は殺さなくてはね。」

その言葉でルイズは全身から冷や汗が出た。

あのワルドと同じような事を言われたらからだ。

「わ、私は公爵家令嬢よ。そ、こ殺したりなんかしたら……」

「一国の皇太子とチーム全員の命に比べたら他国の公爵家の三女の命なんぞ羽毛よりも軽い。こんな事もわかりませんか？」

掠れながらの脅しも通じない。

「最後に一度だけ選択肢をあげましょうか。

この状況に耐えられないようなら、別行動をとって帰ってもよろしいのだけれど。

別に無事に帰ろうが、捕虜になろうが、野垂れ死のうが、別に痛くも痒くありませんし構わない。

寧ろ手間が省ける。

足手まといは要りませんから。それとも自分が荷物である事を自覚して、尚且つ物のように黙って邪魔せずについてくるなら同行を許しましょう。」

怖いのは有能な敵より無能な味方と相場が決まっている。

「そ、そんなの……」

「時間がありませんから5秒で決めなさい。」

決かねているルイズに苛酷な命令をだす。

「え？え、ええ？」

「フューンフ、フィーアー」

まだ理解していないルイズを余所にカウントは始まる。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。」

「ドライ、ツヴァーイ。」

構わず続ける。

「アイーンス」

「わかったわよ！連れてってよ！！」

「結構。」

スツと銃口を外して外に向ける。

マリサ達も同様だ。

「さて、進みましょうか。」

杖を振ると同時に外界の音が入ってくる。

ルイズが騒ぎだしそうになったとき咄嗟にサイレントを張ったのだ。

そのまま静かに、村の端を通り抜ける。

虫の鳴き声や草木の擦れる音に混じって、家の中から艶っぽい女性の喘ぎ声が聞こえてくる。

同時に酒のせいか酔っ払いの声もする。

どうやら兵隊達は、お楽しみの真つ最中らしい。

私達も捕まったら、彼らの貢ぎ物になるだろう。

まあ、そんなへマやかすつもりは毛頭ないが。

でもこの分なら警戒もかなり薄いはずだ。

お楽しみに夢中になるくらいだ。

どうせなら朝まで羽目を外して欲しい。

宴を背にして一同は村を通り抜けた。

そのまま村を抜けて、再び森の中に入る。

「休憩。今の内に寝ておきなさい。時間が来たら起こします。それまでに疲れを。」

時刻は午前3時。

歩き始めてからおおよそ12時間経った訳だ。

自分達だけなら、もう少し行けなくもないが、慣れない者に合わせなくてはよりお荷物に成り兼ねない。

森の中で少し開けた大木の下で荷物を下ろす。

背囊から缶詰とレトルトパックを取り出してルイズ達に渡す。

不幸とかそれ以前に、食料は5人分だけだしおまけに、本来はもう少し近い地点から上陸するつもりだったので二日分しか持ってきていない。

だがどう見積もっても3、4日はかかるだろう。

分ければなんとか持つだろうが、足りない分はエクストリーム・かくれんぼよろしく、現地調達する事になる。

「食糧ゲツチユ。」

言った矢先からハンナが蛇を捕まえて頭を切り落としていた。

その後、身を開いて血を抜く。

勿論火は使えない。

煙や明かりで位置がばれる危険もある。

ただ魔法の火なら話は別だ。

有機物が燃えてるわけでないので、煙の心配は無い。

明かりに関しても、何かを被せれば防げる。

その通り蛇にポンチヨを被せるようにして中で軽くあぶる。

そのあぶった蛇の開きに塩をまぶして、何等分かした後皆に手渡す。

ウェールズやルイズ、才人はかなり複雑な表情だ。

魚みたいで美味しいのだが。

まあ、最初は同じ反応をする。

「美味しい？」

「ええ、美味しい。」

そう答えると毎回喜ばれる。

缶詰の中身はソーセージ入りミートソーススパゲティだ。

軍用であるが美味しい。

スパゲティはどここの国でも人気だ。

ただ、ルイズの口には合わなかったようだ。

所詮は軍用品。

いくら美味いと言っても栄養価と保存を重視しているため味や食感までどうこうするさくするような食品ではない。

贅沢を言うてはいけませんが、一流のコックのつくる一流の料理ばかり食べている彼等にはこのような食品の存在を理解出来ないのだから。

流石に文句は言うてはいないが。

無言の食事が終わるとあとは寝るだけになる。

「ねえ。トイレに行きたいんだけど。」

ルイズが辛そうな表情で訴えてくる。

「残念ですけど、そんなものありませんからそこらへんでしてくだ
さいな。」

「うそでしょ。」

「大丈夫、誰も見ませんから。」

顔を真っ赤にして俯く。

逆に見る奴がいたらヤバイ。

色々と。

かなり我慢していたようだ。

足が震えている。

「そんなの嫌よ!」

「じゃあ、家に帰るまで我慢してちょうだいな。」

ルイズは何も言えなくなり、しばらくうつろうつろしていたが生理現象
には逆らえず草むらに入っていた。

自然が私を呼んでいる、だ。

「どうかしたのか？」

入れ代わりにマリサが戻って来た。

地雷を埋めてきた帰りだ。

「別に。それより見張りは？先に寝る？」

「それじゃあ、先に寝せてもらっせ。交代の時には起こしてくれ。」

「勿論。一人だけ寝させ続けるわけないでしょう。」

最後まで聞かずに、マリサは銃を肩に掛けて大木にもたれ掛かって眠る。

特殊部隊にはこういった図太い神経でないと成れない。

さて、私は朝まで見張りだ。

今は、私と二ナの二人。

二ナは頭上の大木の枝から周囲を監視している。

危険なのは兵士たちだけではない。

匂いを嗅ぎ付けた、森の住人達もそれに含まれる。

辺境の森の中は危険な幻獣や野生動物の宝庫である。

特に闇の帳に包まれたら彼等の時間になる。

大半が夜行性だからだ。

夜中にぶらりと森に入ってそれっきり、というのは日常茶飯事である。

だから、滅多な事が無い時は夜中に未開の森に入ろうなんて者はいない。

今はその危険が増している。

動物達からの盾となる火と明かりが無い以上、いつでも襲えるからだ。

現に茂みの向こうからは、光る二つの鋭い目玉が幾つも見えて星のようだ。

ただ、こちらは起きていて睨みを効かせているため不用意には近づくことはなく遠巻きに眺めているだけだ。

ルイズはやや慌ただしく戻ってきた。

「君は寝ないのか？」

ウェールズがこちらに来る。

「見張りです。それより殿下こそ寝た方がよろしいですよ。明日も歩きづめになるでしょうから。」

ルイズを見ると、寝ている才人の膝を枕にして寝付いている。

「僕はこれからどうなるのだろうか？」

溜息を吐くようにウエールズが呟いた。

「不自由にはならないでしょう。新しいアルビオンの為に我々としては尽力をつくすつもりですから。」

「だと良いのだが・・・」

「信用出来ません？」

「頼りには・・・しているさ。」

「殿下の命は、我々が身をていしても守り抜くゆえ。御心配なさらず。」

木立の隙間から満天の星が見える。

この空の下で殺し合いが起きているとは到底思えない。

しかし世界は確実に回っている。

朝。日も高く上がり、大地を高めから照らしつける。
がさー！

物音が聞こえて、目が覚める。

今まで寝ていた根と根の間から拳銃を持って身を起す。

「わたしだぜ。撃つなよ。」

銃口を向けられた対象のマリサは苦笑しながら両手を挙げる。

そのまま銃を仕舞う。

時計を見ると7時。

少々寝すぎてしまった。

「他は？」

「うちら以外全員寝てるよ。」

見ると昨晚見たのと同じ姿勢で、彼等は寝ていた。

「ニナとハンナは斥候に行ってるぜ。」

追加補足を目を擦りながら聞く。

「なら戻ってきたら出発しましょう。」

日が高いうちは余り行動したくないが、森は深い。

それに目的地の進行方向には情報が正しければ、村や集落は無いはずだ。

朝食のビスケットをかじりながら、今後のプランを考える。

同時刻、ロンダース村近郊関所。

あたりには、アルビオン軍兵士が散開して辺りを搜索している。

関所の小屋の前に背の低い小肥りの中年貴族と同じく中年だが、しりとした格好の貴族が立っている。

マーカライト男爵と男爵の部隊を直接指揮するオケーズと言うメイジだ。

マーカライト男爵がごく一般的な貴族の格好なのに対してオケーズは軍人上がりのメイジだ。

彼らの前には、冷たくなった守衛の死体が横たわっている。

「ベルカ兵です。」

オケーズは傷口や痕跡からそう判断した。

「ふむ。」

マーカライト男爵が口髭を触る。

「おそらくだが、ニューカッスルにいたベルカ兵の残党だろう。脱出にでも失敗したのかの。」

「誰かを護衛しているようだ。そして我々の居た村を掠め、北西の

方角へ。」

「であるうな。」

オケーズの考えにマーカライト男爵も賛成した。

実際、彼等搜索部隊のターゲットはウエールズ皇太子だった。

ニューカッスル城が爆破されて、レコンキスタ軍が血眼になってウエールズの死体を探したが見つからなかった。

状況から既に船で脱出したとの包囲網を哨戒していた竜騎士から報告もあつた。

生憎、さしたるダメージを与える前に逃げられてしまい、急いで追撃部隊を編成したがその時には既にベルカ領内に入られてしまった。

しかしワルドからの報告も加味すると、もしかしたら脱出に失敗してまだアルビオン領内にいる可能性も低いがあつた。

ちよつどスパイ事件の影響もあつて、諸侯に動員令が下つたのであつた。

特にニューカッスル付近の貴族らには、ニューカッスルを囲むように包囲した後、その輪を狭めていくよう指示された。

「いかがなさいましょうか？ 議会に報告だけでもしておきますか？」

「否。それはいかん。我々だけで捕まえてみせよう。」

マーカライト男爵はきつぱりと言った。

「下手に報告でもすれば、クロムウエルの金魚の糞共や周りの公爵、伯爵共に手柄を横取りされかねない。」

「しかし・・・」

「いいのだ。捕まえたら、たまたま捜索中に不審な者を見付けそれがたまたま皇太子だったと、適当に言い訳でもすればどうとでもなる。それに万が一取り逃がしたとしてもなんの咎めも受けん筈だ。そもそも皇太子など『見付けてなどいない』のだからな。」

「わかりました。」

そう答えるオケース。

実際にはそう上手く行くだろうかと、心中思っていたが、男爵が宮中にどんな服で参上しようかと、ほそえんで皮算用をしていたので（付き合いが長いので、手に取るように分かる。）、脳の隅に置いた。

だがこれは確かにローリスク・ハイリターンな事だ。

それに足跡からして整然、8人がそこらの筈だ。

手持ちだけでも2個中隊。

それと後から合流する2個中隊を合わせれば大隊規模に匹敵する戦力だ。

いくら精銳だろうと、半分隊程度に大隊をぶつければ、十分どころかお釣りが来るだろう。

「よろしい。直ちに出発しろ。索敵を怠るな。最初にウエルズを見つけた奴には10エキューくれてやる。捕まえた奴には500エキューだ。おまけに宮中にも紹介してやるぞ。さあ行った、行った！」

男爵の焚きつけ（主に賞金の部分）で兵士達の士気と意欲が漲る。

「オケース。君は彼らがどこに行くと考えるかね？」

「ローランドには行きませんでしょう。リッシンメイズにもおなじならば。」

オケースはローランドとリッシンメイズのほぼ中間の地点を指す。

「タンジル岬を目指すでしょう。あそこはよい土地ですが、人はほとんどおりません。あそこなら脱出するにはうってつけの場所ですよ。」

タンジル岬。

それにはティリエルの持つ地図にも書いてあった。

書き加えられた、LZの文字の下に。

それから2日。

ようやくリッシンメイズから十数キロ付近のセーフハウスに到着した。

見た目はなんの変哲もない木造の民家だが、隣に半地下式の小さな建物が隣接している。

ルイズ達はマリサとヴィルヘルミナとで少し離れた地点で待機させている。

「右異常なし。」

「左クリア。」

「気配なし、了解。」

地面に伏せた状態でセーフハウスの周りを索敵する。

万が一に備えてだ。

既に先行されていて、待ち伏せされている可能性もあった。

「ハンナ、呼び出しをお願いします。」

「あいあいさ。」

無線機を指定された周波数に合わせて送信する。

「え、こちらリッターよりアーベ。応答願いますとござ。」

『・・・・・・・・』

「こちらリッター。アーベ、聞こえますか？聞こえてたら返答願います、どうぞ」

ハンナが呼び掛けるが砂嵐のようなノイズしか聞こえない。

「通じない？」

「うん。おかしいな。周波数はあってるんだよね。考えたくないけど、貰った周波数自体が間違ってるのか、機械が壊れてるのか、それとも……。」

機械を軽く叩くハンナの顔は、やや不安げだ。

「無線に出れない状態にあるのか。」

こくりとハンナが頷く。

「ニナはどう思う？」

「この状況だけではどうとも判断しがたいのでなんとも言えませんけど、どのみち入るしか有りませんから。」

「私と同感ね。なら、突入しましょう。私は表、ニナは裏口、ハンナはサポート。逃げるような者がいたらすいかする必要は有りませんから。敵との判断は特に。」

「突入はダイレクト？それともサイレント？」

「サイレントで行ければ良いけど、それは無理でしょうっから任せます。」

突入の打ち合わせをした後。

配置に着く。

「こちら、配置に着いた。」

『こちらも。いつでもどうぞ。』

「突入！」

静かに前進してドアに取り付く。

ドアには当然鍵が掛かっている。

アンロックは効かないので、手荒いがドアの蝶番を破壊する。

ハンナから借りた、マスターキーに装填した、ドア専用のスラッグ弾で蝶番を吹き飛ばす。

そのまま突入。

3発目以後は通常の散弾だ。

いつでも弾を叩き込める。

玄関にはいない。

すぐに隣接するリビングに入る。

するとそこには・・・

「おい、どうした？俺はノンケだって喰っちまう男だぜ。そんなんで俺がイクとでも思っているのか？構わずぶち込めよ。」

全裸の男が居た。

銃を向けられても男はなんの反応も示さない。

この台詞からみれば大物だと取れるだろうが、実際には当たり前的事だ。

彼はティリエルなどを見てなどいない。

現に彼は銃口から背を向けている。

先程の言葉は、『自分の真後ろに密着して立っている』若い貴族に向けて言った事である。

「わ、わかりました……………」

当然ながら彼もまた全裸であり、自分の大砲を……………
……………である……………。

「あんたもこれから出すから、しっかり受け止めるよ。」

そう今度は、自分の前に同じく密着している中年らしい貴族に言った。

「フオオオオオオオ！」

もはや言葉になっていない叫びを上げる中年貴族は頬を上気させて、顔はヘヴン事態と、とても形容しがたい表情で自分の息子を戦闘状態にして悶えていた。

まさしく知ってはいけない世界がそこに存在していた。

「え、あアーベーはどちらで？」

なるべく視界に入れないように、気を取り直して聞く。

でないと始まらない。

「俺だ。」

ようやくティリエルの存在に気づいたようで真ん中に挟まれているナイスガイの男が答えた。

「尋問が終わるまで待っていてくれないか？」

「わかりました……なるべく早急に。」

「努力してみる。」

やっぱり、しなくていい。

踵を返すと自分の後ろで思考停止状態に陥ってしまった二ナが固まっていた。

すれ違いざま、肩を叩いて正気に戻すと同時に退出を促す。

我に返って慌てて部屋から出る。

悲しいけどこれが世界だ。

間違いなくこの世界で起きている出来事なのだ。

これが真実である以上受け入れなくてはならない。

受け入れたくはないが。

「イ、ク、ぞ。」

「アッー！ー！！」

最後の二重演奏など私は聞かなかった。

しばらくして尋問（？）が終わった彼が出てきた。

何故か青いツナギを着ている。

たった今、アーベーのコードネームの意味が理解出来た。

だがこれも諜報活動ならありなのだろう。

女が男を誘惑するハニートラップは、スパイ方法の有名な一つだ。

だからこれも・・・うん・・・まあ・・・あり・・・なの・・・かな？

ただ対象が特殊過ぎてもの凄く限られるだろうが。

ちなみにばれた理由が、夫が仕事から戻ってこないので浮気を疑った妻が夫を尾行したら男と夫がそういう行為に及んでいて、すぐに貴族を狙う変質者として指名手配されたそうなの。

悲しい。

取りあえず、明日の朝までここで消耗品の補給と休憩を兼ねて滞在する。

何より護衛対象の足が限界に達してこれ以上は遅くなるだけだ。

歩き詰めで満身創痍だったルイズ達は喜んだ。

ここからタンジル岬までは歩いても一日かそこらで辿りつける。

走れば半日で着くだろうがその必要はまず無いだろう。

「敵がこっちに？」

「ええ。そう」

偵察から戻ってニナが告げた。

「敵の規模は、どのくらいかしら？」

「正確な数は分からないけど、少なくとも300人以上。横に広がって捜索中。恐らく私達だと。」

「余り好ましくもないわね。場所から言ってマーカライト男爵の軍だと見て間違いないでしょう。」

「奴らの速度と補足開始地点から考えて大体6時間の距離だぜ。」

「なら予定を繰り上げて早めに出発しましょうか。二時間程。」

「彼らになんて言われるかな?」

「文句を言われますね。絶対に。」

「額に2発ぶち込まれるよりはましでしょう。」

「筋肉痛かあの世行きか……よほどの馬鹿以外選択肢は決まってるだろうぜ。」

「問題はそんな馬鹿が、この世界には掃いて捨てるほどありふれている事ぐらいかしら?」

「はははは、違いなない違いない。」

最後に皮肉笑いをして話し合いを終わらす。

誰も聞いておらず、理解もしないだろう。

後は変わらず見張り、斥候、仮眠をシフトして朝を迎えた。

「やらないか。」

才人が目を覚ました瞬間、聞いた言葉であった。

「うおっ！」

目を開くとそこには、自分の目を見つめる男の顔。

思わず飛びのいた。

「ウホッ！」

代わりに男の傍らにいつの間にか立っていた中年の男が顔を赤くして何故か悶えている。

快楽と引き換えに人間として何か大事な物を無くしてしまったような様子に、ああはなりたくないといと心と貞操に誓う。

横を見ると皇太子も微妙な表情でこちらを見ている。

勿論ウエールズも才人もノーマルであり、そういう趣味はない。

ただし何故か男の顔を見ていると変な感情が沸き上がってくるので顔を極力見ないようにした。

その反対側の部屋では、ティリエル達がやや深刻な顔で地図を睨んでいた。

「まさかここまで速いとは。」

「私も一晩野営して出発は朝だとよんだんだがなあ。」

「予想外だったわね。」

事は偏在で偵察に向かった時だ。

本来想定していた距離よりも近く、活動中の敵に遭遇したのだった。

しかも斥候ではなく、全員が夜通し走らなければ到達出来ない筈の距離を。

噂で聞いただけだったが、レコンキスタ軍の兵士の一部は麻薬を使って身体能力を無理矢理強化しているとのことだったがどうも本当らしい。

ともあれ今まで稼いでいた数時間の距離を打ち消されてしまった。

今の距離は一時間か、良くて二時間。

今悩んでいるのは、背後の敵に一撃加えて少しの間行動を不能にさせるべきかしないべきかと、移動ルートを選定だ。

一撃を加えられれば時間は稼げる。

が、逆に敵の増援を呼び寄せてしまう可能性がある。

またルートだが、途中の山間を抜けるコースか少し下流の沢沿いに進むコースかである。

山間コースは、やや道が険しくタンジル岬までは少し時間がかかるが安全なルートで、おまけに標高が高い為無線も通じる事が出来る。

そうすればタンジル岬に着いた時にちょうど迎えが来る事になる。

一本の下流ルートは、タンジル岬までショートカットが出来るコー
スだ。

ただ逆に待ち伏せを受けやすいところでもある。

それに下流だと山が邪魔でタンジル岬まで無線が通じないことだ（
要するに待ち時間が生じる）。

利点はショートカット出来る点と、水の中を通るため追跡を巻ける
（犬を使っているため匂いが流れる）点だ。

結論は待ち伏せをして、かつ下流のルートを通る事にした。

日も高く上がり、日の光が母なる大地を照らすその下。

藪を掻き分け、草を踏み抜きながらマーカライト男爵の搜索部隊が
前進している。

少し高くなった所でマーカライト男爵とオケーズ、そして専属の護
衛が地図を見てあちこち指をさしている。

「君ならどうとる？私は沢沿いでは無く山沿いにタンジル岬を目指
すと思うのだが。」

「それは定石過ぎるでしょう。私なら裏を掻いてあえて沢沿いを進

むと思いませんな。」

「何故そう言い切れる？」

「彼らはタンジル岬で脱出をするつもりです。ならばなるべく早く辿り着く事を目指すでしょう。それにあれから足跡が更に増えました。大人数である山を越えるのは困難だと。なので「隊長！」

先頭に位置した部隊の伝令が坂を駆け登ってくる。

「報告します。連中の足跡ですが、山間の方向に進んでいます。」

「それ見たことか！」

男爵は自慢げに腹を撫でた。

その時。

ドガン！！

先頭の部隊の横でいきなり爆発が起きた。

爆発の付近に居た者は悲鳴と同時に吹き飛ばされ、離れていた者も一斉にバタリと倒れる。

突然の爆発で混乱する兵士達。

更に死は襲いかかる。

ドスン！！

またもや爆発が起きて、無事だった残りの兵士達をあの世に送る。

二度目の爆発は最初のよりも近くで起きた。

おかげで先頭集団はほぼ全滅してしまった。

(よし。)

茂みの下で起爆装置を両手に持ったマリサが後退する。

思いもよらぬ爆発と死者が出たせいで部隊の士気はガクンと下がった。

死体や負傷者の後送もあるだろう。

少こしだが時間は稼げた。

オケーズは進行方向の森を睨みつける。

「どうするのだ！？早く追わなければ逃げられてしまうぞ。急いで山に向かわなければ！」

「奴らは山にはいない！」

狼狽する男爵にオケーズは強く言った。

「何故分かる。」

オケーズにも確証はない。

だが分かるのだ。

彼らは山には行ってなどいないと。

「彼らは沢にいます。間違いなく。」

「………わかった。任せよう。」

男爵は力無く折れた。

オケーズは先程連絡しに来た伝令に近づく。

「後方の部隊に伝える。応援は何分で来られる？」

一同は沢を歩いていた。

この時期は雨がやや多い。

だが沢の流れは小さく、水も澄んでいる。

目的地まであと半分といった距離だ。

後ろからマリサが駆けてくる。

到着するとハンナから水筒を受け取る。

「上手くいったぜ。」

喉を潤して、奇襲の際に身軽にするため置いてきた荷物を再度背負い直す。

「なら一応しばらくは……安全じゃないみたいね。」

「隠れて！」

視界の先にはやる気の無さそうにこちらに向かってくる敵部隊が遠くに見えた。

とはいえ、向こうからこちらは見えていないらしい。

だが迂回するには遠すぎる。

やり過ぎすしかない。

茂みに伏せる。

敵は雑談やら欠伸やらしていて真剣に搜索する気は無いようだ。

大体16メートルあたり前を横切る。

と、その時。

「どこ触ってるのよ変態!!」

少し離れたとこにしゃがんでいたルイズが突然立ち上がり叫び声を上げた。

手でスカートを押さえている。

ルイズの足らへんには手が2本伸びている。

持ち主はアーベ어의虜となった二人の男で、顔にはヤバそうな笑みを貼付けていた。

完全に人間として終わっているようだ。

そんな者に状況判断という高度な行動は出来ない。

ただひたすら自らの欲求を目指して突き進もうとしている。

その結果がこれだ。

向こうの兵士達はポカンと立ち上がったルイズを見つめている。

いくら注意散漫とはいえ至近で叫び声と激しく動けば流石に気づかれる。

ただ、突然の出来事と、まさか本当に居ると思ってはいなかったの
で思考が追いついていないようだ。

「撃て！」

「自由射撃！薙ぎ払え！」

声と同時に数発ずつの射撃音が森に響き渡る。

特にやかましいのかミニミの連射音だ。

突っ立っていた兵士がバタバタ、ドミノ倒しのように倒れる。

「走れ！」

叫ぶと同時に駆け出す。

ぐずぐずしていると銃声で他の敵に、

「いたぞ！あそこだ！」

見つかってしまった。

走りながら敵の鼻面にグレネードを撃ち込む。

スポン！とインパクトの無い音で発射された40ミリグレネード弾は、走って来た指揮官の足元で炸裂する。

破片が辺り一帯に飛び散り、至近にいた敵兵を吹き飛ばす。

しかし、破片の洗礼を免れた者が反撃を開始する。

矢、弾、魔法が周りの木立にぶちあたり炸裂する。

木片があちこちから飛来する。

ハンナの目の前に剣を振り上げた傭兵が躍りかかった。

丁度死角になっていたようだった。

だが剣を振り下ろす前に振り向いたハンナのマスターキーで元居た位置に吹き飛ばされる。

生きていた時との違いは顔面にチョコチップクッキーのように鉛が入ったことか。

バレルをサイドスイングさせて排莖したら、ポシエットから別のグレネード弾を取り出して装填する。

元の位置に戻すともう一度敵目掛けて撃った。

グレネード弾が放物線を描いて飛ぶ。

敵も先程痛い目にあっているので咄嗟に身構える。

弾は敵の少し前に着弾した。

だが爆発はしない。

代わりに濛々と立ち込める煙が出た。

煙幕弾だ。

密度の高い煙は自分達と敵の間に障壁を張る。

何人かの兵士はもろに吸ってしまい、激しく嘔せている。

さもなくば、煙が目に入って開けられなくなってしまう。

慌てて煙から遠ざかろうとする。

その隙に一気にトングズをかます。

マガジンに残った弾をフルオートでばらまいた後、先に待避した仲間の後を追う。

煙が晴れて、兵士達が落ち着きを取り戻すまでには既に目標の姿はなく、森は静寂さを取り戻していた。

「男爵殿！ 搜索中の小隊から皇太子らしき一行を補足。 交戦したとの連絡が。」

マーカライト男爵はようやく合流した配下の部隊とタンジル岬を指していた。

「なるほど、それでどんな次第であるか？」

規模は既に大隊規模。 430名の兵士が集結している。

「どうも取り逃がしてしまったようで。 敵は沢から西の方角の方に逃走したようです。」

「やはり君の言ったとおりだったな、オケーズ。」

男爵が傍らのオケーズに振り向く。

だがオケーズは伝令から更なる情報を聞き出そうとしていた。

「損害は？」

「最初に発見した第3小隊と第9小隊の先遣隊が交戦するもおよそ半数以上が戦死か負傷しています。」

「戦果はどうした？」

「戦果は確認はされていません。恐らく無傷でしょう。敵がやせ我慢をしていなければの話ですが。」

「そうか。」

オケーズは表情を曇らせた。

一瞬しかなかった遭遇戦。

しかも与えた損害は人数の倍。

先の待ち伏せから抜けた数も加えると二個小隊が丸々潰された事になる。

たかが12人程（実際に戦闘に参加したのはその半分以下）の数でだ。

どうも敵の火力は高いらしい。

現在タンジル岬を包囲すべく部隊を分割している所だ。

だがオケーズは一抹の不安を思えた。

オケーズは首を振って有り得ないと否定した。

こちらでは人数で遙かに勝っている。

おまけに遙々大砲まで持ってきた。

負ける要因など微塵もない。

「ともあれ小隊の連中には10エキューくれてやらんとな。」

男爵が呑気そうに呟いた。

いつの間にか空は曇天に変わっていた。

森の中を走ること、しばらく。

あれから追跡の気配は無いが必ず戦闘になる。

深い森が急に開け、ぽつぽつと木や茂みが生い茂る草原が広がった。

タンジル岬に到着したのだ。

「もう疲れた〜！」

ルイズがへタリと座り込む。

だがまだ到着はしていない。

視界の遠く。

少し高い丘のような所が目的地だ。

「ほら、もう少しだからさ。」

「嫌よ。もう。」

「仕方ないな。」

駄々をこねるルイズに才人は小柄なルイズを背負ってやる。

ひゃっ、とルイズが小さく声を上げた。

5分程で到着する。

皆、荷物を下ろして座り体力を温存する。

この丘から、左は先程までいた森。

右は別の丘の見える。絶好のポジションだ。

ただし背後は断崖絶壁でこれ以上後退は出来ないが。

ハンナだけは無線機で洋上の艦艇と連絡をとっている。

ぽつぽつと空が涙を流している。

できれば嘔泣きぐらいであって欲しい。

灰色の空には雲しかない。

見上げれば吸い込まれそうになるほどだ。

この雲を見ているとまるで自分の心のようにだ。

どんなに自分を取り繕っても、決して私の心が晴れる事はないだろう。

だが、無駄に明るい晴れや絶望に染まった夜よりは、曇り空のがいくらか気楽だ。

何より私は曇りが似合っていると思っている。

「大尉。それでどうする？」

「そうね。今のうちにクレイモア地雷を設置しましょうか。クレイモアは森との中間と、向こうの丘の辺り。C4は敵が隠れそうな灌木と岩場に。ヴィルヘルミナはインターベイションで辺りを監視。森の中まで狙撃出来るわね？」

「もちろんですう。」

「結構。そして残りは簡単な陣地の構築。開始しましょう。」

大体だが、森からここまでの距離は約630メートル、向こうの丘は420メートル。

すなわち、丘の方は敵に接近されやすいのでこちらを要警戒した方がよい。

クレイモアは全体的に放射状に敷設。

その内側にC4の配置になっている。

ハンナの話では到着まで45分ほどかかる見通しだ。

それまで敵を近づけなければよい。

まず狙撃で頭を潰す。

それから銃撃を開始する。

捌ききれなかった敵兵はクレイモアで始末する。

ただし今回はヴィルヘルミナは竜化しない。

何故なら敵も対抗する為に竜騎士を送り込んだら脱出出来ても撃墜されるからだ。

「敵ですよ。」

スコープを覗いていたヴィルヘルミナが無線で知らせる。

丁度仕掛けも終わり戻る所だ。

あらかじめ決めておいた場所で伏せる。

遮蔽物は目の前に倒れる倒木と茂みだけだ。

手元には、ポーチから外したマガジンを並べてすぐに手に取れるようにしてある。

グレネード弾、手榴弾も同様だ。

「どっこい？」

「森の中。」

双眼鏡で確認する。

成る程、森の中に幾人も歩いている姿が見える。

ただこの距離では、弾は当たらないしそもそもが届かない。（曲射をすればかるうじて届くが、そんな芸当をアサルトライフルに要求するのは、ゴルゴ13以外誰もいない。）

唯一射程内なのはヴィルヘルミナのチエイ・タックM200インタ
ーベイションぐらいだ。

ヴィルヘルミナが狙いを定める。

意外な事だが、狙撃において竜に勝る生き物はいない。

高高度からUAVよろしく地上を監視できる程の視力は、同時にス
コープの倍率の限界を超えた距離の敵の姿を鮮明に写し出す事が出
来る。

更に空を飛ぶ竜は、当然鳥の持つ機能を幾つも持っている。

それは、地磁気、ターゲットとの正確な距離感、方位測定、果ては
気温や湿度、風向きや風量、惑星の自転までまるで手に取るよう
に把握できる。

更に使っている銃事態の能力も加算される。

インターベイション。チェイ・タックM200は、408Chey
- Tac弾と言う特殊な弾薬を使う。

重要な事はこの銃にはLRRS（統合射撃システム）が付属してい
て、その機械と感覚の誤差を出した後に狙撃するのだ。

最後に、強力な力だ。

銃をがっしり掴んだ手は、腕のぶれを無くし、発砲時の衝撃を無理
矢理抑込める。

その結果ターゲットに安定したまま弾丸を飛ばせるのだ。

現に今そうしようとしている。

まあ今回は800メートル前後なのでコリオリ効果はほぼ無いと言
っている。

その代わりアルビオン大陸自体の移動を念頭に入れて置かなくては
ならない。

サプレッサーに抑えられたがそれでも大きな銃声が周りに響く。

「ふう。ようやく抜けられそうだな。」

「そのように。」

騎乗の男爵とオケーズが呟く。

奇襲攻撃の後、部隊の再編の際に馬を回して来たのだ。

男爵の周りには、騎乗の重装騎士が6人と軽装の騎士が19人、そのほか銃兵、槍兵、弓兵、騎兵が散開している。

男爵でここまでの軍勢を従えるなどほとんど無い事だが、男爵が持つにはかなり広大な領地がそれを可能にしていた。

「ここまで追い詰めれば逃げ道などない。後はじっくり包囲して捕まえるだけだ。」

もし皇太子を捕まえる事ができれば、兼ねてから念願の上位の爵位を得る事が出来る。

いや、これほどの戦果だ。

伯爵どころか侯爵の位を与えられ更に領地も下支されるに違いない。

これからの一步が栄光と出世への階段を登る事になり、マーカライトの家名を一層輝かせる事になるのだ。

マーカライト男爵は馬を前に進ませる。

だが、その一步の行き先は栄光の階段などではなかった。

それは絞首刑台の13台目であった。

ただ当人が、その事に気づく事は生涯なかったのである。

オケーズの頬にぺちやりと水滴が付く。

上を見上げる。

雨は先程から一瞬やんでいた筈だが、また降り出したようだ。

たいがい雨が葉に溜まり、落ちたのだろう。

そう思い何気なく頬を触る。

しかし水の爽やかさはなく、べったりとした感触が指先の感覚神経から中枢神経に伝わる。

おかしいと掌を見る。

真っ赤だった。

慌てて体を見渡す。

何処にも傷はない。

安心すると同時に周りを見渡す。

しかし周りには誰も倒れたとか、そんな様子は微塵もない。

ふと視線が男爵に向けて目を見開いた。

男爵は少し前に見た姿と平然と手綱を握っていた。

ただ一つ、違いはある。

首がなかった。

あるはずのない首から上がなかった。

血は小さな噴水のように噴き出して銀色の鎧を紅の染料として染め上げていた。

「バーナード!!」

思わずファーストネームで叫ぶ。

周りの騎士達もその声で気づいたように慌てて駆け寄る。

男爵の体はゆっくりと傾ぎ地面に落ちようとす。

間一髪オケーズが受け止めるがぴくりとも動かない。

オケーズの体が主の血で赤く染まってゆく。

しばらく立っていた、オケーズだが男爵の死体を丁寧に横たえようと、怒りが滲んだ声で叫ぶ。

「奴らを殺せ!! 一人残らず殺せ!! 殺した死体は八つ裂きにしろ!! いいな!!?」

「ビューティフォー。」

見事仕留めたヴィルヘルミナに賞賛を送る。

敵もいきなり隊長が死んだりしたらさぞかしパニクる筈だ。

あるいは怒りに任せて突撃するか。

パシャー！と、サプレツサに押さえられた銃声が響く。

敵は散開して突撃に移るようだ。

右は分からないが。

すると右手の丘の方で小さな爆発音が響いた。

ワイヤー感知式のクレイモアに間抜けが引っ掛かったようだ。

続いてもう一発。

クレイモアの数少なく、間隔はかなり空いていたから右手の方もかなりの数が来ている筈だ。

左手からもちらほら森から出てきて突撃しようとしている。

二方向に向けて発砲をする。

大体において単射で正確に撃ち抜く。

いつもは連射速度の速いミニミも3、4発ずつのバースト射撃を繰り返している。

距離の関係上M416でなく、ヴィルヘルミナのG3SG-1を借

りて撃っている。

丘の敵はM416でも射程内ではあるが、弾道特性で頂上付近はやや狙い難い。

それに引き付けても遮蔽物も隆起も無い左は力モだが、右側は丁度下が別の丘で死角になってしまった。

それに駆け降りる敵を狙うのは意外と骨が折れる。

だから狙いが簡単な頂上で確実にキルする。

丘の頂上に頭が見える。

狙って撃ってから僅かな時間をおいて、相手の頭に着弾する。

すぐに十字線をずらして隣の敵兵を狙う。

その敵兵もすぐにお隣りの戦友と同じ運命を辿る。

ただ叩いても叩いても敵は沸いてくる。

一個大隊クラスであるから当然か。

これほどの数では、セミオートの20発弾倉もすぐに空になる。

弾倉交換が終わるとヴィルヘルミナがチェイ・タックを下げている。

弾切れらしい。

G3を渡すと、M416に持ち替える。

やはり5・56ミリだと弾が結構バラけてしまう。

「ハンナ。後何分で迎えは到着しますか？」

「後20分かそこらで来ると思う。」

まだ時間はかなりある。

中々苦しい戦いだ。

「何故過小な敵を、我が兵は突破出来ない!？」

オケースは苛立ちながら部下を怒鳴り付けた。

ただでさえ男爵が戦死して、気が立っている上に、仇の敵を倍以上の軍勢で攻めても犠牲ばかり出るので怒り心頭だ。

「申し訳有りません。なにぶん敵の銃が異常な程、射程が長く連発が聞くので……」

「馬鹿者！奴らの戦い方は第二次討伐聖戦で学んだ筈だろうが！」

「自分はその時子供でした。」

「くそ！砲はまだか。」

味方の攻撃が敵まで届かないなら、こちらも敵の射程外から攻撃するのが一番だ。

今回持って来れたのは、小口径の山砲6門、牽引式の中型榴弾砲が3門。

山砲は分解すれば楽に馬で運べるような大きさだが、榴弾砲については2頭で引つ張るか歩兵が5、6人ばかりで押すしかない。

その分破壊力は目を見張るものがある。

今、ようやく山砲が3門来た所だ。

ここでオケースは悩んだ。

砲撃とはいかに大量の砲弾を目標に撃ち込むのかで決まる。

当然その砲数も砲の口径も重要になってくる。

つまり少ない砲数では敵に打撃力は期待出来ない。

小口径なら尚更だ。

ただ相手は少人数だからそこまで威力にこだわる必要は余りない。

問題は火力ではない。

命中率だ。

お世辞にもこの大砲は命中率はあまり良くない。

観測手も測距儀もないので撃つ時は、たいてい直接照準が出来る距

離まで引き付けるか、何発も撃って着弾位置を確認して修正していくかのどちらかしかない。

今回は後者しかない。

問題は急いで持ってきた為に弾薬が十分なで無いという事だ。

だがオケーズは、一撃でも喰らえさせれば潰せると核心していた。

「左翼から騎兵15！右の茂みからも30が取り付こうとしている！」

「マリサは騎兵を！私は茂みをやる！」

「弾倉があと一つ！」

「手榴弾投擲！」

「弾！」

ハンナにマガジンを投げ渡して、不意に近づこうとしていた敵の団に手榴弾を投げる。

卵型のM39手榴弾は、敵の真ん中で炸裂した。

吹き飛ばされた敵を一瞥して、迫る敵を撃つ。

すぐその隣、その隣とキリがない。

弾薬も本気で足りなくなってきた。

空になったマガジンを抜いて、新しいマガジンを差し込んで右側面のボルト・フォアード・アシスト・ノブを押してボルトを前進させて、銃に命を詰め込んで丘を見ると見たくない物が見えた。

「まずい……」

それが煙を吐く。

「伏せて！」

だがそれは杞憂だった。

三発が時間差を置いて飛んでくるが、いずれも目標を摩りもせず雲海へと落ちていった。

照準を修正した二撃目に至ってはアルビオン側に近すぎて味方を吹き飛ばす次第だ。

結局位置を特定され、狙撃によって砲手が全滅してしまった。

カチッ。

嫌な音が聞こえた。

弾切れでマガジンを替えようと手を伸ばすが、そこにはマガジンが一つだけ。

「弾は？」

「これで最後。」

タン、と代わり映えしない敵の一人に向けて最後の弾丸を撃った。二ナはM1014に切替って撃っている。

手榴弾も使い果たした。

グレネード弾も同様だ。

残った武器は拳銃だけ。

それすら弾が少ない。

早く来てくれないと本気でまずい。

ちなみに他の連中だが、手持ちの武器で応戦してくれるの（オ人やアーベ、ウエールズ）、隅っこで震えてるの（ルイズとかルイズとかルイズ）。

そして、戦場を背中に花を摘んで遊んでいる馬鹿二人。

一番最後に対しては、殴り付きたい気分になるがそんな余裕は微塵もないので我慢するしかない。

マリサのミニミの銃声も最初の時より威勢がない。

敵もそれを察したのか、果敢に突っ込んで玉砕していく。

だがそのおかげで彼我の距離は50メートルにまで縮まった。

弾を撃ち尽くして使い道を無くしたM416を肩にかけて、拳銃に持ち帰る。

マガジンは合計4本。

それで顔のシワまではつきりと見える距離まできた敵兵に鉛弾をぶち込む。

5、6人倒した所で弾切れになってスライドが戻らなくなる。

「テイリエル！」

「フラムスロワー！」

マリサの悲痛な叫びに呪文で答える。

空気中の水蒸気を錬金で変換して可燃性の液体に変える。

ナパームだ。

粘性の炎はどす黒い煙を出しながら、大地を舐める。

同時にそれは敵にも振り注ぐ。

雄叫びが断末魔と悲鳴に代わる。

黒煙の向こう側で立ち止まった敵を風の刃と拳銃で薙ぎ払った時、耳に人間の叫び声と銃声以外の音。

天使の羽音が聞こえた。

才人はM1ガーランドに取り付くように撃ちまくっていた。

撃ってはクリップを入れ、撃ってはクリップを入れを繰り返していたとき。

耳に馴染みある、しかも懐かしい音が聞こえた。

連続的な風を切る音とエンジン音が重なる独特の音。それが背後の断崖から姿を現した時、思わず叫んだ。

「ハインド!？」

突如現れた鉄の竜は敵に怒りのブレスを発射した。

機首の20ミリ機関砲弾は着弾の土煙を上げながら敵をバラバラに薙ぎ払い、ガンポッドからのロケット弾は敵を引き裂き吹き飛ばす。

『こちらブリッツ1。遅くなってすまない。これより敵勢力の掃討を開始する。なお、回収はブリッツ2が行います。』

「了解リッター1-1。感謝します。」

ベルカ空軍攻撃ヘリコプター、フォツケアゲハリスFa424。

通称カノンドラツへは、謎の物体の襲撃におののく敵に破壊神の如く、死の制裁を与える。

勇敢にも杖や武器を向けて応戦する敵も、恐慌から武器をほつり投げて一目散に逃げる敵も容赦なく吹き飛ばす。

やっとの思いで到着した残りの大砲も、運び手がなくなり動けない状態でロケット弾が直撃し、一瞬で鉄屑と化した。

カノンドラツヘが大部分の敵勢力を引き付けているが、僅かに難を逃れた兵士達がしつこく攻撃を仕掛けてくる。

既に皆拳銃の弾も残り僅かだが、出し惜しみする余裕など全くないので遠慮なくぶち込む。

味方の死体を盾にマリサに肉薄しようとした剣士は死体の体ごと貫通した50口径マグナムで後ろにひっくり返る。

剣士が白兵戦以外で銃兵に勝てる筈がない。

3人程列なつて突っ込んできた敵に水晶の槍を突き刺したところで迎えがきた。

見た目V-22、オスプレイに似た外見ティルトロータ機のフォックウルフFW622ドラツヘが崖に近づく。

機首に搭載された20ミリ機関砲は火を噴かない。

代わりに機体側面のドアに備え付けられたMG42が援護の弾幕を張ってくれる。

後部昇降ハッチが開いてMP40を持った味方が三人、姿を現した。

そのうち二人は、廃人同然の貴族二人の脇を抱えて機体の中に消えていった。

「大尉！これで全員ですか？！」

「ええ！そう！」

ローターの風を切る音と生み出す強風で叫ばなくては声が通じない。軍曹の階級章を付けた兵士が後ろのルイズと才人を怪訝に見るがすぐに視線を戻す。

「なら急いで下さい！時間はもうありません。」

頭上をカノンドラツヘが通過する。

すべての兵装を使い果たしたようだ。

「ちょっと、私達はトリステインに戻らなきゃいけないのよ！」

「我々は母艦に戻りしだいブレイメン基地に帰還する予定です！」

「そんな・・・」

ルイズががつくり頭を下げた、その時地面に穴が空いた。

「待ってくれよ、ヴェルダンデ。何処まで穴を掘れば気がすむんだい？」

穴から声が響く。

「誰だ！！貴様。」

「ひい！？ば、僕はトリステインの……」

ドスの効いた声に驚くギーシュ。

ウケる。

「まあ、とりあえず。問題は解決。」

すでにドラツへに全員が乗っている。

「ミスターグラモン。」

「何だね一体！」

「三十秒間待ちますから急いで行って下さいな。」

「はあ？」

疑問符を浮かべるギーシュを脇に流して、最後に残ったC4を穴にほうり込む。

逃走経路は潰しておくに限る。

タイマーは原始的だが導火線を使う。

責めてものプレゼントだ。

すぐにドラツへに飛び乗ると直ぐさま発進してアルピオン大陸から遠ざかる。

「偉大なる我が祖国よ！私は必ずここに戻ってくる！！アイ・シャール・リターン！！！」

ウェールズが歴史に残る宣言を搭乗ハッチからアルピオン大陸に向けて叫んだ。

私も靄がかかりつつある幻想的な石灰石の断崖を目に焼き付ける。

その断崖でくつきりと爆発による閃光が煌めく。

次に来る時は、戦争の時だろう。

ビシューーン、カキユイン、ビシッ！

と風なりと金属の金切り声の後、嫌な音が耳に入る。

途端、尻辺りから痺れと麻痺に似た感触の後、焼き印を押されるような激しい痛みが走る。

「うぐっっ！」

異変に気づいたマリサやウェールズ達が近づく。

手をやると、血で真っ赤に染まっている。

「大丈夫か？何処やられた。」

「あ、あんまり口にはしたくないところですね……本当に。」

痛みも耐えられる程度だ、平気じゃないけど。

傷口も場所が場所だけに致命傷でも何ともない筈だ。

大袈裟過ぎるのもいやなので大丈夫だと伝える。

全く、私はワンオーワン所属じゃないのに！

結局こういうオチか。

結局、帰還までに椅子に座る事は出来なかった。

エネミーライン(後書き)

やっとレポートが終わった。

水面下の争い

ウェールズ亡命作戦が完了した2日後。

ブリミル歴6242年6月31日（面倒なので原作の暦とは違いますが）

この日はハルケギニアの歴史に残る激動の日となった。

アルビオンでは最後の最後まで徹底抗戦を叫んでいた、プリマスが陥落して全アルビオン大陸をレコンキスタが掌握した事でアルビオン革命政府が各国に新政府樹立を公布した同時にトリステイン、ゲルマニア、ベルカに不可侵条約を打診した。

トリステインとゲルマニアでは、正式な婚姻の文章と軍事同盟の調印が行われた。

ベルカでも、ベルリンに設置されたアルビオン亡命政府が正式に結成し、以後自由アルビオンと名乗り対レコンキスタ抗戦の継続を宣言した。

ベルカ政府もコミュニケを発表してこれを承認。

同時にクロムウエルの神聖アルビオン共和国政府を正統な政府と認めないと宣言した。

当然、ベルカとアルビオンは勿論トリステイン・ゲルマニア両国に

も緊張が走った。

元々の軍事同盟も日々強大化する対アルビオンに向けてのものであった。

とはいえすぐに戦争になるのも避けたかった。

トリステイン軍は先々代のフィリップ3世を境に弱体化しつつあり、指揮官も経験不足が目立ち士気も虚ろいやすい。

ゲルマニア軍は精強で数も多いがそのほとんどは諸侯軍で皇帝の力も軍も弱い。

おまけに各諸侯同士が対立していたりするので全体的な統率は難しい。

さらにに諸侯のほとんどはアルビオン遠征には批判的な者が多い。

なにより問題なのは艦隊の数である。

第二次ベルカ討伐聖戦で疲弊しきり、慢性的な財政難で数が揃わないトリステインと、元来陸戦を重視して戦艦の数が過小でほとんどが輸送船改造の仮装巡洋艦レベルのゲルマニアとでは、ロイヤルネイビーエアフォースで名高いアルビオン軍を相手には満足に戦う事は出来ない。

そんなところに降って湧いたような不可侵条約の打診にトリステインとゲルマニアは願ったり叶ったりであった。

そもそも条約を結ぶ事でアルビオンが戦争を起こすのを躊躇させ戦

争を回避するのが目的だった。

しかしベルカと自由アルビオン政府は神聖アルビオン共和国に対して事実上の宣戦布告をしたことで状況は一変した。

具体的にはベルカや自由アルビオンと手を組んで戦うべきか、不可侵条約を結んで平和を守るべきかで意見が真つ向から対立したのだ。

そして真つ先にベルカが不可侵条約を蹴ったことで状況は更に悪化することになる。

前述以外にも更に幾つかの意見が出た。

ベルカと自由アルビオンに不可侵条約の加盟を強要する強行平和維持案や、あえてアルビオンとベルカを戦わせてどちらかが疲弊、弱体化した後攻撃する漁夫の利案。

中でも過激だったのが、アルビオンと同盟を結んでベルカに宣戦布告する、反ベルカ硬派案。

結局堂々巡りした揚句決められたのが、とりあえず不可侵条約を結んでどうなるかを検証してみる、といった日和見案で終始してしまっただ。

肝心のベルカとアルビオンもお互いに重要品の輸出禁止と国内のアルビオン関係の資産凍結をしただけで実行使までには至らず、正式な宣戦布告もなされなかった。

ハルケギニアに一触即発の危機は去った……かに見え、表明上だけの平和が見えた。

しかし、水面下では激しい戦いが行われていることを当事者以外知るよしもない。

ベルカ。ブレイメンはベルカ第三の都市とも呼ばれる港街だ。

この街を支えるのは、ベルカ1巨大な湾港施設で人口は10万を超える。

漁港、貿易港、軍港、造船所、ドック、乾ドック、燃料貯蔵庫など船に関連したすべての施設が存在しているため各国のありとあらゆる船が停泊している。

特に海軍基地はベルカ海軍の主力とも呼べる北海艦隊の停泊場所であり、空軍基地も隣接している。

そんな重要地点な上に国際港であるため人の出入りが激しいのは言うまでもない。

当然警備やセキュリティも当然ベルリン並に厳重である。

加えて、自由アルビオン軍の本拠地（ベルリンは自由アルビオン政府の中心だが比較的大人数が収容でき艦隊も動員も残存艦隊の整備も出来るため）でもありアルビオンとの緊張も高まっている為に更に厚い厳戒体制が敷かれている。

そのブレイメンのパブ。

今や輸入が途絶え、国内の備蓄品しか市場に出回らなくなり値段が高騰したスコッチウイスキーをロックグラスに注ぎながら二人の商

人風の男が密談を交わしている。

「これが例の情報か？」

「そうだ。ここと、ここに……。」

その光景をアルビオン人の店主は見て見ぬ振りをしている。

金を貰っているからだ。

だがすべての人間が見て見ぬ振りをしていないとは限らない。

談笑で賑わう店の前で空冷エンジンの独特な音が止まり酒場の扉が開かれてコートを着た男と憲兵が入ってきた。

もちろん全員銃を持っている。

「ゲシユタポ……。」

誰かが小さく呟いた。

「あの、当店に何か問題でもありませんでしたのでしょうか。」

店主が慌ててカウンターから出てびくびくしながらご機嫌伺いをする。

鷹のような鋭い目をした丸眼鏡の男が高圧感たっぷり店内を見渡すと店主を見下げたように見て告げた。

「この店と客にスパイが紛れ込んでいるとの通報があった。」

その言葉で店主は真っ青になった。

「そんな滅相もない。当店共々、国家と偉大なる指導者に常に忠誠を持って……」

「言い訳はいい。下手に隠し事をするとう強制収容所行きだぞ。」

拳銃を突き付けられてたじろぐ店主。

「ここにいる全員は身分証か渡航許可証を見せるように！ついで荷物の検査をする！身分証が無い者は今のうちに申し出る。下手に抵抗したり逆らったりすれば、どうなるはわかっているだろうな！」

憲兵が店内のすべての客に聞こえるように恫喝する。

後続の憲兵や捜査官が客の身分証をチェックして手荷物検査をし始める。

その様子をゲシュタポの男は鋭く眺めている。

遂にカウンターの二人の席に捜査官がきた。

二人は顔を一瞬見合わせて、ダータルネスからラ・ロシエール行き
のサンタ・クララ号の入港証明書を見せ、もう一人はランドバーク
貿易商の職業証明書を見せた。

店主が一瞬二人を見た。

それをゲシュタポは見逃さない。

「そこのお前とお前。こつちに来い。」

店主のそぶりから二人に何かを感じたのだ。

「こいつらを嚴重に調べろ。」

捜査官が頷き、立つように命令する。

しかし二人は動こうとしない。

「さあ、立て！」

痺れを切らした捜査官が拳銃を抜こうとした。

「立つんだ！」

突然二人が捜査官を突き飛ばして身を翻す。

だが、懐に隠した杖を抜くよりもゲシュタポのほうがかつた。

杖を相手に向ける前にワルサー PPK が火を噴いて、杖も持った腕と撃ち抜く。

二人は激痛で腕を押さえながら床を転げ回る。

カウンターからも、まだ捜査を受けていなかった下男がショットガンを持って抵抗しようとしたが、憲兵のルガーを頭に喰らってひっくり返る。

最後の力で撃たれた散弾は天井に穴を開ける。

別のカウンター席に座っていた男が慌てて、カウンターにまだ置かれていた極秘情報の資料をわしづかみにして逃げようと裏口のドアを開けて角を曲がった。

途端、MP40の連射音が響く。

開いたドアから書類を持った手が見えてそこから赤い水溜まりが広がってゆく。

客がパニックになって騒ぎ出す。

が、憲兵が天井に向けて拳銃で威嚇射撃をしたことで、薬莢が床に落ちる音が聞こえるくらいに静かになる。

店主が震える足どりで近づく。

「わ、わ私は、た、た……か、金を貰っただけで……」

ゲシュタポは無言で冷たい目のままおどとする店主を見つめる。

そして内から外に振りかぶる形で店主を殴る。

店主は殴られた勢いのままカウンター席に突っ込んだ。

もろにぶつかった椅子が壊れて、衝撃で棚の皿やグラスが割れて破片が飛び散る。

店主の顔は鼻血で真っ赤に染まっている。

「売国奴が。」

ゲシュタポが呟く。

「こいつらを連行しろ。」

部下が倒れているスパイと店主を脇に抱え表に連れ出す。

下男と別のスパイの男の死体もズルズルと引きずっていく。

「あなた！」

2階から店主の妻らしい女性が駆け降りてくる。

そして血だらけの夫を見て叫んだ。

「あなたたち、なんて酷いことを！」

「奥さんですね。ご同行願います。」

「一体夫に何の罪があるの？」

「国家反逆罪ですよ。この男は端金で国家の秘密を売るのを仲介した犯罪幫助の列挙とした重罪人だ。」

「そんな……そんな横暴が……認めません。絶対に認めません。」

「横暴？お前達を受け入れた国家を裏切るのは横暴でないのか？」

「止めるマリア！彼らに逆らうな。妻は関係ないんだ。頼む信じて

くれ！」

「裏切り者の言う事なんざ誰が信じると思う？二人共連行するぞ。」

収容車の後を憲兵隊長とゲシュタポの乗るキューベルワーゲンとホルヒ・オリンピアと他の憲兵隊の乗るホルヒ108、オペル・ブリッツ、ハノマーグ装甲車（S d . K f z . 2 5 1）が後に続く。

彼らは夜と霧の中に消えていった。

こんな出来事は最近良くあることだ。

これも平和と秩序を守る為の仕事である。

外交の道程は辛い

ウェールズ・テューダは、窓の外の暗闇に包まれた過ぎ行く景色を眺めていた。

自由アルビオン政府代表として急遽開かれる会議の為、ベルリンからドルムンムントのウルフェンシュタイン城に向かっている。

ただし馬車ではなく防弾仕様のベンツ770Kだ。

勿論周りは護衛に囲まれながらアウトバーン（高速道路）を突っ走っている。

他の車は一切走っていない。

それどころかウェールズ皇太子が移動中ということ自体、政府の上層部しか知られていない。

それは道路を丸々封鎖して、しかも目立たない夜に移動させている事からもわかるだろう。

正直な所、政府もこの移動について、かなり神経質になっていた。

頭痛の種はウェールズの命を狙うテロの事だ。

レコンキスタにとってアルビオン王族は目障り以上に脅威である。

テューダ王朝が存続する限り、クロムウェルの革命政府は他国から

容認されないであろうからだ。

しかし、ベルカ政府はウェールズの引き渡しを拒否したし、暗殺という手段も蟻のはい出る隙間もないようなベルリンの警備体制に手も足も出なかった。

そんな中で移動途中は暗殺には絶好の機会である。

それを裏付けるように先日通過ルート of 資料が流出して、危うくレコンキスタのスパイの手に渡りそうになった。

幸いにも、犯人は捕まり持ち出された資料も確保出来た。

しかし念のために移動ルートも別のルートを選び直し、前日には進行上に危険物が仕掛けてられていないか綿密な捜査をしている。

「はあ……」

「どうかなさいましたか？殿下。」

ため息をついたウェールズを補佐官となったパリーが気遣う。

「少しな。」

「殿下もお疲れでしょう。何分やる事は山積みですからな。無理もありません。」

「いや、別の事だ。」

「ほっ?」

「アンリエッタの事だ。」

考える余裕が出来たからか、ふと思いついた。

「まだご執心で。」

「そんな簡単に吹っ切れる程、私は人が出来ていないよ。」
手元の宝箱を開ける。

もはや何も入ってはいないが、その裏。

アンリエッタの肖像を見つめる。

レコンキスタが台頭する頃から、叶わぬ恋だと百も承知していた。

しかし、後数日でゲルマニア皇帝にアンリエッタは嫁いでしまうのだ。

けれど何故かそれを受け入れてしまっている自分がいるのには少し驚いた。

それに、思うのだ。

正直な所、これは本当に恋だったのだろうか。

アンリエッタとは、ラグドリアン湖以来ほとんどあっていない。

つまり、今の心は同じ境遇で付き合っていた時の未練なのではない

か。

ウェールズはふと何かを探していた。

周りを護衛しているのは、武装親衛隊にケルベロス。

いずれも精鋭中の精鋭のダス・ライヒSS第2装甲大隊とケルベロス首都圏特別警察隊からもエリートから選抜されている。

暗闇の中、並走するツェンダンプ・サイドカーやキューベルワーゲン、ホルヒ108の中から目当ての少女の姿を探していた。

そこでふと、彼女が第1装甲擲弾兵大隊ライプシュタンドルテ・アドルフ・ヒトラー所属だったのを思い出した。

どつりで居るわけが無い。

こんな事を考えるのなんて、かなりあの事が堪えているのかな。

と自重する。

それは、トリスティンとゲルマニアが神聖アルビオン共和国と名乗る裏切り者と不可侵条約を結んだ事だ。

不可侵条約を結んだ事は少しばかりショックだったが、ある意味わかりきった事であったから覚悟は出来ていた。

しかし、より問題だったのはトリスティン・ゲルマニア両政府がこちらに何も言わずに条約を結んだ事だった。

発表するタイミングはレコンキスタと被ってしまったが、それでも知らなかった筈はない。

せめて一言ぐらい会議なり起こして欲しかったのだが、それもなかった。

その意味する事は一つ。

レコンキスタの神聖アルビオン共和国を正式に認めたことに違わない。

不可侵条約を結んだ所で彼らの大義名分の王族撲滅・聖地解放は変わらない。

どの道、アルビオンは地上の足掛かりとして攻撃に移るに決まっている。

そして地理的にも戦略的にもトリステインが望ましいのである。

恐らくそれを見込んでの不可侵条約なのだろう。

戦時の緊張感で相手を常に警戒させるよりは、平和と言う名のカーテンで相手の警戒心を遮れば、例えば港に軍を集結させようと彼らは平和を疑わないだろう。

最初の砲弾が自分達に降り注ぐまで。

最悪なのは、その事について彼らが全く考える余裕も無い事だ。

正直、ベルカに亡命してよかったとも思う。

最初はアンリエッタがいるトリステインが国際的な地位からしたらよかったとも思ったが、立ち位置が不安定なトリステインやゲルマニアよりは、少なくとも敵を見定めて立場をはっきりしているベルカで正解だったのかもしれない。

今回の会談はその事をゲルマニアとトリステインに伝え、自分達の立場を今一度はっきりさせておく機会だ。

恐らく二回目は無い。

二回目があるとすれば戦火で大地が炙られた時だ。

ウェールズは、キツと心と体を引き締める。

ウルフェンシュタイン城はベルカでも数少ない昔からある城だ。

一説では、吸血鬼の王が作ったとか、追放された伯爵が住んでいたとか、あること無いこと囁かれているが実際に歴史に詳しい人物ならそれほど興味をそそられる代物ではない。

しかし、そこまで噂が立つ程の理由は外観にある。

ウルフェンシュタイン城は、トリステイン城のような美しさもヴェルサイテル宮殿のような荘厳さも無い。

シンプルだが山を丸々一つ包み込むような巨大な造りでその周りを頑丈な城壁で囲まれている。

城のデザインや装飾も、どちらかと言えば悪趣味とも言えるシロモノだ。

周りを鬱蒼とした森に囲まれてそびえ立つ様は、姫や王が住むような美しく偉大と言うよりはむしろ、悪魔や化け物が住み着いた悪魔城といった感じで不気味だ。

やけに明るい月明かりに照らされて、余計雰囲気が出ている。

ウェールズの乗ったベンツが鉄格子の門の前で止まるとキイと金属の軋みをならして扉が開く。

車はそのまま進み、噴水がある玄関口の前で停車する。

入口であらかじめ待機していたアルゲマイネSS隊員がドアを開けてウェールズを案内する。

中は予想に反して結構明るかった。

会議室のホールのドアを開けると既に先客がいた。

長方形のテーブルに座っているのが4人。

トリスティン代表エティエンヌ^{II}フランソワ・ド・シュワズール公爵とゲルマニア代表カール・フォン・ブオル^{II}シャウンシュタイン伯爵。

そしてそれぞれの書記官兼補佐官がそれぞれ控えている。パリーが傍らに座り、やや遅れてベルカ代表のリツペンドロップと書記官のリッツが席に着く。

無駄に広い部屋にたった八人しかいないのには、もの哀しさを感じざるを得ない。

「ふむ、このワインはわしの口にはあわんな。」

肥えた腹を窮屈そうに椅子に収めているシュワズール公爵が出されたワイングラスを揺らしている。

彼はトリステインでも有数な大貴族の家系だ。

故に外交官という職務についている。

しかし有能と言われる人物には程遠い。

評価の方もフィリップ3世よりはまし、といった有様だ。

「我々はワインの品評会に来たのではないよ。公爵殿。」

もつともらしい事をいうシャウンシュタイン伯爵だが彼もまた、シュワズール公爵同様有能な人物では無い。

彼は以前ガリアとの会談でガリア大使を怒らせて、戦争の危機にまで問題を発展させて左遷された経歴を持つ人物であった。

ウェールズはこれに痛く失望した。

トリステインもゲルマニアも、もはや自分達をさしたる重要な存在としてしか見ていない事を実感してしまった。

結構会議も全く成果の無いまま、僅か50分で終わってしまった。

ウェールズの忠告も検討しようの一言で握り潰されたのだった。

しかし、一つだけ成果と呼べるか疑問だがあるにはあった。

それはウェールズにトリステイン、ゲルマニア共々、期待するに値しない存在であると改めて判断出来るだけの材料を手に入れた事だった。

とある宰相の憂鬱

トリステイン城、マザリーニ枢機卿は財務大臣のデムリと私室で話し合いをしている。

「なんと…いう事だ…」

「しかし、これが現実です。更には…」

「デムリ、すまないが後でにしてくれないか。これ以上聞くと寿命が縮みそうだ。」

マザリーニはトリステインの枢機卿である。

先代亡き後、不在となった王の代わりにトリステインを納めているといっても過言では無い。

人格は温厚冷静、能力に到っては極めて優秀。

彼のおかげでトリステインは辛うじて国としての体裁を保っているのだ。

彼がいなかったら、トリステインは他国に侵略される前に、財政破綻と内部紛争でバラバラになっていたであろう。

彼の最大の欠点を上げるとしたら簡単な事だ。

トリステイン人でない事と官僚たる貴族の信用が無い事だ。

彼が政治を担う事となった発端は若くして亡くなった先代からだが、ここまで問題が膨らんだ要因まで行くと、先々代のフィリップ3世にまで遡る。

フィリップ3世の時にトリステインは戦争を繰り返した。

連戦連勝のおかげでかつての領土を取り返して、民衆と貴族にトリステインの栄光は過去のものでは無いと自信をつけさせ、取り分け貴族文化は領土や賠償金のおかげで華やかになった。

戦争の財政難もエスターシュと彼の残した政治方針を受け継ぐ事で、トリステイン経済は活性化。

貴族、平民共に生活のレベルが上がった。

貴族や庶民のだれもが、英雄に対して無条件の服従と忠誠を誓ったのだ。

しかし栄枯盛衰とあるように、どんな栄光でも陰りが出てくるのは必然である。

その陰りが見えだしたのは、当時ロマリア教皇インノケンティウス3世が起こした聖戦。

ハルケギニア史上最大とも言われる戦争。

トリステインでは、最悪の戦、英雄王の最後の戦場とも呼ばれる戦い。

俗に言う第二次ベルカ討伐戦争である。

この戦争はハルケギニア史上類を見ない継続した戦いが2年半も続いた戦争となった。

この戦争は総力戦となり、英雄王も友軍ながら高圧的なロマリア軍や死に物狂いで反撃するベルカ軍に手を焼いて、戦争は長引いた。

長期戦はトリステインの許す所でなく、潤沢だった筈の財政も収入を遙かに上回る戦費に食いつぶされて赤字に。

国内は物資の不足と折からの凶作で餓死者が溢れんばかりになり、結局教皇の突然の死去とフィリップ3世の戦死で幕を下ろした。

フィリップ三世の死後トリステインは混乱に陥ったのは、言うまでもない。

戦争自体はガリアの仲裁でベルカがトリステインに大幅に譲歩して、名目上はトリステインの勝利となった。

しかしトリステインにとって、僅かな土地と賠償金だけでは、到底賄えない程の損失だった。

更に拍車をかけたのが歳入不足だ。

世の中とは常に移り行くものであり、エスターシュの経済政策も既に効力を失いつつあった。

まさに勝負に勝って喧嘩に負けるといった典型的な有様であった。

これが、勝者無し戦争とも呼ばれる所以である。

しかしこれはトリステインの転落のほんの始まりであった、戦争が終わった後、トリステインが直面したのは後継者問題だった。

世継ぎを決めようにもフィリップ3世には、娘のマリアンヌ王女しかいなかった。

しかし、女王としてはマリアンヌは幼な過ぎたし、何より政治家には向いていなかった。

王族の子供なら当然帝王学を学んでいた筈だったが、娘を溺愛していて純粹無垢なままでいることを望んだフィリップ3世によってその項目は省かれていた。

となるとやはり誰かしら婿を取らせるしか方法はない。

だが、適当な人物がいなかった。

主だった家系の貴族はほとんど戦死しているか、もしくは幼な過ぎたか。

期待されたヴァリエール公爵の長男には、既に相手がいた。

適当に誰かを継がせて政治を行うにも適当な存在がおらず、議会も国民も王の直接統治を望んでいた。

そんな中に、救いの手（……という名の混乱の種）を差し延べたのは、アルビオンだった。

相手はアルビオン王の弟で、歳も比較的近いとあってこれを受け入れた。

勿論、只ではなくトリステインの港の使用料と停泊税の免除。

関税の引き下げ。

東方貿易の出資を持ち掛けた。

マリアンヌも結婚を受け入れたことで、めでたしめでたし……とは行かなかった。

貴族の中には、アルビオン王族との婚姻に否定な者が何人も存在していた。

彼らの主張は、トリステインの政治はトリステインの王族のみが治めるべきである。

アルビオン王族に任せた日には、国が乗っ取られる、と。

新しいトリステイン王は、政治に関しては博識であったがフィリップ3世と比べて、勇猛さと気迫が足りなかった。

更に言うとかリスマがなかった。

平凡で合理主義者だった彼は、先代と良く比較された。

前が良すぎと後がそれなりだと幻滅してしまうのは人間の性だ。

何より痛いのは、今の王がフィリップ3世の血を引いていない事にある。

当然ながら、本人の能力に関わらず国王の威信は低下した。

それに比例するように、官僚や大臣の権力は力を増していった。

フィリップ3世の下で自信を持ち、豪華な生活をおくっていた彼らは、ますます自分達の欲望を増長させていった。

そして自信過剰になった貴族は、今まで以上に横暴になり、好き勝手し放題となった。

そしてそれが、きつかけとなって起きたのがトリティン・ベルカ事変だ。

それまで強いストレスに耐えながら激務をこなしていた王に限界が訪れた。

事変が解決した三日後、朝礼の最中突然倒れた。

結局介抱虚しく、夜には息を引き取ってしまった。

またしてもマリアンヌ王妃に冠がまわって来た。

しかし、マリアンヌは喪に伏してしまい、王位継承を事実上拒否してしまった。

残されたのはアンリエッタ王女。

こちらもやはり幼な過ぎたし、本人も冠を被るのを嫌がった。

そこに突如現れたのは、当時から枢機卿だったマザリーニであった。王の補佐を勤めていたマザリーニは、マリアンヌ王妃の嘆願もあり、宰相に就任した。

しかし面白くないのが貴族である。

外国人の彼が自分達より国をうまく取り纏めて、自分達より国を知っているのが気に入くない。

さらに打ち立てた政策が理に適った正しいもので、毎回成功を収めているのである。

それはまるで、自分達が必要とされていないと、子供地味な嫉妬を一方的に燃やしているのである。

自分の無能を棚に上げて。

それでマザリーニ対して逆らったりするのだ。

彼にとっては悪循環だ。

病院で言えば、薬をうつのだが、いつかは副作用で死ぬ。

けれど打つのをやめた瞬間死ぬので薬を止める訳にはいかない。

といった具合だ。

このような、重過ぎるストレスで心身共にやせ細り、髪は全部白くなり、そして今では毛が抜けはじめてきた。

その様相で、民衆や貴族の間では鳥の骨と呼ばれる。

中には、『マザリーニの残り湯』という名前の鳥ガラスープを作った料理人もいるあたり、人気の程が良くわかる。

そんな彼の数少ない理解者がデムリ財務卿だ。

そんなわけで、デムリ財務卿とは公私共に仲が良い。

たまに一緒に飲みに行っては内心の不満をおもいつきり愚痴るのである。

朝まで。

もっとも最後に飲みに行ったが2年前なので次は何日かかるだろうか。

マザリーニとデムリが見ているのは二つの書類だ。

一つは、過去数年の王軍の予算配分とその内訳の一覧。

もう一つは王軍の現在の装備と艦、すでに竣工中の船と発注済みの船と人員などが記入された分厚い書類だ。

後者は、これまで王軍情報部や総指揮官が、情報漏洩の恐れがあるとして王が有事の時以外は公表はしないと断固として譲らなかつたが、書類管理の者を説得して写しを極秘に入手したものだ。

どのように入手したのかは、お察し下さい。

ただ、軍上層部の主張する情報漏洩の防止は、ふ菓子の中身のよう
にスカスカである事は確実だ。

入手の経路はどうだった方がいいが、問題は書類の中身だ。

そこから恐ろしい事がわかった。

予算内容と実際に配備された数が合わないのだ。

それにより軍事予算の内、実際に使われたのは3分の2に過ぎない
ことが判明した。

更に調べを進めたら、より恐ろしい結果が出た。

戦艦を発注したはずだがいつのまにか巡洋艦になっていたり、安価
な輸送船ばかりを発注されていたり、艦積砲を予定より小さい物に
代えたり、数を減らしたり、酷いのに到ってはハリボテの船を造っ
て数をごまかしたりしていた。

陸も同様に大砲を予定の半分も調達していないのに、受注を完了し
たと報告したり、弾の数を大幅に減らしたり、定数の満たしていな
い部隊を幾つも作っていたり、戦略的に意味の無い所に砦を造った
り、それが歩兵にやたすく突破されるような脆い作りであったり、
架空の部隊を造っていたりとすさまじい程の不正が横行していた。

それも貴族のせいだ。

今まで彼らは贅沢三昧な生活を送ってきた。

しかし、その基礎となっていた財政基盤が崩壊した今、彼らの収入では今の生活を維持することは出来ない。

とはいえ、昨日までしてきた贅沢を今日手放せと言われて、「はい、そうですか。」と受け入れる程、彼らは人間が出来ている訳がない。

しかし、ながら足りない分は何処からか補填しなくてはならない。

領地持ちの貴族なら、領民に更に重税を加えることで多少は賄えるが、元々生存ギリギリのラインまで搾取しているのだから、たかがしている（これによって大規模な人口の流出が発生した）。

そもそも殆どの貴族は、広大な領地など持つてはいない。

ならどうするか。

それには公的資金の横領が手っ取り早く、おまけに収入が多い。

それを支えたのが、王の影響力が低下した中で、着々と権力を延ばしていったリッシュモン高等法院長であった。

本来横領を取り締まるはずの法院が、公的資金横領の中心になっただけならば、もはや歯止めなど効く筈もない。

彼の下で田沼意次や田中角栄もびっくりの裏金がつごめいているのだ。

中でもこの軍事予算が一番の標的だった。

消耗品が多い軍需物資は偽装が容易で、おまけに他の政治組織から離れた部所である軍部ならば介入も査察もされにくい。

その結果が軍事予算の4分の3以上が行方不明となっているのは、大問題を軽く通り越している。

もともと彼ら貴族にしてみれば、いつ使うか分からない武器や兵器や兵士の鍛錬に金を注ぎ込むよりは、自分達の虚栄心を満足させた方が、国の為になると本気で考えているのだ。

とにかく、国を守るべき軍隊が国を食い物にしている寄生虫に過ぎない事が今回の件ではつきりした。

これで軍事的なことになれば、ゲルマニアに全面的に頼るしかなかった。

マザリーニの中では、ベルカとも同盟を結ばなくてはこの戦いにかつ事は困難だと悟った。

だが言うは易し、行いは難し。

それには、まずアンリエッタ王女を宥め、反ベルカの官僚を力ずくでも押さえ付けなければならぬ。

ただアルビオン亡命政府とは、冷たい空気が漂っている。

何しろアルビオン皇太子が持ち掛けた会議を一部の議会が上に伝えず、ベルカ担当の外交官を送ってしまった事だ。

おまけにレコンキスタと条約を結んだ事に考慮してアルビオン亡命政府に対して冷たい態度を取った上に、「レコンキスタは紳士的だから国に戻ったほうが良いのではないか?」、と当事者の前で降伏を勧める事を言ったものだから大変。

おかげでトリテインは貴族派寄りだと判断されてしまい、アルビオン亡命政府に『我々は今後トリテインに期待しない。ベルカと共同で対処する』と宣言されてしまった。

その頃、アンリエッタ王女はウェールズ皇太子の生存を聞くと喜んで、すぐにトリステインに来させるように側近の大臣達とマザリーニに叫んでいた。

皮肉にもアンリエッタと同じくウェールズの受け入れを主張していたのは、リッシュモン高等法院長であった。

マザリーニにはそれらにも対処しなければならなかった。

もしもの話だが、トリステインがアルビオン亡命政府抜きでアルビオンに侵攻した場合、アルビオン王家から侵略であるとされてしまう恐れもある。

トリステインの前途は多難である。

とあるアルビオンの超戦艦

アルビオン大陸。

今やアルビオン王国から神聖アルビオン共和国と名前を変えた国内は昔とは色々と様変わりしている。

まず大きな事は、各地に政治委員と呼ばれる者が配置された事である。

彼らは諸侯の補佐の名目で赴任しているが、実際には監視だ。

もしも反体制や王家擁護、ブリミル冒流の疑いがあれば即座に革命議会に報告されて、人民裁判の元で死ぬのが嬉しくなるような目にあう。

また、政治将校も配置された。

彼は絶大な権力を持ち、それを思う存分に行使した。

勿論対象には、無実の平民や気に入らない部下、ライバルの上司なども含まれている。

特に上司を裁判にかける事ができれば、自分がそのポストに座る事ができた。

アルビオンに肅清の嵐が吹き荒れたのは言うまでもない。

アルビオン革命の英雄でアルビオン革命軍を率いていた、ジョージ・ダッシュウッド・ドーブマン・ゴールディ卿も肅清された程だ。

今頃エディンバラ北部で木を数えている事だろう。

その為に訓練を受けた将校は肅清されるか亡命するかの一択しかなかった。

残ったのは、理想と熱意を燃やしただけの青年将校と、無能故に肅清されなかった者と、軍を指揮するよりも金を数えた時間が長い、腐敗しておべっかするしか能が無い保守的な將軍しか残らなかった。

後は王の肖像が取り壊され、始祖に手を差し延べるクロムウエルの像が新しく作られたことと、新教徒狩りが激化したくらいだ。

一方民衆の生活はちっとも良くなるらない。

共和国と言つてはいるが、それは貴族の権利を擁護する物であり平民は対象外であった。

むしろより税が加算されて、食料も徴収され、薪になる木も船の建造に使つと、ねこそぎ持つていつてしまった。

彼らはいつても搾取される存在なのだ。

軍港口サイス。

赤レンガの司令部が目立つ港は賑わっている。

ドックではアルビオンの誇る艦隊が突貫の改修工事をしている。

その一つ、名前を変えたロイヤル・ソプリン級の一番艦レキシント
ンと二番艦のサラトガの間に神聖アルビオン共和国初代皇帝の肩書
を持つクロムウエルの姿がある。

神聖で共和国で皇帝と言う矛盾に満ちた名前だが、どうだっていい。

その傍らには、クロムウエルの秘書のシェフィールドと名乗る女性。

そして、この艦隊の新しい司令官となるヘンリ・ボーウッドがいた。

彼らの目線の先では、作業員が異様に長砲身な大砲の換装をしてい
る。

「見たまえ、この巨大な戦艦を。何と言う頼もしさ。ここまでの船
を作り出せる我々にもはや敵はいない。そう思わんかね。」

「そうですね。」

元は巡洋艦の艦長に過ぎないサー・ヘンリ・ボーウッドは自分の艦
を見つめた。

もっとも艦隊司令官とは名ばかりで、恐らく実質上は艦長の任務で
あろう。

それでも、国家の力の象徴である戦艦をしかも旗艦を操る事が出来
るのは名誉であり夢でもあった。

ただ一つ残念なのが、これが王政派でない事だ。

しかし、それをおくびには出さない。

既に敵味方問わず、昔の仲間のほとんどは国を去ったか、この世を去ってしまつて残っているのは自分と親友のホレイシヨだけだ。

ホレイシヨは二番艦サラトガの艦長に就任したそうだ。

二人ともかなり出世したものだ。

もつとも砂上の楼閣がいつまで耐えられるかはわからないが。

「見たまえ、あの大砲を！」

一昔前の船の漕げのように規則正しく突き出た大砲を指差す。

「これぞ我々の新兵器だ。これほどの長砲身、素晴らしい！射程は確か……」

「トリステインやゲルマニアの艦が保有する最大の砲の3・5倍を誇ります。」

「そうだな、ミス・シェフィード。まさしく我々に敵う者などない。」

玩具を与えられた子供のようにはしゃぐクロムウエルを見てみると、とても策謀に長けた人物だとは思えない。

それよりは、操り人形のような感じがした。

怪しいのはシェフィードと呼ばれた女性だ。

氷のように冷たく、ナイフのように研ぎ澄まされたような人物だ。

下手に探りを入れた途端首を、一瞬で撥ねられそうだ。

おまけにシェフィードなんてふざけた名前をしている。

シェフィードは元々川の名前だ。

ポーウツドの故郷のシェフィード川は穏やかで温かい雰囲気の小川だ。

川を走る船を見て艦長を目指したくらい自分には馴染み深い。

そんな自分の大切な場所を汚されたように思えたのだ。

「しかし・・・このハルケギニア最強の戦艦に新型の大砲を積んで、わざわざ結婚式の参列に引き出すのもどうかとおもいますが？無駄に示威行為をすればいらぬ警戒をされますぞ。」

ポーウツドは意図的に正式名称を避けた。

「残念だが、もはやこの艦はハルケギニア最強ではないよ。ポーウツド君。」

予期していなかった展開にポーウツドは驚く。

ポーウツドが案内されたのは、隣接されたかつて三番艦のロイヤル・オークのドック。

もし王政派に渡らなければ、ヨークタウンと名付けられていただろう、生き別れた姉妹艦。

そのからっぽのドックに別の艦があった。

思わず震える手をのばして黒光りする船体に触るポーウッド。

普通なら温かみのある木材の感触が伝わる筈だった。

しかし、指の感覚器官が感じ取ったのはつるつるして無機質で重厚な鉄のものだった。

試しに叩いてみた。

頑丈なチーク材に申し訳程度の装甲板がついた今までのとは違い、砲弾が当たっても砲弾のほうが砕けてしまつような固さだった。

形もやや流線型で何より驚いたのが、普通なら後甲板に剥き出しの発令所兼操舵所が前甲板の装甲で覆われた区画になっていた事である。

まさしく革新的と言えた。

「全長450メートル。全幅85メートル。装甲の厚さ最大55センチ、最低でも35センチ。理論上ではトリステイン、ゲルマニア両軍の大砲ではこの装甲を貫通する事は不可能と言えます。」

つまり不沈艦と言えた。

マストも装甲で覆われ、折れにくいようになっている。

それに興味深いのは甲板と船体下に付けられた旋回式の砲塔だ。

甲板にはマストを挟むような位置に連装艦砲塔が合計10基と単装砲塔が後甲板に4基

艦首にも突き出るように中程から連装砲塔が1基、艦尾にも1基。

各所に小口径単装砲が幾つか。

船腹に中央に飛び出すように連装砲塔が5基とそれを挟むように単装砲塔が6基

そして斉発連発銃砲塔がいくつもついている。

まさしく化け物と言えそうな風貌だ。

ボウツドは心から思った。

この艦の性能を存分に引き出したい。

この艦で思う存分空を駆けてみたい。

この艦で敵を粉碎してみたい。

「どうかね、この艦は？」

クロムウエルの問いにも答えられない。

そこまで感極まってしまったのだ。

「そうだ。君には『親善訪問』の概要を伝えるのを忘れていたよ。」
クロムウェルがその概要を伝える。

それを聞いてポーウッドは、先程の興奮も忘れてた激昂した。

「そんな馬鹿な！そんな卑劣な外交がこのハルケギニアに存在した事などない！」

「落ち着きたまえ、ポーウッド君。それが政治とゆうものだよ。どのみち彼らが先に手を出した事になるのだ。」

「しかし、しかしですな！！」

「政治の事は我々がやる。君は軍の編成と戦の事だけ考えれば良い。」

クロムウェルの一言で終わってしまった。

「では余は会議があるのでね。」

呆然とするポーウッドを置いて、クロムウェルは去っていった。

遺産相続ともう一人の異邦人

「プギイイイ！！プギヤアアア！！」

森の中に豚に似たオーク鬼、量産型ちょはっかいの悲鳴が兎玉する。

先程まで獲物を追い詰めるべく走っていた彼らは、今獲物から遠ざかるべく走っていた。

彼らが逃げる理由は一つ。

獲物を狩る側が狩られる側に移行した事を意味する。

タアアン！

森から軽い銃声が響く。

一匹のオーク鬼がつんのめったように前に転ぶ。

倒れたオーク鬼の後頭部には小さな穴が空いている。

通常の攻撃なら皮膚の下の厚い脂肪に阻まれる筈だが貫通性能に優れた30-06弾は、熱いナイフでバターを切るように貫き、頑丈な頭蓋骨を粉碎して内包された、体に比べて小さな脳に致命傷を与える。

仲間が倒れたのにオーク鬼は見向きもしないで走る。

本能と僅かな理性が叫ぶ。

一刻も早くここから早く離れる!!、と。

生存本能につき動かされた体は、限界まで飛躍された脚力で地面を蹴る。

その結果、彼らは数を減らしながらも逃走に成功した。

オーク鬼が遠くに逃げ去ったのを確認した才人は銃を肩に掛けて木から飛び降りる。

寺院の前の広場には、切り裂かれた肉や燃えているオーク鬼の死体でいっぱいだ。

ギチィ。

「うえっ!」

粘りっこい血が才人の足にへばり付き、糸を引く。

周りにはタバサとキュルケ、ギーシユの姿も見える。

なんか胡散臭い地図で宝探しをしているのだが、宝らしいのはゴミだけがらくたばかりで価値のないものばかりだ。

最悪なのが、化け物だけは大量に潜んでいるという状況なのだ。

謀ったように。

そもそも市販品の宝の地図などロト6より当たる確率が皆無だ。宝も名前に近いが、かなりランクダウンしたもの。

(例、秘剣カラドボルグはただの製造ミスかなんかでひん曲がった剣。)

意図的である。

ハイリスク、ノーリターンでは全く割に合わない。

それよりも、化け物退治として稼いだほうがより儲かりそうだ。

タバサがギーシュの頭を杖で叩く。

「痛っ、何をするんだね？」

「作戦と違う。」

最初は中に油を入れた落とし穴にオーク鬼を落とし一網打尽にするか数を減らしす予定だったのである。

しかし発案者のギーシュがいきなり独断先攻したために、すべてがおじゃんになりかけた。

「僕は先手必勝モットーだからね。実践してみただけだよ。」

「それで失敗したら意味ないじゃないの。」

「抜け駆け、独断先攻は強者の花。」

「そうだよ、わかってるじゃないか。」

「けれど命令を無視して、作戦を失敗させた無能な兵士を処罰するのも指揮官の花。」

「え？」

「確かにね。罰とギーシユは夕食抜きなさい。」

「そんなぁ……」

ギーシユが地面に手をつけて唸っているのを鼻で笑うキュルケ。

「ところでタバサ。さっきの言葉、あなたらしくないわね？」

「ティリエルが教えてくれた。」

「やっぱりね。貴女が言うには似合わない言葉だったから。」

「そう。」

パラツとページをめくる。

題名は、『どんなもんでも食べばまいっつ。ゲテモノ、どっんといらっしやいー』

「ふうん、え？」

キュルケがタバサが見ているページを見て思わず絶句した。

開かれたページは、オーク鬼の部位に関する部分だった。

「まさか・・・貴女食べるき？」

こくりと頷くタバサ。

そして指でオーク鬼の足を茹でる料理と腹肉をトロトロに煮込んだ料理を指した。

「おいしそう。」

その一言でもはや言葉が出ない。

ふとタバサの横には大きめの袋に入った何かがある。

見なかった事にして空を見る。

「みなさん、夕食ですよー。」

シエスタの声で皆、たき火に集まる。

「このシチュー変わってるわね。」

「はい、これはヨシエナヴェっていうんです。」

「じゃあ、このサクサクしたのは？」

「はい、これはティリエンプラっていうんです。ヨシエナヴェは祖父から。ティリエンプラは父から教わりました。祖父はひいおじいちゃんから教わったんです。いまでは村の名物です。」

シエスタは持ってきた瓶から皆のコップに並々と何かを注ぐ。

「何だね？これは。随分臭うが強いが。」

「イモジョチュウってお酒です。」

ふうんとみんな頷きくいつと煽り、そして嘔き出すか、嘔せるかした。

「げほっ、げほっ。随分強い酒だね。これは……」

「かなりストレートに来るわね。」

「むり。」

「って焼酎じゃねえか!!」

「暖かくなりますよ、これ。」

ワインの甘味や弱いアルコール度数になれたキュルケ達には、些か強すぎたようだ。

「頭痛い。吐きそう。」

「大丈夫か？」

珍しく青い顔をしたタバサが、口元を押さえて森の中に消える。

詮索すんじゃねえぞ。

「そ、それで次はなんらね？」

アルコールが回ってきたのか、呂律が回らなくなってきたギーシュ。

「次は………えつと、読めないわね。」

褐色の肌をより赤くしたキュルケも酔ってきたのか、地図を上下逆さまに持っている。

流石に、焼酎のストレートはまずかった。

そしてさほどの間もなく全員潰れた。

次の日。

一行は『竜の羽衣』があり、シエスタの故郷であるタルブの村に来ていた。

ただ、その足どりは重い。

「頭が割れそうだ。」

「ぐぐぐらするわ。」

「……うぶ。」

タルブ生まれのシエスタや日本育ちの才人と違い、焼酎に耐性のない彼らは酒を飲んだ後に必ず襲いかかる試練（強い人は大丈夫です）。

二日酔いに苦しんでいた。

ちなみに、酒に弱くても飲んでいれば強くなる、というのは迷信である。

強い強くないの差は、肝臓のアルコール分解素質によるものだ。

そんなわけで朝から大変だった。

特に酷かったのはタバサで朝から何も食べれず、不機嫌だ。

それでも時折襲ってくる、胃液の逆流に耐えている。

タルブまでのフライトは最悪だった。

乗客にいつリバーズされるか、シルフィードもびくびくものだったであろう。

そんなこんなで竜の羽衣が安置されている寺院に到着したが、この時点で肝心の宝を見たのは才人とシエスタだけだった。

ギーシュとキュルケは、村でベットを借りて寝ている。

タバサは寺院まではついて来たが、吐き気に耐え切れずに、再び森

の中に消えていった。

お察し下さい。

そして才人は、倉庫に眠る物体を見て絶句した。

「うそ……だろ。」

尖った機首から見える4門の銃口。

エンテ型の主翼。

尾部にある推進式の6枚プロペラ。

機首にある翼。

胴体を挟むような垂直尾翼。

何より、深緑に染められた機体にある赤い日の丸。

第二次大戦末期。

本土を攻撃するボーイングB-29スーパーライジングフォートレス、超空の要塞を迎撃する為に帝国海軍航空隊が試作したが、一度も戦場に出ることのなかった機体。

局地戦闘機『震電』がそこにあった。

才人が触ると機体の情報が入ってくる。

それは、何故か1942年に作られた機体であった。

恐らく別の世界の日本から来たのだらうと納得して、シエスタに向き直る。

「シエスタ。ひいおじいちゃんって一体……」

才人がシエスタに連れられたのは、寺院（という名の倉庫）の横にある墓だった。

「ひいおじいちゃんは私が小さい時に亡くなったんです。」
墓には、佐々木武雄、異世界に眠ると日本語で彫ってあった。

感慨深くなりながら、倉庫に戻り主がいなくなった機体を触る。

機体の横には、6つの白い星のマークがあった。

恐らく撃墜マークだ。

そこでふと気づいた。

倉庫の横でタバサが倒れている。

その瞬間、殺気を感じてのけ反る。

風を切る音がして、少し前までいた所に刃が振り下ろされる。

相手は私服の中年の男だ。

男は躲わされた事にも動じず、すぐに二の太刀を振る。

それをデルフリンガーで受け止めるが、腹に蹴りを喰らって吹き飛び倉庫の壁にぶちあたる。

体を起こそうとしたところで、首筋に剣を突き付けられた。

「You are not Strong. 貴様は強くない。」

男の口から、最初は英語。

次いで日本語が聞こえた。

才人は男の顔を良く見た。

五厘の頭、敵めしい顔つき。

そして日本人や東洋人の特徴な黄色い肌。

良くみれば、腰には鞘と拳銃。

突き付けている剣も、湾曲した片刃。

日本刀だ。

「貴様の名前はなんだ？」

「平賀、平賀才人。」

かろつじてそれだけ答えた。

シエスタが叫んだ。

「お父さん!!」

ところ代わってシエスタの実家。

机に向かい会って、シエスタの父親と向かい会っていた。

シエスタはともかく才人は気が気でならない。

何せ睨む目が半端なく怖い。

しかも何故か陸軍の制服に正装しているので怖さ百倍だ。

おまけに大尉。

ベテランだ。

「私の名前は、正樹武雄だ。では聞こう。君はあそこで何をしていた。」

「才人さん達は宝探しに来ていたんです。」

「宝探しだと?」

シエスタの言葉で表情を変える。

手は腰の軍刀に伸びかかっている。

シエスタが慌てて、

「才人さんは、私を貴族から二度も守ってくれたんです。」

と補足すると、驚いた顔をするがすぐに表情を戻して、

「娘が世話になった。」

と頭を下げられた。

「良いですよそんな。」

と才人は慌てる。

そんな事もあったが、元は同じ日本人。

すぐに打ち解けた。

「それで、その正樹さんはどうやってこの世界に？」

「ああ、私はリヒトーフエンヤデンプシー、リベンスキーと一緒に映画館にいたんだが、テレポータを起動したら気が付けばここに居たんだ。」

「あの、なんで映画館に？」

才人が恐る恐る聞くと正樹は凄みのある笑みをして答えた。

「なに。ちょっとゾンビ退治をしてただけだ。」

夕方。

夕日が草原の向こうに沈んで行くのを才人はただ見つめていた。

同郷の人に会えたのは、とても嬉しかったが逆に不安や思うこともあった。

ここに来た二人の日本人は・・・いや、3人の日本人は結局帰る方法も見つからずにここで新しい生活を始めている。

彼らは、自分と違う大人だ。

それも軍人。

それでも苦勞してここまでこれたそうだ。

ゾンビ退治というのが少し気になるが。

そしてもう一つ。

仮に帰る手段があったとして、それは本当に自分が居た世界に行けるのかだ。

信じたくはないが、震電の事といい、時間の幅といい恐らくこの世界は、様々な多重世界と繋がっているに違いない。

そうでなければ、42年に震電があるのも、たった十数年前に武雄

さんが来たのも説明がつかない。

自分でもどうしようもない程不安になってくる。

「ここに居たんですか。」

後ろからシエスタがやって来る。

「正樹・シエスタか……」

日本だったらこうなるだろうと呟く。

「はい？どうしました？」

「いや。俺の居た国、日本風に言つとこうなるんだ。」

「やっぱりですか。」

「知ってたのか？」

「何となくですけど。名前の響きとかが、お父さんやひいおじいちゃんに似てたから。」

「そうか……」

「お父さんから聞きました。ニホンはどんな所かって。とても良い国みたいですね。サイトさんが帰りたいがるのも無理ないです。」

「……」

才人は黙ってしまった。

望郷の念に駆られたのもあるが、正樹さんの事もダンブルドア学院長先生（オスマンじゃ！、と白髭を生やした老人が叫んだのは無視の方向で）から聞いたニコライさんの事も頭を過ぎる。

自分の知っていた国が無くなっている。

それを知った時に襲い掛かる絶望感は計り知れない。

もしも、自分が帰ったつもりの世界で両親がいなかったら。

いや、もしかしたら『召喚されなかった自分』が平和に暮らしている様を目撃したら、一旦自分は生きていけるだろうかと思わざるを得ない。

でも帰りたい。

万が一、億が一の可能性であっても帰りたい。

「サイトさん。もしサイトさんが帰るような事があれば、私を連れていってくれませんか？」

「シエスタ？」

「見てみたいんです。貴族や魔法が無い世界が、何よりサイトさんと一緒に居たいから・・・。」

顔を赤らめて俯くシエスタに才人も顔が赤くなる。

「そうでした。」

と赤らめた顔のままシエスタが口を開いた。

「先程、学院の方から手紙が届いたんです。ミス・ツエルプストーとミスタ・グラモンと私に。」

キュルケとギーシュの手紙を要約すると、先生方がギーシュとキュルケに、「無駄欠席とはどうゆうこっちゃ！！単位取り消しの上反省文だから覚悟しやがれ！！」とのことだ。

シエスタの方は、「もうすぐ祝賀休暇だからこのまま休み取っていいぞ。もし文句言ったらやっがいたら殴り込みに行くから安心してくれ。」byマルトー

だそうだ。

「『竜の羽衣』……シンデンでしたっけ。お父さんが譲っても良いつて言っていました。」

「えっ？良いのか？」

「なんか、俺には陸軍の意地がある、とかなんとか。」

もし、隼や疾風だったら絶対に譲ってくれないんじゃないかな？。

と思う才人であった。

次の日、ギーシュのコネで竜騎士隊が震電を学院まで運んでいった。

その際にシエスタからひいおじいちゃんの遺品を受け取った。

飛行服とゴーグル、必勝と掛かれた鉢巻き、小刀、護身用のブローニングオートM1910を買った。

なんか銃が全部アメリカだなあ〜とひとり心地だ。

学院に帰ったら帰ったで、ホロコースト先生（コルベールですぞ！とry）と一悶着あったのは、当たり前だ。

「ところで、シンデンってどんな意味なんですか？」

「えっ？なんか・・・震える雷・・・みたいな。」

「なんか微妙ですね・・・。」

「・・・。」

遺産相続ともう一人の異邦人（後書き）

やり過ぎた？

悪夢

夜。

才人は気がつけば、夜の草原に立っていた。

否、誰かの視界のようだ。

空は赤い。

そして目の前には、ヘリコプターらしき炎上している残骸が。

一体なにが起こっているのか、わからない。

これは一体どういうことか？

周りには鎧を着た兵士が何人も見える。

突然、ガタンと音がして残骸の下からボロボロの男がはい出て来る。

服装は何故か、迷彩服。

そして自分の意思に関わりなく歩み寄る自分。

血まみれで満身創痍らしい男。

いや少年だ。

自分と同じくらいの日本人だ。

手には拳銃を握っている。

「何故だ……どうして……どうして……」

掠れ掠れの声で問い掛ける少年。

気がつけば肩で息をする瀕死の少年に向けて剣を振り上げている。

止める！止める！止めてくれ！

心中叫ぶが光景は続く。

瞼を閉じようとするができない。

「どうして裏切った！！何故奴らに味方する！！答えろ！！……
！！！！」

何かを叫んで拳銃を向けようとする少年より早く、少年の首を……
……撥ねた。

バツと床から飛び起きる才人。

全身から冷や汗をかいていて、息も荒い。

周りを見渡す。

何の変哲もない、ルイズの部屋だ。

ルイズの寝息が聞こえるだけだ。

夢か……

深い安堵の息をついた。

しかし、さっきの夢は何だったんだろう。

妙にリアルだった。

まあ、いいやと毛布を掛けて横になる。

また悪い夢はみませんように、と思いながら。

ふと耳元で小さな声がしたような気がした。

「……我が友よ。安らかに眠れ。時は来たのだ。憎き仇敵に鉄槌を……オール マスト ダイ」

とある宰相の憂鬱 ツヴァイ

ベルカ

首都ベルリン

年に一度行われる国家建国パレードに街は今、多いに盛り上がっている。

そんな熱狂的な空気が漂う中を、トリステイン宰相、マザリーニ枢機卿が非公式の会談がおこなわれる、ホテル・アドロンの玄関に入った。

パレードの中心であるブランデンブルク門を左手、右手にライヒスタークなどの官庁街を見渡せる特別室に案内されたマザリーニを待っていたのはベルカ帝国宰相、ルドルフ・フェーゲラインとアルビオン亡命政府代表補佐、パリーだ。

「ようこそ、ベルカへ。」

フェーゲラインに促され椅子に座る。

60過ぎのパリーや、老けて見えるマザリーニと違ってルドルフ・フェーゲラインは30代前半と若い。

黒い髪とチョビ髭、そして強い意思と躍動感溢れる目つきをしている。

「早速ですが、用件に入らせていただきます。」

マザリーニが今回ベルカに訪れた理由は、関係がより拗れたベルカ及び亡命アルビオン政府との関係修復。

そして対レコンキスタ同盟の是非の為だ。

プライドや過去の歴史を捨てた場合、トリステインにとってベルカが一番協力できる筈だとマザリーニは知っているからだ。

理由としては、国内にアルビオン王族を擁している為に万が一レコンキスタと戦争になった場合、必ず参戦するからである。

ゲルマニアも確かに頼りにはなるが、所詮は諸侯の集まる連合国である為と地理的にまずゲルマニアには直接戦火が降り注ぐ事はありえない為、十分な兵力を派遣してくれない可能性がある為。

どのみち同盟が締結したので頼るしかないが、戦力と大義名分は多い事に限るのでベルカと同盟を結ぼうと画策しているのだ。

「どうでしょうか？ベルカにとっても悪くない提案だと思いますが。」

「確かに有益な物ですが、残念だがそれは受け入れる事はできませんな。」

フェーゲラインとパリーは首を振る。

「貴国は既に神聖アルビオン共和国と不可侵条約を締結しているで

はありませんか。もし貴方と同盟を結ぶ事になれば、アルビオン亡命政府との協定を反故にしてしまう。」

やはりそこかとマザリーニは思う。

ゲルマニア皇帝とアンリエッタの結婚式の日程が迫るなか、ベルカとアルビオン亡命政府と何としても結びたいマザリーニ。

そもそも非公式な会談なのは、トリステインの議会でベルカと同盟を結ぼうとさげんでも、絶対に反対されるのは目に見えるからである。

ただ、情況は切迫している。

「ならば、我が国がレコンキスタに宣戦布告した後に条約を結ぶのであればどうでしょうか？」

「秘密条約ということであれば、こちらとしても問題はない。そうであろう？ パリー殿。」

「はい。宣戦布告してからなのは、やや遅すぎるとは思いますが、これならば殿下も賛成なさると思います。」

「そうですか。それなら安心です。」

「ただし条件があります。」

安堵したマザリーニにフェーゲラインが条件を出す。

「条件ですと？」

「我が軍の独自の戦略的行動の承認。総司令部の独立。そして我が国の公国の解除と独立の承認。これが最低限の要約です。」

つまり要約すると、最初の二つは共同戦線は張るけど、こっちはこっちで独自で動くからな。

最期のは、さっさと独立したいんで承認頼むわ、といった意味である。

マザリーニは悩む。

無条件ならともかく、条件付きとなると大臣達の説得は難しい。

「なんとかならないでしょうか？」

と、マザリーニが聞くが、

「自らを縛り付けるような条約など、結ぶ意味など無い。」

と条件の除外を拒否された。

自由アルビオン政府もベルカ政府と同調するようで、条件として占領地域の領土割譲を制限する（流石に、無割譲は無理）条件を出した。

ならばと、マザリーニもベルカには戦略物資の輸入の際の格安購入。

トリスティンに20年猶予付きの8500万エキユーの借款の提供。

トリステイン国債、500万エキューの購入。

一部戦略物資の無料提供。

自由アルビオン政府には解放後の港の利用の自由。

関税の免除。

戦費の一部負担。

アルビオン王族の総司令部への参加。

これを要求した。

マザリーニにとって、恐らくそれがトリステイン貴族の許せる条件だろうと察して告げた。

これが破綻すれば、ある意味終わりだ。

だがベルカ、自由アルビオン政府双方共検討してみると答えた。

一応は手応えありとマザリーニは判断した。

もつともこれは決定事項ではないが、いざ同盟という際に多少は円滑に進む筈だ。

この秘密条約の書類にサインしたマザリーニは、テーブルの上に置かれた水を飲んだ。

外で群集の声が一段と大きくなった。

「時間通りですな。ご覧になってみますか？」

フイーゲラインに進められベランダに出る。

街のあちこちから行進曲が流れ、大通りをグースステップをする兵士達が胸を張って一糸乱れぬ行進をしている。

足を真つ直ぐ延ばし、銃を肩に。

将校は剣を肩に行進している。

そして空には、Fw190とBf109Kが（他の国では機械竜と呼ばれる）編隊を組みながら上空を通り過ぎる。

その後は、Me410とJu87スツーカーがスモークを焚いて飛ぶ。

「どつです？素晴らしい軍隊でしょう。」

マザリーニが見たことない武骨な兵器が大通りを進んで行く。

ハノマーグ装甲車。

多連装ロケット搭載トラック、シュートルム・ヴェルフアー。

？号戦車、マウルティアに牽引されるアハトアハト（88？高射砲）。

（いずれもベルカ以外では鉄のカラクリ、異端の玩具、鉄の箱と呼ばれる）

マザリーニはハルケギニアのいかなる軍隊とは異なる様相に終始目を奪われていた。

「いやはや、勇ましい限りですな。」

パリーがその光景を見て言った。

最後に親衛隊が来ると一斉に歓声が上がる。

そして、ハーケンクロイツが翻った瞬間民衆は右手を掲げて叫ぶ。

『ジークハイル・ベルカ！！ジークハイル・マイン・ケーニツヒ！！ジークハイル・ヴィクトーリア！！』

（ベルカ万歳！！我らの王、万歳！！勝利の女神よ万歳！！）

『グローリア・マイン・ベルカ！！グローリア・マイン・ケーニツヒ！！グローリア・マイン・ヴィクトーリア！！ジークハイル！！』

（我らがベルカに栄光あれ！！我らが王に栄光あれ！！我らに勝利の栄光を！！万歳！！）

アルピオン国内の確執（前書き）

I・Sをヨシフ・スターリンと読んでしまう私は重症

アルビオン国内の確執

アルビオン

ロサイスでは明日に控えた親善訪問の準備で慌ただしい。

その中、艦隊司令官のポーウッドはパイプをくわえながら、自分が操縦する『旗艦』の勇ましい姿を見ていた。

勿論、親善訪問という名前の奇襲上陸作戦だ。

作戦概要としては、出迎えに来たトリステイン艦隊を蹴散らした後、後続部隊の橋頭堡を築く為にラ・ロシエール近郊のタルブに降下。

ラ・ロシエール占領後、増援部隊を率いてトリスタニアに進撃し、占領する。

計画通りに事が進むとしたら、おおよそ2、3日で作戦は終了する。

だが、ほとんどポーウッドはこの作戦が成功するとは、正直思っていない。

彼の目から見ても計画は綻びだらけだからだ。

まず、降下地点のタルブだがラ・ロシエールに進撃するには、やや距離が有りすぎる。

降下部隊の移動手段は、僅かな馬を除いてほとんど徒歩である。

タルブからラ・ロシエールの距離は、おおよそ18リーグ。

どうせならもう少し近場に設定すれば良いものを、と思うが仕方ない。

何を隠そう、この作戦は『モンティー』のあだ名で知られている、バーナード・ロー・モントゴメリー元帥の立案した計画だった。

周りから戦力比がベルモット（15：1）にならないと作戦が成功しないとまで言われている彼はプライドが高く、嫉妬深い。

この計画自体も僅か10日前にクロムウェルに提出して認められたので恐ろしい程準備期間が短い。

そのしわ寄せが今、自分達に襲い掛かっている。

更に不満なのが、艦隊司令補佐官兼トリスティン侵攻軍司令官にサー・ジョンストンが選ばれた事だ。

補佐官と言っても実質上はポーウッドの上位にあたる。

彼は貴族議会議員でクロムウェルの信任厚く、彼もまたクロムウェルを心酔する典型的な無能の一人だ。

彼が選ばれた理由は、議員の中で空軍に（3週間）『居たことがある』からである。

しかも士官学校の試験で最下位を取るといって、素晴らしい成績をも

っている。

今も艦長の一人にいつちよ前に命令を下しているが、艦長は彼が無能だと知っているの、頷きはすれど聞き流している。

「しかしホレイシヨもだいぶ扱いになれてきたな。」

とボーウッドは独り言を呟く。

もつとも、相変わらず太りすぎだと付け加える。

その隣にはタルブに降下する、第一降下兵団『レッドデビル』指揮官、アーカート少将と副官のジョン・フロスト大佐も居る。

アルビオンに残った数少ないベテランだ。

アーカート少将ものジョン・フロスト大佐も心情的には王党派だが、それでも初戦からクロムウエルの私兵部隊『鉄竜騎隊』と共に奇襲と火消しに奔走した精強部隊の一つである。

とは言え、今までの損害も軽くはなく15000人いた兵員も今では半分以上の6000人にまで減っている。

これでは軍団よりは旅団と言うべきだろう。

内戦が一応終結しても、クロムウエルにおべっかをかく將軍の部隊に優先的に兵士を補充されているので、おべっかをかかないアーカート少将には、一人も補充兵が送られてこず、定数を満たさないでの出撃となった。

ただアルビオンでも珍しい職業軍人構成の部隊に傭兵や士気や練度

の低い民兵を入れたくなかったアーカート少将が意図的に補充を避けたとも言われている。

ともあれ彼らは勇敢だ。

マサチューセッツの戦いで王党派軍に包囲された際に普通の軍ならとつくに降伏している状況で果敢に援軍が到着するまで街を守りきったのだ。

そんな彼らがモンティイの名誉の供物となるのは、実に痛ましい。

「首尾はどうだね？艦隊司令官。」

「上々ですよ。多いに。」

「それならよろしい。しかしいつ見ても素晴らしいフネだな。『オリヴァー・クロムウエル』号は！」

これがポーウッドのもっとも気に入らない理由だ。

『オリヴァー・クロムウエル』

主殺しの皇帝閣下の名前を冠した船。

ポーウッドにしてみれば、女神に悪魔の名前をつけるにも等しい行為だ。

あまりに彼女が可哀相だ。

「この艦に、レキシントンとサラトガも揃っておるのだ。この陣容

なら、ハルケギニアの全艦隊が相手でももたやすく勝利出来るに違いない。」

そう簡単に行くまい。

とボーウッドは呟く。

腕を組んで一人で頷いているジョンストンに伝令が紙を手渡す。

「喜びの知らせが届いた。見たまえ。」

ジョンストンから受け取ったボーウッドの顔が青くなる。

「トリスティンだけでは無くベルカも艦隊を出してくれるとは！まさに一網打尽に出来る良い機会だ。『マーケット・ガーデン作戦』は成功に終わるだろう！」

『マーケットガーデン作戦』

これが今回の作戦の名称だ。

同時刻

「チャリオット作戦が中止とは、どういう事ですか！！」

ボーウッドの居る港とは少し離れた赤レンガの司令部で一人の高級将校が、上官に向かって大声で訴えている。

「どうもこうも言った通りだよ。シェリダン大佐。」

「解せません！！なぜこの好機に……」

チャリオット作戦とはシェリダン大佐と上官のサッチャー中將が立案した、ベルカの軍港キールに対する奇襲攻撃作戦だ。

具体的には、旧式化した駆逐艦キャンベルタウンをベルカで使われている哨戒船に偽装して、艦体に積まれた何トンもの火薬と奇襲部隊と共に港を攻撃して、港をしばらくは復旧不能、戦闘艦も破壊なしし拿捕するのが目的である、きわめて野心的なものだ。

典型的な自殺作戦だが、奇襲に成功すれば数ヶ月はベルカ海軍の戦闘能力を半減させる事が出来る。

それにいまだ戦闘状態では無いので、成功の確率は比較的高いと予想した。

サッチャー中將は、口では仕方なく言うが表情はシェリダン大佐と同じだ。

「仕方がない。ウエザビー閣下が物資を独占しているんだ。大規模な作戦だから、賛成するしかない。」

ウエザビー司令官は、マーケットガーデン作戦で主力である地上部隊を率いている。

もちろんだが地上部隊の派遣には輸送船が使われる。

だが、その輸送艦隊を護衛する戦闘艦の数が足りないのだ。（ポ
ウツド率いる戦闘艦隊に取られている為。）

ウエザビー閣下がその為に、戦闘艦を要請したのはごくごく自然な事だ。

上級訓練艦から艦装間近な船まで動員される中、旧式ながら今だ現役なキャンベルタウンが徴収されたのは当然過ぎる事だ。

更にウエザビーはプライドが高く、武器や装備を潤沢にしたがった。

故により多くの火薬と人員を議会に追加要求した結果、作戦の要となる船はおろか、それに積まれる火薬も上陸部隊も奪われてしまい、当然ながら作戦は実行不可能となり、作戦自体も白紙となってしまった。

この事を議会に抗議したのだが、クロムウエルの信任厚く、議会に強い影響力を持つウエザビーに押さえ付けられてしまった。

ウエザビーも他の大多数の貴族と同様に自分より有能な者を排除したがる。

その為、議会はシエリダンに物資が確保されるまで作戦の無期限延期を決定した。

もちろん延期というのは建前で、現実には中止と同様の意味だった。

その事でシエリダンは怒り狂っているのだ。

「くそっ！戦争が始まってからじゃ、チャリオット作戦は意味が無いんだぞ!？」

「シエリダン。気持ちはわかるが、チャリオット作戦はいわば自殺作戦だ。上層部も消極的にならざるを得ないだろう。」

確かに敵のど真ん中に突撃するのだから、生還率は低いだろう。

もちろん脱出手段はそれなりに用意している。

「なら、モントゴメリーの作戦はどうなんだ？六千もの部隊を目的地の数リーグも離れた地点に降下させるんだぞ。十分な装備も無い降下部隊にトリストインの騎兵部隊を投入したら一たまりもない。」

「シエリダン。」

「第一ウエザビーもウエザビーだ。既に戦闘艦隊が敵艦隊を駆逐して、空域を確保してくれるのに、わざわざ多数の戦闘艦を引き連れていく事も無いだろう。」

「シエリダン！」

サッチャーが咎めるがシエリダンは止まらない。

それだけ不満が溜まっているのだ。

「こつちが要求してるのは、たった一隻の駆逐艦と二隻の輸送船、火薬に200人の兵士だけでいいのに。たったそれだけで、ベルカ海軍の半分の戦力を削ぎ落とすことが出来るんだぞ。それに、生存率もマーケットガーデンよりは高い。」

「シエリダン！！これは、ロンディウムの決定なんだ！！」

サッチャーが怒鳴り、シェリダンがようやく黙る。

「すまない、シェリダン。政府批判が誰かの耳に入ったら、君を失うことになる。」

「わかってるよ、サッチャー。少しいらついでただけだ。」

「この際、モントゴメリーとウエザビーに任せてみようじゃないか。敵は凶上演習と違って自分の思い通りには動いてくれないからな。」

サッチャーがパイプに火を付けながら言う。

「じゃあ、俺達はどつするんだ。」

「さあね。とりあえず休暇でも取って、庭園でも眺めながら紅茶の一杯でも飲むとするか。」

不死者達の夜（前書き）

ノリ100パーセント!!

不死者達の夜

ベルカ

『永遠の夜』

空には明るい月が光って、星が瞬いている。

しかし不思議なのは太陽だ。

太陽はまるで皆既日食のように黒く、周りを噴き出すプロミネンスが縁取るように光っている。

ダイヤモンドリングみたいと言えばわかりやすい。

この太陽の事をベルカでは、シュバルツゾネ。（英語に直すとブラツクサン）と呼んでいる。

更に不思議な事に、この地方は外部からは視認できないようになってる。

この地方独特の現象は、この『永遠の夜』と呼ばれる地域にしか発生しない奇妙な現象で、いまだその謎は解明されていない。

一部では、強大な力を持った吸血鬼達が先住魔法で作り出した土地であるとか、異世界への入口だとか噂されているがいずれも憶測に過ぎない。

一般的に知られているのはここが吸血鬼達にとって、またベルカにとっての聖地である。

吸血鬼にとって、苦手な紫外線が降り注がないからだ。

その『永遠の夜』の地に、広大な研究施設がある。

なぜここに研究施設があるのかといえば、一つは外部から視認されない為機密保持がしやすく実験自体の隠匿しやすい為。

もう一つは先にも言ったように、紫外線等が降り注がない為に、通常では不可能な環境での研究が可能となるからだ。

そして、その実験施設の一つで事件、いや、事故が発生したのである。

「それで、このA68棟とE15棟で起きたと。」

「そうだ。できる限り迅速に頼む。」

事件の概要を簡単に説明すると、研究棟の一つで実験中誤って試験体が脱走。

他の試験体にも感染もしくは脱走して手が付けられなくなった。

そして隣接する別の研究棟を巻き込んだところで封鎖が完了した。

幸い研究者は全員、パニックルームや個室に避難して死傷者はいないそうだ。

ただその直後、何らかの原因で二つの研究棟の電源が落ちてしまい出られなくなってしまったのだった。

連絡も、全員無事を伝えた所で切れてしまったので中で何が起きているのか詳しくはわからない。

そんなわけで、休暇中だったティリエル達ヴェアヴォルフのメンバーが呼ばれたのだ。

もともと、ヴィルヘルミナが抜けた4人であるが。

『デア・リーゼ』研究棟内は薄暗い。

「ゆっくり進んで。」

「痛てっ！くそ、前が曇って見えにくい。」

「相変わらず、息苦しいわ。」

「蒸れるう〜。」

明かりは、胸の懐中電灯と下と天井の非常灯がたよりだ。

しかし、顔を覆うガスマスクのせいで視界は悪い。

発生した場所が場所だけに、化学薬品が大量にありそれらの容器が破損している可能性が高い為仕方ない。

それでも全身を覆うタイプのゴテゴテスーツよりは遙かに増した。

ただ電源が入りさえすれば、換気装置と自動空気濾過装置が起動するからガスマスクは不要となる。

武器は広くもなく狭くもない場所なので、フルオート火器だ。

マリサはMG42、ティリエルとハンナはSTG44、ニナはMP40とポンプアクション式散弾銃を構えている。

ドアは主要な入口は全て電動式だ。

これは非常事態の際に隔離がたやすく行われるようにするためである。

勿論開閉手段が無いわけでは無く、主電源が切れた際には自動で予備電源が入る仕掛けになる。

ただ予備電源の主な目的は主電源の起動とシステムデータの保護と最低限の管理システムの維持がせいぜいである。

ただ何故か今回は予備電源も起動していないので、他の区画の電力をバイパスしてドアを開ける。

その為3人程、技術屋が同行している。

彼らは今、その作業に取り掛かっている。

武器は護身用としてワルサーP38改を携えるだけだ。

「よし、開いた。」

まず滅菌室のドアが開く。

消毒液が吹き付けられて、ファンから風が吹き、体についた細かいゴミを吹き飛ばす。

それが終わると、目の前のドアが開いてエアロックされていた部屋の空気がプシューと、音を立てて排気される。

そして、基盤を弄ってバイパスを解除する。

そうしないと電源を入れた際に余分な負荷がかかって回路が焼き切れてしまう。

「空气中に毒化合物、化学物質共に検出されません。」

空気検知機を持った二ナがくぐもった声で伝える。

それに頷いて前を見る。

いくら夜目が効くと言っても完全な暗闇ではそもいかない。

懐中電灯の光だけが頼りだ。

「まがり角に注意して、全周警戒。離れないように。」

ピストルグリップを握る手に力が入る。

セレクターはフルオートにする。

と、横から別のライトの光芒が差し込み、ドンドンと何かを叩く音がする。

ライトを向けると、同じようにガスマスクをして銃を持った警備員が壁の防弾ガラスを叩いていた。

守衛室のようだ。

技術屋の一人が壁にあったパネルを外していじくっていると、ブーンと音が響いて明かりが一斉に点く。

守衛室のドアが開いて警備員が5人程出て来る。

いずれもSMPを肩に引っ掛けている。

「いやあ、助かったよ。何時間も待たされて、てっきり来ないのかと思ったよ。」

「それは災難でしたね。この先の状況は分かりますか？」

親指を立てて扉に向ける。

「さあ？警報が鳴ったんで急いで行こうとしたんだが、その途端電源が落ちてな。カメラも見ての通りだ。」

懐中電灯で照らす先には、カメラをモニターするテレビが幾つもあるが、いずれも砂嵐である。

そこまで電気が回っていないのだろう。

「まあ、少なくとも扉の先には多分何も……」

ガシャンとロックが解除され、ウィーンとドアが開く。

「……………」

皆無言で扉の先の暗闇に銃口を向ける。

突然、バンバンと音がして照明が手前から順番について、無人の白い廊下が照らされ向こう側の扉までの視界が確保出来る。

「……………ないようだな。」

「そのようね。」

電気が入ったおかげか、廊下に面したドアが一斉に開く。

そこから、白衣を来た科学者がわらわら出てきた。

一瞬身構えるが、「大丈夫か?」「何が起きたんだろうか」と口々につぶやく声が聞こえてきたので警戒を解く。

そろそろ出口に向かう科学者の中で、髭を延ばした年配の科学者が声を掛けてきた。

「おい、一体全体何が起きたんだ?いきなり警報が鳴ったと思ったら、閉じ込められて。」

胸の名札からして、チーフの一人らしい。

「まだ、詳しい原因は分かりません。情報では、生物兵器区画から何か逃げ出した為と。我々は原因究明と救助に来ました。」

それを聞いたチーフは、いらいらした口調で

「またか。大体なんで光学兵器部門の隣が生物兵器部門なんだ。」

と、どうしようもない愚痴をこぼしていた。

とりあえず避難指示は出ているので、後を警備員に任せて先に進む。

生物兵器部門に入ると中は、何気に酷かった。

ピーカーやらフラスコやら試験管やらが散乱していて、非常灯のハザードランプが廊下を最低限照らしている。

ガラスがあちこち割れていたり、なんか赤い染みがそこかしこにあつたりする。

無事な研究室から、ガスマスクを被った研究員がガラス越しに助けを求めている。

しかし、ここまでは電源がバイパス出来ないので無理矢理こじ開けるしか方法はない。

とにかく主電源を復旧させなければならない。

薬品の煙や何かが視界を塞ぐ。

全く最悪だ。

「ここを右です。」

若い工兵が順路の曲がり角を曲がり、何かにぶつかり悲鳴を上げて尻餅をつく。

目の前に立ち塞がる、白衣の上からでも分かる、巨大で逞しい胸板。突然の悲鳴にかなりびっくりした。「待て！撃つな撃つな！」

喋ったのでどうやら生存者らしい。

危なかった。

もう一秒遅かったら絶対に撃っていたかもしれない。

ゆっくりライトを上げると、ミノタウルスが立っていた。

それだけなら良いが、ガスマスクをしておまけに上下スーツ型の白衣を着ているのは、正直シールドだ。

胸の名札には、ラルカスとある。

右手に持った拳銃がおもちゃに見える。

「ようやく来てくれたのか？いやよかった。」

何故か全身を掻きむしりながら、安堵の声を上げるミノタウルス。

「えっと、何が起きたか分かりますか？」

若干戸惑いながらも切り出す。

話は聞いたが、良く分からないらしい。

まあ、もうすぐ知る事にはなるのだろうか。

ミノタウルスことラルカスの後から、何人かの人間の研究員がやはり、全身を掻きむしりながら出てくる。

どうも部屋に逃げ込んで電気が切れた時に、試験用動物として保管していたノミの入った容器を落としてしまい、身体を刺されたとの事。

去って行く研究員の呟きが廊下から響く。

「痒い、痒い、痒い、痒いぜ、ちきしょう!」

「憂さ晴らしに、上に行ったら、うまいもんでも食うか。」

「かゆい、かゆい、かゆい。」

「うまいもんつつたらやっぱり……」

「かゆい……」

「うまい……」

「かゆ、うま……」

なんか、ものすごく不吉な言葉が聞こえるが無理矢理無視する。

カチャン。

何かを蹴っ飛ばしたようで、思わず下を見る。

そこには、拳銃と……拳銃を握った肘までの白衣の袖を着けた腕が転がっていた。

拳銃もスライドが下がったままだ。

軽くあたりを見渡したが、腕の持ち主らしき姿は無い。

予想が当たりませんようにと、つい信じてもない神に願った。

条約破りは計画的に（前書き）

更新が遅くなつてすみません。

携帯をなくすハプニングもありましたが、何とか見つかりました。

条約破りは計画的に

運命の日。

6月29日。

トリステイン第一艦隊は、神聖アルピオン共和国の国賓を迎えるべくラ・ロシエールから北に60リーグ離れた地点で遊沃している。

「遅いなあ。奴らは。」

艦隊司令官のラ・ラメー伯爵は呟いた。

「犬は犬なりに着飾っているのでしょうか。」

艦長のフェヴィスが馴れない船に気を使いながら後甲板に立っている。

トリステイン第一艦隊は約60隻もの艦数を数える、打撃部隊だ。

旗艦は『メルカトール』からベルカ製の『ラ・グロワール』に代わっている。

これは空軍総司令部の指示だ。

せっかく、今までの旗艦より高性能なフネを購入したのに、旗艦を変えないのでは体面に係わるとの事だった。

その『メルカトール』は『ラ・グロワール』の後ろについてきている。

とにかく、今までのフネとは勝手が違うので艦長もやや戸惑っているのだ。

しかし、ラ・ラメーもフェヴィスから、今はじゃじゃ馬だが馴らせば名馬になると言っていたので何も言わない。

ラ・ラメー自身、ベルカにあまりよい感情は無い。

だがこのフネに関しては、それなりに気に入っている。

特に装甲付きなのが良い。

流れ弾で死なずにすむからだ。

「そろそろ約束の時間ですな。」

フェヴィスが懐中時計をみながらラ・ラメーに言った。

ちなみに事前に通達されていたアルビオン艦隊の到着予定時刻はとつくに過ぎている。

時間なのは、急遽参加する事になったベルカ艦隊の到着予定時刻である。

「しかし、アルビオン艦隊め。今日来るのか明日来るのか、はつきりしてもらいたいものだ。風石が無駄になる。」

ラ・ラメーが愚痴る。

当然だ。

出撃するだけでも、ただでは無いのだ。

無駄な飛行は補給物資の備蓄にも影響が出てくる。

艦隊一つ分なら尚更だ。

「これも彼らの戦略でしょうか？ 相手を待たせて、消耗させる。上手い作戦です。」

「なら我らも奴らの財政を締め付けるように、余分に待たせた分の請求書でも渡すとするか？」

「成る程。よいアイデアですな、司令官殿。」

互いに冗談を言い合っていると、鐘楼から見張りが叫ぶ。

「左後方の雲海より艦隊！！ベルカ艦隊と思われます！」

懐中時計の針は約束の時刻と丁度。

流星は時間に厳しいベルカだけあるとラ・ラメーは思った。

後甲板から身を乗り出して左手を見る。

ズバーン！と雲の中から、ベルカ海軍の巡洋艦が飛び出した。

「プリンツ・オイゲンですな。中々立派な艦だ。」

船乗りは船に対しては、嘘はつかない。

先頭切つて飛び出した重巡に続いて、同じく重巡のアドミラル・ヒッパー。

ポケット戦艦ベルツチエラント。

軽巡のケルン、ハノーファ、ハンブルク。

駆逐艦が10隻。

そして旗艦である、戦艦ティルピッツが陣形を保ったまま姿を現した。

特にティルピッツには、ラ・ラメーもフェヴィスも驚いた。

目の前の戦艦は、噂に聞くロイヤル・ソブリンより一回りも巨大であった。

43サントもある連装砲塔が4つ。

威圧感をばらまいている。

しかしながら、艦隊自体はややお粗末だ。

駆逐艦などの補助艦艇も含めたこの17隻の艦隊が、ベルカ北海艦隊のほぼ全ての戦力であった。

それに比べて、トリスティン第一艦隊は倍の60隻の艦を保有していて、そのほとんどは主力艦だ。

ちなみにトリスティン王立空軍には、合計6つの艦隊が存在する。

一方、ベルカ海軍は北海艦隊、大洋艦隊、南洋艦隊の三つしか存在しない。

いずれも似たような編成になっている為、トータルの艦の数ではトリスティンには及ばない。

なお、ベルカもZ計画を実行中だがほとんどの船はまだ建造中の段階だ。

とにかく、お互いに信号旗を掲げて並走する。

そしてようやくアルビオン艦隊が到着したが、それは明らかに強大であった。

トリスティン、ベルカ両艦隊の前にあるのは、空を埋めつくさんばかりの大艦隊であった。

「なん、という………なんと数なんだ。」

ラ・ラメーですら絶句してしまう光景がそこには、あった。

戦艦に混じってなぜか輸送船なども混じっているが、その数およそ400隻。

空より船の比率が高いくらいだ。

そして左右にロイヤル・ソブリン級戦艦2隻を従えた黒く巨大な戦

艦がそれを更に強調している。

映画でいうなら、スターウォーズの第二デスター破壊の際に反乱同盟軍の前に現れた帝国艦隊と言えば良いだろう。

とにかく巨大であった。

噂に聞いたロイヤル・ソプリンが駆逐艦に見えるくらいだ。

アルビオン艦隊は蝗の群れのように進んでくる。

実際の所、急ごしらえの船員達でろくな陣形を組むほどの練度も無いのだが、それが逆に規模を目立たせているのは、何たる皮肉か。

向き合っていたトリスティン・ベルカ艦隊は回頭して、アルビオン艦隊と併走する。

そして旗流信号を掲げる。

『貴旗艦ノ歓迎ヲ謝ス。アルビオン艦隊旗艦『クロムウエル』号艦長兼艦隊司令官、サー・ヘンリ・ボーウッド。』

「なるほど。艦長が司令官を兼務するほど、アルビオンは人員不足に苦しんでいるようすな。しかし、クロムウエルとは……」

「優秀な提督や艦長が軒並み粛清されているという噂は、どうやら本当のようだな。よかったな、艦長。我々はトリスティン空軍所属で。」

「たしかに……」

「それに、奴らの主も自分の名前を船に付けるとは、よほど自惚れが過ぎているようだ。あるいは、勝利に逆上しているのか。返信、貴艦隊ノ来訪ヲ心ヨリ歓迎ス。無事ニ到着サレ安堵ス。トリステイン艦隊司令長官、ラ・ラメー」以上。」

言葉を控えた士官が伝令に伝える間、ラ・ラメーはベルカ艦隊の旗流信号を見る。

『我が艦隊ハ、トリステインニ親善ニ来ラレタ貴艦隊ヲ歓迎ス。ベルカ海軍最高司令官、エーリヒ・レーダー。』

どうやら、ベルカ艦隊にはわざわざ総司令官が搭乗しているようだ。

アルビオン艦隊から礼砲が放たれる。

ついでトリステイン艦隊も発砲する。

そして、ベルカの番となる。

ティルピッツで警告音のサイレンが鳴ると、アルビオン艦隊に向けた主砲からすさまじい爆音と火炎。

そして衝撃波が噴き出す。

空気が震えるところではない。

ラ・ラメーが一瞬あとじさる。

その時、事件は起きた。

アルビオン艦隊に混じる、一隻の軽巡ホバートがいきなり炎上、爆発した。

当然ながら、アルビオン艦隊は攻撃の説明を要求した。

『コチラ、アルビオン艦隊司令官ヨリ、貴艦ハ、何故ニ『ホバート』号ヲ撃沈サレタシ。ソノ意図ヲ説明セヨ』

「何を馬鹿な！！いや、もしや……」

実はラ・ラメーは、出撃する前にマザリーニからアルビオン側の奇襲攻撃の可能性を思索されたのだ。

当初はあまりにも馬鹿げていると思っていたが、実際になってしまった。

恐らく、それを見越してベルカ艦隊も加えたのだろう。

「提督。以下がなさいますか？」

ラ・ラメーは、平静を取り戻し命令した。

「直ちに、返答せよ。『本艦隊ガ、発射シタノ八空砲デアル。『ホバート』号ニツイテハ、本艦ハシラス。』それから右舷砲戦準備。忙しくなるぞ。」

「提督！それはつまり……」

「ああ、そつだ！あの『鳥の骨』の世迷言が的中したんだ！」

ラ・ラメーは、ベルカの対応を横目で見る。

『我が艦隊モ、トリステイン艦隊ト同様ニ空砲ナリ。爆発ハソチラノ艦ニ原因ガアルト見ル。仮ニ、本艦ガ発砲セシムナラ、ソナ艦ニ、撃ツホド馬鹿デハナイ。』

すると、アルビオン艦隊も旗を上げる。

『我が艦隊ハ、ソナナみすヲスルホド、脆弱ニアラズ。ヨツテ、コノ爆発ハソチラノ砲撃ニヨルモノト、判断スルナリ。』

『ハア？冗談モ休ミ休ミニシロ？ナンデワザワザ、ココマデ来テ、ボロ船ヲ撃沈スル必要ガアル？頭冷ヤセ、ボケガ！経年劣化シテ爆発スルヨウナ船ナンカ、持ツテクルナ！！』

『船ヲ撃沈シテオイテ、ソノ言イ草ハナンダ！！オマエノ貧弱ナ艦隊ゴト、さはらマデブツ飛バスゾ！！』

『ヤレルモンナラ、ヤツテミロ！コチトラ貴重ナ風石消費シテ来テヤツタンデ気ガ立ツテルンダ！！結局、戦争ガシタインダロ？ソウナンダロ？』

『ウルサイ黙レ！イイカラ、オイ止メロ！マダ言イ終ワツテ』

旗を使つての口論で、伝令が過労でぶつ倒れるような不毛な争いの後、アルビオン艦隊の旗は突如意味不明な旗を上げて沈黙する。

しばらくして、ちゃんとした旗が上がる。

『我が艦隊ハ、コノ砲撃ニ際シテ防衛ノ為、攻撃ヲ開始スル。』

それと同時に、アルビオン艦隊が一斉に砲撃を開始する。

空が黒色火薬の煙で覆われる。

質量と硬さ、速度を持った鉄の雨がトリステイン艦隊に降り注ぐ。

だが、砲撃の規模に比べて命中弾はかなり少ない。

アルビオン艦隊の練度が低すぎるのだ。

とは言え、下手な鉄砲も数撃ちや当たる。

規模からしては命中率は低いのであって、もともとの砲数が半端ではない。

中でもレキシントン、サラトガ、クロムウエルの3隻は数少ないベテランが占めているのと、新型砲のおかげで破壊力は抜群だ。

トリステイン艦隊もラ・グロワール以下、数隻が反撃しただけで、残りは事態をいまだ把握しきれていない。

ベルカ艦隊はアルビオン艦隊とは、それなりに距離が開いていたので威力は低く、損害も剥き出しの対空機銃が破損したくらいで、装甲を貫通した砲弾は一発もない。

そんな状況の中、ティルピッツから旗が上がり、ベルカ艦隊の指図できる全ての兵器がアルビオン艦隊に向けられた。

旗には、短くこうある。

『ヨロシイ。ナラバ戦争ダ。』

と。

ここにおいて、ラ・ロシエール空戦は幕を開けた。

ベルカ艦隊の砲撃は苛烈であつた。

43サント、26サント・20・3サント、15サント、10・5サント各種砲弾が、唯一の存在意義である敵を粉碎する為に飛翔する。

各大砲の射程はまちまちだが、戦艦の主砲は3万マイル以上。

巡洋艦の主砲でも2万マイルは軽い。

今回はその十分の一の距離からの射撃だ。

高性能な光学照準器や射撃システムのおかげで、外した弾はごく僅かだ。

船腹をえぐられた敵艦が次々と大破、ないし爆沈していく。

でかいとはいえ、所詮は木造艦だ。

船自体が可燃物のようなもので、内部で火災でも起きればたちまち浮かぶ松明となる。

さらに、今回発射されたのは榴弾だ。

船体を食い破った砲弾は内部で炸裂。

構造物を吹き飛ばす。

続いて、船腹から白い煙を噴き出しながら何かが飛び出した。

鳥雷と呼ばれる魚雷の空中バージョンだ。

それは、自分で進路を修正して敵の船腹に突撃し、大爆発を起こす。

爆発の衝撃波で、甲板にいた水兵は残らず吹き飛ばされ、地上へと特攻していく。

他の船員も内臓を損傷させられたり、鼓膜を破られ呻いている。

しかしその苦しみは長くは続かない。

爆発は船の生命線たる竜骨を軽くへし折り、船体が負荷に耐え切れずに抜切れる。

43セント砲弾が命中した艦に至っては、文字通り消し飛んでしまった。

そんな光景が空のあちこちで広がっている。

しかしそんな中、無傷の船も幾つかあった。

「左舷第一砲塔付近に敵砲弾命中！損害無し！！」

「第3マスト付近にも着弾。同様に損害無し。」

「素晴らしい。流石は最新鋭と呼ぶだけはあるな。」

ボーウッドは、損傷箇所を報告しに来た伝令の答えに思わずほそく笑みを浮かべる。

いずれも、命中したのはプリンツオイゲンの20・3サント砲弾だったが、もっとも厚い55サントもの装甲の前で砕け散ったのだ。

一番薄い部分に当たってもあまり結果は変わらないだろう。

もっとも43サントの場合はどうなるかは定かではないが。

ちなみにジョンストンは戦闘が始まってからすぐに報告書を書く為と、この発令所の下の会議室に引きこもっている。

勿論、皇帝への義務だと言う建前ではなく、臆病風に吹かれたからだ。

寸前に信号旗で無茶苦茶やっていたのを止めたボーウッドとしては、清々する限りだ。

「しかしながら、我が艦隊もかなりの被害を受けているもようです。」

ボーウッドの目にも、傷を負い黒煙を上げる数多くの味方艦の姿が見て取れる。

その数は、奇襲に成功した対象のトリステイン艦隊とほぼ同数だ。理由は何度も繰り返すがかなり簡単だ。

練度が低すぎるからである。

メルカトールを狙おうとした、モヨラとバンデリーの前にドーヴエイが飛び出して味方の砲撃で蜂の巣になる。

大破したドーヴエイは速力がめつきり落ちて、戦闘能力を失う。

「あ、エイデューとチエルマーが…!!」

士官の一人が悲鳴を上げる先には、二隻の駆逐艦が片方の腹に船先を突っ込んでしまっている。

そして、止まった二隻に針路を塞がれた他の船が激突して破砕音が響く。

「馬鹿共め、間隔を開けないからだ。」

ちなみに、ここに遅れた理由もそんな感じなハブニングが多発したからである。

しかし数が数だ。

それにレキシントンやサラトガといったベテランの船が頑張っているおかげで優勢だ。

そのうちサラトガは二段目砲甲板の中央に大穴が開いているが、ダメコン（ダメージコントロールの略）のおかげでなんともない。

それに恐るべきベルカ艦隊も無傷とはいえない。

駆逐艦数隻が犠牲を省みず突っ込んできた船の集中砲火を浴びて戦線を離脱。

巡洋艦ケルンも、艦橋から煙を出して、駆逐艦2隻にエスコートされて離脱していった。

もっともその代償に、攻撃を仕掛けた船は残らず、浮かぶ残骸と化している。

しかしながら感傷に浸る余裕は、この空のどこにもない。

通信用の魔法具を手にとる。

「各艦隊の司令官につぐ。現状をもって、予定通りに艦隊を分ける。なお損害と再編成が必要と思われる第2艦隊にそれぞれの艦隊の艦を抽出するように。」

このような乱戦の時には、このような道具はかなり有効である。

「ただしネルソン提督率いる第二艦隊は残存トリステイン艦隊とベルカ艦隊をラ・ロシエール空域から遠ざけるように。ドレーク提督の第三艦隊は予定通りトリステイン艦隊の停泊港のデン・ヘルダーを攻撃せよ。第一艦隊は第二艦隊に代わり、降下兵団を援護する。」

本当ならば、トリスタニア上空をこの巨艦で飛行して、トリスタニア市民とトリステインの大臣達に見せつけ降伏を促すつもりだったが、計画通りに行かないのが戦争だ。

「伝令。各艦に命令を下す。旗艦以下数隻以外は全て、第二艦隊へ

合流せよ。復唱。」

「旗艦以下数隻以外は全て、第二艦隊へ合流。了解しました。」

伝令は復唱すると、旗手の元に走っていった。

この通信用魔法具の欠点は、各旗艦のみ設置されていることだ。

「よろしかったのでしょうか？艦長。」

「ああ、奴らを食い止めるにはそれなりの数の船が必要になる。どうせなら、この船も殴り込みに使いたかったのだが……そうもいかん。」

副長が心配そうに聞くのを、単眼鏡を覗きながら答える。

「なんなら、本艦以外を全部第一艦隊に廻すか？」

「御冗談を。そんなことをしたら輸送船の防備が疎かになります。」

現在輸送船は艦隊からやや外れて航行している。

武装の無い輸送船は攻防共に脆弱で、戦闘部隊のお荷物でしかない。

それに、一隻あたり300人と重装備を収めている。

一隻でも沈められただけでも手痛いダメージだ。

それだけに、守らなくてはならない。

「分かっているさ。ホレイシヨの活躍に期待するしかない。」

「サラトガは、フォイ船長の操舵ですから簡単にはやられないでしょう。」

ホレイシヨは、アルビオン空軍の中でもトップクラスの提督だ。

士官学校では成績トップで首席で卒業。

実戦経験も豊富で、ボーウッドも模擬戦で勝ったことは無い。

そんな彼が艦隊司令官でないのは、最下位の成績のジョンストンが首席で卒業したホレイシヨを嫉んで手をまわしたからだ。

どのみち、もはや賽は投げられている。

どの目が出るかは、勝負が終わってからだ。

「たのんだぞ。ホレイシヨ・ネルソン。」

そんな意図を読み取ったのか、再編成し敵に向け回頭する艦隊の先頭に立つサラトガのマストに旗が一つ翻る。

旗の名称はZ旗。

意味は、『皇国ノ興廃コノ一戦ニアリ』

ホレイシヨは、分かっていた。

この作戦に失敗したら、神聖アルビオン共和国の勝利は有り得ない

と。

どんな時でも勝利の為にベストを尽くすのが軍人の勤めだ。

その点に関しては、ボーウッドも同意見だ。

せめてもの露払いと、ボーウッドは上空を見上げる。

雲の合間にぽつりぽつりと黒点が次々現れる。

条約破りは計画的に（後書き）

大学生活が始まって来たので更新が遅くなったりします。

何分ご容赦下さい。

生きるも死ぬも紙一重

だれかは言った。

天空を舞う黒い影は悪魔であると。

影はやがて竜の姿を取り、急降下してトリステイン・ベルカ艦隊に襲い掛かる。

このハルケギニアで竜騎士は最強の兵種である。

縦横無尽に飛び回り、何者も耐えられないブレスを吐き、地を這う者全てに恐怖の風を吹き付ける。

とりわけ鈍足な戦列艦にとっては、竜騎士は悪魔そのものである。

船全体が可燃物で出来ているので、火炎のブレスを甲板に浴びせられかけたら救いようがなくなる。

それに帆を焼かれたり、マストをへし折られたりしても終わりだ。

空中に浮かぶ船は、地上の兵士と違い全ての方向から攻撃を受ける。

また、空には隠れる場所も何も無い。

攻撃を躲そうにも狭い甲板には逃げる場所もなく、船自体の機動も鈍い。

そして攻撃を受けたら最後、乗員は炎上する船と運命を共にしなけ

ればならない。

竜騎士に対抗できる武器は射角の狭く、射程の短い大砲の散弾を使うか、あるいは当たる確率がゼロに近い、士官の魔法かマスケット、カロネードに頼るほかは無い。

もつともこれは敵にとってで、味方としてみればこれいじょう心強い援軍はない。

突然の急襲にトリステイン側は、攻撃される寸前まで気づかなかつた。

翼を折り畳んで空気抵抗を少なくし、速度を上げた火竜は慌てふためく水兵に情け容赦なく火炎を浴びせ、甲板を地獄の業火で焼き尽くす。

火炎プレスは、可燃性の液体が燃えているものだ。

簡単には消えない。

燃えるマストは、まるで異端審判の火刑の十字架のようだ。

金切り声のような悲鳴をあげながら、助けを求める水兵達が甲板から次々と地上に落下していく。

そうでなくても、甲板には皮膚の爛れた死体が折り重なっている。

あちこちで大砲の火薬に引火して爆発する船が見て取れる。

ベルカ艦隊も激しい対空砲火を打ち上げるが、竜騎士はその火線を

潜り抜けて離脱する。

なん騎かが火線に捉えられ、肉塊となって落下していくが、それはほんの僅かな数だ。

対空機銃などは、一応防盾もついてはいるが、剥き出しに限りなく近い。

それに一部の魔法ならともかく吹き付けられる炎には、防盾など殆ど無意味だ。

ある者は火達磨になった仲間を消火器で火を消しに走り回り、ある者医療班が担架を持って走り回り、別の竜騎士の攻撃を受ける。

トリステインと比べて多少はましだが、甲板上は地獄に近い。

その中の一人。

ヴェルナー・トートは左舷艦橋付近の連装20ミリ機関砲に取り付いていた。

甲板すれすれを飛行する竜に重い銃身をあちこち振り回して、撃ちまくっていた。

しかし、曳光弾は竜騎士の後ろを飛び去ってばかりいた。

もう何発撃ったのかは分からない。

足元には、指よりも太い空薬莖が広がっている。

ヴェルナーの努力を嘲笑うかのように、竜騎士は甲板すれすれを飛びながら、マジックアローで甲板上を掃射する。

「ザニテーター、ヒア！！ザニテーター！！」

直ぐ隣の破損した対空機銃で、難を逃れた兵士が戦友の負傷箇所を押さえながら、衛生兵を呼んでいる。

負傷している彼の胸から、真っ赤な血が傷口を抑える戦友の手の間から溢れ出ている。

目は虚ろで、時折痙攣を起こしている。

その時、すぐ側に置いてあった弾倉の入った箱に火が引火して爆発。

一瞬で二人とも肉片と化してしまった。

「うおおおおお！！」

叫び声を上げながら、目の前を通り過ぎる竜騎士に、蜘蛛の巣状の照準機を合わせて引き金を引く。

重低音の連射音が響き、銃口からはマズルフラッシュが噴き出し、足元に熱い空薬莖が積み重なる。

「ヴェルナー左だ！！」

巨大なドラムマガジンを抱えた、戦友のクルトが指差す方向には、数騎の竜騎士が攻撃を加えんと、急降下してくる。

「ぶっ殺してやる!!」

銃口を90度旋回させ、狙いをつけて撃ちまくる。

数発混ぜた曳光弾が、敵に吸い込まれる。

その時、銃が吠えるのを止めた。

「シャイセ!!」

ヴェルナーが毒付く。

弾切れだ。

クルトが急いで弾倉を二つ嵌め込んでいるが、緊張しているのが手が震えて入らない。

「早く、早く!!」

「うるさい、急かすな!!」

そんな中でも敵は迫りつつある。

竜がブレスを吐こうと口を開ける。

「入った!!」

クルトが叫んで、弾を薬室に送り込む。

「シュパイネル!シュパイネル!シュパイネル!」

目の前に迫った敵に弾丸を叩き込む。

空中に血飛沫と鱗や肉片が舞う。

右の翼が有り得ない方向にへし折れて、錐揉みに落ちて行く。

竜から振り落とされた騎士は、フライで勢いを殺す事も出来ずに甲板にぶちあたる。

時速400から600キロ前後でたたき付けられた身体は、潰れたトマトのようになり、ぐちゃぐちゃになった臓器などを甲板にぶちまけている。

「うおおおはああ！！やったぜ、ちきしょう！」

「お前すげえよ！」

肩を叩いて喜ぶ二人。

しかし戦いは、終わってはいない。

直ぐさま二騎が接近してきた。

すぐ近くの機銃は、別の方角の敵を撃っている。

つまり、自分達しか防ぐ事はできない。

一騎は、弾幕に耐え切れずに離脱。

だがもう一騎は腹を据えたのか、物ともせず突っ込んでくる。

その時またも、運悪く弾切れた。

しかも弾倉は、まだ木箱の中に入ったままで足元に転がったままだ。

クルトが箱に飛びつくが、間に合わない。

(ここまでか……!)

死の恐怖で思わず目を閉じる。

それでも持ち場から離れないのは、流石ともいえる。

しかし、いつまでたっても攻撃は来ない。

ブウンと風を切る音がして、目を開けるとそこには、嵐でポロポロになった蝙蝠傘のようになった竜が重力に引かれて落ちていくのが見えた。

そして頭上には、攻撃を終えて急上昇しているBf109Kの優雅な姿が見えた。

「メッサーシュミットだ！ルフトヴァッフェが来てくれたんだ！」

「遅いじゃないか！だけどこれでもう勝てるぞ！」

鉄の竜は、竜騎士を追い散らす。

上空でも、別の戦いが繰り広げられていた。

「早く落ちろ！蚊蜻蛉め！」

F W 1 9 0 フォックケウルフを操るエヴァ・ロースマンは酸素マスクごしに悪態を付きながら、一騎の竜騎士相手に格闘していた。

今回が初陣の彼女と違い、標的の竜騎士はそれなりの手練らしく、右に左に上昇下降を繰り返して、照準機に捉えさせない。

「アドラー6。深追いするな。」

僚機のベテランパイロットが無線で忠告する。

彼女らの部隊の任務は爆撃部隊の援護であり、敵を撃墜することでは無い。

もちろん撃墜する事に越した事はないが、敵を追撃して味方が喰われたら本末転倒も甚だしい。

「ヤボール。」

最後に、機銃を撃って追い払ってから踵を返す。

護衛対象はスツーカーとスツーカー？、そしてロケット弾装備のフォックケウルフだ。

もつとも一番最後は、余り護衛する必要もないが。

エヴァが編隊に戻ろうとして機体をバンクさせると、スツーカー編隊に向けて下から近づく影が見えた。

エヴァは咄嗟に敵だと判断した。

ベルカの戦闘機の場合、2機のロットテか4機のシュバムで編隊を組む。

しかし眼前の影は、3機編隊のケツテだ。

ケツテを使うのは、ハルケギニアでもアルビオンだけだ。

すなわち敵だ。

スツーカー隊は、敵が死角にいるため接近に気づかない。

他の戦闘機隊は、上方から接近する敵を阻む為に上昇している。

「アドラー5、スツーカー隊に敵が下方から接近中。これより迎撃に入ります。」

「了解したアドラー6。先に行け。」

エヴァの無線でスツーカー隊も気づいたらしく、回避行動を取ろうとする。

しかし鈍足の機体で、更に重い爆弾を抱えているせいでその動きは鈍い。

よしんば回避できても、お粗末な後部機銃でどうにかできるものでもない。

少しでも時間を稼ぐ為に、スツーカ編隊の周りを飛行していたMe 410とDo 335が敵の頭を抑えるべく機首に集中された火力を解き放つ。大型の双発機であるMe 410とDo 335は、単発機に比べて火力に勝る。

だがいかんせん数が少なかった。

アルビオン竜騎士隊も編隊を解いて、戦闘機をやり過ごす。

損害は正面に向かっていた竜騎士だけだ。

30ミリや20ミリの集中砲火で原形を留めないミンチとなって泥のように落ちていく。

もちろん竜騎士隊もただでは済まさない。

すれ違い様に魔法やブレスを撃ち放つ。

竜騎士は上昇限界高度と速度で戦闘機に劣る。

しかし、空中機動に関してはかなり高い。

不規則で小回りの効き、失速速度が存在しない程低い竜騎士は低速の格闘戦ではかなり強力だ。

おまけに竜騎士は、射程こそ短いがそのブレスと魔法は、斜め後ろを除けば、ほぼ全方向に攻撃を加えることが出来る、極めて広い射角を保持している。

一方戦闘機は、一部の例外を除いて前方にしか攻撃出来ない。

また、魔法の中には範囲攻撃も存在する。

ちなみに速度も、個体によってまちまちで大まかに時速150から690と性能差に開きがある。

なかには、800キロと化け物（竜自体、化け物だが）クラスも存在している。

とにかく、竜騎士は（乗り手次第）戦闘機を凌駕する機動を取ることも可能なのである。

鋭い風の刃は、一機のMe410に襲い掛かる。

刃は薄い装甲を切り裂く。

しばらくは何事も無いように飛び続けたが、亀裂が空気抵抗の負荷に耐え切れずに尾翼が空中分解する。

きりきり舞いしながら落下していくも、パイロットと後部機銃手は何とか脱出に成功したらしく、空中に二つの白い花が咲く。

幸いかもしれないが、下はトリステインの土地。

領主によっては、助かるかもしれない。

通り過ぎた戦闘機隊は急降下で速度が付きすぎていて、反転しての攻撃ができない。

引き返して撃ち落とそうにも、その時には手遅れとなっている。

爆撃隊を救えるのは、エヴァと僚機のみとなった。

竜騎士隊の速度は、おおよそ540キロ。

大馬力のエンジンとスマートな形のスツーカー？は590キロ出すことができ、なんとか振り切れるが、スツーカーはオリジナルより強いエンジンに換装したとはいえ480がせいぜいだ。

逃げ切るのは無理だ。

エヴァは敵の左200メートル上空から後ろを取るように接近、速度を落としながら距離500メートルから先頭の隊長らしき竜にむけて、機銃を撃ち放つ。

輝く幾つもの曳光弾が流星の如く、竜に降り注ぐ。

敵は後方からの接近に気がつかなかったようで、回避する間もなく撃墜されてしまった。

「よしー」

エヴァはすぐにラダー（方向舵）ペダルを踏んで機体を右に横滑りさせ、標的の隣の竜騎士を狙う。

隊長騎を撃墜してから5秒後、もう一騎を撃墜した。

僚機も3騎を撃墜。

敵もようやく気づいたようで、エヴァと僚機目掛けて魔法が幾つも飛んでくる。

しかし、被弾することなく敵を抜ける。

後ろを振り返ると、何騎かが頭をもたげて編隊から離脱。

残りは、爆撃隊を狙う針路をとり続けている。

離脱した騎は、翼を畳み急降下。

エヴァ達を撃墜するべく後を追う。

「今だ。一気に引き離すぞ。」

僚機が今度は、エヴァの前に出て機首を上げる。

エヴァもならい機首を上げると、スロットルを全開にした。

エンジンが唸り音を上げて、一気に上昇する。

敵も追おうとしたが、振り切られてしまう。

しかし、スツーカー隊の防衛には間に合わない。

スツーカー隊が最後の手段と、後部機銃の弾幕を張り敵を近づけまいとする。

不用意に近づいた素人の騎士が蜂の巣になるが、その隙にベテランはスツーカーの死角になるやや下から距離を詰めた。

スツーカーは頑丈な機体ではあるが無敵ではない。

マジックアローが何本も飛び出し、機体に穴が空く。

慌てて回避するが、その機動は覚束ない。

尾翼とエルロンが損傷しているのだ。

燃料タンクにも穴が空いたらしく、燃料の白い霧が胴体側面の被弾箇所から噴き出す。

第二撃がまたも襲い掛かり、一発がエンジンに被弾。

黒煙を噴き出し、エンジンが咳込む。

もはやこれまでと、パイロットが脱出の為に風防を開けた途端。

一発が吊り下げていた1トン爆弾に命中。

一瞬で大爆発を起こした。

爆発は、攻撃を加えた竜騎士や周りのスツーカーにも損傷を与える。

何かのスツーカーが黒煙を吹いて離脱していく。

エヴァの耳にも哀れなパイロットの悲痛な叫び声が聞こえてくる。

「ちきしょう！ちきしょう！」

どの機体かは分からないが、後部機銃手の叫び声が入る。

次の瞬間、キャノピーが割れる音と何かが突き刺さる音がした。

「ちきしょう。ライミー共が！」

僚機のパイロットが叫ぶ。

目の前を見た目は無事なスツーカーがダイブしていく。

しかし良くみると、キャノピーは砕け散り、内側は真っ赤に染まっている。

「仇はとるから。」

エヴァは操縦桿を握り直した。

目指すは、隊長機を狙う敵騎。

敵は、紙一重で攻撃を躲すスツーカーに夢中になっている。

照準器に敵を捉えて、射撃ボタンに手を乗せる。

ふと、キャノピーに取り付けた鏡に一瞬何かが光った。

途端に無線から怒鳴り声が聞こえた。

「アドラー6、左に回避しろー!!」

思わず操縦桿を左下に倒して左のペダルを踏む。

機体は横滑りをしながら左に上昇する。

右翼に光る筋が何本も通過してガガガツと鈍い被弾音が響く。右に振り返ると長い杖を持った竜騎士がこちらを狙っているのが見えた。

どうも風竜らしく、かなりの速度を出せるらしい。

振り切る為に宙返りの機動に入る。

しかし、機体の挙動がおかしい。

右翼の補助翼が変な位置で固まってしまっている。

機体は予想したよりも大回りな軌道を描いてしまう。

それに宙返りもまずかった。

追っていた竜騎士は宙返りをせずに、空中で減速。

そこから、竜だからこそ出来る急激な方向転換でエヴァ機の未来位置に向かったのだ。

エヴァが気づいた時には、もう遅かった。

目の前に迫る敵騎。

僚機もこちらを助けるべく迫っているが、やや遠い。

相手の杖が光る。

光の矢は、左翼の付け根に突き刺さりフラップを引きちぎる。

その内何本かは、計器盤を貫通。

電気コードをめちやくちやにした。

フォツケウルフは、操縦系統を油圧でなく電気で制御している。

その為、この一撃が致命傷となった。

フォツケウルフはコントロールを失ったのだ。

とどめとばかりに、敵はウィンドブレイクを機体にぶつけてから、悠々と去っていった。

ウィンドブレイクは、機体の揚力を吹き飛ばして失速させる。

引き起こしも出来ないまま、真つ逆さまに落ちていく。

「うづあ……あ、アドラー6墜落する。アドラー6墜落する……！」

衝撃でキャノピーにぶつけた頭から血を流しながらもエヴァは生きていた。

朦朧する意識の中で無線に叫んで、急ぎ脱出する。

ベルトを外してキャノピーを開けようとしてロックを解除する。

「つく、うぐぐー！」

しかし、キャノピーは開かない。

満身の力を込めて引いてもキャノピーはびくともしない。

ウィンドブレイクでキャノピーが僅かながら歪んでしまったのだ。

「嘘！出られない。」

腰の拳銃でキャノピーを撃つが、悲しいかな、防弾ガラスだった。

敵から身を守ってくれる筈の防弾ガラスで閉じ込められた形だ。

それでも脱出しようとは発も同じ所に弾を撃ち込んだが、ガラスに白い蜘蛛の巣状の輝が入るだけで、やがてスライドストップが掛かる。

「ああ……そんな。」

絶望の表情のエヴァの視覚に、迫り来るゴツゴツした岩場が迫る。

「……………」

最後に何かを呟いたが、その声を聞いた者は誰もいない。

時速800キロ近くで急降下した機体は、岩場に激突。

一瞬でひしゃげ、残ったガソリンが爆発。

黒煙が一筋立ち上った。

しかし、エヴァの勇敢な行為により爆撃隊は最小限の被害で攻撃位置に到達した。

エヴァは任務を達成したのだ。

アルビオン 第一降下兵団 レッドデビル

「悪魔だ！悪魔が来るぞ！」

「早く躲せ！早くしろ！」

輸送船の甲板にひしめいている兵士達は、動きの鈍い船に苛立ちながら、空を見ていた。

空から黒い点が幾つも降下してくる。

彼らの願いはただ一つ。

「こっちへくるな。」

だ。

まずスツーカー？が急降下。

機銃掃射しながら、爆弾倉を開けて500キロ爆弾を投下する。

鳥の糞のように落ちてくる爆弾を見つめるしかない。

爆弾が炸裂する度に、空中にバラバラになった身体が舞う。

降下した機体は、引き起こさずに通過する。

そして第二波が来る。

スツーカーが翼に取り付けたサイレンを鳴らして急降下。

このサイレンを聞いて平常心を保てる者は殆どいない。

カロネードが散弾を撃ち上げるが、射程や威力も連射速度も威嚇にもならない程虚しい。

機銃弾が甲板を嘗めて、並んだ兵士を薙ぎ倒す。

投下された1トン爆弾は、敵艦に飛び込むと、一秒後には巨大な船は木片となる。

爆撃機が過ぎても、死の恐怖は過ぎ去らない。

戦闘機が残った銃弾を残らず吐き出す。

相手は図体のでかい船。

射的的だ。

流石に20ミリや7・92ミリで沈みはしないが無傷ではすまない。

しかし潮が満ち干きするように、攻撃もやがて終わりを告げる。

編隊を組んで西の空に消えて行く航空機の群れ。

彼らが帰投するのは至って単純な理由で燃料と弾薬の補給の為だ。

航続距離がそれなりの機体は国境近くの航空基地へ。

そうでないものは、この空域からやや離れた所に隠れている航空母艦に帰還する事になる。

入れ代わりによやくトリステインの竜騎士隊や魔法衛士隊が到着するが、数を減らせど練度の高いアルビオン竜騎士隊に敵う筈もなく、ばたばたと撃ち落とされてしまった。

不毛な会議

「第6竜騎士隊、連絡途絶！」

「ロリアンの観測所で南下する艦隊を目撃したと報告が……」

トリステイン首都、トリスタニアの王宮。

縦長の机を中心に置いた豪華な会議室では、大臣や長官、将軍が意見をぶつけ合っている。

しかし、いつもなら非生産的で自らの利益のみを追求しながらのんびり進行するのが恒例だが今回は例外で皆青ざめている。

理由は、ラ・ロシエル上空での艦隊戦とアルビオンから宣戦布告の通達が来たからと、各地でいくつかの施設が音信不通となっているからである。

最初の連絡が入ってから数時間。

その後も伝令が飛び込んで何度も内容を読み上げるが、その中には一つも状況が好転したという知らせは一つもない。

『第一艦隊、我レ損耗7割ヲ越エラレタシ。コレ以上ノ戦闘継続ワ甚ダ困難ヲ窮ムル。撤退ヲ望ナリ。』

『発、デン・ヘルダー艦隊司令部。現在アルビオン艦隊ノ攻撃ヲ受ケツツアリ。状況説明ト、攻撃許可ヲ求ム。』

『ラ・ロシエール守備隊、当テ総司令部。我レ、アルビオン空中艦隊ニヨル艦砲射撃ヲ受ケタリ。我方方、コレニ對抗シウル戦力ナシ。大至急応援ヲ送ラレタシ。』

『カミーユ・ド・アストン伯爵ヨリ。我、陛下ニ仇ナス敵カラ神聖ナル国土ヲ護ルベク出陣イタス。陛下ノ御威光ガ未来永劫照ラス事ヲ願ツテ。』

こんな一刻を争う情報が次々入り、状況は切迫している。

しかし、会議に参加する者達は何の行動もできていない。

「まず、彼らに特使を送るべきです。最悪、賠償金の支払いも視野に入れると……」

「特使ならすでに何度も送った！！これは明らかに計画的な攻撃だ！！」

「サンジエルマン公爵！！貴方はトリステインを戦争にほつり込むおつもりか？！ここは、外交的決着で話をつけるべきでは？」

「とにかく、ゲルマニアに援軍を要請しましょう！ゲルマニアの駐留大使を呼びたまえ！」

「それよりもベルカに断固抗議すべきです！彼らは我等に無許可で越境侵犯した上にわが領空で戦闘行動を行っているのですよ！ベルカに対して警告を発しなければ。」

「外交的決着？マザリーニ枢機卿。これは明らかかな侵略行為です。賠償金？彼らが要求するのは、国土の全てと陛下の血でありましょ

う。ここは攻撃あるのみです。」

「そんなに事を荒立てては……ここは平和的に解決を……」

「攻撃ですと？馬鹿馬鹿しい。我が軍だけであの軍勢に突っ込むなど自殺行為だ。それよりも王都を守り、状況を判断し、援軍を待つのが得策ではないかと……。」

「この際双方の為に講和を結ぶべきだと……我々は平和を望むべきです。領土をある程度差し出せば、彼らも納得が……。」

「パール殿、それでは敵に国土をおめおめと蹂躪させると？」

「そうではない……私が言いたいのは……。」

意見は山ほど出るのだが、結論はいつこうに出ない。

今だに動員令すら出ていないのだ。

時間だけが刻一刻と過ぎて行く。

タルブに集う者達

予想外の犠牲を払いながらも、ようやくタルブ上空に到着した第一艦隊は兵員の降下作業に入る。

揚陸専用の装備を備えた船は草原に着陸し、そうでない輸送船はロープを垂らして兵員や物資を降下させる。

「アイリーン！」

「アイリーン！」

「ファッキン、アイリーン！」

銃やら剣を背中に括り付けたレッドデビルの面々が口々に何かを叫びながらラペリングをしている。

『アイリーン』とは、アテネ国の言葉で平和という意味だ。

今回の作戦の合言葉だが、言葉の意味とは真逆の事をしているのは彼らも十分に理解はしている。

降下した兵士達はすぐに全周警戒の陣形を作る。

だが草原の何処にも敵の姿は見えない。
それも当然だ。

トリステインの主力地上部隊は今だに編成途中で遙か遠くにあり、タルブの領主であるアストン伯とその手勢が攻撃を加えたが、艦砲射撃と竜騎士隊により既に駆逐されていた。

もつとも、騎兵とは言え僅か数十人で6000もの大群を相手にしたところでたかがしれているが。

頼みの綱の竜騎士隊もアルビオンの竜騎士隊の前には、ろくな反撃も出来ずに地上に伏している。

もちろんだがベルカ艦隊も一部を除いて空域を離れ、航空隊もすでにトリステイン上空から姿を消していた。

これによりアルビオン軍は制空権も主導権も手にする事が出来たのだ。

地上部隊は物資を降ろし次第、先発隊をラ・ロシエールに向けて進軍を開始。

同時に近くにあるタルブの村と近隣のアストン伯の館を空挺堡と司令部を置く為に本隊と艦隊を移動させている。

しかし、彼らはそこで予想もしない反撃を食らうのであった。

上空をアルビオン竜騎士隊が舞っている。

彼らの眼下では、家々が渦巻く炎に巻かれている。

その竜騎士隊よりやや上空にワルドがいた。

いつものグリフォンとは違い風竜に跨がりながら、遠くに見えるラ・

ロシエールのある山を見つめる。

旗下中隊にタルブの村を焼かせたがあまり、意味もなかっただろうと一人心地に浸る。

先程の空戦でトリステイン竜騎士9騎、ベルカ軍の機械竜5騎（内訳はスツーカー3機FW190、2機）を落としていた。

「こんなものか・・・」

ワルドは思わず呟いた。

少し前まで所属していたトリステイン軍が、奇襲とは言えこうやすやすと撃ち破られるのを見ると、どれだけトリステインがちっぽけな国だったのかが理解できる。

これはもはや戦では無い。

ただの一方的な虐殺だ。

このまま寡兵が籠るラ・ロシエールを降下兵団で蹂躪して、本隊の到着を待ち、一気に首都になだれ込む。

もっともトリステイン軍の底力は確実に、あるとワルドは信じていた。

わかるのだ。

胸が疼く。

その予感は当たっていた。

巨大な松明となった家々の間を、アルビオン兵が横隊で進んでいる。

彼らは、周囲を警戒しながら手に持ったマスケット銃を構える。

降下兵団の兵士達は、いずれも二つ以上の武器を携帯している。

普通は銃兵は、銃を一丁しか持っていないが、彼らは2丁背中に背負い、更にサーベルを腰に下げている。

服装も鎧や兜は身につけず、せいぜいチェーンメール程度の軽装だ。

彼ら降下兵団は、何よりも迅速に、をモットーにしている。

装備も貧弱で数も少ない為に防御力も攻撃力も低い空挺部隊であるが故に、まず相手よりも先に目標を占領し、相手より優位な場所で戦い、味方が来るまで持ちこたえる。

それが降下兵団たる彼らの役目だ。

その部隊を別の精鋭部隊が見張っていた。

タルブを囲む森の中。

静かに梢や藪や茂みに身を隠して攻撃のタイミングを伺う一団がいた。

彼らは、カーキ色に塗った普段着に草や枝を付けてた擬装を施して森と一体化していた。

彼らの名前は、タルブ自警隊。

タルブのタルブの民による、タルブの村の為の自警隊だ。

もともと自警隊と言いながらも、トリステイン軍も裸足で逃げ出すような猛訓練を行っている。

発祥は佐々木武雄少尉の時で、本格化したのは正樹武雄大尉の時からだ。

陸戦のプロフェッショナルな大日本帝国陸軍の正樹武雄直伝の戦術と忍耐力、そして大和魂を譲り受けたタルブの男達は、正に一騎当千の強者達であった。

彼らの武器は旧式の火縄銃、クロスボウ、手製の手投げ弾、ラツパ銃、槍、そして九九式軽機関銃、九九式小銃、九二式重機関銃、百式短機関銃といった日本軍の銃火器であった。

「まだだ。十分に引き付けてから撃て。」

シエスタは、頷きながら九九式軽機関銃の望遠照準機に映る敵兵に狙いを付ける。

左手は銃肩に宛がわれて、銃を安定させる。

「ジュリアン。狙うのはわかってるな？」

「はい。父さん。」

シエスタの真上の木には、弟のジュリアンが九九式小銃の照門と照星を敵の士官に合わせる。

正樹自身は百式短機関銃を構えている。

やや離れた場所では、村人が数人ががりで九二式重機関銃を操作していた。

「隊長。まだですか？」

村長兼副隊長である、初老の男が耐え切れなさいように、正樹に詰め寄る。

「まだだ。奴らが艦砲や竜騎兵の援護出来ない距離まで待て。」

正樹は、冷静に指示を出した。

彼らが40メートルまで近寄った時。

ついに反撃の火蓋は切れた。

「てえっ!?!」

正樹が叫ぶと同時に、森の中から弓矢や銃弾が敵に浴びせられる。

クロスボウや弓から放たれた矢の鏃は、反応の遅れた兵士の喉元や、鎧を貫いて突き刺さる。

ウッドペッカー（啄木鳥）のあだ名の九二式重機が、由来となる遅い連射速度で敵を横薙ぎに倒していく。

咄嗟に切り込みを掛けた兵士は、森に入る前にラッパ銃とマスクETT銃、百式の洗礼を浴びる。

しかしながら、歴戦の戦士達の対応は早い。

「アンブツシュ！！フォーバック、フォーバック！！」

貴族士官が倒れる中、下士官が叫んで稜線の影に隠れるように指示を出す。

その影に入ろうと、背中を見せた敵兵を九九式軽機関銃がバタバタと薙ぎ倒してゆく。

「機関銃！奴らを釘付けにして、頭を上げさせるな！擲弾手、前へ！！」

正樹が矢継ぎ早に指示を出す。

先程指示出して、稜線の影に飛び込んだ、アルビオン軍下士官のエングルホーンが同僚の下士官に声をかける。

「くそ！どのくらいやられた？」

「コレマッタ大尉は戦死、バーンズ少尉もあの通り。メイジは全滅

だ。」

バーズ少尉は胸に弾を喰らい、部下に引きずられて退避はしたものの、胸の入射控から大量に出血していて、顔は土気色で虚ろな目で虚空を見つめ、痙攣を起こしながら倒れている。

誰が見たって手遅れだ。

「あ、あああああゝ!!！」

誰かの悲痛な叫び声が聞こえる。

「スチュワート、伝令を呼んでこい。それから生きている伝書鳩係を探せ。」

同僚に命令すると、自分は声の方へ向かう。

少し頭が見えたらしく、土煙が立ち上る。

「た、助けてくれ!!撃たれて動けねえ!!！」

「動くな、ブラックバーン!!頭を下げてろ!!！」

「どうした!?!」

「軍曹、ブラックバーンがやられました。」

敵とこちらの間、負傷兵がいるらしい。

「ルークとデイビットが向かいましたが、敵にやられて……ちきし

「ようあんにやるー!!」

「落ち着け今から、艦砲射撃を要請する。」

「そんな!!それじゃあ、ブラックバーンはどうなるんだ!」

仲間を見捨てることは出来ないと、憤る部下の肩を掴み。

「見捨やしない。艦砲射撃の前に必ずブラックバーンを助け出す。」

エングルホーンの言葉に、詰め寄った部下は敬礼をして戻っていく。

「第一分隊、第二分隊射撃用意!」

「ブラックバーンの所までは誰が行く?」

「俺が行きます。」

先程エングルホーンに詰め寄った兵士が名乗り出る。

「わかった。ベンジャミン、行け。」

身軽になるため、装備を外すベンジャミンを隣の兵士が手伝う。

「ベンジャミン、ジグザグに走って絶対に止まるんじゃないぞ。」

「わかってるさ。」

「第一分隊、ファイヤー!!」

軍曹の叫びで一斉にマスケット銃を撃ち放つ。

一呼吸おいて、森からも一斉射撃と機関銃の連射音が轟く。

撃つた後に姿勢を低くした彼らの頭上を、風を切る音と共に弾丸や矢が過ぎる。

銃声に遅れて、腹を打つような重い破裂音が僅かな数だが聞こえて、空中からヒュルルルと風鳴りを立てながら何かが落ちてくる。

その音が消えた途端、傾斜に伏せていた身体が地面を削り取った分の土砂と共に吹き飛んだ。

「くそ！ 奴らは大砲まで持っていやがったのか！！」

厳密に言えば彼らの考える大砲ではない。

八九式擲弾筒と木砲の発射であった。

八九式擲弾筒は、小型の迫撃砲であり、放物線を描きながら目標に到達した。

木砲は簡単に言えば、砲身を束ねた木で作った代物だ。

当然だろうが連続射撃に耐えられるような代物ではない。

これによるアルビオン軍の被害は僅かだ。

八九式擲弾筒は一門しか無く、弾もほんの僅かな為発射された弾は二発のみ。

木砲は5門ほどを揃えていたが、いずれも初弾を撃った直後に使用不能となっている。

弾自体も小さな鉄球で直撃でも一人か二人がやっとの威力だ。

それでも、目的は肉体的ダメージよりも相手は大砲まで持っているという精神的ダメージを狙ったものだったから問題はとりあえずはない。

続いて、擲弾が投げられるがすべて手前に落下して炸裂した。

もともと歴戦の勇士たる第一降下兵団の兵士達には、正樹が期待したほどダメージは与えられていない。

「第二分隊、ファイヤー!!」

砲撃後でも兵士達は、怯むことなく撃ち返す。

第二斉射が終わり、黒色火薬の煙で視界が塞がれた時に、ベンジャミンが飛び出した。

黒煙を煙幕代わりに利用してブラックバーンまでに近づく。

ジクザクに走るベンジャミンの周りから、ビシッと着弾する音が聞こえる。

「今だ！早く潜り込め！」

誰かが叫ぶと同時に足から窪みに滑り込む。

間一髪弾丸が服を掠めたが、それだけですんだ。

とは言え、少しでも身を晒せば敵の的になる未来が待っている。

「は、早く助けてくれ……」

「大丈夫だ。すぐにここから連れ出してやる。それよりどこをやられた？」

「は、腹だ……」

ベンジャミンがブラックバーンの上着を裂くと血で紅くなっている。

「平気だ。今から運び出す。」

ぐったりしているブラックバーンを担いだベンジャミンは、味方の方向に走り出す。

来たときのように機敏に動けないがそれでも渾身の力を込めて走る。

こっちだ！早く来い！などと叫び、しきりに手を振る味方。

「援護射撃！撃てえ！」

散発的に森に向かって放たれる銃弾。

そのおかげか、敵からは攻撃はない。

「もう少しだ！」

誰かが叫ぶ。

後、15メートル。

後、10メートル。

後、5メートル。

軍曹がこちらに手を伸ばす。

その方向に飛び込もうとして、一步を踏み出す。

べちゃ。

笑顔のエンゲルホーンの顔に赤い液体が付着した。

血だ。

血はベンジャミンの腰から出ている。

ベンジャミンはエンゲルホーンの数メートル先で、膝を着く。

理解できない、と言わんばかりの表情で空を仰ぐ。

その胸にもう一弾が背中から胸に飛び出して、それが致命傷となったのか、血を吹いて倒れ込む。

その時にブラックバードも投げだされ、エンゲルホーンの胸に飛び込んでいたが、後頭部が顔面が吹き飛んでいて、息は絶えていた。

「ちきしょう!!」

一人の兵士が激昂して、被っていた鉄兜を地面に叩き付け、身を乗り出して怒鳴る。

「トリスティンの豚野郎共が!!何も撃つこたねえだろうが!!」

撃たれてはかなわないと、仲間が数人で稜線の影に押さえ込む。

「軍曹」

「伝書鳩係はどうした……………」

俯いたままのエンゲルホーンに声をかけた部下に抑揚の無い声で返す。

「エドワード二等兵であります。」

その部下の後ろから、背中に籠を背負った兵士がエンゲルホーンに敬礼する。

「よし、エドワード。上空に控えてる馬鹿でかい凶体の艦に伝える。座標4-34-20、あの森の中に潜んでやがる糞野郎共をぶっ飛ばせってな!!」

「イエッサー!!」

エドワードは、返事をすると思いの籠から鳩を出してその足に座標を書いた羊皮紙をくくり付け、空に放つ。

森から攻撃はなかった。

こちらにも攻撃を避ける為に一旦下がる。

しばらくして、砲声にやや遅れて砲弾が森の中で激しい土煙を立てる。

爆発こそしないが、放たれた質量エネルギーはすさまじいものがある。

木々を薙ぎ倒し、陣地を穿ち、土砂を巻き上げる。

砲撃が止んだ時、森の中で動くものは何もいなかった。

先程戦った森やや離れた森の中、空からの攻撃を避ける為に密度の濃い所を選んでタルブの村の住民がぞろぞろ列なり歩いていく。

実の所、木砲と擲弾筒を撃った後、殆どの人員を退避させていたのだ。

残っていたのは、狙撃をしていたジュリアンくらいだ。

そのジュリアンも既に追いついてきている。

これも、武雄の立てた作戦の内だ。

上陸作戦において、水際の機関銃陣地やその他の脅威となるものは、攻撃を仕掛けたら最後、艦砲射撃や航空隊によって破壊されるのは、ある種当たり前の事だ。（ノルマンディーみたく、逆に味方に近づいて攻撃できない事もあるが）

大東亜戦争で米軍の上陸作戦に遭遇したこともあるのでその所は理解していた。

「父さん。この森、あまり深く入ると危険じゃないかな？」

ジュリアンが今危惧したのは、この先の森にはオーク鬼が出る事があるからだ。

ちなみにアルビオン艦隊や竜騎兵についてはあまり危惧していない。

彼らとて、わざわざ少ない民兵ごときにわざわざ森を焼き払ってまで追撃する筈も無い。

船の砲弾は無限では無いし、オリヴァー・クロムウェル以外の艦は、砲撃調整の為に船ごと動かさなくてはならない。

竜騎兵も制空権確保と近接航空支援が主任務だし、やたらめったら動くのも良くない。

被害自体も全体から見れば、針で刺された以下程度なので特に深刻な障害とはともなりえないし、戦略的に言えばカジュアリティの範囲内だ。

それよりも、今の目標は空挺堡の確保とラ・ロシエール進攻なので、民兵ごときに一々構ってられないのが理由である。

「大丈夫だ。こんな騒ぎな時は、たいてい森の奥深くでおさまるのを待つものだ。わざわざ出て来はしない。」

「そうなんだ。」

「よれより距離をもっとおくぞ、ロワイヤン辺りまで行ければ当分は安心出来る。」

そのまま歩みを進める一行の耳に、木の葉の擦れる音以外の音が聞こえてきた。

何かが唸るような。それも連続的に聞こえてくる。

その音は、急速に近付いてくる。

「お父さん……」

シエスタが不安そうに正樹を見上げる。

しかしながら正樹には、この音がなんだかわかっていた。

この音はレシプロ機のエンジン音であると。

ブウン！！

森の切れ目から一瞬見えた影は、エンテ型をしていた。

「竜の羽衣だ！！竜の羽衣！！」

運よく見る事が出来た村人が歓喜の声を上げる。

パイロットも視認出来たようで、速度を落として旋回する。

村人が被っていた帽子を投げたり、得物を掲げたり、それぞれのやり方で歓迎する。

それを見たらしいパイロットは軽く翼を振って進路を変える。

彼らがいましがた、戦っていた場所へ。

正樹は無言で、去り行く機体に敬礼をしていた。

「才人さん……………」

来てくれた嬉しさと、戦いに巻き込んでしまった不安に板挟みになったシエスタは、震電が向かっていった空に、どうか無事で帰ってきてほしいと祈った。

ハルケギニア物語外伝／英雄達の空／予告編（前書き）

キャラもストーリーも考えてあるが、いつ掲載するか正直不明。

ハルケギニア物語外伝／英雄達の空／予告編

彼ら？

ああ、知ってる。

俺もその一人だ。

話せば長い。

戦闘機パイロットのエースに必要なのは、幾つかある。

敵に容赦をしない心。

仲間を思いやる気遣い。

頼りになる僚機。

戦況を読める観察眼。

コンディション最高の機体。

帰還時に一杯引っ掛ける場所。

何より飛ぶ事を楽しむ事。

このくらいだ。

俺達がそうだった。

『赤い男爵』と呼ばれた男。

『リヒトフォーフェン・サーカス』の仲間達。

そして、宿敵の『四英雄』。

あの年は、とても暑かった。

「よう、マンフレート。良い眺めだ。ここからなら、世界は平和に見える。」

「無駄口を叩くな。もうすぐ合流地点だ。」

「固すぎるよ、カール。」

「違う。お前が柔らか過ぎるんだ、ウィルバー。」

「見えてきたぞ、左翼だ。」

「了解隊長。」

30年前、ハルケギニア各地を震撼させた戦争が起きた。

「パッシェンデル上空B77Rで大規模な空中戦。」

「援軍は？どうなっている！」

「リヒトホーフエン・チーム。現在地上部隊が攻勢に出ている。撤退は許可できない。可能な限り地上部隊を支援せよ。繰り返す撤退は許可できない。」

「だろうな。スコア上乘せた。」

「給料と休暇もだ！！！」

「こちら、クレーエ隊。共に飛べる事が出来て嬉しい。」

「こちら装甲部隊、ヴィルヴェルヴィントで可能な限り、支援する。」

「英雄さん達、落ちるんなら味方の上空で頼む。」

第二次ベルカ討伐聖戦には謎が多い。

誰が望んで、誰が初め、誰が勝ったのか。

誰もが加害者になり、誰もが被害者となる。

神への信仰とは何か？

「ベルカの機械竜が接近中。全て排除し、制空権を確保せよ。」

「リヒトホーフエン・サーカスだ。警戒しろ。」

「レッド・バロンが何だ！僕が落としてやる。」

「カリン！後ろ！スカル・プリンスだ！」

「キツネ狩りの時間だ。」

「連合の犬共め！」

「この戦争はどちらかが滅ぶまで終わらない！」

「受け入れる餓鬼共。これが戦争だ。」

「僕は落ちない。」

「ならすぐに落としてやる。」

「前線を突破するぞ！」

「本当の電撃戦を見せてやる！」

「こいよ、『臆病者』！！！」

「『生き残れ！』」

ハルケギニア物語番外編『英雄達の空』

アルビオン編のめどがつきしだい掲載。

ハルケギニア物語外伝／英雄達の空／予告編（後書き）

少しふざけてみた。

反省はしたくない。

登場人物紹介

ティリエル・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデル

年齢 17

所属 SS武装親衛隊 第1装甲擲弾兵大隊 『ライプシュタン
ダーテ・アドルフ・ヒトラー』第3中隊 第2小隊指揮官

???

階級 大尉

八分の一、吸血鬼

本作の主人公かもしれない人物。

軍隊以外にも幅広く活動しているが、その真意は不明。

才人に異様に固執しているようだが？

ベルカ公国の国王の長女。

だが、本人はそのプライドがあんまりなく、差をなく接する。

趣味は、溪流釣り、ドライブ、射撃

甘い物が好きで、炭酸が無いと死ぬ。

ガムが無くても死ぬ。

猫舌である、辛い物は見向きもしないなど、微妙にダメである。

見た目上品なお嬢様だが、結構ノリが良い。

普段の口調は丁寧だがキレたり、戦場だとドスを効かせた話方をする。

好物は、蕎麦、炭酸類、。

ちなみに、飲むと辛気臭さくなるタイプである。

モデルは、某変態兄妹の妹。

カール・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデル

職業 ベルカ公国国王兼大統領

年齢 48

ベルカ公国の第18代国王

国民の絶大な支持を受ける王。

容姿は、ただのおっちゃん。

温厚な国王だが、非情な判断も下せるしっかりした人。

家族サービスは、かなりするほう。

王様だが、家庭では料理、洗濯、溶接、土木工事、日用大工、運転、なんでも出来るスーパーパパ。趣味は、渓流釣り、バイク弄り、食べ歩きなどである。

若い時は、自転車でベルカ横断を達成するなど、やんちゃを通り越して変人である。

料理は揚げ物類を得意とする。

また酒を飲みながら料理する、キッチンドリinkerでもある。

運転がすさまじく、ティリエル以外が乗ると殆ど酔う。

ちなみに酔うと、完全なるおっちゃん化する。

モデルは……

ヴィルヘルミナ・リツケルト

年齢 不明（忘れた）

所属 国防軍 第1降下猟兵連隊

????

階級 少尉

火韻竜の少女。

ティリエルが6歳の時にたまたま召喚させられた。

直後、謝罪され（土下座含む。）お詫びに、国籍と名前を与えられた。

だが、本人は一人旅にも飽きたので丁度よいと許して、友人になった。

毒舌でツンデレだが、ツンする相手もデレる相手もない為、気が強いだけである。

ツッコミ担当らしい。

料理は、普通に上手い。

ちなみに下戸。

モデルは、某薔薇人形の3番目

狙撃手で自動火器を好む。

趣味は、テレビ、読書、料理、放浪

マリサ・ガーランド

年齢 18

所属　SS第四装甲大隊　第四中隊　第一小隊長

階級　中尉

ただの普通の魔法使いで、ティリエルの幼なじみ。

ちなみに一つ年上なのは、誕生日の関係で実質同い年である。

戦車以外にも、爆破工作と整備士のライセンスを持っている。

銃は、主に機関銃を好む。

火と土のラインであるが、あまり魔法は使わない。

元の家系はガリア空軍の將軍で有能であったが勢力争いに負けて、更に新教徒であった事がばれて国を追われた三代目。

亡命した際にたまたま見た飛行機械（飛行機の原形で試作品）を目にして素晴らしい、と叫んで第二の祖国に忠を尽くす事にした。

ガーランド家は代々ベルカ空軍ルフトヴァッフエの軍人であったが、マリサだけはティリエルに影響されて親の反対を押し切って国防軍に入隊。その結果実家から勘当された。

その後、ティリエルが武装親衛隊に入隊した後と同様に能力を買われて武装親衛隊に入った。

なお、兄は三人いて長男は戦闘機のエースパイロット、次男は空軍基地司令、三男は急降下爆撃機のパイロット。

現在ティリエルの自宅に同棲中。

趣味は車弄り。

元ネタは、東の方の黒白魔法使い。

ちなみに、笑い上戸。

二ナ・ディートリヒ

17歳

所属 武装親衛隊 第一遊撃大隊

階級 曹長

エルフと翼人のハーフ。

二刀流とCQBを得意とする。

エルフに混じり血だという理由で迫害されていた為、家族と共にベルカに移住してきた。

そんな関係から、エルフを快く思っていない節がある。

知り合ったのは、エルフと貿易交渉の際に仲介役の父親と同行した際に、同伴していたティリエルと意気投合した為である。

ちなみに、父親はそれがツテとなってエルフ方面の外交関係の仕事

に着く事ができた。

戦闘時と普段で性格が変わる。

ティリエルは仲が良い。

元ネタは、容姿と戦闘時の性格は管理局の凡人。通常はだんご大好きパン屋の娘、酔ったときは鉈女になる。

なお遊撃隊は、偽装であり正式名称は『アインザックグッペンである。』

ハンナ・ローレイ

年齢 17歳

所属 第2SS支援大隊屠殺中隊所属

種族 鳥人

鳥の翼と特徴的な耳を持つ少女。

趣味は料理、歌、食材探し。

平時は何を考えているか分からない時もあるが、相手の気持ちに鋭い所もある。

基本良い娘。

ティリエルの幼なじみ。

実は全国チェーン展開中の料亭『極楽亭』の会長の愛娘で、メンバー中で一番のおぜう様で富豪（ティリエルは王族だが、あえて除く）。

軍隊に入った理由は、戦場でも兵士に美味しい食事を。そしてあわよけば貴重な食材をゲツチュするためであった。

そんな理由なのだが、実際にやってみると調理以外にも無線技師、医療、更にはヘリコプターの免許を持つてしまい、射撃の才能も非凡なものがあり、あっちこちで引つ張りだこになってしまった。（昨年未までは衛生大隊に所属していた。）

また料理も、味付けしただけで他のと味が変わる、誰もが嫌がる料理なのに彼女が調理すると至高の料理になる、パンを焼いただけのを食した相棒が余りの旨さに昇天した、との噂が口コミで広がり糧食を配給する際には行列が出来る騒ぎになり中には、遠くの部隊からわざわざくる強者も存在する。（料理を食べた総司令官がいたく気に入り、総司令部付きになりかけた事もあった。）

そのため本人も自分専用のフィールドキッチンを保有していて、戦場に行く際にも調味料は欠かさず持っていき現地調達 of 食料（大体がゲテモノ）を仲間に振る舞っている。

家は色々面倒という理由でティリエルの家に同居中、食事担当。

元ネタは、東の方の屋台の店主で亡霊姫の非常しよ……

最後に一言。

みすちーは俺の嫁。

異論は認めてやる。

レオン・S・ケネディ

職業 アメリカ合衆国エージェント

ひよんな事でハルケギニアにやって来きたバイオの主人公。

体術、接近戦、射撃能力も高い。

元警官だったが、一日で止めた。(勤務先が物理的に消失したため)

時間的には、バイオハザード・ディジェネレーションの後。

出した理由は、原作に薬草師でレオンって人がいたのと、その時たまたまバイオ5やってて丁度良いと思ったから。

ちなみに、あの後無事に元の世界に帰りました。

全く関係ないが、あの時「紫ババア」といった村人だが、あの後しばらく行方がわからなくなっていて、見付かった時には、「ゆかりんじゅうななさい、ゆかりんじゅうななさい。」という謎の言葉を

連呼していた。

何が起きたかは、お察し下さい。

アーベ・H・コーワ

所属 国防軍情報部

階級 極秘

年齢 不明

ハンブルクに住んでいた元自動車修理工のイイ男。

5年前に公園のトイレにて通り掛かった少年に猥褻な行為をした為に、強制猥褻罪と猥褻物陳列罪、児童保護法違反、危険思想保持、民族反逆罪などで30年の実刑判決が下る。

しかしながら、強制収容所にて同収容者らを次々と手駒にしていく性欲さから、特殊な場合に置けるスパイとして優秀との判断で、司法取引にて釈放。

現在アルビオンを中心に活動。

アルビオン戦争勃発にて、7月に活動地域をトリスティンに変更予定。

ふう。もうこんな時間だ。おや？誰か来たようだ。なんだこんな時

間に……………アッー！

正樹武雄

年齢 不明

職業 大日本帝国陸軍将校

階級 大尉

武士の血を引く日本男子。

ひよんな事から、敵味方関係なくゾンビに襲われて、解決(?)する為に各地を転々とした後、キーノ・デア・トーテンのテレポータに乗った際に、気が付いたらハルケギニアに来ていた。

その後は、先に来ていた佐々木武雄と意気投合して、嫁さんを貰って、子沢山。

佐々木と正樹が大和魂を注ぎ込んで作り上げたタルブ自警団は極めて精強で、下手な軍隊など寄せ付けない。

無茶苦茶勇敢で英語も堪能である。

ガンダールヴの能力は無いが各国の武器、時代が明らかに違う武器も使いこなせる。

決して、WAWの最初のステージで死んだ将校ではない。

B Oで顔が変わったりもしていない。

ちなみに中の人はヨードである。

元ネタは、ここまで書けばわかるでしょう。

「貴様は強くない。」

エヴァ・ロースマン

所属 ベルカ空軍 第一航空艦隊 第12戦闘航空団

最終階級 中尉

ラ・ロシエール空戦に参加したパイロット。

中産階級の長女で、航空学校に入学。

実技、座学共に首席クラスであり、他の成績優秀者と一緒に一足早く配属。

准尉に昇進。

ラ・ロシエール空戦にFW - 190A - 9にて参加。

爆撃機護衛中に、神聖アルビオン空軍エース、ジャック・フランシス・ド・ワルドの攻撃を受け撃墜。

脱出不能で乗機と共に墜落。

戦死

死後、二階級特進

咄嗟の判断で爆撃機を守りぬき、また初撃墜を記録したため第二級鉄十字章を授与（追贈）

スコア 2 騎

組織紹介

ベルカ公国

人口650万（実質700万以上）

元首 カール・ドライゼ・フリードリヒ・フォン・ルーデル・ド・ベルカ

帝国宰相（首相） ルドルフ・フェーゲライン

政治体制 国家社会主義

首都 ベルリン

トリステイン北部からゲルマニアの西部の間を領土とする国家。

寒冷な地方には珍しく、肥沃な土地で様々な産業が発達してきた。

特に科学技術に重点を置いており、ハルケギニアの他の各国と比べてやや異常な点がある。

名目上はトリステインの属国（台湾みたいな、あるいは保護国）扱いだ、事実上独立しており宋主国であるトリステインとは折り合いが悪い。トリステインとゲルマニアに挟まれる事から土地の領有を巡って争いが絶えず、トリステインとは双方とも悪感情が湧いている。

特に各国と大きく異なる点を上げれば、移民を多く受け入れている

事と、貴族制をほぼ消滅させた事である。

移民に関しては他の国と比べた場合、税金が比較的安くそれに見合った保障を受ける事が出来、また人種や宗教の差別をしないようにしている為、亜人や新教徒や戦争難民、没落貴族などが転がり込んでくる。

人種については固有の人種が国民の40%に過ぎない事と、富国強兵の為に手っ取り早く人口を増やす為に取った。

宗教については基本全てに抑圧をかけているが、弾圧されるよりはまし、と新教徒の難民が多い。

大統領の意味についてだが、国王が即位した時に国民投票を行い、過半数を超えれば政治の実権を取れ、過半数を超えなかった場合は象徴的な存在となる。

議会はあるにはあるが権限は弱い。

なお、王族と吸血鬼の関係については後述の建国の歴史を参照。

現在の国交の状況。

トリスティン

今までの歴史的経緯から関係は悪いが貿易は行っている。

関係は悪いのにトリスティンはロマリアに続いてベルカに移民して

くる割合が多い。

ゲルマニア 何度も戦ってきたがさほど気にはしていない。

ガリア

かつては敵対したこともあったが、第二次ベル力戦争で仲介役をするなど双方ともに友好的な関係を築いている。

特にガリア王家とは三代前から親交がある。

貿易は活発で、ガリアからは主に魔法技術を学んでいる。

アルビオン

特に悪くも良くはなく、今まで戦争状態に発展した事は、レコンキスタを除いてない。

貿易も活発に行われている。

ロマリア

新興国と宗教国家という関係から、外交や内政に口出ししてくる為に関係は頗る悪い。(政府が、神よりも我々を信じろ、と公言する程。)

政府に対する国民感情は良く、協力的である。

治安維持に関しては、特に熱心で秘密警察ゲシュタポを含め様々な機関が存在しており、工員や犯罪者、反国家主義的な思想犯から国民を守っている。

ちなみに刑罰は顕著で、窃盗や万引きでも数十年は刑務所で働くことになる。

なお、ベルカでは死刑は基本（よほどの事が無い限り）行われない。

ヴェアヴォルフ

正式名称 ベルカ対外特別任務編成大隊

ベルカ国防軍、武装親衛隊の中から選び抜いた精鋭揃いの部隊。

装備は特別に外界の兵器や開発中の兵器を使用出来る権限を持つ。

基本は、潜入工作などのコマンド作戦などを主な任務としている。

ただ常時存在する訳でなく、部隊員は必要に応じて予め所属している原隊から一時的に離れる仕組みになっている。

これは、誰が隊員かと判りにくくする為と通常作戦時の部隊のステ

ータスを上げる為である。

935軍団

正式名称 935先行科学者実験部隊。

ベルカの中でも最先端の科学者と技術を持ついわば研究室。

ベルカ魔法科学技術研究所よりもより危険で誰も思いつかないようなオーバーテクノロジーを日々開発している。

全体的に兵器開発が中心である為門戸が極めて狭い。

そもそも研究所自体が機密事項であり存在事態が疑われている。

又、他の研究所と違い所属も親衛隊である。

ベルカ創立以前から存在していて、ベルカ発祥にも深く関係している。

研究施設は幾つか存在するが、いずれも境界の土地か別の建物に擬装されている。

一応本部はデア・リーゼと呼ばれる施設で、永遠の夜と呼ばれるベルカの聖地の何処かにあると噂になっている。

最高責任者はマクス博士。

デア・リーゼ所長はエドワード・リヒトーフエン少将。

元ネタは……………

W A WがB L A C K O P Sをウィキってみれば良く分かる。

ベルカ国防軍

ベルカの盾であり矛ある主力組織である。

陸軍、海軍、空軍からなり、徴兵及び志願により集まった国民は、専門的な訓練を受け、有事の際には銃を手に取り、国の為に命を捧げる兵士となる。

その練度は、ハルケギニアでもトップクラスであり、民兵や傭兵とは比べものにはならない。

しかしながらその練度と精強さ、装備と引き換えに、維持には莫大な国家予算を投じている。

首都圏特別警護隊 『ケルベロス』

通称、『首都警』は国家の中心地であり、政治、経済の発信源であ

る脆弱な中枢部の首都を内外に潜む敵を殲滅し被害を最小限に食い止める為に設立された。

警察からのエリートから抜粋され、治安維持の為にあらゆる権限を持ち、あらゆる攻撃を防ぐ漆黒のプロテクトアーマで全身を包んだ姿は、倒される非合法の組織からは恐怖の、守られる市民からは尊敬の眼差しで見られる。

主な彼らの任務は、主要施設や区画の警備、政府高官などの重要人物の警護、地下の反動分子の逮捕、または武力鎮圧などである。

しかし、時には親衛隊と共同で国外への任務に着くこともある。

タルフの奇跡(前書き)

遅くなつてすみません

タルブの奇跡

震電のコックピット。

計器やレバーで狭いコックピットの中で何かが揉み合っている。

「この犬うううう！！あんなメイドにまで鼻の下伸ばしてえ！！二回死ねえ！！」

「ちよつ、止めるルイズ！！本当に死んじまううう！！？」

よくみれば才人に跨がったルイズが、才人の首を掴んで前後に揺らしているのだ。

そのせいで操縦桿やシフトペダルが動かされ、機体が木々すれすれをふらついている。

慌てて、操縦桿を引き高度を上げる。

2130馬力を発揮するハ-43のおかげで、機体は苦もなく高みへと舞う。

戦争が始まって、タルブの村が襲われたと聞いて急いで文字通り、飛び出したのだ。

固定化のおかげか、佐々木さんのメンテナンスのおかげか、15年も放置されていたのに頗る快調である。

ガンダールヴの印が大丈夫だと教えてくれたし、実際にエンジンの

試運転まではしたのだが、やはり実際に飛ぶまで不安ではあった人であった。

武装の方も点検したのだが、どうもここ（ハルケギニア）に来る前に戦闘は行なわなかったようで、弾薬はフルに入っていた。

30ミリは各60発ずつで240発。

対戦闘機用なのか、弾道の確認用なのか不明だが、九八式固定機関銃が二丁で合わせて500発。

そして主翼の下に付けられた対空ロケット弾が8発。

そしてこっそり操縦席に忍び込んできたルイズが一人。

これが全ての武装だ。

離陸する前にキュルケが無理だと言っていたが、前に乗った船みたいな木造船ならば、ロケット弾は効く筈だし、大口径の機関砲の連射を浴びせれば撃破できる筈だ。

そっ心に言い聞かせる才人の視界に、幾つもの黒煙と遠くに舞う竜。

そして巨大な船を囲むように、無数の船が見えた。

緊張で汗ばんだ手で操縦桿を握りしめて、スロットルを上げる。

ほぼ同時刻。

3000メートルの空を小編隊が飛行している。

数は僅か34機。

戦闘機が9機、爆撃機が24機、偵察機が1機だ。

偵察機が混じっているのは、あわよくばアルビオン軍とトリステイン軍の戦い方を知ろうというものだ。
タルブに向けて飛行中だ。

「さてよ。敵さんはどこだ？」

巡航速度で飛行しながら頭を絶え間無く動かし、敵が来ないか確認する。

今はレーダーという便利なものもついてはいるが、過信は出来ない。

相手は生き物。

映らないこともある。

「はあ。燃料は足りるかあ？」

「落ち着け、ロト3。戦場はそう遠くない。俺が保障する。」

ロト3こと、D0335のパイロット、ヨーゼフが愚痴る。

「そう言われてもなあ。空母の部隊にやわからんだろ。陸の基地からずつとここまで、爆撃機のお守りしながら燃料計をガン見しての飛行だ。帰りの分まで持つか心配だよ。」

「燃料切れはこつちもある。状況は同じだ。」

本日二回目の出撃となる、空母の艦載機のパイロットがそれに答える。

戦闘機の詳細はBf109が4機、Fw190が2機、Do335が3機である。

内Bf109以外はベルカの航空基地からの発進だ。

ちなみに爆撃機の方はJu388が9機、スツーカーが9機、スツーカーが6機の編成となっている。

全機対地用の装備で、Ju388以外は空母からの発艦だ。

なお、偵察機はDo335の偵察機型である。

「どうだか、そつちはやばくなれば空母に帰れるが、こつちはトリステインに不時着だ。どんな目にあうのかわかったもんじゃない。」
ヨーゼフがやや苛立っているのは、爆撃機の護衛に十分な戦闘機が無いことと、ここに来るまでに僚機がエンジントラブルで先に帰還してしまっただからだ。

やはり爆撃機が24機もいるのに、戦闘機がたったの9機では守りきれない。

まあ、タルブに敵が降下したと情報が入り、慌てて帰還した機体や出撃していない機体を集めて飛ばした上にどこかの馬鹿が離陸をしくじり、その滑走路が使えなくなつて先に離陸していた爆撃機のお守を押しつけられたのだ。

無理もない。

おまけに燃料も不安げだ。

ベルカ軍機は日本の海軍機体みたく、3000キロ以上の航続距離など持つようには設計されていない。まあ元々の地理的要素を考えれば当たり前と言えればそれまでだ。

それに増槽を取り付けたとしても、2000キロに届くか怪しい。

それに戦闘による激しい空中機動を行えばたちまち燃料が尽きる。

それで持つて帰りの分まで考えるのだから不安にもなる。

そんな事を考えている間に、敵の姿が見えて来た。

緑の平原は着陸した輸送船でひしめき合い、上空では順番を待つ輸送船が待機し、周りを戦列艦と竜騎士が牧羊犬のように守りを固めている。

しかし何故か慌ただしい。

着陸している輸送船がまだ開いていた搬出口から荷物をボロボロと落ししながら、離陸をしようとする。

そして戦列艦は巨体を鈍く機動させ、そのせいで船団が乱れている。

「どうなってやがるんだ!？」

「トリステイン軍か!？」

その正体を突き止めたのは、偵察型のD0335の観測手であった。操縦席より一段高い偵察席は、視界が広くまた観測用の光学機器が取り付けられていた為いち早く発見できたのだ。

「あいつは、竜騎士じゃねえ!!俺達と同じ戦闘機だ。」

「なに言ってるんだ、ゲシュペンストアウゲン。見間違いじゃないか?」

「俺達以外に航空隊は来てないはずだぞ!」

「いや、見たことない機体だが、間違いなく航空機だ。」

最初は疑っていたが、確かに遠くで竜騎士とは明らかに形も速度も違う物体が竜騎士達と絡み合っている。

時たま、パツと空中で何かが炸裂して竜騎士が原形を留めずに落ちていく。

「さて、そろそろ敵さんもこちらに気づいた筈だ。こちらは離脱する。遠くで見守ってやるよ。見守ってるだけだがな!!」

「いいから、さっさと行け!!ゲシユペンストアウゲン!ちゃんと司令部に報告してくれよ!!」

武装の無い偵察機が編隊から離れ、一気に速度と高度を上げて遠ざかってくる。

「さて全戦闘機隊、爆撃隊!!準備はいいか?」

「ロトリーダー準備よし。」

「グリーンリーダー用意よし!!」

「マルダーリーダー用意よし!!」

「ゴルトリーダー用意よし!!」

「増槽を落とせ!!」

合図が出て、機体の下にぶら下がった殆ど空の増槽燃料タンクが重力に引かれて落ちていく。

「こちら、爆撃隊編隊長。これより敵降下地点に爆撃を行う進路を取る。援護してくれ。」

「敵竜騎兵正面から30騎!突っ込んでくる!!」

「全機、爆撃隊の前に出る。敵の歓迎だ。鉄のシャワーを浴びせて

やれ！」

前に出た戦闘機隊と後に続く爆撃隊は機銃を撃ちまくりながら、正面に立ち塞がる竜騎士に向かって突っ込んだ。

艦隊を守ろうと敵正面に展開した竜騎士は射程外からの弾丸の嵐に巻き込まれ、泡を食ってちりじりになった。

その出来た隙間に速度を武器に強引に入り込む。

敵の殆どはルーキーだったらしく、右往左往して追い付けてはいない。

しかし僅かな手練が爆撃隊に食い下がる。

それに対して後部機銃が、射程に入られないように火線を張る。

そうして、足止めされていた隙に後ろから周りこんだ戦闘機によって撃墜されてしまった。

爆撃隊は暖降下しながら、いまだ輸送船が着陸している空挺堡の物資集結地点に狙いを定める。

地上の兵士たちが、阻止攻撃を仕掛けてくるが逆に機首の旋回機銃でなぎ倒されてしまう。

「もうすぐ目標地点だ。投下用意！」

爆弾倉が開かれ、機体に納められた爆弾の代わりにコンテナが露わになった。

もちろんただのコンテナではない。

クラスター爆弾である。

「投下!!」

機首に腹ばいになった、観測手が手元のスイッチを押すとコンテナが投下された。

投下されたコンテナは空中で開き、中からSD2対人用爆弾が飛び出す。

コンテナ一つにつき108個のSD2が詰まっており、一機のJU388が搭載した量は膨大な数となる。

ばらまかれたSD2は、拡散しながら逃げ惑う兵士たちの頭上から降り注ぐ。

そして地面に落下した衝撃で爆発し、あるものは空中で爆発した。

その効果は恐ろしい程てきめんであった。

隠れるところもなく、逃げる暇もない彼らに助かるすべはない。

ある者は直撃して手足が引き飛び、ある者は破片で切り裂かれ、ある者は爆風の衝撃波で内臓をやられて血を吐き、そして跡形もなく血煙になる。

その光景は爆撃機が通りすぎるたびに繰り返され、過ぎ去ったあ

とには焦土と血肉と残骸しか残らない。

まさしく死を振りまくとはこのことである。

被害は人的被害だけには収まらない。

進路上にまだとどまっていた輸送船が何隻か巻き込まれほか、物資集積所に置かれていた黒色火薬が誘爆し、大砲などの重火器と物資のほとんどを喪失してしまった。

これが後々響くことになる。

しかしながら、先遣隊のほとんどは被害には遭っておらず、いぜんとしてラ・ロシエールを目指していた。

そして、攻撃には成功した爆撃隊と戦闘機隊だがその前に怒り狂ったアルビオン竜騎士隊が立ちふさがることになるのだ。

トリステインの存亡をかけた戦いの中、今だトリステイン軍はすがたを見せないでいた。

戦争は会議室で起きてるんじゃない！戦場で起きてるんだ！！（前書き）

意外に一日で書き上がるもんだ。

戦争は会議室で起きてるんじゃない！戦場で起きてるんだ！！

遠くタルブで戦闘が勃発している中、トリスタニア市街は混乱の極みにあった。

「逃げる！急ぐんだ！！」

「パパ、待って！！」

「どけ！どきやがれ！」

「ヒヤッハー！！略奪だぁー！！ヒヤッハー！！金だぁー！！」

どこでどう伝わったのかは知らないが、アルビオンの突然の宣戦布告・ラ・ロシエール空域でのトリステイン艦隊の大敗・艦隊の本拠地であるデン・ヘルダーの壊滅・タルブ草原にアルビオン軍の降下が民衆の間に広がり、たちまちパニックに陥った。

更にいまだトリステイン軍が反撃の兆しも見えないことが知れ渡ると、トリステインの敗北を察した市民がわれ先に避難しようとい斉にトリスタニアから脱出を計ったのだ。

当然といえば、当然だ。

自国が侵略されているというのに、肝心の軍隊が出動すらしていない状況では、誰だって敗北を想像するし、敵の目標が王宮のあるトリスタニアを目指すことくらい誰だってわかる。

この時代、占領されれば当然ありとあらゆる物が略奪され、男は殺され、女子供は犯されたあげく奴隷にされる。

当然誰もそんな目には遭いたくないから、家族と共に荷車や馬車に家財道具や金目の物を積み込む訳だが、中産階級が集中する都市部でのこと。

おまけにゲルマニア皇帝との結婚ということで、アンリエッタ王女を最後に一目見ようと地方からも大勢駆け付けていた。

ただでさえ狭い道に大量の荷車や荷物を背負った人がごった返す訳である。

道は大混乱に陥った。

中には荷物に挟まれたり、馬車に轢かれたり、人に押し潰されたりして命を落とす者も出てくる。

また、この混乱時に便乗して商店などから略奪行為を行う者も出始める。

これを静める筈の衛士達は、逆に避難か略奪に参加する始末。

僅かに職務を遂行しようとした者もいたが、そもそも上層部から何も命令が下っていなかった為に、的確な対処法も分からないままいたずらに混乱を煽るか、ただただ混乱の渦に飲み込まれてしまった。

同様なことが、トリスタニア以外の中規模都市でも起きており、傍目からすればトリスタニア崩壊も時間の問題かと思われた。

城下町で死者が出るほどの騒ぎが起きているとはつゆ知らず、王宮では数時間前と変わらないことがつづいている。

「タルブ草原に突入したアストン伯、あれから連絡ありません。おそらくですが……討ち死にされたと思われませぬ。」

「タルブの上陸軍に対してベルカ軍が攻撃を仕掛けた模様。しかしながら、敵は依然侵攻中。」

会議室では相変わらず言い争いが続けられている。

「戦況はどう見ても、我が方に不利だわ。」

「やはり、謝罪と賠償で矛を収めてもらう訳にはいきませんか？」

「手遅れになる前に撤退しましょう。」

「そうだな……防衛ラインを首都周辺に敷いて、ゲルマニアの援軍を待ちつつ状況を整理しよう。」

「ちょっと待て、タルブの隣は私の領地だぞ！そんな馬鹿げた戦略には断固反対する。」

「我輩もだ。私の土地を敵におめおめ渡すなど言語道断だ。今の内に攻めるべきだ。名誉にかかわる。」

大臣や閣僚は相も変わらず意見を放つだけだ。

ちなみに先ほどゲルマニアの駐留大使を呼んだのだが、「本国に問い合わせないと何とも言えない為、連絡が来るまで待たれたし。」
と言いつつ退出していった。

上座に座るアンリエッタは、最初から空気扱いだ。

元々は、これからゲルマニア皇帝にのアルブレヒト三世に嫁ぎ（実際に嫁ぐのは、アルブレヒト3世と共同統治をしていたシュタイアーマルク公の弟のレオポルト4世）に行く際の最後の別れと挨拶が目的だったが、今ではそれどころではなくなってしまった。

ふと、しばらく発言をひかえて座っていたパール候が突然立ち上がると。席から離れて出口に向かっていった。

一瞬皆あつげにとられて沈黙が起こる。

「パ、パール候……ど、どちらに？」

一人の大臣が咎めるが、パール候は慥然とした顔でこう告げた。

「所用を思い出した故、退出いたします。」

通常御前会議においては、不敬であるがパール候は他の貴族の制止を振り切り去って行った。

逃げたのだ。

それに釣られてか、私も、私もと何人かの貴族が相次いで席を立った。

もはや崩壊寸前である。

「うぬれ、貴様ら！陛下のご恩に仇で返す気か！！」

怒りで顔を真っ赤にしたサンジェルマン公爵が叫ぶ。

が、だれも引き返さずに扉がしまる。

同時にサンジェルマン公爵が机を叩く。

「あの売国奴どもめ！！」

しばらく静かになり、遠くの喧騒が会議室へも聞こえるようになった。

ふとアンリエッタが窓から外を見ると道という道に人が溢れかえって町の出口を目指している。

そこでやっとアンリエッタは気がついた。

彼ら国民の運命は、我々貴族メイジにかかっているのだ。

貴族は平民を助け、平民は見返りに貴族を尊ぶ。

これは、帝王学の初歩の初歩である。

しかしながら、この中で一体何人がそれを実践しているのだろうか？

目線を戻すと、会議室のとびらが開かれる所であった。

現れたのは、リッシュモン高等法院長であつた。

「リッシュモン殿！！このような重要な会議に高等法院長ともある貴殿が遅れてくるとは何事であるか！」

「待たせてしまったことは謝らう。なにぶん平民共が邪魔であつてな。」

「国の一大事ですぞ！！道を塞ぐ平民などさつさと轢き殺してくればよろしかったのだ！！」

「現にそうして来たのだ。サンジェルマン公爵。」

遅く来たリッシュモンにサンジェルマン公爵が叱責を飛ばす。

「リッシュモン殿、この事態にいかに対処したらよいか…何か策はあるでしょうか？高等法院長としての立場からお聞かせ願いたい。」

腰の低いジャン・バール外務大臣がリッシュモンに意見をもとめる。

「全面的講和。これしか方法はありませんな。我々にはアルビオンと戦つて勝つほどの軍事力はありませんからな。」

「それでは、事実上の降伏ではないか！！貴殿はトリストインを敗戦国にしたいのか！！」

またしてもサンジェルマン公爵が食つてかかる。

「降伏とはいささか異なりますな。我々はアルビオンの要求するも

のを渡し、我々は見返りに独立を守る。」

「同じようなことだ。愚策にもほどがある。降伏するくらいなら、潔く戦って死ぬべきだ。」

「それこそ愚策であるな。相手の怒りが小さいこそが唯一の機会がと考えるが？もし私の言われる案が愚策と申すのなら、代案でも出してはいただけませんか？」

黙るサンジェルマンにはそく笑みながら、リツシュモンは続ける。

「しかし、このような一大事を我々だけで決めるのはいささか傲慢というもの。ここは、我らが姫殿下に御裁可をいただくのが筋であろう。」

そう言ってリツシュモンはアンリエッタに向き直り、膝をつく。

「姫殿下。国家と王家、そして民を守る為に不敬ながらもこの事案の採択を願います。」

アンリエッタはリツシュモンの言葉を聞きながら、自分なりに考えていた。

口先では、民のことや国の事を考えているようだが、実際には彼ら貴族は自分たちの利益しか考えていない。

そして自分もそうであった。

親友を自分の都合で死地に向かわせてしまった。

貴族を軽蔑しながら、自分も同じことをしていた。

王族としての立場に甘え、義務を放棄し権利ばかり主張してきた。

そんなことで民は、平和になどならない。

そんなことを自分は望んでなどいない。

顔をあげると、歴代のトリステイン王の肖像画が目に入る。

その中には、見知った顔もあった。

父の顔だ。

他の貴族に冷遇されながらも父は、語っていた。

トリステインを繁栄させ、豊かにしたいと。

貴族と平民が共存できる環境にしたいと。

その隣には、祖父のフィリップ3世の肖像画がある。

母が夜な夜な子守唄の代わりに教えてくれた。

「アン、あなたのおじいちゃんは、民の繁栄を願って戦ったのよ。最後は少しおかしくなちゃったけど、最後の最後まで民の安泰を願っていたのよ。」

アンリエッタは目を閉じて考える。

王として。王族としての役割を。

自分がすべき事柄を。

今自分がなすべきことは何なのか。

民の為に、国の為にするべきことを。

「わたしは……」

途中で息が切れてしまい、大きく深呼吸して立ち上がる。

「わたくしは、この事案には賛成しかねます。」

会議室にどよめきはしる。

「この事案には、我々が守るべき民に対して何の考慮もされていないと考えます。」

「しかし、殿下。これ以外に我々が生き残るすべは……」

「我々が生き残ったとしても、民が生き残らなければ意味はありません。我々がここに居るのは、民を守るためではないのですか？」

「では、どうすれば……」

「戦うのです。それ以外に道はありません。国民が今もこうしている間に死んでいるのです。見なさい……」

アンリエッタがゆびを指した先には、逃げる為にこった返している民衆の姿だった。

「あれが、我らの怠惰が招いた結果です。」

「しかしながら殿下、敵は強大です。みすみす討ち死にしろと？」

「名誉の敗北に赴くではありません。侵略者を追い返し、民の命をひとつでも救う為に戦うのです。勝つ為に戦うのです。」

「しかし、アルビオンとは不可侵条約を……」

「しかし……ではありません、枢機卿。現に今はアルビオンと砲火を交えているではありませんか。今やらずして、いつ戦うのですか？」

黙る貴族たちにアンリエッタは続ける。

「確かにアルビオンは強大です。反撃を加えるよりは潔く降伏して恭順するほうが貴方がたは、得策でしょう。ですが、そのどこに貴方がたが日ごろから言っている名誉があるのか理解しかねます。民を守る義務を負うからこそ私たちは貴族と呼ばれることを許されているのです。貴方がたが、貴族としての義務を放棄するなら、わたくしだけでも義務を遂行しましょう。そのかわり、今すぐにこの場で貴族であることを放棄しなさい!!」

アンリエッタはそれだけ言い捨てると、会議室を飛び出そうとした。

「姫殿下!!!危険ですぞ!!!」

「祖父がワールテルローの戦いのおきに先陣を切ったときも同じこと

をいったでしようか？」

「殿下！！」

「近衛！私の馬と甲冑を！連隊を呼びなさい！！」

マザリーニの制止を振り切ったアンリエッタは回廊を歩く。

一緒についてきたサンジェルマン公爵が後に続く。

「あなただけは、来てくれましたか……」

「それがわたくしめの役目ですから。」

老将軍はそう答えた。

「しかしながら殿下、いまだ連隊は動員を終えておらぬ故、定数を満たしておりません。」

「軍の最高司令官はどこに？」

「南部トリスティンにて休暇中です。」

「では貴方が指揮を執りなさい。」

「御意。老骨に鞭打つてでもやり遂げましょう。」

「殿下！！」

その後ろから息を切らしたマザリーニ枢機卿が現れる。

「枢機卿。まだ何か…」

文句を言われるのかと思いきや、古びた旗を渡される。

「これをお忘れですよ殿下。」

その旗はかつて不退転の戦であったワートルローの戦いの際にフィリップ3世が持っていた旗だ。

それを受け取るアンリエッタ。

「衛兵、馬を一頭よこしてくれ。」

マザリーニが近くの衛兵に命じる。

「マザリーニ枢機卿……」

枢機卿は静かに。

「枢機卿の仕事は殿下の補佐ですから。」

かくして、トリスティン軍は遅すぎる出陣を果たしたのだ。

戦争は会議室で起きてるんじゃない！戦場で起きてるんだー！（後書き）

かなりつかれたよー

遠すぎた街（前書き）

もうすこしあとがきをがんばってみよう。

遠すぎた街

ラ・ロシエール。

ここの建造物の殆どは硬い岩盤をえぐって作られている。

歴史では、土のスクエアメイジが作ったと言われている。

しかし実際には、半分程が真実だ。

確かに著名なスクエアメイジが何人も関わってはいるが、最終的な仕上げと重要な所以外は囚人と強制的に徴用された平民が労働に従事し、劣悪な環境下でかなりの人数が犠牲となった。

もっともこの事実を知るものは、もはや存在しないが。

そんなことは置いておいて。

そのラ・ロシエールの街道をジョン・フロスト大佐率いる先遣隊1個大隊が進撃してきた。

「止まれ。」

フロスト大佐が街の入口で右手を上げて進軍を止める。

数時間前に一度味方の艦隊が街に艦砲射撃をした筈だが、物や出店や屋台などが散らばっている以外に特に目立つような被害はない。

頑丈な岩盤は上方向からの砲撃に対してかなりの抗力を発揮したよ

うで、火の手どころか煙一筋立ち上っていない。

さすがは要塞街とも呼ばれただけはある。

しかしながら、街中に人の居るような気配がまるでない。

合図を出すと、蝙蝠傘をわきに抱えた小隊長に率いられた小隊が姿勢を低く前進する。

数十メートルほど進んだところで攻撃があった。

両脇の建物に開けられた銃眼から銃弾やら魔法が火線をはる。

姿勢の高かった一人がウツ！と短いうめき声を上げ、胸を押さえて崩れ落ちる。

こちらの部隊も反撃するが、銃眼の向こうの相手にはあまり意味をなさない。

「煙幕だ。スモーク 煙幕を投げろ。スモーク」

メイジが魔法を唱えると白い煙が立ち込め、それを壁に前進するが火線に阻まれ、逆に負傷者が増える一方だ。

「下がれ！後退だ後退だ！」

腕を負傷した小隊長が傘を振って後退を命じる。

部下たちが負傷して味方や武器を抱えて後ろに下がる。

だがそのすきに別の方向から攻めていた他の部隊が建物にとりつく。とりついた兵士は、導火線のついた鞆を建物の窓に投げ入れる。

中から叫び声が響いて数秒後、くぐもった爆発音と同時に銃眼から土煙が噴き出す。

反対側の建物も同様である。

その建物の扉が勢いよく開かれ、中から激しい炎と火達磨のラ・ロシエール守備隊が飛び出してきた。

人間松明となり熱さにもだえて、叫び声をあげて地面の上を転げまわっていたがやがて静かになる。

「いまだ！街を確保しろ！！」

「チャージ
突撃！！」

敵拠点を無力化したことで、後方の部隊が街を占領すべくなだれ込む。

占領自体はラ・ロシエール守備隊が寡兵だったこともあり一時間ほどで完了した。

しかしラ・ロシエール守備隊は勇敢であった。

出口のない横穴式の建物に立てこもり、大砲で吹き飛ばされるか、炎でまる焼けにされるまで抵抗を続けた。

戦闘終了後ジョン・フロスト大佐は広場に横になった敵の英雄たちと、戦死した仲間達に騎士の礼をしたのち遺体を安置した。

しかしながら、彼らの戦いはまだ終わってはいない。

むしろこれからが本番である。

この街の住人はすでに避難しており、僅か移動の困難なもの、そして修道女と老人しか残っていなかった。

そのため敵が逆襲する際には、なんら問題なく街を攻撃できる。

おまけに彼らには、ある問題がのし掛かっていた。

まずは物資や重火器の運搬手段である馬の不足による補給の問題、タルブからラ・ロシエールまでの連絡の問題、最後に援軍であるハリ・カーライル中佐ひきいる大隊と連絡がとれないことだ。

最悪この不十分な装備のまま、味方上陸部隊が到着するまでのあいだ、街を確保し続けなくてはならない。

言い換えればこれが、この戦争の天王山である。

もし上陸部隊の到着まで持ちこたえれば、この戦争の勝敗は明らかとなる。

だがもし到着する前にこの街が敵に奪還されれば、この作戦の為に犠牲を払ったもの達の努力がすべて灰塵に帰すばかりか、二度と侵攻のチャンスを得られないであろう。

遠すぎた街（後書き）

おはこんばんにちは。最近トリガーハッピーであることを自覚し始めてきたうP主です。

遅くなつてすみません。

今年の夏休みはいろいろありました。

一日中ゲームしたり、いやいや自動車教習にいたり、友人と映画を見にいたり、サバゲーを心行くまでたのしんだり、大学からの通知に恐々としたりしました。

あと、次回からになりますがこのあとがきでQ&A的なことをしたいと思います。

なのでネタバレにならない程度の質問などに答えていきたいと思いません。

それでは次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6304q/>

ハルケギニア物語『復讐八、我二有り』

2011年10月1日14時39分発行